



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告  |
| Author(s)    | 森安, 孝夫; オチル   |
| Citation     |   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/20780">https://hdl.handle.net/11094/20780</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## セブレイ碑文 Sevrey Inscription

吉田 豊・森安孝夫・片山章雄  
(Yutaka YOSHIDA / Takao MORIYASU / Akio KATAYAMA)

### 概観 (吉田 豊・森安孝夫)

調査場所：セブレイ=ソム，北緯 43 度 34 分，東経 102 度 15 分の地点。

調査日時：1997 年 9 月 8 日，9 月 9 日。

調査者：森安，林，吉田，片山，大澤，オチル，ボルド，バヤル，バツトルガ。

調査方法：拓本を作成するとともに写真・ビデオの撮影を行う。拓本は正面と裏面について 2 セットずつ作成。碑文の計測。写真・ビデオは各自が撮影する。

遺蹟の現況と景観：(森安担当)「行動記録」1997 年 9 月 8 日，9 月 9 日参照。

碑文の現況：縦 80 cm，横 52 cm (ただし銘文が残る碑文面が平らな部分だけを計れば 45 cm)，厚さ 69 cm。碑面にはソグド文とルーン文字の碑文が 7 行ずつ縦に刻まれている。中心部から向かって右側にソグド語，左側にルーン文字銘文がある。この面には後の時代に刻まれたヤギや馬の落書きが，銘文に覆い被さって存在し，一部文字が読めなくなっている。碑文の文字の彫りはきわめて浅く，文字の残りは良くない。最初の報告者であるクリヤシュトルヌイとリフシツはテキスト以外に写真を発表しているが，文字の読みを確認するには不十分である。下でも見るように，彼らの読みのほとんどが我々が作成した拓本からは支持されない。時代を特定するキーワードのほとんどすべてが，誤読であった可能性が高いということになる。

この碑面の裏側もほぼ平らな面を残しており，こちらにも銘文があった可能性がある。罫線とおぼしき線が縦に走っていることもこの推定を補強する。ただし文字を確認できたわけではないので，この点は確実とは言えない。

碑文のスケッチ・復元図・写真：Кляшторный / Лившиц 1971a; Kljaštornyj / Livšic 1971b によって写真が公表されている。本報告書では Plates 15a, 15b として吉田・片山による模写を掲げる。

拓本所蔵機関：ロシア科学アカデミー言語学研究所サンクト=ペテルブルグ支部(?)；モンゴル科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部。

考察：碑文の現況から，この碑文の本来の状態を復元することはある程度可能である。ソグド語とルーン文が左右対称になっていることから，この面は碑文の正面あるいはその裏面であって側面ではなかったはずである。カラ=バルガスン碑文では，漢文とソグド語の 2 言語からなる面が，片面の中央から前者は左に，後者は右に向かって行が進む。この例を参考にすれば，ソグド語文はこの面の中央から始まり，右に向かって行が進んでいたことは明らかである。縦に刻まれたルーン文の行の進み方は，左から右へ進むものもその逆もあるので，この場合そのどちらであったかを知るのは容易ではない。しかし，中央から左に向かって行が進んでいたと考えるほうが，側面から始まり，行が右に進んでいたと考えるより自然であろう。

その場合，ルーン・ソグド面の反対の面には何語が書かれていたであろうか。ここでもカラ=バルガスン碑文を参考にすれば，第 3 の言語としては漢文が書かれていたと考えるのが自然である(しかしそのことは現在の保存状態では確認することができなかった)。この推定が正しいとすれば，漢文が一つの面を占め，ルーン文とソグド文がもう一方の面を二分していたことになる。そしてこの状況から漢文面が正面であったと推測することができる。一方カラ=バルガスン碑文ではルーン面が正面であったことになる。

碑石の寸法も，側面の幅が 69 cm であることから，それが 70 cm 程度のカラ=バルガスン碑文とほぼ同じであったと推定できる。碑文面の高さが 3 m 程度の巨大な碑文であったことになる。

参考文献：Кляшторный / Лившиц 1971a; Kljaštornyj / Livšic 1971b; 護 1973 (= 護 1992, pp. 558-572)。

### ソグド面テキスト・翻訳 (吉田 豊) Sogdian Part of Sevrey Inscription (Yutaka YOSHIDA)

#### Text

- 1            ](m) || B L A N K yγ(l)++γ[            ]+++++ B L A N K (rt)[y?
- 2            ]++ s(m)wtr z-npw ZY 'wδ rw[ ](t)r'y ZY βtδl'+ (pr) '(wtcw'n) ++(c)tδ'rt (ZY) γ+[
- 3            ]p'rym'kw 'w(t)[ ]y [ ]+t ''p (βrδ)'rt ZY m'γ nwc +++[
- 4            p](r)št[']t (δ)[r-            ]++++++[
- 5            ](y) L(')[            ]t s'r (w)'nkw pty++r +++nt[
- 6            ]++[ ]s(')t δ'r('y)m (rt)y δ++++[
- 7            ]+++++[

#### Translation

Sevrey Inscription

- 1 ... .. [We wrote this inscription?] || Yaghl\*\*\* ... Then ... ..
- 2 ... .. the coast of the ocean and there Ru\*\*\* and Vatdhal\*\*\* \*\*\*ed and ... ..
- 3 ... .. \*\*\* ... he brought water and we ... new ... ..
- 4 ... .. prepared ... ..
- 5 ... .. not ... to ... thus ... ..
- 6 ... .. we \*\*\*ed. Then ... ..
- 7 ... ..

和訳

- 1 .. [我々はこの碑文を書いた] . ヤグラ\*\*\* . . .
- 2 . . . 大海の岸に、そしてそこで\*\*\*と\*\*\*は\*\*\*した . . .
- 3 . . . \*\*\* . . . 彼は水を運んだ、そして我々は新しい . . .
- 4 . . . 準備した . . .
- 5 . . . ない . . . へ次のように . . .
- 6 . . . 我々は . . . した . . .
- 7 . . .

訳注

上の訳からも理解される通り、碑文の内容についてはほとんど分からない。ただし重要な点は第1行目に短い2本線からなる句読点があり、その直前には文字の長い尾があることである。これはその前で一つの文が終わっていたことを示すだろう。そしてカラ=バルガスン碑文の第1行が碑額と同じ文章「我々はこの . . . の碑文を書いた」で始まり、その後に空白部分があること。さらにはその後に、碑文の起草者の名前が書かれていることを考え合わせれば、第1行目の句読点の前の文字は m の長い尻尾（あるいは t の尻尾で、文章は3人称で「彼らが . . . 書いた」と書かれていた？）と考えることができるだろう。

ルーン面テキスト・翻訳 (片山章雄) Runic Part of Sevrey Inscription (Akio KATAYAMA)

以下、翻字(Transliteration)はバツトルガとの共同成果であるが、転写(Transcription)と翻訳は片山の責任で提出する。

翻字・転写 Transliteration and Transcription

- 1(7) i.. / YGLiG  
i/// yaŷliŷ-
- 2(6) ///. // QWTL / B  
//////// qutl[uy] b-
- 3(5) ////////// k ü / T /  
//////// kö[l] t-
- 4(4) .i g . // . // WR t / (g) n  
(-i)g(-)//////// -ur t{e?}gin
- 5(3) . k /// . WN // i . . nč a B / . z WN  
/ k /// (-)un(-) / i/[bu?]nč a b[ol?]zun
- 6(2) // . / rt W R ŋ / š D m z T .  
////-rt uruŋ / [ba?]šadm äz t-  
(又は šadimiz)
- 7(1) ..... // .. B L  
////////// (-)ba(-)

翻訳 Translation

- 1 ? /// ヤグリグ
- 2 // // // クトウル [グ] ?
- 3 // // // キョ [ル] ?
- 4 / ? ? // // // ? ? テギン (?)
- 5 / ? // ? ? // ? [この?] ように, [な] れ!  
/ ? // ? ? // ? / let it [become] thus !
- 6 // // ? ウルング (?) / 導かない (?) ?

(or 我々のシャド)

////?? uruŋ/ without leading (?) ?

(又は our šad)

7

////////// ???

## 訳注

ソグド面同様、ルーン文字面も上記のテキスト・訳のごとく、一貫した内容の理解には至らない。1行目の *yaylīy-* は *Кляшторный / Лившиц 1971a; Kljaštornyj / Livšic 1971b* において *yaylaya(r)* とされた語だが、Lの次の母音は石の混在物の関係で写真では *a* に見えそうでも拓本からは *i* と判断される。*yaylaya(r)* が不可能となり、ソグド面でも *yy(l), yaghl\*\*\** となるので、この箇所のみ固有名詞として対応する可能性が高い。

# モンゴル時代遺蹟・遺物現況

## General Description of Sites and Inscriptions of the Mongol Era

松田孝一 (Kōichi MATSUDA)

### (1) モンゴル時代の統治システム

1996年度と1998年度に調査対象となったモンゴル高原に残存しているモンゴル時代の碑文、遺蹟について総括的に列挙しておきたい。ここに言うモンゴル時代とは、13世紀初頭のチンギス=カンによる大モンゴル国の建国に始まり、その領域がユーラシアの草原地帯全体に拡大し、統一が保持されていた帝国期、及び大モンゴル国が分裂した13世紀後半から14世紀後半の元朝統治時代の両時期を指している。

大モンゴル国では、その国家はカンの一族の男子が諸王として各地に分封され、辺境領域に封建領を形成し、また、有力従属集団にはカンの女子が公主として嫁し、集団の長はやはり一定の封地を確保して分権統治を行っていた。大モンゴル国は、コアとなるチンギス=カンの居所とその属領（いわば天領）及び辺境に分封された一族諸王・姻族諸侯の封建領の結合体であった。

カン及び各王侯はそれぞれ遊牧地（ユルト）と遊牧集団（千戸組織）を保持し、各領域内で季節移動を行いながら、日常生活を行いつつ、戦時には一定の兵員を率いて軍事活動に参画した。またその日常生活を維持・存続するための装置として、身辺護衛組織（ケシク）、配偶者集団（配偶者たる皇后、妃たちの住居たるオールドとオールド付属の人間集団）、農業生産・手工業生産のための都市・集落を設立した。

北中国など、南方の農耕地帯を征服した際には、そこにカンの出張行政機関である「行省」が設置され、統治を行った。また、カンや各王侯はともに征服地内にも応分の権益を保持し、それを経営した。こうしてモンゴル時代には、首都がモンゴル高原のカラコルム地区にあった帝国期においても、クビライ政権が成立して中国の大都地区に首都を遷都した後の元朝時代にあっても、北中国の富がモンゴル高原に流入し続けた。また、元朝時代のモンゴル高原には、従来の封建領をもつ諸王以外に、新たに北平王・北安王・晋王などの称号をもつクビライ家の諸王も封建された。

また、元朝政権は、元朝に反対する封建諸王たちと対決する必要から、自派の封建諸王軍団とは別個に新たな軍団を配備し、ホクシン=テールの宣威軍城などの屯田地<sup>(1)</sup>を開かせるとともに、軍事・行政の各種機関を設立した。

やがて13世紀末から14世紀初頭になると、中央アジアのモンゴル勢力が衰退し、元朝軍団は、中央アジア奥深く侵攻した。その一方で、元朝領内へは反対勢力の王侯の降伏・帰順があり、それに伴って、それらの王侯配下の大量の人口が元朝領内へ移住した。降伏・帰順した王侯への優遇、さらに難民とも言える彼らの配下の人的集団の生計維持のための食糧など大量の富の供給の必要が飛躍的に増大していった。元朝政府は、以後、元末に到るまで、モンゴル高原へ中国から米をはじめとする食糧供給を高い水準で維持して行くことになる。この機能を果たすために、元朝は14世紀初頭にモンゴル高原にあらたな行政機関、嶺北行省を設立した (Dardess 1973; 松田 1996, pp. 58-59)。

### (2) 調査対象となった碑文・遺蹟

上記のモンゴル時代の統治システムのあり方に関わる遺蹟・碑文資料として1996年度、1998年度の調査の対象となったものは、およそ次の(a)～(f)の6つの範疇に分けられる。

(a) カンの政治権力の所在地（ユルト）である首都圏における、カンの季節移動場所におかれた宮殿群や都市、農業集落、手工業集落の所在実態等、統治装置の解明に関わるもの

この項目に属するものとしては、ハンガイ山脈の東斜面、オルホン大平原の南端、カラコルムを中心として、南北に広がる一連の宮殿・集落遺蹟を上げなければならない。ハンガイ地域はモンゴル高原でもっとも豊かに草が生育する場所である (吉田順一 1980, pp. 49-51)。それゆえに匈奴以来、突厥・ウイグル・契丹・ケレイトなど、モンゴル高原を支配した遊牧勢力の拠点は、みなこの地域に置かれてきた。モンゴル帝国においても、第2代カン・オゴデイがこの地に首都を建設して以来、やはりモンゴル高原の中心として位置づけられた。ここを中心として、カンは南北の地域に季節移動を行い、首都はカラコルムを中心とする面としての地域であったと考えるべきで、その意味で「首都圏」という用語が適用できよう。

オゴデイ時代～モンケ時代におけるモンゴルのカンの季節移動に関しては、ボイル (Boyle 1974)・陳得芝 (1985, pp. 37-39) が詳細に検討している。ボイルによれば、その移動経路は、次の如くである。

|              |                                      |
|--------------|--------------------------------------|
| 4月～5月末まで40日間 | カラコルム（万安宮）北一日行程のカラ=バルガスン近くの湖と湿地で鷹狩り。 |
| 6月初め～4, 5週間  | カラコルムを経て、町から3マイルの丘上。                 |

(1) 最前線の屯田地としてチンギス=カン時代以来の鎮海城の他、五条河が知られる (堀江 1988, pp. 165-166)。

|               |  |
|---------------|--|
| 後～7月          | カラコルム東7マイルのトゥズグ=バリク（迎駕殿）。                  |
| 7月～8月積雪まで     | 南東のオルメクト地方の山地の夏营地（オルホンとホクシン=ゴルの間にあると思われる）。 |
| 後～10月初めまで40日間 | オルメクト地方の最南部フヘ=ノール。                         |
| 後～秋の末まで       | オンギ河沿いの冬营地。                                |
| 後～2月まで3ヶ月間    | ゴビ=アルタイの狩場。                                |
| 2月            | トゥズグ=バリクを経てカラコルムへ戻る。                       |

しかしながら、オルメクトなどの地名が具体的にどこに比定されるべきかはなお疑問がある。実際の現地調査にもとづいて、松田孝一は宮殿のひとつについて先駆的に比定を試みたが（朝日新聞、1994年12月4日夕刊）、加藤晋平（加藤 1997; Kato 1997）・白石典之（1996; 1997）は近年精力的にこの問題に取り組み、大きく研究を進展させ、成果を提示しつつある。

オゴデイからモンケまでのモンゴル皇帝の季節移動を、『元史』の記録から復元すると、そのコースは、初期には一定しないが、1235年のカラコルム都城・万安宮建設以降、オルホン河からオンギ河流域に沿っての南北移動に一定化していると判断される。

|       |   |
|-------|---|
| 1230年 | 春、オルホン河で狩猟。夏、タミル河で避暑。   |
| 1231年 | 夏、九十九泉で避暑。  |
| 1232年 | 冬、納蘭赤刺温の野に狩猟、太祖の大オルドに行幸。  |
| 1233年 | 春、鉄列都に行幸。秋、兀必思に狩猟。冬、阿魯兀忽可吾のオルドに行幸。                                  |
| 1234年 | 春、オルホン河で饗宴、狩猟。夏、ダラン=ダバスで集会。秋、八里里、ダラン=ダバスで会議。<br>冬、脱卜寒で狩猟。           |
| 1235年 | 春、カラコルム都城・万安宮を建設。   |
| 1236年 | 春、万安宮落成。  |
| 1237年 | 春、ゲゲン=チャガン沢で狩猟。夏、ソーリン城、ゲゲン=チャガン殿建設。<br>冬、野馬川（川は平原の意）で狩猟。            |
| 1238年 | 春、ゲゲン=チャガン沢で狩猟。トズグ城を建設、迎駕殿建設。                                       |
| 1239年 | 春、ゲゲン=チャガン沢で狩猟。   |
| 1241年 | 春、ゲゲン=チャガン沢で狩猟。冬、大狩猟。オテグ=クラン（クラン=野馬）山に戻る。<br>オゴデイ死去、ダラン=ダバスでカン選出会議。 |
| 1246年 | 春、カラコルム。秋、オンギの宿滅禿里でグユク即位。冬、野馬川で黄羊を狩猟。                               |
| 1247年 | 夏、曲律淮黒哈速で避暑。  |
| 1248年 | 春、グユク死去。  |
| 1251年 | 夏、コデエ=アラルでモンケ即位。  |
| 1252年 | 春、失灰に行幸。夏、カラコルムに滞在。冬、オテグ=クランに滞在、狩猟。                                 |
| 1253年 | 春、ゲゲン=チャガンで狩猟。夏、火児忽納要不（花）児に行幸。秋、グン=ノールに行幸。<br>冬、オンギに滞在。             |
| 1254年 | 春、ゲゲン=チャガンで狩猟。夏、オルメクトに行幸。<br>冬、也滅干哈里又海で狩猟。フフ=ノールの西で諸王会議。            |
| 1255年 | 夏、オルメクトに行幸。   |
| 1256年 | 春、欲児陌苦哥都に諸王百官会議。夏、タミル河に滞在。シラ=オルドに行幸。ダイルアタに行幸。<br>冬、阿塔哈帖乞児蛮に行幸。      |
| 1257年 | 春、忽蘭也児吉に行幸。夏、太祖行宮へ行幸。ケルレンに会合。オルメクトに行幸。<br>秋、グン=ノールに滞在。天を祭る。         |

オルホン河沿いの遺蹟を網羅的に図面に表現したのは、ラドロフである。その図面 (Atlas, pl. LXXXII) で、北からウゲイ=ノール湖の西約 5.6 km（図面の縮尺にもとづく距離）の①タイシン=ジロ（タインシン=ジル, Atlas, pl. LXI-1, LXII-1-4）の遺蹟の存在をまず記している。1247年にこの地域を旅行した張徳輝は、ウゲイ=ノールの真西に契丹の別城があり、周囲はカラコルム平原（和林川）で農業が行われており、野菜や麦が霜害にあっていると記している。この城址はカラ=バルガスンに比定する（松田 1994, p. 293）よりも、ラドロフが記しているタイシン=ジロに比定されるべきものであろう。ウゲイ=ノールから西へ流出するハロ河はホクシン=オルホン河と合流して、さらにオルホン河に流入する。タイシン=ジロ遺蹟はこの合流地点付近に位置する。従って、水量豊富なこの城址近傍はモンゴル時代にも農業が行われていた可能性は十分ある。ラドロフは、さらにそこから南南西約 15.3 km の②ジグステイ=ノール湖の南東す

ぐのところの遺蹟，そこからほぼ南 9.8 km の③ドイティン=バルガス (Atlas, pl. XLI-2) の遺蹟を記載している。ドイティン=バルガスについて，ポターニン，都市の址が，オルホンの近くに，トイトウイン=ツァガン=ノールと呼ばれるところにあり，ここにかつて蒙古の汗の妻が住んでいたという話があったことを記す (ポターニン 1945, p. 155)。バンバーエフは，カラ=バルガスンから 15 km のトイトイン=トルゴイという高い岡上にある大家屋の跡を訪れた。これは四角形で，低い土塁をめぐらす。家屋のあとにはただ自然石を積み重ねた基礎だけが残っている。四隅には四面体の花崗岩の柱が建っている。右と左の方には中央が穴になっている周囲に加工した石が散乱している。廃墟の頂上にはオボーが設けられていると記している (バンバーエフ 1942, pp. 77-78)。またペルレーは，ドイティン=ツァガン=ノール湖にドイティン=バルガスという大きな旧城址があり，地元の人々はツァガン湖が現在ある場所にも大きな町の址があり，洪水で沈んだと記す。ペルレーはこれをオゴダイの春の宮殿の所在場所に比定する可能性について先駆的に提起しながらも今一步及ばず，結論としては逆に否定した。これに対して白石典之は，このドイティン=バルガスの調査を 1996 年に行い，オゴダイの春の宮殿と断定した (白石 1997, p. 117)。図面としては Atlas, pl. LXI-2, 加藤報告に掲載された白石典之の作成の図面 (Kato 1997, p. 20, Fig. 5; 加藤 1997, p. 15, 図 4) がある。

ラドロフは，さらにドイティン=バルガスから南東約 5.2 km の④トムチンギル=ポルト=ノール湖の東南の遺蹟<sup>(1)</sup>，そこから南東約 3.6 km の⑤ハラト山の東の遺蹟 (現地名ハラティン=ドルベルジン=バルガス)<sup>(2)</sup>，そこから南西 1.7 km の⑥ザイ=ノール湖畔の遺蹟 (現地名ハラティン=バルガス)，そこから南東約 5.4 km の⑦カラ=バルガスン，そこから南 2.1 km の⑧礎石などの散乱する遺蹟，そこから南東約 25.3 km の⑨エルデニ=ゾー (万安宮) を記載している。

ラドロフ以外には，最近の加藤による UNESCO の報告で，⑩バヤン=ゴル遺蹟の存在が指摘されている。これは上記の⑧の礎石などの散乱する遺蹟の南南東約 12.7 km に位置している<sup>(3)</sup>。

またオルホン河の本流から離れて支流の遺蹟に関して，ラドロフは，オルホン河へ流入する⑪ジルマンタイ河上流の宮殿の廃墟のスケッチを載せている (Atlas, pl. LXVII)。また，バンバーエフは，ザイン=フレー (ツェツェルリク) から南へ向かい，ホヘ=スメ谷を西に上って⑫ホヘ=スメ廃墟 (高さ 1 m, 長さ 40 m, 幅 40 m) を見，そして，ホヘ=スメの頂上を越えて，ジルマンタイ河の上流のチャガン=スメイン=ゴルに降りて⑬チャガン=スメイン=ヘレム (城塞) (3 列の土塁があり，外壁の長さ，南北 200m, 東西 240 m。土塁の間隔 20 m。土塁内部は小高い丘となっている<sup>(4)</sup>) の存在を指摘している (バンバーエフ 1941, p. 76)。パルシは，ザイン=ゲゲン (ツェツェルリク) の南西 10 km の南タミル (オルト=タミル) 河の⑭ホーチン=オリヤスタイ城址 (城壁 770×775 m, 壁幅 8 m, 高さ約 1 m 余り，城壁外 40 m に外堀) の存在を指摘している (Halén 1978, p. 77)。

オルホン流域の遺蹟群の中心たるオゴダイ建設の万安宮とカラコルムの都城に関する研究はすでに，1949 年のキセリョフ・ペルレーによる発掘調査と報告があり (Пэрлээ 1961; Киселев 1965), ヴォイトフ (Войтов 1990), 加藤晋平 (Kato 1997; 加藤 1997), 白石典之 (1998) の調査報告，佐口透の研究史の整理 (1970, pp. 296-314) は参照すべきものであり，カラコルム一帯を焦点に遊牧国家における都市，農業の意義の検討の試み (Moses / Greer 1997) もある。

今回の我々の調査の中心は，カラコルムの碑文の調査と拓本の収集であった。従って，遺蹟の調査は包括的・全面的なものではない。カラコルムでは，いずれも亀跡が所在する，カラコルムの万安宮，万安宮から 3 km のカラコルム南のメルヒー=トルゴイ，さらにカラコルムの東の街外れの計 3ヶ所を 1996 年・1998 年に調査したのみである。オルホン流域に関しても，1998 年にわずか 1 日の概観調査を行ったに過ぎない。また，カラコルム西北 5 km の⑩バヤン=ゴルの城址，⑦カラ=バルガスン，その北の⑤ハラティン=ドルベルジン=バルガスと⑥ハラティン=バルガス，③ドイティン=バルガス，さらにカラコルム南南東 130 km の⑮シャーザン=ホトの各遺蹟で景観調査と略測を行った。このうち，

<sup>(1)</sup> 湖名はロシア製の 20 万分の 1 地図には表記されていないが，遺蹟はかなり大きなマークで城塞の存在として明確に表示されている。

<sup>(2)</sup> 本年の調査で，方形の低い土塁で囲まれた城址の存在を確認した。城址の北西壁は北約 133 度の傾き，北西壁 192 m, 北東壁 198.6 m, 南東壁 194.2 m, 南西壁 196.2 m。北西・南東壁の中央に門がある。城壁内にはマウンドが中心軸に沿って 3 個，また北東・南西壁内側に沿って各 1 個，南東壁の東隅と南隅よりに円形マウンドが各 1 個あり，中央の円形マウンドには瓦・レンガがあった。

<sup>(3)</sup> バヤン=ゴル河の谷筋を西へ登る。谷幅は 300~400 m 位。2.3 km 登った場所に便宜上バヤン=ゴル第 1 城址と名づけた城址がある。さらに谷筋を 2 km ほど西へ登ると，そこに加藤報告 (Kato 1997, pp. 23-24) にある遺蹟がある。便宜上これをバヤン=ゴル第 3 城址とする。遺蹟は第 1，第 3 とともに 2 つの方形の囲郭がずれて接している形態をしている。このずれた接合形はメルヒー=トルゴイの遺蹟と共通している (Kato 1997, pp. 23-24)。第 1 城址の囲郭の一つは土塁の方形 (北辺 69 m, 南辺 66 m, 西辺 56.4 m) がはっきりと残存している。その囲郭の内部に 2 つのマウンドが残っている。南東よりのマウンドは高さ 2 m, 北西よりは高さ 1 m である。周囲の土塁はモンゴル時代に特有の低いもので，周辺との比高差は 50 cm 程度である。瓦・レンガがマウンドに多く散乱している。第 1 城址の北の枝谷の奥に，半球状に盛り上がったマウンドを四角形の低い土塁が囲んでいるのが見える。これをバヤン=ゴル第 2 城址と仮に名づけておく。予定外の発見で時間がなく，写真撮影のみで済ませたため計測記録はない。第 2 城址は，東北側の土塁の囲郭内にマウンドがあるが，礎石の類は見えなかった。瓦・レンガの散乱は地表から見る限り少量であった。加藤によれば，土塁の高さは 70~100 cm である (Kato 1997, p. 23)。1998 年度行動記録 8 月 17 日を参照。

<sup>(4)</sup> 3 列の土塁がある点は宣威軍城第 3 城址と同じである。

シャーザン=ホトについては本報告書の当該項目を参照されたい。シャーザン=ホトの図面については、白石典之（新潟大学）から実測図の提供を受けている。

#### (b) 嶺北行省の統治に関わる碑文

カラコルムに関わる碑文については、本報告書の松川節のカラコルム関係碑文報告を参照されたい。また、嶺北行省は、カラコルムの都市内にその官庁が設置されていたと考えられ、エルデニ=ゾー内の碑文の多くも14世紀以降の嶺北行省の行政に関わるものである。これらの碑文の詳細な内容は今後の検討課題として残したが、本報告書ではカラコルム関係碑文官職名・人名総合索引（松井太担当）を提出し、今後の諸碑文の検討の基礎資料とする。

#### (c) 王侯の、いわば第2級の、あるいはミニチュアサイズの同様の統治装置の解明に関わるもの

この範疇に属するものとしては、セレンゲ河の支流アルゲル=ムレン北岸の釈迦院遺蹟と碑文「釈迦院碑記」がある。この地は、チンギス=カンに内附し、代々チンギス=カン家の女子を嫁に迎える姻族諸侯の待遇を与えられたオイラト族の首長の勢力圏に含まれ、ここに都城・寺院が建設されたと考えられる。碑文はそれに関わるもので、モンゴル語と漢文で記されており、現在、ウランバートル市内の民族史博物館に所蔵されている。本報告書の宇野伸浩の報告を参照されたい。

次に、アルハンガイ=アイマクのハルホル=ハン遺蹟が挙げられる。この遺蹟の主要城址である第1城址は、16～17世紀に修築された部分もあったと考えられるものの、モンゴル時代に特有の緑釉瓦が残存することから、元朝有力王族の拠点であったことは確実である。本報告書の松田孝一の報告を参照されたい。

#### (d) 元朝の軍事活動の拠点都市の実態解明に関わるもの

この範疇に属するものとして、ウブルハンガイ=アイマクの宣威軍城址（ホクシン=テール遺蹟）がある。これはクビライ政権が派遣した漢人軍団の駐屯基地の遺蹟である。また、現在ウランバートルのモンゴル民族史博物館には、この駐屯基地建設について記した碑文「宣威軍碑」が所蔵されている。遺蹟・碑文の双方を、1996年・1998年に調査した。本報告書の村岡倫の報告を参照されたい。

また、同遺蹟には多くの穴状の遺構が残されており、そのうちの1ヶ所について、モンゴル側が実験的発掘を実施した。軍事遺蹟らしく、鉄の鏃、鎧の一部などが出土した。発掘についてはモンゴル側のグンチンスレン（Гүнчинсүрэн）の報告を参照されたい。

#### (e) その他の都市遺蹟

ウイグル時代以後、モンゴル高原の草原地帯に、農業集落、手工業職人集落、商業活動のための集落・都市が出現した。それらのウイグル時代に建設された都市遺蹟のうち、バイバリク遺蹟は、元朝時代初期においても都市としての機能を保持していたことが、文献的に知られる。1997年にトルコ班の調査対象となったが、モンゴル班でも1998年の調査対象に加え、実際の景観・遺蹟の残存状況の把握から、モンゴル時代の特徴の確認につとめた。バイバリク遺蹟に関する本書前掲報告の松田孝一補足部分を参照されたい。

#### (f) 関連調査対象

碑文以外に、ボルガン=アイマクのファイテン=ゴルの岩壁銘文、ウランバートル南郊のイフ=テンゲリン=アムの岩壁銘文の2つも調査した。ファイテン=ゴル岩壁銘文については、本報告書の中村淳・松川節・松井太の報告を参照されたい。ただし、両者とも、銘文判読はきわめて困難であり、特にイフ=テンゲリン=アムの銘文は近年に上書きされて元の文字が判読できず、歴史資料としては利用しがたい状態である。

また、モンゴル時代の遺蹟との比較検討のため、モンゴル時代以降に属するツァガン=バイシン遺蹟を調査し、その付近の碑文を採拓して、内容の検討を行なった。さらに、ツァガン=バイシンから20kmほどのトール河畔に、ツォクト=ホンタイジに関わる5言語の銘文があり、それらを現地で検討・確認し、漢文部分のみ拓本を採取した。以上、本報告書のツァガン=バイシン遺蹟等の報告を参照されたい。

なお、各遺蹟・碑文の説明で方向を示す「北90度」などの表記は、時計回りの角度を示す。

今回の調査にあたり、収集した瓦・レンガの胎土分析には三辻利一教授（奈良教育大学）、衛星写真による遺蹟分布の解析には相馬秀廣教授（奈良女子大学）、調査図面の作成には武田和哉氏（奈良市教育委員会埋蔵文化財調査センター）のご支援・ご協力を賜わった。末筆ながら、特記して謝意を表したい。

# カラコルム関係碑文所在状況

## Present Whereabouts and State of Qara-qorum Inscriptions

松川 節 (Takashi MATSUKAWA)

### はじめに

モンゴル帝国の首都カラコルム (Qara-qorum) は、1260年、クビライ (Qubilai) が大元ウルスを興すとともに、帝国の中心としての地位を大都・上都にゆずり、モンゴリアにおける中心的要塞都市となった。1368年にモンゴルが北帰してからもしばらくのあいだ、カラコルムはモンゴリアにおける中心都市であり続けたが、次第に衰え、1585年、当地にチベット式仏教寺院エルデニ=ゾー (Erdeni-juu) が建立されたときには、すでに廃墟となっていた模様である。

カラコルム遺蹟には、当時の栄華を物語る様々な石刻史料が現在に至るまで残されている。本稿では、カラコルムに伝存するモンゴル時代の石刻史料について、その調査・研究史とともに、最新の所在状況をまとめておく。

### 調査史

カラコルムの学術調査は、1889年、ロシア帝国科学アカデミーの派遣したオルホン探検隊 (ラドロフ団長) によって初めて行なわれ、その成果は、『オルホン探検叢書集成』(Сборник трудов Орхонской экспедиции) と、1892~99年にかけて4分冊で刊行された『モンゴル古代遺蹟図冊』として残されている (Atlas)。前者のうちの第1巻には、1889年の第1次探検のリーダーであったヤドリツェフが行動記録を記しており、そのなかでヤドリツェフは、1889年夏にエルデニ=ゾーを訪問したところ、院内各処に漢文及びモンゴル文の碑文が放置されており、あるものは寺院外門の敷石として、あるものはチョクテン堂宇の礎石として利用されていたと記録している (cf. Cleaves 1952, p. 9)。このときに採取された拓本を収め、1892年に発刊された Atlas 第1分冊には、エルデニ=ゾーの内外から発見された様々な漢文碑文やウイグル文字モンゴル語碑文の拓影が収録された。

このときにロシア隊によって用意された碑文拓影は、クーロンの総理衙門を介して清末の考証学者・葉昌熾の知るところとなり、葉は拓影を手写し、その概要を葉昌熾 (撰) 『語石』(光緒27年(1901)自序)のなかに紹介した<sup>(1)</sup>。また葉を通じて李文田の知るところとなり、『語石』に先立つこと4年、1897年に李文田 (撰) 『和林金石録』(以下『和録』と略)が刊行された。『和録』にはラドロフ探検隊によって採拓されたほぼすべての漢文碑文が著録されており、これは、カラコルム関係碑文研究の嚆矢となるものである。

ラドロフ探検隊の次にカラコルムの調査記録を残したのは、1908年に橘瑞超と野村栄三郎によって敢行された第二次大谷探検隊であり、野村栄三郎は、1908年8月23~26日にエルデニ=ゾーに滞在し、院内にあった7点の碑文について、その配置を平面図で示しつつ、若干の情報を記している (野村 1937, p. 463)。碑文の採拓は、現地人の反対により実現せず、また、そもそも碑石に油 (おそらく仏教崇拜物として信者がバター油を塗りつけたものであろう) が注がれており、採拓は不可能であったとする (野村 1937, p. 462)。

しかしながら、野村が著わしたエルデニ=ゾー内の碑文配置図と、7点の碑文の大きさに関する情報は、1938年以降、大幅に移動され、或いは失われたモンゴル時代の碑石が、そもそもどの地点に配置されていたかを知る上で貴重である。ラドロフが報告する碑石の所在地名 Daschyn Aizun<sup>(2)</sup>, Zanidin Dugun などの堂宇は、1938年に行なわれた大規模な破壊によってすでに現存せず、1938年以前のエルデニ=ゾー院内堂宇配置図を我々は手にすることができなかったからである。

1908年の第二次大谷探検隊以降、カラコルムで大規模な調査が行なわれることはしばらくなかったが、1912年に現地を訪れたコトヴィチは、ラドロフが報告するウイグル文字モンゴル語碑文2断片に接合するとみられる3断片を新たに発見し、1918年に報告した (Котвич 1917)。コトヴィチは発見の事実のみを伝えたもので、その後これら3断片の行方は知られていない。一方、1926年に現地調査を行なったポッペは、さらに新たなウイグル文字モンゴル語碑文2断片を見だし、コトヴィチと同じく、これら2断片がラドロフの2断片と接合する可能性を示唆した (Ponne 1929, pp. 14-15, 20-22)。

これ以降、カラコルムでは、1933~34年にロシア人探検家ブキニチが調査を行ない、1948~49年にはロシア人考古学者キセリョフが本格的な調査を行ない、1978年からモンゴル科学アカデミー歴史研究所が継続調査、1995年からはユネスコによる遺蹟保存調査が行なわれているが、モンゴル時代の碑文が新たに発見されることはないまま、1998年の我々の調査に至る。

<sup>(1)</sup> 本書は中国金石学の入門書として有名で、日本語訳 (藤原楚水訳『支那金石書談』大東書院、1929; 再刊: 『中国石刻書道史』名著出版、1986) も存在する。日本語訳書によると、葉昌熾は元碑として以下の13点をあげている。三靈侯廟碑、四世同居の立石?、和林兵馬劉公去思碑、三皇廟の残碑2。以上5碑の碑陰にはみな題名あり。嶺北省右丞郎中総管収糧記、漢冢の残石、大司農保釐朔方記、残石4 (みな碑陰あり)、勅賜興元閣記。

<sup>(2)</sup> これはコトヴィチによって Dash-naicin と訂正された。

## 研究史

カラコルム出土モンゴル時代の碑文に関する研究は、上述の李文田（撰）『和林金石録』に始まった。この『和林金石録』は羅振玉による詳細な校勘記を伴って 1929 年に再刊されている。これ以降、漢文碑文の研究は、漢蒙碑文『勅賜興元閣碑』（1346 年建立）の訳註を 1952 年にアメリカのクリーヴスが発表した (Cleaves 1952) 以外、まったくなされてこなかった。

モンゴル語碑文のうちでは、上述の漢蒙碑文『勅賜興元閣碑』がカラコルム城建設の歴史を物語るものとして、欧米の学者の注目を集めた。『勅賜興元閣碑』の研究史・釈読については、クリーヴス論文にまとめられているので参照されたい。

## 所在状況

以下、1998 年の本調査によって把握することができたカラコルム出土モンゴル時代碑文の所在状況をまとめておく。冒頭の No. については、後継の「カラコルム関係碑文官職名・人名総合索引」冒頭の一覧表の通し番号に従う。また、これらの碑文と、Atlas の拓影・『和録』の移録との対応関係についても、同表を参照せよ。

**Nos. 3-5, 勅賜興元閣碑 (Atlas, pls. XLI-1, 2, 3):** これら 3 断片と、コトヴィッチの報告する 3 断片、ポッペの報告する 2 断片を含め、勅賜興元閣碑を形成する断片はすべて所在不明であった。わずかにポッペ報告の 2 断片が、1926 年以降、ウランバートルに移送されたことがわかっているのみ。あるモンゴル人学者によると、これらの碑文はウランバートルのボグド=ハーン宮殿博物館の門前に 1970 年代まで設置されていたというが、現存せず、文献的な裏付けもとれていない。しかし 1997 年、No. 3 断片がウランバートルにあるモンゴル科学アカデミー歴史研究所の考古学研究室に所蔵されていることがわかり、その釈読がトゥルバトによって発表された (Төрбaт 1997)。トゥルバト論文によると、碑石は上下に分断されて 2 断片になっている。我々は 1998 年度の調査時にこの碑文に初めて接し、採拓することができた。

**Nos. 6, 7, 11, 16, 19, 20, 22, 23, 24, 25, ゴルバン=ゾーの欄干・石柱・壁面碑文:** エルデニ=ゾーが 1585 年に建立されたとき、最初に造られた本殿ゴルバン=ゾー堂宇は、建築に際してモンゴル時代の石碑がその建材として再利用され、以後、現在に至るまでいかなる破壊・改築も被らないまま伝存している。ゴルバン=ゾーの欄干、石柱、或いは壁面に埋め込まれた碑文の多くは、ラドロフによって採拓されているが、今回の調査で我々は、ラドロフが採拓しえなかった計 4 点について、新たに拓本を採ることに成功した。松田孝一担当の 1998 年度行動記録、8 月 24 日を参照。

**Nos. 9, 10, 題名残碑 (Atlas, pls. XLIII-3, 4):** エルデニ=ゾー東門外の両石柱に埋め込まれたもの。裏面を参照することはまったく不可能である。なお、この門の実際の方位は東南、エルデニ=ゾーのプランからみると正門なので、「南門」と呼ぶのが正しいが、ラドロフ以来の慣習に従い本稿では東門と呼ぶこととする。

**Nos. 14, 嶺北省右丞郎中総管収糧記・No. 15, 和林兵馬劉公去思碑 (Atlas, pls. XLV, XLVI):** ともに院内東北の草むらのなかに並んで横倒しにされている。すぐ側に碑文の台座が放置されており、ほぞ穴の寸法が和林兵馬劉公去思碑のソケットの寸法と一致することから、同碑の台座であったと思われる。これらの碑文が現在地に移動された由については、1998 年度行動記録 8 月 16 日の項を参照されたい。嶺北省右丞郎中総管収糧記については、本報告書の松川・松井担当分を参照。

**No. 17, 翹建三靈侯廟碑 (Atlas, pls. XLVII-2, 3):** 現存。院内東門近くに立つ。

**No. 18, ベルシア語碑文 (Atlas, pl. XLVIII):** 現存。南門近くに立つ。

以上のほか、Nos. 8, 12, 13 は、ラドロフが拓影を掲載しているが、現在所在不明になっているものである。

## カラコルム関係碑文官職名・人名総合索引 Index of the Terms Found in Qara-qorum Inscriptions

松井 太 (Dai MATSUI)

Atlas や李文田『和林金石録』（以下『和録』と略）をはじめとする従来報告により、元代モンゴル高原史に関係する碑文資料は、計 21 件の存在が知られていた。その中には、現在、原碑が行方不明となっているもの、また将来された拓本の所在が不明のものもある。しかしながら、我々は今回の調査において、現在モンゴル国内の所蔵機関に保管されている釈迦院碑記・宣威軍碑、さらにエルデニゾー寺院内で再利用ないし放置されている碑文を多く再確認することができた。それらを一覧表にして以下に掲げる。表中、No. の項が太字で表記されているものが、我々が原碑を実見調査のうえ拓本を将来し得たものである。すなわち、これまで知られていた計 21 件のうち 15 件と新発見の 4 件、合計 19 件の碑文について、原碑を調査したことになる。

本稿においては、今後の研究を進めるための基礎的作業として、特に元代カラコルム関係碑文に登場する官職名・人名についての総合索引を提示する。

| No. | 碑 題             | Atlas    | 和録   | 現在地*             | 拓本 |
|-----|-----------------|----------|------|------------------|----|
| 1   | 釈迦院碑記           |          |      | 民族史博物館           | ○  |
| 2   | 宣威軍碑            |          |      | 民族史博物館           | ○  |
| 3   | 勅建興元閣碑・モンゴル文    | XLI-1    |      | モンゴル科学アカデミー歴史研究所 | ○  |
| 4   | 勅建興元閣碑・漢文       | XLI-2    | 24a* | 不明               |    |
| 5   | 勅建興元閣碑・モンゴル文    | XLI-3    |      | 不明               |    |
| 6r  | 三皇廟残碑           | XLII-1   | 12a  | G・西壁             | ○  |
| 6v  | 三皇廟残碑・碑陰        | XLII-2   | 13b  | G・西壁             |    |
| 7r  | 大司農保蓋朔方記        | XLII-3   | 27a  | G・南門階段北石柱表       | ○  |
| 7v  | 大司農保蓋朔方記・碑陰     | (XLII-3) |      | G・南門階段北石柱裏       | ○  |
| 8v  | 四世同居立石・碑陰       | XLIII-1  | 23b  | 不明               |    |
| 8r  | 四世同居立石          | XLIII-2  | 23b  | 不明               |    |
| 9   | 題名残碑            | XLIII-3  | 19b  | E・東門外南石柱         | ○  |
| 10  | 題名残碑            | XLIII-4  | 18a  | E・東門外北石柱         | ○  |
| 11v | 三皇廟残碑・碑陰        | XLIV-1   | 25a  | G・西壁             |    |
| 11r | 三皇廟残碑           | XLIV-2   | 24b  | G・西壁             | ○  |
| 12  | 漢塚石             | XLIV-3   | 33a  | 不明               |    |
| 13  | 残碑              | XLIV-4   |      | 不明               |    |
| 14r | 嶺北省右丞郎中総管収粮記    | XLV-1    | 28a  | E・東北草中           | ○  |
| 14v | 嶺北省右丞郎中総管収粮記・碑陰 | XLV-2    |      | E・東北草中           | ○  |
| 15r | 和林兵馬劉公去思碑       | XLVI-1   | 14b  | E・東北草中           | ○  |
| 15v | 和林兵馬劉公去思碑・碑陰    | XLVI-2   | 16b  | E・東北草中           | ○  |
| 16  | 残碑              | XLVII-1  | 30a  | G・北門階段北石柱表       | ○  |
| 17r | 勅建三靈侯廟碑         | XLVII-2  | 21b  | E・東門内            | ○  |
| 17v | 勅建三靈侯廟碑・碑陰      | XLVII-3  | 22b  | E・東門内            | ○  |
| 18  | ベルシア語碑文         | XLVIII   |      | E・南門内            | ○  |
| 19r | 残碑              | XLIX-1   | 31a  | G・中央門階段北石柱表      | ○  |
| 19v | 残碑（同上関連）        | (XLIX-1) |      | G・中央門階段北石柱裏      | ○  |
| 20r | 残碑              | XLIX-2   | 31b  | G・中央門階段南石柱表      | ○  |
| 20v | 残碑（同上関連）        | (XLIX-2) |      | G・中央門階段南石柱裏      | ○  |
| 21  | イスンゲ紀功碑         | XLIX-3   |      | ロシア・エルミターージュ博物館  |    |
| 22  | 残碑              |          |      | G・南門階段南欄干裏       | ○  |
| 23  | 残碑              |          |      | G・中央門階段南欄干裏      | ○  |
| 24  | 残碑              |          |      | G・中央門階段北欄干裏      | ○  |
| 25  | 残碑              |          |      | G・北門階段南欄干裏       | ○  |

\* 「現在地」欄のEはエルデニゾー内、Gはゴルパンゾー内をさす。

\* 勅建興元閣碑・漢文は、許有壬『至正集』巻45（元人文集珍本叢刊）に「勅賜興元閣碑」として載録。Cleaves 1952 参照。

## 凡例

- 1) 本索引では元代カラコルムに直接関連する漢文碑文を対象とする。従って前掲一覧表のうち、釈迦院碑記 (No. 1)・宣威軍碑 (No. 2)・勅建興元閣碑モンゴル文 (Nos. 3, 5)・ペルシア語碑文 (No. 18)・イスンゲ紀功碑 (No. 21) は除外される。また、No. 13 の残碑は Atlas (pl. XLIV-4) に不鮮明な拓影が公刊されるのみで移録不可能であり、No. 22 の残碑は漢字1字が確認されるにすぎないので、いずれも除外する。また、勅建興元閣碑漢文 (No. 4) は、『和録』所収部分のみを対象とし、許有壬『至正集』に収録される部分は対象としない。
- 2) 左から順に語彙、所出碑文、所出行数 (A, B, C は段を示す)、Atlas 掲載の図版 No., 『和録』の葉数・行数を示す。なお、語彙は人名・職名・文散官・武散官の順に配列する。
- 3) 破損・摩滅のため判読できない文字は□で示すが、文脈から確実に推補可能と考えたものはそのまま補い、特に注記しない。ただし、碑石の破断によって現存しない部分に残っていたと考えられる文字は [ ] で示す。
- 4) 官職名が官司名に後続している場合、その双方で検索可能なように配慮した。例えば「嶺北行省左右司郎中」については、「嶺北行省左右司郎中」「左右司郎中」「郎中」のいずれでも検索可能である。
- 5) 「耆老」「社長」など、厳密には官職とはいえないが、当時のカラコルムの社会構成をうかがう上で重要と考えた語彙も採録し、官職に含めて扱う。
- 6) 碑文は以下の略称で示す。

興元閣 [ch] = 勅建興元閣碑・漢文  
 三皇 = 三皇廟残碑  
 大司農 = 大司農保釐朔方記  
 四世 = 四世同居立石  
 嶺北 = 嶺北省右丞郎中総管取糧記  
 劉公 = 和林兵馬劉公去思碑  
 三靈侯 = 勅建三靈侯廟碑

- 6) 名称・呼称の一致する三皇 (= 三皇廟残碑) および残碑を区別するため、名称・略称の後の [ ] 内に前掲一覧表の No. を示す。また、各碑とも r は碑陽、v は碑陰を示す。

Index of the Terms Found in Qara-qorum Inscriptions

| 語句     | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    | 語句      | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    |
|--------|----------|-----|---------|-------|---------|----------|-----|---------|-------|
| 人名     |          |     |         |       | 王 德成    | 劉公 [v]   | B04 | XLVI-2  | 17a06 |
| □ □敬   | 殘碑 [9]   | 03  | XLIII-3 | 20a05 | 王 伯亨    | 殘碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 |
| □ □□   | 劉公 [v]   | A05 | XLVI-2  | 16b06 | 王 伯令    | 殘碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 |
| □ □□   | 劉公 [v]   | A12 | XLVI-2  | 17a01 | 王 輔     | 殘碑 [10]  | C03 | XLIII-4 | 19b03 |
| □ 安貞   | 殘碑 [20v] | 12  |         |       | 王 李羅帖木兒 | 殘碑 [10]  | B08 | XLIII-4 | 18b09 |
| (□) 彥暉 | 殘碑 [19r] | 13  | XLIX-1  | 31b06 | 王 明見    | 三皇 [11v] | C07 | XLIV-1  | 26b03 |
| □ 擇善   | 殘碑 [19v] | 11  |         |       | 溫 榮     | 殘碑 [10]  | C04 | XLIII-4 | 19b02 |
| □ 陳    | 殘碑 [10]  | A10 | XLIII-4 | 18a05 | 溫 毅     | 殘碑 [25]  | 03  |         |       |
| □□     | 殘碑 [10]  | B03 | XLIII-4 | 19a02 | 艾 恭賢    | 殘碑 [10]  | A02 | XLIII-4 | 18b01 |
| □□思不花  | 殘碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 20b09 | 郭 □     | 大司農 [v]  | 01  |         |       |
| □□□    | 殘碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 19b09 | 郝 完澤    | 殘碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 20a12 |
| 愛薛     | 殘碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20a01 | 郭 君祥    | 三靈侯 [v]  | 03  | XLVII-3 | 22b11 |
| 阿忽刺    | 殘碑 [20r] | B07 | XLIX-2  | 32b04 | 郝 師嚴    | 殘碑 [19v] | 11  |         |       |
| 阿兒思蘭出  | 殘碑 [20v] | 02  |         |       | 郭 思亨    | 三皇 [11v] | B12 | XLIV-1  | 26a07 |
| 阿里     | 殘碑 [19v] | 05  |         |       | 郭 思齊    | 殘碑 [19v] | 09  |         |       |
| 阿里     | 殘碑 [20v] | 08  |         |       | 郭 從道    | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b03 |
| 阿老丁    | 劉公 [v]   | B06 | XLVI-2  | 17a08 | 郭 崇節    | 殘碑 [10]  | C11 | XLIII-4 | 19a07 |
| 阿魯渾沙   | 殘碑 [19r] | 01  | XLIX-1  | 31a06 | 郝 世榮    | 殘碑 [19r] | 06  | XLIX-1  | 31a11 |
| 安 □□   | 殘碑 [19v] | 01  |         |       | 郭 擇善    | 殘碑 [19r] | 02  | XLIX-1  | 31a07 |
| 晏 溫    | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a02 | 霍 有孚    | 嶺北 [r]   | 02  | XLV     | 28a04 |
| 安梯不花   | 殘碑 [10]  | A01 | XLIII-4 | 18b02 | 賈 成     | 三皇 [6v]  | B08 | XLII-2  | 14a04 |
| 暗都刺    | 殘碑 [10]  | A08 | XLIII-4 | 18a07 | 賈 成     | 四世 [r]   | 04  | XLIII-2 | 23b08 |
| 暗都刺    | 劉公 [v]   | B06 | XLVI-2  | 17a08 | 賈 成     | 殘碑 [25]  | 20  |         |       |
| 暗都ㄅ    | 三靈侯 [r]  | 01  | XLVII-2 | 21b06 | 譚 澤     | 殘碑 [10]  | B07 | XLIII-4 | 18b10 |
| 暗都刺    | 殘碑 [20v] | 07  |         |       | 賈 仲□    | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a07 |
| 宇      | 殘碑 [23]  | 04  |         |       | 賀 伯川    | 殘碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 19b09 |
| 衛 □榮   | 殘碑 [10]  | C04 | XLIII-4 | 19b02 | 賀 美     | 殘碑 [10]  | C10 | XLIII-4 | 19a08 |
| 榮 繼明   | 殘碑 [10]  | C10 | XLIII-4 | 19a08 | 賈 福     | 三皇 [6r]  | 09  | XLII-1  | 12b08 |
| 亦□□    | 殘碑 [19r] | 08  | XLIX-1  | 31b01 | 賈 福     | 三皇 [11v] | B03 | XLIV-1  | 25b10 |
| 亦吉不    | 殘碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20b03 | 何 明里    | 殘碑 [20v] | 11  |         |       |
| 亦思馬因   | 三皇 [11v] | B06 | XLIV-1  | 26a01 | 顏 □     | 殘碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 20a11 |
| 亦速福    | 殘碑 [10]  | A07 | XLIII-4 | 18a08 | 韓 惟一    | 殘碑 [19v] | 11  |         |       |
| 亦刺馬丹   | 殘碑 [20v] | 03  |         |       | 完顏 榮祖   | 殘碑 [10]  | B09 | XLIII-4 | 18b08 |
| 燕者     | 殘碑 [20v] | 07  |         |       | 韓 欽甫    | 殘碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20b12 |
| 燕 勝    | 殘碑 [19v] | 12  |         |       | 韓 執庸    | 殘碑 [20v] | 09  |         |       |
| 俺都刺哈蠻  | 殘碑 [20v] | 08  |         |       | 完者帖木兒   | 殘碑 [20v] | 05  |         |       |
| 燕 伯顏不花 | 殘碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 20a10 | 完者帖木兒   | 殘碑 [24]  | B08 |         |       |
| 王      | 殘碑 [20v] | 07  |         |       | 完者禿     | 三皇 [11v] | C04 | XLIV-1  | 26a12 |
| 王      | 殘碑 [20v] | 11  |         |       | 完者不花    | 殘碑 [20v] | 06  |         |       |
| 王      | 殘碑 [20v] | 14  |         |       | 韓 守益    | 殘碑 [10]  | A05 | XLIII-4 | 18a10 |
| 王 □德   | 殘碑 [20v] | 10  |         |       | 歡 赤     | 三皇 [6v]  | A03 | XLII-2  | 13a10 |
| 王 儀    | 三皇 [11v] | B10 | XLIV-1  | 26a05 | 韓 德     | 嶺北 [r]   | 03  | XLV     | 28a06 |
| 王 義    | 三靈侯 [v]  | 02  | XLVII-3 | 22b10 | 韓 德     | 殘碑 [16]  | 18  | XLVII-1 | 30b11 |
| 王 敬    | 劉公 [v]   | A08 | XLVI-2  | 16b09 | 閔 也先    | 殘碑 [10]  | B03 | XLIII-4 | 19a02 |
| 王 考思   | 殘碑 [20v] | 09  |         |       | 魏 義     | 三皇 [11v] | C09 | XLIV-1  | 26b05 |
| 王 克義   | 殘碑 [10]  | B06 | XLIII-4 | 18b11 | 魏 思賢    | 殘碑 [10]  | B03 | XLIII-4 | 19a02 |
| 王 克弘   | 殘碑 [10]  | A06 | XLIII-4 | 18a09 | 魏 信     | 三皇 [11v] | C10 | XLIV-1  | 26b06 |
| 王 古大   | 三皇 [6v]  | B10 | XLII-2  | 14a07 | 吉 仲實    | 劉公 [v]   | B06 | XLVI-2  | 17a08 |
| 王 忽林赤  | 殘碑 [19v] | 13  |         |       | 魏 二     | 劉公 [v]   | B11 | XLVI-2  | 17b02 |
| 王 子溫   | 劉公 [v]   | A08 | XLVI-2  | 16b09 | 魏 文義    | 殘碑 [10]  | B01 | XLIII-4 |       |
| 王 實    | 三皇 [11v] | C10 | XLIV-1  | 26b06 | 牛 恭□    | 殘碑 [10]  | C10 | XLIII-4 | 19a08 |
| 王 從善   | 殘碑 [10]  | A02 | XLIII-4 | 18b01 | 教 子長    | 殘碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 20a11 |
| 王 俊    | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a04 | 喬 秉中    | 劉公 [v]   | A07 | XLVI-2  | 16b08 |
| 王 潤    | 劉公 [v]   | B10 | XLVI-2  | 17b01 | 許 恭祖    | 殘碑 [10]  | B05 | XLIII-4 | 18b12 |
| 王 成    | 殘碑 [19v] | 13  |         |       | 許 繼先    | 三皇 [11v] | B10 | XLIV-1  | 26a05 |
| 王 成甫   | 三靈侯 [v]  | 01  | XLVII-3 | 22b09 | (許) 有壬  | 興元閣 [ch] | 03  | XLI-2   | 24a08 |
| 王 節    | 三皇 [11v] | C07 | XLIV-1  | 26b03 | (許) 有壬  | 興元閣 [ch] | 03  | XLI-2   | 24a08 |
| 王 宗魯   | 殘碑 [24]  | E02 |         |       | 魏 良卿    | 三靈侯 [v]  | 10  | XLVII-3 | 23a06 |
| 王 仲賢   | 三皇 [11v] | C06 | XLIV-1  | 26b02 | 狗兒      | 殘碑 [20v] | 03  |         |       |
|        |          |     |         |       | 景 元利    | 殘碑 [10]  | A03 | XLIII-4 | 18a12 |

| 語句    | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    | 語句      | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    |
|-------|----------|-----|---------|-------|---------|----------|-----|---------|-------|
| 邢文通   | 残碑 [9]   | 03  | XLIII-3 | 20a05 | 周亨      | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a03 |
| 月魯帖木兒 | 残碑 [20v] | 04  |         |       | 周中信     | 三皇 [11v] | C06 | XLIV-1  | 26b02 |
| 元     | 四世 [v]   | 03  | XLIII-1 | 23a01 | 周彬      | 残碑 [19r] | 05  | XLIX-1  | 31a10 |
| 堅口    | 劉公 [v]   | A09 | XLVI-2  | 16b10 | 受之 →劉天錫 | 劉公 [r]   | 08  | XLVI-1  | 15a09 |
| 彦暉    | 残碑 [19r] | 13  | XLIX-1  | 31b06 | 朱誠翁     | 三皇 [11v] | C07 | XLIV-1  | 26b03 |
| 堅童    | 三皇 [11v] | B10 | XLIV-1  | 26a05 | 朱邦寧     | 残碑 [10]  | A03 | XLIII-4 | 18a12 |
| 元道    | 残碑 [19v] | 10  |         |       | 朱良弼     | 劉公 [v]   | A07 | XLVI-2  | 16b08 |
| 高口    | 三皇 [11v] | C07 | XLIV-1  | 26b03 | 徐       | 漢塚石      | 05  | XLIV-3  | 33a08 |
| 耿嘉    | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 | 尚       | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b10 |
| 咬哥    | 残碑 [20r] | A01 | XLIX-2  | 31b10 | 尚       | 残碑 [20v] | 13  |         |       |
| 高侃    | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b10 | 常慶祥     | 三靈侯 [v]  | 06  | XLVII-3 | 23a02 |
| 高彦温   | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a08 | 尚桂班     | 三皇 [6v]  | B03 | XLII-2  | 13b11 |
| 侯克誠   | 三靈侯 [r]  | 16  | XLVII-2 | 22b05 | 尚桂班     | 残碑 [10]  | A01 | XLIII-4 | 18b02 |
| 哈散    | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 | 章元澤     | 三皇 [11v] | C03 | XLIV-1  | 26a11 |
| 孔思永   | 残碑 [25]  | 01  |         |       | 常興      | 三皇 [11v] | C08 | XLIV-1  | 26b04 |
| 侯思温   | 三皇 [11v] | C10 | XLIV-1  | 26b06 | 將仕      | 三皇 [11v] | C04 | XLIV-1  | 26a12 |
| 哈兒實不花 | 残碑 [24]  | C09 |         |       | 常士口     | 三皇 [11v] | C06 | XLIV-1  | 26b02 |
| 高儁    | 残碑 [23]  | 03  |         |       | 蕭守信     | 残碑 [10]  | A06 | XLIII-4 | 18a09 |
| 侯從道   | 残碑 [10]  | B05 | XLIII-4 | 18b12 | 常仁卿     | 三靈侯 [v]  | 08  | XLVII-3 | 23a04 |
| 侯松    | 三皇 [6v]  | A11 | XLII-2  | 13b06 | 常達      | 残碑 [19v] | 10  |         |       |
| 侯徐道   | 三皇 [6v]  | A12 | XLII-2  | 13b07 | 常仲興     | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a03 |
| 侯瑞    | 三皇 [6v]  | A07 | XLII-2  | 13b02 | 肖塔赤帖木兒  | 三靈侯 [v]  | 11  | XLVII-3 | 23a07 |
| (先)皇帝 | 劉公 [r]   | 11  | XLVI-1  | 15b02 | 秦才甫     | 三靈侯 [v]  | 06  | XLVII-3 | 23a02 |
| 侯德霖   | 劉公 [v]   | B08 | XLVI-2  | 17a11 | 沈子玉     | 三靈侯 [v]  | 03  | XLVII-3 | 22b11 |
| 咬難    | 三皇 [6v]  | B02 | XLII-2  | 13b10 | 辛德      | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 19b09 |
| 高八哈失  | 三靈侯 [r]  | 13  | XLVII-2 | 22a11 | 辛伯顏察兒   | 残碑 [24]  | D03 |         |       |
| 高八哈失  | 三靈侯 [v]  | 02  | XLVII-3 | 22b10 | 睦民澤     | 三皇 [6v]  | A08 | XLII-2  | 13b03 |
| 侯文秀   | 三皇 [6v]  | B08 | XLII-2  | 14a04 | 成剛      | 大司農 [v]  | 01  |         |       |
| 皇甫    | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 20b08 | 成剛      | 残碑 [19r] | 07  | XLIX-1  | 31a12 |
| 高法瓊   | 残碑 [25]  | 02  |         |       | 成塔海     | 残碑 [10]  | C06 | XLIII-4 | 19a12 |
| 高     | 大司農 [v]  | 03  |         |       | 石懷宝     | 三皇 [6v]  | A11 | XLII-2  | 13b06 |
| 吳希孟   | 残碑 [10]  | A01 | XLIII-4 | 18b02 | 席大川     | 三皇 [11v] | B12 | XLIV-1  | 26a07 |
| 胡景昂   | 三皇 [6r]  | 11  | XLII-1  | 12b11 | 席大川     | 劉公 [v]   | A10 | XLVI-2  | 16b11 |
| 胡元建   | 残碑 [19v] | 03  |         |       | 先皇帝     | 劉公 [r]   | 11  | XLVI-1  | 15b02 |
| 吳國瑞   | 劉公 [v]   | B09 | XLVI-2  | 17a12 | 錢国宝     | 三靈侯 [r]  | 16  | XLVII-2 | 22b06 |
| 胡宗瀚   | 三皇 [11v] | B09 | XLIV-1  | 26a04 | 錢国宝     | 三靈侯 [v]  | 03  | XLVII-3 | 22b11 |
| 忽都帖木兒 | 残碑 [10]  | B10 | XLIII-4 | 18b07 | 宋       | 三皇 [6v]  | A12 | XLII-2  | 13b07 |
| 忽都伯   | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 | 宋郁      | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b10 |
| 兀都蛮   | 残碑 [10]  | B13 | XLIII-4 | 18b04 | 曹郁      | 残碑 [20v] | 10  |         |       |
| 忽刺真   | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b01 | 宋懷德     | 三皇 [11v] | C09 | XLIV-1  | 26b05 |
| 吳不花   | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 20a12 | 宋懷德     | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a04 |
| 吳友直   | 残碑 [10]  | B03 | XLIII-4 | 19a02 | 曹彦亨     | 嶺北 [r]   | 22  | XLV     | 29b05 |
| 蔡汝霖   | 残碑 [10]  | C05 | XLIII-4 | 19b01 | 曹政      | 三皇 [11v] | C08 | XLIV-1  | 26b04 |
| 崔仲和   | 劉公 [v]   | B02 | XLVI-2  | 17a04 | 曹政      | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a04 |
| 賽甫丁   | 残碑 [10]  | B12 | XLIII-4 | 18b05 | 曹世能     | 残碑 [24]  | D05 |         |       |
| 崔亮    | 三靈侯 [v]  | 06  | XLVII-3 | 23a02 | 倉赤      | 残碑 [20r] | A04 | XLIX-2  | 32a01 |
| 蔡罕    | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 |       | 曹仲和     | 三靈侯 [v]  | 07  | XLVII-3 | 23a03 |
| 蔡罕    | 残碑 [20v] | 07  |         |       | 曹伯通     | 三靈侯 [v]  | 02  | XLVII-3 | 22b10 |
| 扎忽兒歹  | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 19b12 | 曹有口     | 残碑 [23]  | 01  |         |       |
| 扎馬魯丁  | 残碑 [10]  | C08 | XLIII-4 | 19a10 | 蘇仁      | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b09 |
| 鎖飛    | 残碑 [19v] | 04  |         |       | 孫弘道     | 三靈侯 [v]  | 07  | XLVII-3 | 23a03 |
| 叉里台   | 残碑 [20v] | 11  |         |       | 孫三      | 残碑 [20v] | 13  |         |       |
| 史毅    | 残碑 [19v] | 05  |         |       | 孫士元     | 残碑 [10]  | B03 | XLIII-4 | 19a02 |
| 史克昭   | 残碑 [19v] | 08  |         |       | 孫士元     | 残碑 [20v] | 12  |         |       |
| 時弼    | 三皇 [11v] | C02 | XLIV-1  | 26a10 | 孫友口     | 残碑 [9]   | 03  | XLIII-3 | 20a05 |
| 周郁    | 残碑 [10]  | B04 | XLIII-4 | 19a01 | 大用      | 残碑 [16]  | 01  | XLVII-1 | 30a03 |
| 周元    | 三皇 [11v] | C08 | XLIV-1  | 26b04 | 脫口      | 残碑 [10]  | C13 | XLIII-4 | 19a05 |
| 周元    | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a02 | 脫因      | 残碑 [23]  | 07  |         |       |
| 周元    | 三靈侯 [r]  | 15  | XLVII-2 | 22b04 | 脫火赤     | 残碑 [19v] | 12  |         |       |
| 周亨    | 三皇 [11v] | C09 | XLIV-1  | 26b05 | 脫歡      | 残碑 [10]  | A01 | XLIII-4 | 18b02 |

Index of the Terms Found in Qara-qorum Inscriptions

| 語句     | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    | 語句     | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    |
|--------|----------|-----|---------|-------|--------|----------|-----|---------|-------|
| 脱脱     | 残碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20b04 | 趙融     | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a03 |
| 脱脱     | 残碑 [20v] | 08  |         |       | 張友直    | 残碑 [19v] | 13  |         |       |
| 脱脱     | 残碑 [24]  | B06 |         |       | 張燁     | 残碑 [19v] | 02  |         |       |
| 脱列     | 残碑 [24]  | A07 |         |       | 趙翼     | 三皇 [11v] | C06 | XLIV-1  | 26b02 |
| 段起祖    | 嶺北 [r]   | 03  | XLV     | 28a06 | 陳      | 四世 [v]   | 02  | XLIII-1 | 23b12 |
| 段起祖    | 残碑 [19v] | 09  |         |       | 陳貴     | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a03 |
| 仲明     | 残碑 [19r] | 11  | XLIX-1  | 31b04 | 陳仲仁    | 三靈侯 [v]  | 04  | XLVII-3 | 22b12 |
| 紐隣     | 三皇 [6v]  | A05 | XLII-2  | 13a12 | 陳仲良    | 三靈侯 [v]  | 04  | XLVII-3 | 22b12 |
| チヨ 安衡  | 残碑 [10]  | A03 | XLIII-4 | 18a12 | 陳竝口    | 残碑 [19r] | 04  | XLIX-1  | 31a09 |
| 張翥     | 三皇 [6v]  | B07 | XLII-2  | 14a03 | 鄭雲卿    | 三皇 [11v] | C09 | XLIV-1  | 26b05 |
| 張口     | 残碑 [10]  | C03 | XLIII-4 | 19b03 | 鄭珪     | 残碑 [24]  | D09 |         |       |
| 張郁     | 残碑 [19v] | 09  |         |       | 丁元     | 三靈侯 [r]  | 03  | XLVII-2 | 21b08 |
| 張邊     | 残碑 [20v] | 11  |         |       | 丁元     | 残碑 [20r] | C03 | XLIX-2  | 32a12 |
| 張允恭    | 三皇 [11v] | B04 | XLIV-1  | 25b11 | 程国英    | 三靈侯 [v]  | 09  | XLVII-3 | 23a05 |
| 張益     | 三皇 [11r] | 01  | XLIV-2  | 25a01 | 程充     | 大司農 [v]  | 02  |         |       |
| 趙温     | 残碑 [19r] | 02  | XLIX-1  | 31a07 | 丁璧     | 残碑 [10]  | A03 | XLIII-4 | 18a12 |
| 張革     | 残碑 [10]  | B05 | XLIII-4 | 18b12 | 徹徹都    | 三皇 [6r]  | 01  | XLII-1  | 12a07 |
| 張寬     | 残碑 [10]  | A02 | XLIII-4 | 18b01 | 塔海鉄穆爾  | 残碑 [20r] | B05 | XLIX-2  | 32b02 |
| 長吉     | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b04 | 陶元工イ   | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b09 |
| 長吉     | 残碑 [24]  | B03 |         |       | 陶元工イ   | 三皇 [6v]  | A11 | XLII-2  | 13b06 |
| 張久     | 劉公 [v]   | A09 | XLVI-2  | 16b10 | 陶士宜    | 嶺北 [r]   | 02  | XLV     | 28a04 |
| 張玉     | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 | 陶士宜    | 三靈侯 [r]  | 15  | XLVII-2 | 22b04 |
| 張居仁    | 残碑 [10]  | B04 | XLIII-4 | 19a01 | 塔朮丁    | 四世 [v]   | 02  | XLIII-1 | 23b12 |
| 趙景文    | 嶺北 [r]   | 09  | XLV     | 28b04 | 塔朮丁    | 残碑 [10]  | A01 | XLIII-4 | 18b02 |
| 張瑄     | 残碑 [10]  | B05 | XLIII-4 | 18b12 | 塔石鐵木兒  | 残碑 [24]  | C06 |         |       |
| 張顯之    | 三靈侯 [v]  | 01  | XLVII-3 | 22b09 | 塔羅帖木兒  | 残碑 [20v] | 06  |         |       |
| 張光     | 三皇 [6r]  | 11  | XLII-1  | 12b12 | (倒) 刺沙 | 嶺北 [r]   | 07  | XLV     | 28b02 |
| 張恒道    | 三皇 [6v]  | A12 | XLII-2  | 13b07 | 倒刺沙    | 残碑 [19v] | 06  |         |       |
| 張国英    | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 | 倒刺沙    | 残碑 [20v] | 06  |         |       |
| 趙國寶    | 四世 [r]   | 04  | XLIII-2 | 23b08 | 塔郎吉    | 残碑 [10]  | A12 | XLIII-4 | 18a03 |
| 張察罕不花  | 残碑 [10]  | A04 | XLIII-4 | 18a11 | 秃兒迷失   | 残碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20a02 |
| 張山     | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a02 | 秃秃     | 残碑 [24]  | A10 |         |       |
| 張之悦    | 残碑 [19v] | 10  |         |       | 奴兒丁    | 残碑 [20v] | 06  |         |       |
| 張思義    | 残碑 [19v] | 09  |         |       | 杜師魯    | 三皇 [6v]  | B11 | XLII-2  | 14a08 |
| 張思賢    | 三皇 [6v]  | A11 | XLII-2  | 13b06 | 奴刺丁    | 劉公 [v]   | B06 | XLVI-2  | 17a08 |
| 張思明    | 三皇 [11v] | B09 | XLIV-1  | 26a04 | 都恰     | 三皇 [6v]  | A04 | XLII-2  | 13a11 |
| 張思明    | 劉公 [r]   | 02  | XLVI-1  | 14b12 | 那海     | 残碑 [24]  | B10 |         |       |
| 張從義    | 三皇 [11v] | B11 | XLIV-1  | 26a06 | 任      | 大司農 [v]  | 02  |         |       |
| 趙從玉    | 残碑 [10]  | A02 | XLIII-4 | 18b01 | 任元宜    | 残碑 [19v] | 02  |         |       |
| 張從礼    | 残碑 [10]  | B04 | XLIII-4 | 19a01 | 任全     | 劉公 [v]   | B03 | XLVI-2  | 17a05 |
| 趙守中    | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 | 捏古栢    | 三皇 [6r]  | 09  | XLII-1  | 12b07 |
| 張順     | 劉公 [v]   | B02 | XLVI-2  | 17a04 | 捏古列思   | 残碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b02 |
| 張汝健    | 残碑 [10]  | A02 | XLIII-4 | 18b01 | 納速兒丁   | 残碑 [20v] | 05  |         |       |
| 張震     | 三皇 [11v] | B10 | XLIV-1  | 26a05 | 馬      | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 |       |
| 趙誠     | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a05 | 馬      | 残碑 [23]  | 02  |         |       |
| 張成     | 残碑 [19v] | 12  |         |       | 馬口     | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 19b09 |
| 張積     | 劉公 [v]   | A02 | XLVI-2  | 16b03 | 梅只子温   | 劉公 [v]   | A04 | XLVI-2  | 16b05 |
| 趙仲實    | 劉公 [r]   | 20  | XLVI-1  | 16a07 | 買住     | 残碑 [19r] | 05  | XLIX-1  | 31a10 |
| 張仲澤    | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a07 | 買住     | 残碑 [20v] | 01  |         |       |
| 趙仲明    | 残碑 [10]  | A01 | XLIII-4 | 18b02 | 裴全     | 三皇 [11v] | C09 | XLIV-1  | 26b05 |
| 張禎     | 劉公 [v]   | B09 | XLVI-2  | 17a12 | 裴全     | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a04 |
| 張天佑    | 三皇 [6v]  | B06 | XLII-2  | 14a02 | 裴祐     | 三皇 [11v] | B02 | XLIV-1  | 25b09 |
| 張天祿    | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a03 | 馬延義    | 残碑 [19v] | 05  |         |       |
| 張惇     | 残碑 [19v] | 11  |         |       | 伯加奴    | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b03 |
| 趙彬     | 残碑 [20v] | 11  |         |       | 伯家奴    | 残碑 [24]  | C03 |         |       |
| 張福     | 劉公 [v]   | B03 | XLVI-2  | 17a05 | 伯顏     | 残碑 [10]  | C12 | XLIII-4 | 19a06 |
| (帖) 木兒 | 残碑 [19r] | 09  | XLIX-1  | 31b02 | 伯顏回    | 残碑 [19v] | 05  |         |       |
| 張保直    | 三皇 [6v]  | A12 | XLII-2  | 13b07 | 白守忠    | 残碑 [20r] | C07 | XLIX-2  | 32b04 |
| 帖木(哥)  | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b04 | 伯藍     | 残碑 [19v] | 03  |         |       |
| 趙也先不花  | 三皇 [11v] | C04 | XLIV-1  | 26a12 | 白良     | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a04 |

| 話 句      | 碑 文      | 行   | Atlas   | 和 録   | 話 句     | 碑 文      | 行   | Atlas   | 和 録   |
|----------|----------|-----|---------|-------|---------|----------|-----|---------|-------|
| 馬兒       | 残碑 [20v] | 02  |         |       | 楊 德     | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a04 |
| 馬思忽      | 残碑 [19v] | 03  |         |       | 楊 德     | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a04 |
| 馬 澤      | 残碑 [10]  | C07 | XLIII-4 | 19a11 | 楊 文益    | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 19b09 |
| 馬 禎      | 残碑 [10]  | A03 | XLIII-4 | 18a12 | 楊 也先    | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 |
| 馬奴       | 三皇 [11v] | B08 | XLIV-1  | 26a03 | 楊 和卿    | 三靈侯 [v]  | 05  | XLVII-3 | 23a01 |
| 馬 奴      | 劉公 [v]   | A03 | XLVI-2  | 16b04 | 余 良甫    | 三靈侯 [r]  | 02  | XLVII-2 | 21b07 |
| 馬 飛脚     | 三皇 [6v]  | B07 | XLII-2  | 14a03 | 雷 維翰    | 残碑 [19r] | 03  | XLIX-1  | 31a08 |
| 馬 某      | 残碑 [10]  | A11 | XLIII-4 | 18a04 | 刺刺      | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 |
| 樊 惟忠     | 残碑 [20v] | 03  |         |       | 蘭 慶甫    | 三靈侯 [r]  | 16  | XLVII-2 | 22b05 |
| 蛮子       | 三皇 [6v]  | A06 | XLII-2  | 13b01 | 蘭 慶甫    | 三靈侯 [v]  | 05  | XLVII-3 | 23a01 |
| 蛮子       | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b02 | 蘭 和甫    | 三靈侯 [v]  | 05  | XLVII-3 | 23a01 |
| 蛮子       | 残碑 [20r] | A07 | XLIX-2  | 32a04 | 李       | 残碑 [20v] | 13  |         |       |
| 蛮子       | 残碑 [20r] | A10 | XLIX-2  | 32a07 | 李 □     | 残碑 [9]   | 02  | XLIII-3 | 20a06 |
| 蛮子       | 残碑 [24]  | A03 |         |       | 李 □     | 残碑 [19r] | 03  | XLIX-1  | 31a08 |
| 蛮子□      | 残碑 [23]  | 01  |         |       | 李 □成    | 残碑 [19v] | 14  |         |       |
| 范 德翽     | 三皇 [6v]  | B06 | XLII-2  | 14a02 | 李 □愍    | 残碑 [19v] | 13  |         |       |
| 樊 敏      | 残碑 [19v] | 01  |         |       | 李 榮祖    | 残碑 [20v] | 10  |         |       |
| 馮 君祥     | 三皇 [6v]  | B08 | XLII-2  | 14a04 | 李 說     | 残碑 [9]   | 04  | XLIII-3 | 20a04 |
| 馮 君勝     | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a03 | 李 温     | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a03 |
| 馮 四      | 劉公 [v]   | B10 | XLVI-2  | 17b01 | 李 覺福    | 三皇 [11v] | C10 | XLIV-1  | 26b06 |
| 馮 泰      | 残碑 [20v] | 11  |         |       | 李 貴     | 三皇 [6r]  | 11  | XLII-1  | 12b11 |
| 馮 澤      | 三皇 [6v]  | A12 | XLII-2  | 13b07 | 李 貴     | 三皇 [11v] | B04 | XLIV-1  | 25b11 |
| 馮 二      | 劉公 [v]   | B11 | XLVI-2  | 17b02 | 李 熙     | 残碑 [20v] | 09  |         |       |
| 馮 邦彦     | 三皇 [11v] | B11 | XLIV-1  | 26a06 | 李 憲     | 大司農 [v]  | 04  |         |       |
| 不花       | 三皇 [6v]  | B05 | XLII-2  | 14a01 | 李 種     | 残碑 [19v] | 08  |         |       |
| 普顏       | 残碑 [20v] | 09  |         |       | 李 叔亮    | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b09 |
| 武 行本     | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 | 李 守正    | 三皇 [6v]  | A09 | XLII-2  | 13b04 |
| 武 舜謙     | 三皇 [6r]  | 11  | XLII-1  | 12b11 | 李 守德    | 三皇 [11v] | B10 | XLIV-1  | 26a05 |
| 武 順謙     | 残碑 [9]   | 02  | XLIII-3 | 20a06 | 李 守德    | 残碑 [23]  | 08  |         |       |
| 別 (兒怯不花) | 大司農 [r]  | 02  | XLII-3  | 27a06 | 李 忠     | 残碑 [10]  | C03 | XLIII-4 | 19b03 |
| 別速堅      | 三皇 [6v]  | A02 | XLII-2  | 13a09 | 李 仲宗    | 三皇 [6r]  | 09  | XLII-1  | 12b07 |
| 彭 詣      | 劉公 [r]   | 03  | XLVI-1  | 15a01 | 李 徵     | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 |
| 法忽兒丁     | 残碑 [10]  | B02 | XLIII-4 | 19a03 | 李 徵     | 残碑 [20v] | 10  |         |       |
| 房 志      | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 | 李 霆     | 残碑 [10]  | B04 | XLIII-4 | 19a01 |
| 彭 仲福     | 劉公 [v]   | B08 | XLVI-2  | 17a11 | 李 樞璣    | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a07 |
| 彭 別帖木兒   | 三皇 [6v]  | B04 | XLII-2  | 13b12 | 李 塔失帖木耳 | 三皇 [11r] | 03  | XLIV-2  | 25a03 |
| 木薛飛兒     | 嶺北 [r]   | 09  | XLV     | 28b05 | 李 塔失鉄穆耳 | 三靈侯 [r]  | 04  | XLVII-2 | 21b09 |
| 木八剌沙     | 残碑 [19r] | 07  | XLIX-1  | 31a12 | 李 塔刺海   | 残碑 [10]  | A09 | XLIII-4 | 18a06 |
| 木八剌沙     | 残碑 [20r] | B02 | XLIX-2  | 32a11 | 李 德     | 残碑 [23]  | 02  |         |       |
| 李羅帖木兒    | 残碑 [20v] | 07  |         |       | 李 伯顏普華  | 劉公 [r]   | 20  | XLVI-1  | 16a07 |
| 孟 君祥     | 三靈侯 [v]  | 01  | XLVII-3 | 22b09 | 李 伯述    | 残碑 [20r] | C02 | XLIX-2  | 32a11 |
| 蒙古       | 残碑 [20v] | 09  |         |       | 李 文□    | 残碑 [20v] | 03  | XLIII-1 | 23a01 |
| 毛 朵里别歹   | 残碑 [10]  | C09 | XLIII-4 | 19a09 | 李 文義    | 四世 [v]   | 03  | XLIII-1 | 23a01 |
| 也兒吉那     | 残碑 [24]  | E05 |         |       | 李 明     | 三靈侯 [v]  | 09  | XLVII-3 | 23a05 |
| 也失哥      | 残碑 [10]  | B11 | XLIII-4 | 18b06 | 李 明     | 残碑 [9]   | 03  | XLIII-3 | 20a05 |
| 也先       | 残碑 [9]   | 04  | XLIII-3 | 20a04 | 李 也先    | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 |
| 也先       | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 19b10 | 劉 □     | 残碑 [23]  | 15  |         |       |
| 也先不花     | 残碑 [19v] | 01  |         |       | 劉 安禮    | 残碑 [24]  | E08 |         |       |
| 也先不花     | 残碑 [19v] | 08  |         |       | 劉 闊道    | 残碑 [19v] | 10  |         |       |
| 也忒迷失     | 残碑 [19v] | 07  |         |       | 柳 加兒    | 残碑 [19v] | 07  |         |       |
| (許) 有壬   | 興元閣 [ch] | 03  | XLI-2   | 24a08 | 劉 謙     | 残碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20a03 |
| (許) 有壬   | 興元閣 [ch] | 03  | XLI-2   | 24a08 | 劉 弘遠    | 残碑 [10]  | B05 | XLIII-4 | 18b12 |
| 姚 秀實     | 四世 [v]   | 02  | XLIII-1 | 23b12 | 劉 行可    | 残碑 [19v] | 02  |         |       |
| 楊 壽春     | 三皇 [11v] | B01 | XLIV-1  | 25b08 | 劉 行可    | 残碑 [20v] | 04  |         |       |
| 姚 閏      | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 19b09 | 劉 孝先    | 嶺北 [r]   | 22  | XLV     | 29b05 |
| 楊 潤      | 劉公 [r]   | 19  | XLVI-1  | 16a06 | 劉 忽都帖木兒 | 残碑 [19r] | 10  | XLIX-1  | 31b03 |
| 姚 信甫     | 三靈侯 [v]  | 09  | XLVII-3 | 23a05 | 劉 沙的    | 嶺北 [r]   | 02  | XLV     | 28a04 |
| 楊 達      | 三靈侯 [r]  | 16  | XLVII-2 | 22b05 | 劉 四     | 劉公 [v]   | B10 | XLVI-2  | 17b01 |
| 楊 仲文     | 三皇 [6r]  | 11  | XLII-1  | 12b11 | 劉 潤甫    | 三皇 [11v] | C06 | XLIV-1  | 26b02 |
| 楊 德      | 三皇 [11v] | C08 | XLIV-1  | 26b04 | 劉 進     | 三皇 [6r]  | 11  | XLII-1  | 12b12 |
|          |          |     |         |       | 劉 進     | 三皇 [11v] | C07 | XLIV-1  | 26b03 |



| 語句              | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    | 語句          | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    |
|-----------------|----------|-----|---------|-------|-------------|----------|-----|---------|-------|
| (嶺北行省) 左右司郎中    | 三靈侯 [r]  | 03  | XLVII-2 | 21b08 | 石工          | 残碑 [16]  | 18  | XLVII-1 | 30b11 |
| (嶺北行省) 左右司郎中    | 残碑 [24]  | B02 |         |       | 石匠          | 劉公 [v]   | B10 | XLVI-2  | 17b01 |
| (嶺北行省) 左右司郎中    | 残碑 [24]  | B05 |         |       | 石匠          | 三靈侯 [r]  | 15  | XLVII-2 | 22b04 |
| 參議              | 残碑 [25]  | 08  |         |       | 前建功官        | 残碑 [9]   | 01  | XLIII-3 | 20a08 |
| 參知政事            | 三皇 [11r] | 02  | XLIV-2  | 25a02 | 宣使          | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 19b09 |
| 參知政事            | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b02 | 前兵馬         | 劉公 [r]   | 09  | XLVI-1  | 15a10 |
| 參知政事            | 残碑 [20r] | C06 | XLIX-2  | 32b03 | 前吏目         | 劉公 [v]   | A04 | XLVI-2  | 16b05 |
| (嶺北行省) 參知政事     | 残碑 [20r] | C01 | XLIX-2  | 32a10 | (和寧路) 總管    | 嶺北 [r]   | 09  | XLV     | 28b05 |
| (嶺北行省) 參知政事     | 残碑 [24]  | A02 |         |       | (和寧路) 總管府   | 劉公 [r]   | 07  | XLVI-1  | 15a07 |
| (嶺北行省) 參知政事     | 残碑 [24]  | A09 |         |       | (和寧路) 總管    | 残碑 [10]  | B12 | XLIII-4 | 18b05 |
| (嶺北行省) 參知政事     | 残碑 [24]  | A12 |         |       | 倉司吏         | 残碑 [10]  | C03 | XLIII-4 | 19b03 |
| (嶺北等処行中書省) 參知政事 | 残碑 [10]  | A09 | XLIII-4 | 18a06 | [宗] 禪院      | 残碑 [16]  | 05  | XLVII-1 | 30a08 |
| (嶺北等処行中書省) 參知政事 | 残碑 [10]  | A10 | XLIII-4 | 18a05 | 相付官         | 残碑 [23]  | 03  |         |       |
| (嶺北等処行中書省) 參知政事 | 残碑 [24]  | A06 |         |       | 相付官         | 残碑 [23]  | 04  |         |       |
| 祇應司提領           | 三皇 [11v] | B12 | XLIV-1  | 26a07 | 相付官         | 残碑 [23]  | 05  |         |       |
| 司官              | 劉公 [v]   | A01 | XLVI-2  | 16b02 | 太醫          | 三皇 [11v] | B04 | XLIV-1  | 25b11 |
| 祇候              | 劉公 [v]   | B07 | XLVI-2  | 17a10 | 大使          | 三皇 [11v] | B12 | XLIV-1  | 26a07 |
| 司獄              | 三皇 [6v]  | A10 | XLII-2  | 13b05 | 大使          | 三皇 [11v] | C04 | XLIV-1  | 26a12 |
| (和寧路) 司獄        | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 20a10 | 大司農         | 大司農 [r]  | 02  | XLII-3  | 27a06 |
| 司倉              | 三皇 [6v]  | B06 | XLII-2  | 14a02 | (平準庫) 大使    | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b10 |
| 司倉              | 残碑 [10]  | C04 | XLIII-4 | 19b02 | 達魯花赤        | 三皇 [6v]  | A02 | XLII-2  | 13a09 |
| 社司              | 三靈侯 [v]  | 04  | XLVII-3 | 22b12 | 達魯花赤        | 三皇 [6v]  | A03 | XLII-2  | 13a10 |
| (和寧路) 儒学学正      | 三靈侯 [r]  | 02  | XLVII-2 | 21b07 | 達魯花赤        | 三皇 [11v] | B06 | XLIV-1  | 26a01 |
| 儒学教授            | 残碑 [9]   | 10  | XLIII-3 | 20a11 | (和寧路) 達魯花赤  | 残碑 [10]  | B13 | XLIII-4 | 18b04 |
| 儒学正             | 三皇 [11v] | B09 | XLIV-1  | 26a04 | (和寧路) 達魯花赤  | 三靈侯 [r]  | 01  | XLVII-2 | 21b06 |
| (和寧路) 儒学正       | 劉公 [r]   | 03  | XLVI-1  | 15a01 | (和林兵馬) 達魯花赤 | 残碑 [10]  | C13 | XLIII-4 | 19a05 |
| (和林兵馬司) 儒学正     | 劉公 [r]   | 02  | XLVI-1  | 14b12 | 知印          | 残碑 [20v] | 02  |         |       |
| 儒学録             | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b09 | (省) 知印      | 残碑 [20v] | 01  |         |       |
| 首領              | 劉公 [r]   | 20  | XLVI-1  | 16a07 | 知事          | 三皇 [6v]  | A08 | XLII-2  | 13b03 |
| 首領              | 劉公 [v]   | B01 | XLVI-2  | 17a03 | 知事          | 残碑 [23]  | 07  |         |       |
| 首領官             | 残碑 [23]  | 06  |         |       | 知事          | 残碑 [25]  | 02  |         |       |
| 首領官             | 残碑 [23]  | 15  |         |       | (理問所) 知事    | 残碑 [9]   | 04  | XLIII-3 | 20a04 |
| (省) 首領          | 残碑 [19v] | 12  |         |       | (和寧路) 知事    | 残碑 [10]  | B07 | XLIII-4 | 18b10 |
| 省醫              | 三皇 [6r]  | 11  | XLII-1  | 12b11 | (知) 制誥      | 三皇 [11r] | 01  | XLIV-2  | 25a01 |
| 省醫              | 残碑 [20v] | 13  |         |       | 治中          | 三皇 [6v]  | A05 | XLII-2  | 13a12 |
| 省首領             | 残碑 [19v] | 12  |         |       | 中奉大夫        | 残碑 [9]   | 01  | XLIII-3 | 20a08 |
| 上相              | 嶺北 [r]   | 07  | XLV     | 28b01 | 鎮撫          | 残碑 [23]  | 09  |         |       |
| 省知印             | 残碑 [20v] | 01  |         |       | 鎮撫司         | 残碑 [23]  | 09  |         |       |
| 省都鎮撫            | 残碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b02 | (省都) 鎮撫     | 残碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b02 |
| 省都鎮撫            | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b01 | (省都) 鎮撫     | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b01 |
| (嶺北行省) 照磨       | 残碑 [24]  | E02 |         |       | (付都) 鎮撫     | 残碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20b04 |
| (嶺北行省) 照磨       | 残碑 [24]  | E05 |         |       | (付都) 鎮撫     | 残碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20b03 |
| (嶺北行省) 照磨       | 残碑 [24]  | E08 |         |       | 通事          | 残碑 [10]  | B02 | XLIII-4 | 19a03 |
| (嶺北省) 照磨        | 残碑 [10]  | A05 | XLIII-4 | 18a10 | 通事          | 残碑 [20v] | 03  |         |       |
| 書寫              | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 | (都) 提举      | 三皇 [6v]  | B02 | XLII-2  | 13b10 |
| (都) 社長          | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a07 | (同) 提举      | 三皇 [6v]  | B03 | XLII-2  | 13b11 |
| 書吏              | 残碑 [10]  | A06 | XLIII-4 | 18a09 | (付) 提举      | 三皇 [6v]  | B04 | XLII-2  | 13b12 |
| 司吏              | 三皇 [6v]  | A11 | XLII-2  | 13b06 | (付) 提举      | 三皇 [6v]  | B05 | XLII-2  | 14a01 |
| 司吏              | 三皇 [6v]  | B07 | XLII-2  | 14a03 | (和林倉) 提舉    | 残碑 [10]  | C08 | XLIII-4 | 19a10 |
| 司吏              | 残碑 [10]  | B04 | XLIII-4 | 19a01 | 提控案牘        | 三皇 [6v]  | A09 | XLII-2  | 13b04 |
| 司吏              | 残碑 [10]  | C10 | XLIII-4 | 19a08 | 提控案牘        | 残碑 [9]   | 03  | XLIII-3 | 20a05 |
| 司吏              | 三皇 [11v] | B10 | XLIV-1  | 26a05 | 提控案牘        | 残碑 [23]  | 08  |         |       |
| 司吏              | 劉公 [v]   | A06 | XLVI-2  | 16b07 | 提控案牘        | 残碑 [23]  | 15  |         |       |
| (倉) 司吏          | 残碑 [10]  | C03 | XLIII-4 | 19b03 | (和寧路) 提控案牘  | 残碑 [10]  | B06 | XLIII-4 | 18b11 |
| (和寧路) 司吏        | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a07 | 提控斗子        | 三皇 [6v]  | B08 | XLII-2  | 14a04 |
| 進士              | 嶺北 [r]   | 02  | XLV     | 28a04 | 提領          | 三皇 [6v]  | B10 | XLII-2  | 14a07 |
| (和寧路) 推官        | 残碑 [10]  | B09 | XLIII-4 | 18b08 | 提領          | 残碑 [25]  | 03  |         |       |
| 政事              | 残碑 [20r] | A01 | XLIX-2  | 31b10 | (祇應司) 提領    | 三皇 [11v] | B12 | XLIV-1  | 26a07 |
| 稅使司提領           | 三皇 [11v] | C03 | XLIV-1  | 26a11 | (稅使司) 提領    | 三皇 [11v] | C03 | XLIV-1  | 26a11 |
| 石工              | 嶺北 [r]   | 03  | XLV     | 28a06 | (平準庫) 提領    | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 20b09 |

Index of the Terms Found in Qara-qorum Inscriptions

| 語句           | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    | 語句          | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    |
|--------------|----------|-----|---------|-------|-------------|----------|-----|---------|-------|
| 鉄匠           | 三靈侯 [v]  | 09  | XLVII-3 | 23a05 | (前) 兵馬      | 劉公 [r]   | 09  | XLVI-1  | 15a10 |
| 典史           | 殘碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 19b11 | (和林) 兵馬達魯花赤 | 殘碑 [10]  | C13 | XLIII-4 | 19a05 |
| 同知           | 三皇 [6v]  | A04 | XLII-2  | 13a11 | (和林) 兵馬     | 劉公 [r]   | 01  | XLVI-1  | 14b11 |
| (和寧路) 同知     | 殘碑 [10]  | B11 | XLIII-4 | 18b06 | (國史院) 編修官   | 三皇 [11r] | 01  | XLIV-2  | 25a01 |
| 同提舉          | 三皇 [6v]  | B03 | XLII-2  | 13b11 | 豐盈庫付使       | 三皇 [11v] | C05 | XLIV-1  | 26b01 |
| (和林倉) 同提舉    | 殘碑 [10]  | C07 | XLIII-4 | 19a11 | 面前          | 殘碑 [19v] | 13  |         |       |
| 都事           | 殘碑 [19r] | 09  | XLIX-1  | 31b02 | 蒙古字學教授      | 三皇 [11v] | B02 | XLIV-1  | 25b09 |
| 都事           | 殘碑 [19r] | 12  | XLIX-1  | 31b05 | 蒙古字教授       | 殘碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 20a12 |
| (左右司) 都事     | 三皇 [11r] | 03  | XLIV-2  | 25a03 | 譯史          | 殘碑 [9]   | 04  | XLIII-3 | 20a04 |
| (提控) 斗子      | 三皇 [6v]  | B08 | XLII-2  | 14a04 | 譯史          | 殘碑 [10]  | A01 | XLIII-4 | 18b02 |
| 都社長          | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a07 | 譯史          | 殘碑 [10]  | B03 | XLIII-4 | 19a02 |
| (嶺北行省左右司) 都事 | 三靈侯 [r]  | 04  | XLVII-2 | 21b09 | 譯史          | 殘碑 [10]  | C09 | XLIII-4 | 19a09 |
| (嶺北省左右司) 都事  | 殘碑 [10]  | A07 | XLIII-4 | 18a08 | 譯史          | 劉公 [v]   | A11 | XLVI-2  | 16b12 |
| (嶺北省左右司) 都事  | 殘碑 [19r] | 02  | XLIX-1  | 31a07 | 訳史          | 殘碑 [20v] | 04  |         |       |
| 都鎮撫          | 殘碑 [23]  | 10  |         |       | 吏目          | 殘碑 [10]  | C11 | XLIII-4 | 19a07 |
| (都) 鎮撫       | 殘碑 [23]  | 10  |         |       | 吏目          | 三皇 [11v] | B09 | XLIV-1  | 26a04 |
| 都鎮撫          | 殘碑 [23]  | 11  |         |       | (前) 吏目      | 劉公 [v]   | A04 | XLVI-2  | 16b05 |
| (都) 鎮撫       | 殘碑 [23]  | 11  |         |       | (兵馬司) 吏目    | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b09 |
| (省) 都鎮撫      | 殘碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b02 | 理問官         | 殘碑 [23]  | 02  |         |       |
| (省) 都鎮撫      | 殘碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b01 | 理問所         | 殘碑 [23]  | 01  |         |       |
| 都提舉          | 三皇 [6v]  | B02 | XLII-2  | 13b10 | 理問所知事       | 殘碑 [9]   | 04  | XLIII-3 | 20a04 |
| (李) 伯述       | 大司農 [r]  | 08  | XLII-3  | 27a12 | (嶺北省) 理問    | 殘碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20a01 |
| 判官           | 三皇 [6v]  | A06 | XLII-2  | 13b01 | (嶺北省) 理問    | 殘碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 19b12 |
| (和寧路) 判官     | 殘碑 [10]  | B10 | XLIII-4 | 18b07 | 令史          | 殘碑 [9]   | 03  | XLIII-3 | 20a05 |
| 副兵馬          | 三皇 [11v] | B08 | XLIV-1  | 26a03 | 嶺北行省管勾      | 殘碑 [19r] | 03  | XLIX-1  | 31a08 |
| 付使           | 三皇 [11v] | C02 | XLIV-1  | 26a10 | 嶺北行省管勾      | 殘碑 [19r] | 06  | XLIX-1  | 31a11 |
| 付使           | 三皇 [11v] | C04 | XLIV-1  | 26a12 | 嶺北行省管勾      | 殘碑 [19r] | 09  | XLIX-1  | 31b02 |
| (平準庫) 付使     | 殘碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b11 | [嶺] 北行省左丞   | 殘碑 [20r] | B01 | XLIX-2  | 32a10 |
| 付提舉          | 三皇 [6v]  | B04 | XLII-2  | 13b12 | 嶺北行省左丞      | 殘碑 [20r] | B03 | XLIX-2  | 32a12 |
| 付提舉          | 三皇 [6v]  | B05 | XLII-2  | 14a01 | 嶺北行省左右司都事   | 三靈侯 [r]  | 04  | XLVII-2 | 21b09 |
| (和林倉) 付提舉    | 殘碑 [10]  | C05 | XLIII-4 | 19b01 | 嶺北行省左右司郎中   | 三靈侯 [r]  | 03  | XLVII-2 | 21b08 |
| (和林倉) 付提舉    | 殘碑 [10]  | C06 | XLIII-4 | 19a12 | 嶺北行省左右司郎中   | 殘碑 [24]  | B01 |         |       |
| 付都鎮撫         | 殘碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20b04 | 嶺北行省左右司郎中   | 殘碑 [24]  | B04 |         |       |
| 付都鎮撫         | 殘碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20b03 | [嶺] 北行省參知政事 | 殘碑 [20r] | C01 | XLIX-2  | 32a10 |
| 付都鎮撫         | 殘碑 [23]  | 12  |         |       | 嶺北行省參知政事    | 殘碑 [24]  | A01 |         |       |
| 付都鎮撫         | 殘碑 [23]  | 13  |         |       | 嶺北行省參知政事    | 殘碑 [24]  | A08 |         |       |
| 付都鎮撫         | 殘碑 [23]  | 14  |         |       | 嶺北行省參知政事    | 殘碑 [24]  | A11 |         |       |
| 付兵馬          | 劉公 [v]   | A03 | XLVI-2  | 16b04 | 嶺北行省照磨      | 殘碑 [24]  | E01 |         |       |
| (和林) 付兵馬     | 殘碑 [10]  | C12 | XLIII-4 | 19a06 | 嶺北行省照磨      | 殘碑 [24]  | E04 |         |       |
| (嶺北省) 付理問    | 殘碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20a03 | 嶺北行省照磨      | 殘碑 [24]  | E07 |         |       |
| (嶺北省) 付理問    | 殘碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20a02 | 嶺北行省平章政事    | 殘碑 [20r] | A02 | XLIX-2  | 31b11 |
| 父老           | 劉公 [r]   | 09  | XLVI-1  | 15a10 | 嶺北行省平章政事    | 殘碑 [20r] | A06 | XLIX-2  | 32a03 |
| 父老           | 劉公 [r]   | 18  | XLVI-1  | 16a02 | 嶺北省         | 殘碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 20b07 |
| 平準庫          | 三皇 [6v]  | B09 | XLII-2  | 14a06 | 嶺北省         | 嶺北 [r]   | 07  | XLV     | 28a12 |
| 平準庫大使        | 殘碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b10 | 嶺北省管勾       | 殘碑 [10]  | A04 | XLIII-4 | 18a11 |
| 平準庫提領        | 殘碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 20b09 | 嶺北省檢校官      | 殘碑 [10]  | A06 | XLIII-4 | 18a09 |
| 平準庫付使        | 殘碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b11 | 嶺北省檢校官      | 殘碑 [24]  | D01 |         |       |
| 平章政事         | 大司農 [r]  | 03  | XLII-3  | 27a07 | 嶺北省檢校官      | 殘碑 [24]  | D04 |         |       |
| 平章政事         | 嶺北 [r]   | 07  | XLV     | 28b02 | 嶺北省檢校官      | 殘碑 [24]  | D07 |         |       |
| [平章] 政事      | 殘碑 [20r] | A01 | XLIX-2  | 31b10 | 嶺北省左右司員外郎   | 殘碑 [10]  | A08 | XLIII-4 | 18a07 |
| (嶺北行省) 平章政事  | 殘碑 [20r] | A03 | XLIX-2  | 31b12 | 嶺北省左右司員外郎   | 殘碑 [24]  | C01 |         |       |
| (嶺北行省) 平章政事  | 殘碑 [20r] | A06 | XLIX-2  | 32a03 | 嶺北省左右司員外郎   | 殘碑 [24]  | C04 |         |       |
| (嶺北省) 平章政事   | 殘碑 [20r] | A09 | XLIX-2  | 32a06 | 嶺北省左右司員外郎   | 殘碑 [24]  | C07 |         |       |
| 兵馬           | 三皇 [11v] | B07 | XLIV-1  | 26a02 | 嶺北省左右司都事    | 殘碑 [10]  | A07 | XLIII-4 | 18a08 |
| 兵馬           | 劉公 [r]   | 08  | XLVI-1  | 15a08 | [嶺] 北省左右司都事 | 殘碑 [19r] | 01  | XLIX-1  | 31a06 |
| 兵馬           | 劉公 [v]   | A02 | XLVI-2  | 16b03 | 嶺北省照磨       | 殘碑 [10]  | A05 | XLIII-4 | 18a10 |
| 兵馬司          | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b09 | 嶺北省付理問      | 殘碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20a03 |
| 兵馬司          | 三皇 [11v] | B05 | XLIV-1  | 25b12 | 嶺北省付理問      | 殘碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20a02 |
| 兵馬司吏目        | 三皇 [6r]  | 10  | XLII-1  | 12b09 | 嶺北省平章政事     | 殘碑 [20r] | A08 | XLIX-2  | 32a05 |
| (和林) 兵馬司     | 劉公 [r]   | 07  | XLVI-1  | 15a07 | 嶺北省理問       | 殘碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20a01 |

| 語句           | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    | 語句   | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    |
|--------------|----------|-----|---------|-------|------|----------|-----|---------|-------|
| 嶺北省理問        | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 19b12 | 光祿大夫 | 残碑 [20r] | A08 | XLIX-2  | 32a05 |
| 嶺北等處行中書省     | 残碑 [9]   | 01  | XLIII-3 | 20a08 | 資政大夫 | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b04 |
| 嶺北等處行中書省     | 劉公 [r]   | 07  | XLVI-1  | 15a07 | 資善大夫 | 残碑 [10]  | A11 | XLIII-4 | 18a04 |
| 嶺北等處行中書省右丞   | 残碑 [10]  | A12 | XLIII-4 | 18a03 | 資善大夫 | 残碑 [20r] | B06 | XLIX-2  | 32b03 |
| 嶺北等處行中書省左丞   | 残碑 [10]  | A11 | XLIII-4 | 18a04 | 資善大夫 | 残碑 [24]  | A04 |         |       |
| 嶺北等處行中書省參知政事 | 残碑 [10]  | A09 | XLIII-4 | 18a06 | 資善大夫 | 残碑 [24]  | A08 |         |       |
| 嶺北等處行中書省參知政事 | 残碑 [10]  | A10 | XLIII-4 | 18a05 | 資德大夫 | 残碑 [10]  | A12 | XLIII-4 | 18a03 |
| 嶺北等處行中書省參知政事 | 残碑 [24]  | A04 |         |       | 從仕   | 三皇 [6v]  | A08 | XLII-2  | 13b03 |
| 郎中           | 残碑 [19r] | 04  | XLIX-1  | 31a09 | 從仕   | 三皇 [6v]  | A09 | XLII-2  | 13b04 |
| 郎中           | 残碑 [19r] | 06  | XLIX-1  | 31a11 | 從仕   | 三皇 [6v]  | A10 | XLII-2  | 13b05 |
| (左右司) 郎中     | 残碑 [24]  | B07 |         |       | 從仕   | 三皇 [11v] | C02 | XLIV-1  | 26a10 |
| (左右司) 郎中     | 残碑 [24]  | B10 |         |       | 從仕郎  | 残碑 [19r] | 03  | XLIX-1  | 31a08 |
| (嶺北行省左右司) 郎中 | 三靈侯 [r]  | 03  | XLVII-2 | 21b08 | 從仕郎  | 残碑 [19r] | 06  | XLIX-1  | 31a11 |
| (嶺北行省左右司) 郎中 | 残碑 [24]  | B03 |         |       | 從仕郎  | 残碑 [24]  | E01 |         |       |
| (嶺北行省左右司) 郎中 | 残碑 [24]  | B06 |         |       | 將仕郎  | 残碑 [10]  | B06 | XLIII-4 | 18b11 |
| 路史           | 三皇 [6r]  | 09  | XLII-1  | 12b07 | 將仕郎  | 残碑 [23]  | 07  |         |       |
| 和寧務          | 残碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 21a01 | 將仕郎  | 残碑 [24]  | E07 |         |       |
| 和寧路          | 三皇 [6v]  | A01 | XLII-2  | 13a08 | 承事郎  | 残碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 21a01 |
| 和寧路          | 劉公 [r]   | 03  | XLVI-1  | 15a01 | 承事郎  | 残碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20b04 |
| 和寧路醫學教授      | 三皇 [6r]  | 09  | XLII-1  | 12b07 | 承事郎  | 残碑 [19r] | 09  | XLIX-1  | 31b02 |
| 和寧路經歷        | 残碑 [10]  | B08 | XLIII-4 | 18b09 | 承事郎  | 残碑 [23]  | 03  |         |       |
| 和寧路司獄        | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 20a10 | 承事郎  | 残碑 [24]  | E04 |         |       |
| 和寧路儒学学正      | 三靈侯 [r]  | 02  | XLVII-2 | 21b07 | 承直   | 三皇 [6v]  | A07 | XLII-2  | 13b02 |
| 和寧路儒学正       | 劉公 [r]   | 03  | XLVI-1  | 15a01 | 承直   | 三皇 [6v]  | B04 | XLII-2  | 13b12 |
| 和寧路司史        | 嶺北 [r]   | 04  | XLV     | 28a07 | 承直   | 三皇 [6v]  | B05 | XLII-2  | 14a01 |
| 和寧路推官        | 残碑 [10]  | B09 | XLIII-4 | 18b08 | 承直郎  | 残碑 [9]   | 04  | XLIII-3 | 20a04 |
| 和寧路總管        | 残碑 [10]  | B12 | XLIII-4 | 18b05 | 承直郎  | 残碑 [10]  | A04 | XLIII-4 | 18a11 |
| 和寧路總管        | 嶺北 [r]   | 09  | XLV     | 28b04 | 承直郎  | 残碑 [10]  | A05 | XLIII-4 | 18a10 |
| 和寧路總管府       | 劉公 [r]   | 07  | XLVI-1  | 15a07 | 承直郎  | 残碑 [10]  | C12 | XLIII-4 | 19a06 |
| 和寧路達魯花赤      | 残碑 [10]  | B13 | XLIII-4 | 18b04 | 承直郎  | 残碑 [10]  | C13 | XLIII-4 | 19a05 |
| 和寧路達魯花赤      | 三靈侯 [r]  | 01  | XLVII-2 | 21b06 | 承直郎  | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b02 |
| 和寧路知事        | 残碑 [10]  | B07 | XLIII-4 | 18b10 | 承直郎  | 残碑 [19r] | 08  | XLIX-1  | 31b01 |
| 和寧路提控案牘      | 残碑 [10]  | B06 | XLIII-4 | 18b11 | 承直郎  | 残碑 [24]  | C01 |         |       |
| 和寧路同知        | 残碑 [10]  | B11 | XLIII-4 | 18b06 | 承直郎  | 残碑 [24]  | D04 |         |       |
| 和寧路判官        | 残碑 [10]  | B10 | XLIII-4 | 18b07 | 承直郎  | 残碑 [24]  | D10 |         |       |
| 和林耆老         | 四世 [v]   | 01  | XLIII-1 | 23b11 | 承德郎  | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b10 |
| 和林耆老         | 四世 [r]   | 04  | XLIII-2 | 23b08 | 承德郎  | 残碑 [19r] | 07  | XLIX-1  | 31a12 |
| 和林倉          | 三皇 [6v]  | B01 | XLII-2  | 13b09 | 承德郎  | 残碑 [24]  | B09 |         |       |
| 和林倉提舉        | 残碑 [10]  | C08 | XLIII-4 | 19a10 | 承務   | 三皇 [11v] | C02 | XLIV-1  | 26a10 |
| 和林倉同提舉       | 残碑 [10]  | C07 | XLIII-4 | 19a11 | 承務郎  | 残碑 [10]  | B07 | XLIII-4 | 18b10 |
| 和林倉付提舉       | 残碑 [10]  | C05 | XLIII-4 | 19b01 | 承務郎  | 残碑 [10]  | B10 | XLIII-4 | 18b07 |
| 和林倉付提舉       | 残碑 [10]  | C06 | XLIII-4 | 19a12 | 承務郎  | 残碑 [10]  | C05 | XLIII-4 | 19b01 |
| 和林付兵馬        | 残碑 [10]  | C12 | XLIII-4 | 19a06 | 承務郎  | 残碑 [10]  | C08 | XLIII-4 | 19a10 |
| 和林兵馬         | 劉公 [r]   | 01  | XLVI-1  | 14b11 | 承務郎  | 残碑 [19r] | 03  | XLIX-1  | 31a08 |
| 和林兵馬司        | 劉公 [r]   | 02  | XLVI-1  | 14b12 | 承務郎  | 残碑 [19r] | 04  | XLIX-1  | 31a09 |
| 和林兵馬司        | 劉公 [r]   | 07  | XLVI-1  | 15a07 | 太中大夫 | 残碑 [10]  | B12 | XLIII-4 | 18b05 |
| 和林兵馬司儒学正     | 劉公 [r]   | 02  | XLVI-1  | 14b12 | 忠憲大夫 | 三靈侯 [r]  | 04  | XLVII-2 | 21b09 |
| 和林兵馬達魯花赤     | 残碑 [10]  | C13 | XLIII-4 | 19a05 | 中順   | 三皇 [6v]  | A05 | XLII-2  | 13a12 |
|              |          |     |         |       | 中順   | 三皇 [11v] | B06 | XLIV-1  | 26a01 |
|              |          |     |         |       | 中順大夫 | 残碑 [9]   | 05  | XLIII-3 | 20a03 |
| 文散官          |          |     |         |       | 中大夫  | 残碑 [24]  | B07 |         |       |
| □□大夫         | 残碑 [24]  | A11 |         |       | 中奉大夫 | 残碑 [10]  | A09 | XLIII-4 | 18a06 |
| 亞中大夫         | 残碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20a01 | 中奉大夫 | 残碑 [10]  | A10 | XLIII-4 | 18a05 |
| 亞中大夫         | 三靈侯 [r]  | 01  | XLVII-2 | 21b06 | 中奉大夫 | 残碑 [20r] | C03 | XLIX-2  | 32a12 |
| 榮祿大夫         | 残碑 [20r] | A02 | XLIX-2  | 31b11 | 中奉大夫 | 残碑 [20r] | C04 | XLIX-2  | 32b01 |
| 榮祿大夫         | 残碑 [20r] | B03 | XLIX-2  | 32a12 | 中奉大夫 | 残碑 [20r] | C05 | XLIX-2  | 32b02 |
| 嘉義           | 三皇 [6v]  | A02 | XLII-2  | 13a09 | 中奉大夫 | 残碑 [20r] | C06 | XLIX-2  | 32b03 |
| 嘉義大夫         | 嶺北 [r]   | 09  | XLV     | 28b04 | 中奉大夫 | 残碑 [20r] | C06 | XLIX-2  | 32b03 |
| 銀青光祿大夫       | 残碑 [20r] | A05 | XLIX-2  | 32a02 | 中奉大夫 | 残碑 [24]  | A01 |         |       |
| 光祿大夫         | 大司農 [r]  | 02  | XLII-3  | 27a06 | 中奉大夫 | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b02 |
| 光祿大夫         | 嶺北 [r]   | 07  | XLV     | 28b01 | 徵事郎  | 残碑 [19r] | 12  | XLIX-1  | 31b05 |

Index of the Terms Found in Qara-qorum Inscriptions

| 語句           | 碑文       | 行   | Atlas   | 和録    | 語句 | 碑文 | 行 | Atlas | 和録 |
|--------------|----------|-----|---------|-------|----|----|---|-------|----|
| 朝列大夫         | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 19b12 |    |    |   |       |    |
| 朝列大夫         | 残碑 [10]  | B13 | XLIII-4 | 18b04 |    |    |   |       |    |
| 朝列大夫         | 残碑 [23]  | 04  |         |       |    |    |   |       |    |
| 朝列大夫         | 残碑 [23]  | 05  |         |       |    |    |   |       |    |
| 朝列大夫         | 残碑 [24]  | B01 |         |       |    |    |   |       |    |
| 朝列大夫         | 残碑 [24]  | B04 |         |       |    |    |   |       |    |
| 朝列大夫         | 残碑 [24]  | D07 |         |       |    |    |   |       |    |
| 朝列大夫         | 劉公 [v]   | A02 | XLVI-2  | 16b03 |    |    |   |       |    |
| 文林郎          | 残碑 [19r] | 05  | XLIX-1  | 31a10 |    |    |   |       |    |
| 奉義           | 三皇 [6v]  | B02 | XLII-2  | 13b10 |    |    |   |       |    |
| 奉議           | 三皇 [11v] | B07 | XLIV-1  | 26a02 |    |    |   |       |    |
| 奉議大夫         | 残碑 [10]  | A06 | XLIII-4 | 18a09 |    |    |   |       |    |
| 奉議大夫         | 残碑 [10]  | A07 | XLIII-4 | 18a08 |    |    |   |       |    |
| 奉議大夫         | 残碑 [10]  | A08 | XLIII-4 | 18a07 |    |    |   |       |    |
| 奉議大夫         | 残碑 [19r] | 06  | XLIX-1  | 31a11 |    |    |   |       |    |
| 奉議大夫         | 残碑 [19r] | 09  | XLIX-1  | 31b02 |    |    |   |       |    |
| 奉議大夫         | 残碑 [24]  | C04 |         |       |    |    |   |       |    |
| 奉議大夫         | 残碑 [24]  | D01 |         |       |    |    |   |       |    |
| 奉訓           | 三皇 [6v]  | A04 | XLII-2  | 13a11 |    |    |   |       |    |
| 奉訓           | 三皇 [6v]  | A06 | XLII-2  | 13b01 |    |    |   |       |    |
| 奉訓           | 三皇 [6v]  | B03 | XLII-2  | 13b11 |    |    |   |       |    |
| 奉訓           | 三皇 [6v]  | B10 | XLII-2  | 14a07 |    |    |   |       |    |
| 奉訓大夫         | 残碑 [10]  | B08 | XLIII-4 | 18b09 |    |    |   |       |    |
| 奉訓大夫         | 残碑 [10]  | B09 | XLIII-4 | 18b08 |    |    |   |       |    |
| 奉訓大夫         | 残碑 [10]  | C07 | XLIII-4 | 19a11 |    |    |   |       |    |
| 奉訓大夫         | 残碑 [24]  | C07 |         |       |    |    |   |       |    |
| 奉訓大夫         | 残碑 [24]  | C10 |         |       |    |    |   |       |    |
| 奉政大夫         | 嶺北 [r]   | 08  | XLV     | 28b03 |    |    |   |       |    |
| 奉政大夫         | 三靈侯 [r]  | 03  | XLVII-2 | 21b08 |    |    |   |       |    |
| 奉直           | 三皇 [11v] | C03 | XLIV-1  | 26a11 |    |    |   |       |    |
| <b>武 散 官</b> |          |     |         |       |    |    |   |       |    |
| 昭信校尉         | 残碑 [10]  | C06 | XLIII-4 | 19a12 |    |    |   |       |    |
| 昭武           | 三皇 [6v]  | A03 | XLII-2  | 13a10 |    |    |   |       |    |
| 進義           | 三皇 [11v] | B08 | XLIV-1  | 26a03 |    |    |   |       |    |
| 進義校尉         | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 20b07 |    |    |   |       |    |
| 進義校尉         | 残碑 [10]  | B11 | XLIII-4 | 18b06 |    |    |   |       |    |
| 進義校尉         | 劉公 [v]   | A03 | XLVI-2  | 16b04 |    |    |   |       |    |
| 宣威將軍         | 残碑 [23]  | 02  |         |       |    |    |   |       |    |
| 宣武將軍         | 残碑 [9]   | 08  | XLIII-3 | 20b01 |    |    |   |       |    |
| 忠顯校尉         | 残碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20b03 |    |    |   |       |    |
| 忠顯校尉         | 残碑 [10]  | C01 | XLIII-4 | 19b05 |    |    |   |       |    |
| 忠顯校尉         | 残碑 [23]  | 12  |         |       |    |    |   |       |    |
| 忠顯校尉         | 残碑 [23]  | 13  |         |       |    |    |   |       |    |
| 忠翊           | 三皇 [11v] | C04 | XLIV-1  | 26a12 |    |    |   |       |    |
| 忠翊校尉         | 残碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b11 |    |    |   |       |    |
| 忠翊校尉         | 残碑 [9]   | 09  | XLIII-3 | 20b09 |    |    |   |       |    |
| 忠翊校尉         | 残碑 [10]  | C02 | XLIII-4 | 19b04 |    |    |   |       |    |
| 敦武           | 残碑 [9]   | 11  | XLIII-3 | 20a10 |    |    |   |       |    |
| 武德將軍         | 残碑 [9]   | 07  | XLIII-3 | 20b02 |    |    |   |       |    |
| 武略將軍         | 残碑 [9]   | 06  | XLIII-3 | 20a02 |    |    |   |       |    |
| 武略將軍         | 残碑 [23]  | 09  |         |       |    |    |   |       |    |
| 武略將軍         | 残碑 [23]  | 10  |         |       |    |    |   |       |    |
| 武略將軍         | 残碑 [23]  | 11  |         |       |    |    |   |       |    |
| 武略將軍         | 残碑 [23]  | 14  |         |       |    |    |   |       |    |

# 嶺北省右丞郎中総管収粮記 Sino-Mongolian Inscription of 1348

松川 節・松井 太

(Takashi MATSUKAWA / Dai MATSUI)

調査場所：ハルホリン市、エルデニ=ゾー寺院内。

調査日時：①1996年8月26～27日；②1998年8月12～16日。

調査者：①松田・松川・松井・オチル；②松田・村岡・宇野・松川・中村・オチル・ダシバトラフ・ガルサンツェレン。

調査方法・作業内容：①碑陰のみ拓本1セットを採取。写真撮影。②碑陽・碑陰について、拓本を2セット採取。写真撮影。

碑文の現況：エルデニ=ゾー寺院内東の草地内に、碑陰を上にした状態で放置されている。その隣には「和林兵馬劉公去思碑」も、同じく碑陰を上にした状態で放置されている。長さ234cm、幅85cm、厚さ27cm。下になっている碑陽側は長さが10cmほど長く、244cmある。碑石基部には亀趺或いは基台に差込むためのソケットがあり、途中で折れたあとが見て取れる。現存するソケットは、長さ12cm、幅29cm、厚さが19cm。また、付近に亀趺ないし基台は見あたらなかった。

碑陰のモンゴル文は、碑石の中央、碑頂から12～60cmの部分に行間6cmで4行記されている。碑頂から60cm以下、最下部に到るまでは全幅にわたって漢文が刻されていたと思われるが、全体に磨耗が激しく、左半分には文字の痕跡すら残っていない。碑頂から120～180cmの部分には、李文田が『和林金石録』で指摘するとおり、チベット文字の仏呪 om̐ mani pad me hūm̐ が3行にわたって刻されており、その下に刻されていたはずの漢文を解読することは、もはや困難である。チベット文字の仏呪を刻する際、意図して碑面を削った可能性がある。

拓影：Atlas, pl. XLV-1, 2 (碑陰の下3分の1が欠)；松川1997, pl. XI (碑陰モンゴル文類のみ)。

拓本所蔵機関：立命館大学図書館<sup>(1)</sup>；モンゴル国科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部。

考察：Atlasに拓影が公刊されたことにより、はじめてその存在が知られる。この拓影から、碑陽の末尾に5行のウイグル字モンゴル文、碑陰上部に数行のウイグル字モンゴル文が存在することがわかる。

1897年に李文田(撰)『和林金石録』が碑陽の漢文を著録。さらに羅振玉が、Atlas所載の拓影と自ら蒐集した拓本とによって対校し、詳細な校勘記を1929年に完成させる。ただし、羅振玉の校勘記でも、碑陰の漢文とモンゴル文の存在には言及されていない。

この間、コトヴィチ(Котвич)とポッペ(Поппе)が現地調査の際に当碑文の存在を確認している。コトヴィチは「ゴルバン・ゾー堂宇の前方——より正確にはツァニト堂宇の近く——に建つ漢文碑文の両面に数行のモンゴル文テキストが認められた」と述べる(Котвич1917, pp. 206-208)。従って、コトヴィチの調査時点では、本碑はまだ立てられた状態であったことが判る。現在のように放置されたのは1981年のことである。これはエルデニ=ゾー博物館の前館長ダワドルジ氏に対するインタビューにより判明した。1998年度行動記録8月16日を参照。

参考文献：Atlas, pl. XLV; Котвич1917; 李文田『和林金石録』；ポッペ1942, pp. 16-17; Ligeti 1972, p. 27; 松川1997。

## 嶺北省右丞郎中総管収粮記・モンゴル文(松川 節)

### Mongolian Part of Sino-Mongolian Inscription of 1348 (Takashi MATSUKAWA)

本碑を実見したコトヴィチとポッペは、それぞれ「漢文碑文上のモンゴル語銘文は、充分良好に保存されているが、その内容は、大部分漢語の音写であり、ただ官職名を示しているだけで、漢文で記された内容を意味するにすぎない。モンゴル語の部分は、ほんの数個の単語からなっているだけである」(Котвич1917, pp. 206-208)。「漢文碑文。この碑文中若干行は古代蒙古の書体で書かれ、漢文中にある諸固有名詞の音写である」(ポッペ1942, pp. 17, 32)と説明するのみで、モンゴル文テキストの解読は行なわなかった。その後リゲティは、Atlasの拓影に依拠し、また漢文面の内容をも斟酌して、碑陽モンゴル文のテキスト転写を初めて提出した(Ligeti 1972, p. 27)。その際、リゲティは参考文献として“G. Kara, Inscription sino-mongole de Qara-qorum de 1348. AOH 25”を挙げているから、カラ(G. Kara)が本碑モンゴル文の解読研究を準備していたと推測される。しかし、カラ論文はAOH当該号(1972)には発表されておらず、また管見の限り、現在までいかなる形でも公表されていない。一方、碑陰モンゴル文について、Atlasの拓影はほとんど判読に堪えない状態であった。

このような状況にあって、我々は1996年度の調査において拓本(ただし碑陰のみ)を採取し、これに基づいて松川

<sup>(1)</sup> この拓本は、清朝最後の庫倫辦事大臣であった三多(サンドー)が宣統2年庚戌(1910)の夏に採拓させたものであることが、右下部分の題記「和林倉碑 庚戌夏日 三多 識」から判明する。

が初めてテキスト転写を提出した(松川 1997)。さらに我々は、1998年度の調査において碑陽をも採拓できた。本処で提示されるテキストは、今回の調査で将来した拓本に依拠する。また、松川(1997)がさきに提出した碑陰モンゴル文テキストにも、若干の訂正を加えた。

本碑モンゴル文の綴り字については、語末の /-ng/ を表記するために -NK と書かれるべきところで、しばしば -K としか書かれていない点が注目される (r02: NYK = Ni<n>g 「寧」; r03: CYK = čī<n>g 「丞」; r04: L'NGCWK = langčū<n>g 「郎中」; r05: NYK = ni<n>g 「寧」; r05: XWCWK = qoču<n>g 「和中」 v01: LYK = Li<n>g 「嶺」; v02: CWK = čū<n>g 「中」; v03: CWK = čū<n>g 「中」)。その多くは漢語の音写である。本稿では、これらの用例で -N- が表記されていない場合、<n>として補った。

#### 碑陽 (recto)

- r01 yekes ordas-un  
 r02 ǰmekei Ni<n>g-ong-uun medelün Köke Balayasun-a sayuqu noyad-ǰa  
 r03 si-čing daivu lingbui šingun yiu-či<n>g Temüge  
 r04 čeule daivu soo-yiu-si-yin langčū<n>g ǰanggi  
 r05 ge-yi daivu qoo-ning luu-yin sunggon Musavir noyan-da sang qoču<n>g amuu lan irgen-i ülüü YW/// ///D(..)///

- r01 大オルダの  
 r02 フメケイ寧王の支配のコケ=バラガスンにいるノヤンたちのために  
 r03 資政大夫(で)嶺北省の右丞テムゲ、  
 r04 朝列大夫(で)左右司の郎中ジャンギ、  
 r05 嘉議大夫(で)和寧路の総管ムサーフィル(らの)ノヤンのために、倉(の)和中(の)糧を、多くの人々を……しない……………

#### 語注

**r02, ǰmekei Ni<n>g ong:** この ǰmekei Ning-ong が『元史』巻43、順帝本紀、至正13年(1353)12月己亥の条に「寧王旭滅該、還大斡耳朶思」と現われる寧王旭滅該(Hümekei)に同定されることは確実である。本碑では 'WM'K'Y と書かれるが、『元史』での漢字音写からは語頭に /h/ を有していたと考えられる(e.g. Hügü > 旭烈~旭烈兀。ウイグル字では先古典期モンゴル語の語頭の /h/ を表記できない)。松川 1997, pp. 94-95 を参照。

**r02, noyad-ǰa:** Ligeti (1972)・松川(1997)ともに luq-a と読んだが、彼らが L- とする語頭字を拓本によって他の語頭の L- と比較すると、フックの曲がり方が微妙に違う。おそらく本処で L- のフックにみえる部分は碑石のキズであろう。r05, v03 と比較して、noyad-ǰa が破損しているものと考えたい。

松川(1997)は r05 の noyan-da を noyan-dan, また v03 の noyad-ta を noyan-tan と転写し、いずれも「ノヤンたちが」と訳す。しかしながら、両処とも接尾辞の字形は明らかに D' / T' である。また、碑文によって顕彰される人物に与位格語尾が接続して「~に; ~のために、~を記念して」の意となる例は「忻都公碑」モンゴル文の碑額および第1行にも在証される(Cleaves 1949, p. 62)。本碑で列挙されるノヤンたちも顕彰の対象となっていることは明瞭なので、問題の noyan (noyad)-da も「ノヤンたちのために」と訳し、立碑の目的を記すものとみる[以上、松井]。

**r05, sang qoču<n>g amu:** sang の部分を Ligeti (1972) は ?swq̄, 松川(1997) は sung と読んで不明語としたが、今回の拓本で明らかに sang と判読できる。周知のように、漢語「倉」からの借用語。原義は「倉、くら」であるが、ウイグル語では倉に納入されるべき穀物現物をも意味し(松井 1997, p. 30 & n. 5)、また多くの蒙漢合璧命令文では sang amu と熟して「倉糧」と対訳される(中村・松川 1993, pp. 76-77)。本処では、sang amu 「倉糧」が和中(> mo. qočung. cf. 松川 1997, p. 92; 本稿モンゴル文語注 v03; 漢文語注 7a)によって集積されたものであることを特に強調するため、具体的な amu 「食糧; 米」の直前に qoču<n>g を挿入して「倉の(=倉に納入されるべき)和中の糧; 和中の倉糧」を意味するものか[以上、松井]。

**r05, lan irgen-i ülüü:** Ligeti (1972)はこの部分を lan čögen-i ülüü と転写し、また松川(1997)は [t]ula 'NK'-Y ülüü と訂正した。いずれも Atlas の拓影によるものであったが、今回将来した拓本により、明らかに lan irgen-i ülüü と判読できた。最後の否定辞 ülü(ü)には、「苦しめる; 飢えさせる」といった意味の動詞が後続し、本処以下全体で「多くの民を苦しめず(飢えさせず)……」というような、糧食集積を賞賛する文脈となっていたと推測される[以上、松井]。

#### 碑陰 (verso)

- v01 Ling-bui šing-un 嶺北省の  
 v02 yiu-čing Temüge lang-čung ǰanggi 右丞テムゲ、郎中ジャンギ  
 v03 sunggon Musavir noyad-ta qoo-čung 総管ムサーフィル(らの)ノヤンたちのために、和中(の)

v04 amun quriyaysan-u tula bii tas bayiulba

糧を集めたので、碑石を建てた。

語注

v01, **Ling-bui šing**: < chin. 嶺北省. 碑陰モンゴル文の内容が、碑陽漢文の碑名「嶺北省右丞郎中總管收糧記」の対訳であることに気づけば、固有名詞の比定は容易である。「張応瑞碑」モンゴル文 (line 13) には Ling-bui ding čuu qing čungšü šing < chin. 嶺北等處行中書省の対訳例が在証される (Cleaves 1950, p. 112).

v02-03, **yiü-čing Temüge lang-čung Janggi sunggon Musavir**: yiu-čing < chin. 右丞, lang-čung < 郎中, sunggon < 總管. いずれも「忻都公碑」 (lines 2, 32, 37) に在証される (Cleaves 1949, pp. 97, 117, 121). また, yiučing < 右丞はトゥルファン出土モンゴル語命令文書 (Cerensodnom & Taube, BTT XVI, Nr. 73, line 4) にも在証される.

v03, **qoo-čung**: これまでモンゴル語資料中には在証されていないが、本碑の主旨からみて、漢語「和中」の音写に間違いはない。同じ語が、r05 では XWCWK qoču<ng と分かち書きされずに綴られている。この「和中」については、漢文面碑陽の語注 7a (松井担当) を参照。

v04, **bii tas**: 「碑石」の意。この語は漢語の「碑」と古代ウイグル語の taš 「石」からなる。すでに「忻都公碑」 (line 2: Cleaves 1949, p. 93) に在証される<sup>1)</sup>。

嶺北省右丞郎中總管收糧記・漢文 (松井 太)

Chinese Part of the Sino-Mongolian Inscription of 1348 (Dai MATSUI)

本碑漢文面に関する拓影や移録研究については、すでに松川節が既発表論文 (松川 1997) と上掲箇所ですとまとめているので繰り返さない。松川 (1997) は碑陽の漢文について Atlas 所載の拓本に依拠しつつ『和録』の移録に若干の変更を加えた。しかし、これは碑陽を実見調査できない段階でなされたものであり、1998 年度の原碑調査と採拓の結果、いくつかの点で訂正を要することが判明している。ただし、本稿では逐一には言及しない。

6 行目から 12 行目の下部 1/3 ほどは碑石の表面が摩滅・剥落し、拓本によっても判読困難であり、缺字数も明確ではない。この摩滅部については、『和録』も単に「闕」と注記するのみである。ただし缺字数は、松川 (1997) が推測したよりも、各行あたり 2~3 字ほど多いと思われる。少なくとも、6 行目末の「我」は、7~12 行末字よりも 1 字高い位置にある。本稿での復元は 1 字あたりの寸法と、とくに第 8 行での推補に基づく (語注 8b 参照)。

碑陰は Atlas, pl. XLV-2 に拓影が公刊されるが、そこから文字を読みとることはほとんど不可能であり、『和録』も移録していない。また、原碑を実見しても、碑面の中心から右側に人名・官名が列挙されているのみである。本稿では移録しない。これらの人名については前掲「カラコルム関係碑文官職名・人名総合索引」を参照せよ。

积文

篆額 嶺北省右丞郎中總管收糧記

- 1 嶺北省右丞郎中總管收糧記
- 2 河東古陶進士霍有孚撰 滕陽陶士宜刊 劉沙的監工
- 3 河東大鹵段起祖書 石工韓德
- 4 和寧路司吏李褻獻篆 都社長 張仲澤 賈仲□ 高彥温 助□
- 5 伏以
- 6 國之和羅以從權民之中糧以應募此經濟之嘉猷致治之急務也夫欲上不蠹國下不厲民者則惟在于委任得其人  
收受□□□□□□□□義□□我
- 7 嶺北省治在藩垣朔漠不毛例設和中五十餘年泊至正丁亥咨准糧數一十五萬石於是監者上相光祿大夫平章  
政事□□□□□□□□倒刺沙
- 8 中奉大夫參知政事蜜子亞相承直郎左右司員外伯加奴奉政大夫左右司都事郭氏從道等推選資政大夫右丞  
帖木哥□□□□□□□□長吉掾
- 9 史趙氏景文嘉議大夫和寧路總管木薛飛兒等董正其事秋毫無犯億石之糧月餘而畢可謂神矣矧我數君子者  
皆□□□□□□□□□□不剛不
- 10 柔之才居有為有守之地則其風彩閑雅外圓內方望之如霜之潔就之如日之春無虐榮獨而畏高明不屈威武而  
□□□□□□□□□□□□不蠹
- 11 國而厲民惟奉公而愛物使豪強寢鉅錮之形而不敢輕姦猾怠跳梁之狀而不敢侮下逮百執事之人亦皆有□□□

<sup>1)</sup> Uig. bii (~bi) taš は、漢文・ウイグル文合璧「重修文殊寺碑」 (line 25: 耿世民・張宝璽「元回鶻文『重修文殊寺碑』初釋」【考古學報】1986-2, p. 260), 「亦都護高昌王世勳碑」 (第 5 載, line 36) にも在証される。ただし、高昌王世勳碑の在証例は、従来 bir taš あるいは bay taš などと誤読されている。Geng Shimin & J. Hamilton, L'inscription ouïgoure de la stèle commémorative des Iduq qut de Qočo. Turcica 13, pp. 22, 31; 耿世民「回鶻文亦都護高昌王世勳碑研究」【考古學報】1980-4, p. 518; 卡哈爾=巴拉提・劉迎勝「亦都護高昌王世勳碑回鶻文碑文之校勘与研究」【元史及北方民族史研究集刊】8, 1984, p. 70 [以上, 松井]。

□□□□□□□□□□□□□□借而

12 價高下 龠合無偏毫釐不繆書之臣爲上 爲德爲下爲民 詩之憲憲令德宜民宜人而不惟默契於心則又發揮□□  
□□□□□□□□□□□□□□亦不

13 吐周官所謂以公滅私民其允懷豈不信哉吁和中之名不見於經則其創制立法自我

14 元始然一代之興必有一代之制昔唐虞夏商治不過九州而有納總納銓納秸納粟納米之例周人地廣列爲□□  
□□□□□□□□□□□□□□漢□□

15 國寢廣郡縣天下而有常平義倉之目彼魏晉之淆亂金宋之苟簡誠不足法也由是觀之歷代之天下未有如我  
16 元之天下也歷代之制度未有如我

17 元之制度也以我

18 元之天下論我

19 元之制度極難者和中爾和者上之所節以誅民中者下之所精以報

20 國苟得其人天雨海流而不息神運鬼輸而不竭不得其人反是以

21 今無爲之治得可用之人當纂之於經編之於史以幸萬世傳之不朽可也愚因北京道糧客裨舍等允志于

22 國之忠澤民之願也哉時至正戊子秋八月朔日記 同立石人呂仲寬 劉良甫 劉孝先 曹彥亨 □□□

句讀

嶺北省右丞郎中總管收糧記

河東古陶進士霍有孚，撰。河東大鹵段起祖，書。和寧路司吏李禩，篆。滕陽陶士宜，刊。劉沙的，監工。石工韓德、都社長張仲澤、賈仲□、高彥溫，助□。

伏以。國之和糴以從權，民之中糧以應募。此經濟之嘉猷，致治之急務也。夫欲上不蠹國下不厲民者，則惟在于委任。得其人收受□□□□□□□□義□□。我嶺北省，治在藩垣。朔漠不毛，例設和中五十餘年。洎至正丁亥，咨准糧數一十五萬石。於是，監者上相光祿大夫平章政事□□□□□□□□倒刺沙·中奉大夫參知政事蛮子亞相·承直郎左右司員外伯加奴·奉政大夫左右司都事郭氏從道等，推選資政大夫右丞相帖木哥·□□□□□□□□長吉·掾史趙氏景文·嘉議大夫和寧路總管木薛飛兒等，董正其事。秋毫無犯，億石之糧，月餘而畢。可謂神矣。矧我數君子者，皆□□□□□□□□□□，□不剛不柔之才，居有為有守之地，則其風彩閑雅，外圓內方。望之如霜之潔，就之如日之春。無虐榮獨而畏高明，不屈威武而□□□。□□□□□□□□□□不蠹國而厲民，惟奉公而愛物。使豪強寢鋸錮之形而不敢輕，姦猾怠跳梁之狀而不敢侮。下逮百執事之人，亦皆有□□□□□□□□□□□□□□□□借而價高下，龠合無偏，毫釐不繆。書之臣爲上爲德爲下爲民，詩之憲憲令德宜民宜人。而不惟默契於心，則又發揮□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□亦不吐。周官所謂以公滅私民其允懷，豈不信哉吁。

和中之名不見於經，則其創制立法自我元始。然一代之興，必有一代之制。昔唐虞夏商，治不過九州，而有納總·納銓·納秸·納粟·納米之例。周人地廣列爲□□□□□□□□□□□□□□□□漢□□國寢廣郡縣天下，而有常平義倉之目。彼魏晉之淆亂·金宋之苟簡，誠不足法也。由是觀之，歷代之天下，未有如我元之天下也。歷代之制度，未有如我元之制度也。以我元之天下論我元之制度，極難者和中爾。和者上之所節以誅民，中者下之所精以報國。苟得其人，天雨海流而不息，神運鬼輸而不竭。不得其人反是。

以今無爲之治得可用之人。當纂之於經編之於史。以幸萬世傳之不朽可也。愚因北京道糧客裨舍等，允志于國之忠澤民之願也哉。

時至正戊子秋八月朔日，記。同立石人呂仲寬·劉良甫·劉孝先·曹彥亨·□□□。

訓讀

嶺北省右丞郎中總管收糧記

河東古陶進士霍有孚，撰。河東大鹵段起祖，書。和寧路司吏李禩，篆。滕陽陶士宜，刊。劉沙的，監工。石工，韓德。都社長張仲澤、賈仲□、高彥溫、助□。

伏して以えらく。國の和糴は以て權に従い，民の中糧は以て募に應ず。此れ，經濟の嘉猷にして致治の急務なり。夫れ，上は國を蠹（そこ）なわず下は民を厲（しいた）げざらんと欲すれば，則ち惟だ委任するに其の人を得るに在り。收受□□□□□□□□義□□。

我が嶺北省，治は藩垣に在り。朔漠は不毛なれば，例として和中を設くること五十餘年。至正丁亥に洎び，咨して糧數一十五萬石を准さる。是に於いて，監たる者，上相光祿大夫平章政事□□，□□□□□□□□倒刺沙·中奉大夫參知政事蛮子亞相·承直郎左右司員外伯加奴·奉政大夫左右司都事郭氏從道等，資政大夫右丞相帖木哥·〔朝列大夫左右司郎中〕長吉·掾史趙氏景文·嘉議大夫和寧路總管木薛飛兒等を推選し，其の事を董正せしむ。秋毫も犯す無く，億石の糧，月餘にして畢る。神と謂う可し。矧んや我が數君子は，皆な□□□□□□□□□□。不剛不柔の才を□し，有為有守の地に居る。則ち其の風彩は閑雅にして，外圓内方たり。之を望めば霜の潔きが如く，之に就けば日の春の如し。榮獨を虐げて高明を畏ること無く，威武に屈して□□を□せず。□□□□□□□□□□國を蠹ない民を厲げず，惟だに公を奉じて物を愛（あわれ）むのみ。豪強をして鋸錮の形を寢めしめて敢えて輕んぜしめず，姦猾をして跳梁の状を怠らし







## 釈迦院遺蹟 Site of Sakya-Temple

宇野伸浩 (Nobuhiro UNO)

調査場所：フブスグル=アイマク，アルボラク=ソムに位置する。ムルン市から約 54 km，車で 117 分。北緯 49 度 38 分，東経 99 度 39 分（遺蹟南辺の石柱で計測）。デルゲル=ムレンの北岸に位置し，遺蹟から河まで約 1100 m。

調査日時：1998 年 8 月 6 日～7 日。

調査者：松田，村岡，宇野，松川，中村，オチル，ダシバトラフ，ガルサンツェレン。

調査方法・作業内容：遺蹟全体の写真撮影を松川が行い，村岡・中村・宇野の日本班，ダシバトラフ・ガルサンツェレンのモンゴル班が，分担して各マウンドごとの調査を行った。日本班は，マウンドごとの写真撮影を宇野，瓦・レンガ採集を村岡・中村・宇野の全員，スケッチを村岡，デジタル=メジャー計測を中村・村岡が担当した。モンゴル班は，マウンドごとの写真撮影とスケッチをダシバトラフ，デジタル=メジャー計測をガルサンツェレンが担当した。通訳のバトジャルガルがモンゴル班の補佐役として瓦・レンガを収集。日本班が調査したマウンドは 6 か所，モンゴル班が 7 か所，合計 13 のマウンドを調査した。

マウンドごとの作業内容としては，マウンドの写真撮影とスケッチ，デジタル=メジャーによるマウンド A の 1955 年石柱からの距離の計測，磁石によりマウンド A の石碑からの方角の計測，巻き尺によりマウンド上の礎石等の計測およびそのポラロイド写真の撮影，瓦・レンガの採集を行った。

遺蹟の現況：リンチェンの論文に載っている平面図 (Rinčen 1959, p. 135) に記されたような一辺 100 m 以上という四角形の城壁は，残念ながら現在見いだすことができない。デルゲル=ムレンに平行して，遺蹟の南辺にあたると思われる土塁があり，その一角に城門の跡が残っている。1955 年に石碑「釈迦院碑記」をウランバートルに運んだ後，石碑を 1955 年にウランバートルに運んだことを記した石柱（高さ 105.5×幅 34.5×厚さ 18.0 cm）が，城門西側の土塁の上に建てられた。その場所が「釈迦院碑記」が立っていた場所である可能性が高いと思われる。遺蹟の南辺の土塁は，西に行くにつれて自然堤防のように見え，どこまでが遺蹟の土塁なのかははっきりしない。また，遺蹟の東方・北方・西方には，はっきりした土塁を見いだすことは難しかった。

城門跡のマウンド（マウンド A）を含めて，合計 13 のマウンドを確認したが，その中で最も重要なマウンドは，マウンド A の石柱から西北へ 126 m の距離にあるマウンド B である。マウンド B は，直径 26.4～28.0 m，高さ約 1.5 m の円形状の本体に，直径 9.5～10.5 m の円形状の張り出しが西南方向に突出した形をしている。またマウンド B の西北には，やや小型の直径 9.5～12.4 m，高さ 0.4 m のマウンドがある。また西南方向の張り出し部のさらに西南 8.5 m の距離にも，直径 10.6～11.9 m，高さ約 0.2 m の小型のマウンドがある。

マウンド B の上に礎石が 7 個，マウンド B の東南に礎石が 1 個ある。マウンド上の礎石の中で最大のものは，マウンドから東南側の斜面にある柱礎であり，96.0×93.5×高さ 21.0 cm，その上部には直径 64.0 cm，高さ 4.5 cm の凸部がある。この柱礎は現在 2 つに割れている。マウンド B の縁辺部には，やや小型の直方体の礎石がぐるりと円形状に 6 個並んでいる。小さいものが 37.0×31.0 cm，大きいものでは 78.5×55.0 cm，縦横 50 cm 前後のものが多い。土からほとんど出ないため高さは計測できなかった。マウンドの東南には，マウンド上の上記の大きな柱礎から測って 14.3 m の距離に，102.0×72.0×高さ 14.5 cm の柱礎があり，この上部には直径 46.5 cm，深さ最大 19.0 cm の円柱形の穴があいており，穴の底はすり鉢状になっている。

マウンド B の東側に位置するマウンド C は，マウンド A・B に次いで注目されるマウンドであり，ここからは多くの瓦・レンガが見つかった。

遺蹟の景観：行動記録 1998 年 8 月 5 日参照。

遺蹟の図面：Rinčen 1959, p. 135. 今回の調査データにより作成した図面（部分）を **Plate 17** として掲載する。

考察：釈迦院遺蹟の中で礎石が最も数多く残っているマウンドは，マウンド B である。リンチェンは，このマウンド B を宮殿跡と考え，マウンド B 上の大きな柱礎を宮殿の柱の礎石とした (Rinčen 1959, fig. 5)。その理由の一つは，「釈迦院碑記」に「モンケ=カン」の名が出てくることから，この遺蹟はモンケ=カンの宮殿跡であり，ルブルク修道士が訪れたモンケ=カンの宮殿こそ，まさにこの遺蹟であると推測したことによる。リンチェンは次のように述べている。「この銘文（「釈迦院碑記」という碑額）は，かつて皇帝の宮廷の近くに仏教の僧院 (Sakya の院) があつたことを我々に証明しており，かつてギョーム=ド=ルブルク師がモンケ=カンの宮廷を訪れたまさにその場所であると推測することができる。ルブルク師は『皇帝の宮廷からカラコルムまで 10 日行程である』と述べているが，土地の人々は『石碑がその地域内にある Aru-Bulay ソムから，カラコルムの廢墟に建っている寺院 Erdeni juu までも，やはり 10 日行程だ』と言っている。おそらく，考古学的な調査は，ルブルク師が描写したキリスト教の教会があつた場所を，我々が発見することを可能にするだろう」 (Rinčen 1959, p. 136)。しかし，その後の研究の進展により，この推測がまったく誤りであったことが明らかになった。ルブルク修道士が訪れたモンケ=カンの冬営地の宮殿がオンギ河流域にあつたことは，J. A. Boyle (1974) などの研究により現在間違いないこととされている。今回調査したシャーザン=ホトは，その宮殿跡である可能性が高いとされる遺蹟である。従って，この釈迦院遺蹟にカンの宮殿があつたとは考えられず，マウンド B を宮殿跡と

する積極的な根拠はない。

では、このマウンドBは何の跡であった可能性が考えられるであろうか。本報告書の「釈迦院碑記」漢文部分訳注の「はじめに」に述べたように、デルゲル=ムレンの流域は、モンゴル帝国・元朝の時代にオイラト族の住地の一部であった地域であり、この釈迦院遺蹟にはオイラト族の駙馬と公主が居住しており、「釈迦院碑記」が8月6日（旧暦6月25日）に建てられていることからして、この釈迦院遺蹟は夏営地であったと考えられる。この遺蹟に、夏のあいだ公主や駙馬が居住する何らかの固定家屋があった可能性も考えられるが、モンゴル人の好みからして夏の間はむしろ天幕に居住していた可能性も否定できない。現在のところこの遺蹟あったことが確実な建造物は、碑文の漢文部分に述べられているバルス=トゲが建てたという寺院であり、マウンドBが寺院跡であった可能性をまず考えるべきであろう。なお、リンチェンは図上でも本文でも寺院の位置を明記しておらず、またリンチェンが寺院の柱の礎石と見なした礎石 (Rinčen 1959, fig. 3, 4) を今回の調査では見つけられなかったため、リンチェンがどこを寺院跡と考えたかは不明である。

参考文献： Намнандорж 1956; Rinčen 1959, pp. 130-142; 胡・白 1985, pp. 13-16; 陳得芝 1983, pp. 251-260; Boyle 1974, pp. 145-151.

## 釈迦院碑記 *Inscription in Honor of Möngke Qayan*

宇野伸浩・松川 節・中村 淳

(Nobuhiro UNO / Takashi MATSUKAWA / Jun NAKAMURA)

調査場所：ウランバートル市内，民族史博物館（Үндэсний түүхийн музей）。

調査日時：1998年7月26～27日。

調査者：松田・村岡・宇野・松川・中村・オチル・ダシバトラフ・ガルサンツェレン。

調査方法・作業内容：松川・中村が写真撮影。松川がビデオ撮影。宇野がポラロイド写真を撮影後，中村とともに巻き尺で計測。先行研究によるテキストと詳細に照合する。拓本の1枚目は，碑文の文字部分に塗り込められていた歯磨き粉に拓本用紙が貼り付いたために破損が激しい。1枚目の失敗分も含めて合計3セット採取。

碑文の現況：1955年にデルゲルムレン河岸の釈迦院遺蹟からウランバートルに運ばれ，現在は，民族史博物館3階のモンゴル時代の部屋にケースなしで展示されている。亀裂はなし。

形状は，高さ145.5×幅78×厚さ10.5～17 cm。下から120 cm（左），124 cm 7（右）までは直線でカットされており，その部分には面取りが左の表側・裏側，右の表側・裏側，計4カ所にある。その上部は，曲線状をなすがでこぼこに欠けている。厚さは，下部では16～17 cm，上部へ行くにつれて薄くなり，高さ110 cmあたりでは厚さ10.5 cm。石碑の欠損・表面の剥離は右上，左上，左下の3カ所。向かって右の裏側の面取りの部分が割れてヒビが入っている。

文字の種類は，漢字とウイグル式モンゴル文字。碑陽は，モンゴル文が左から3行，漢文が右から12行，碑額が漢字5字（ただし「碑」の字はわずかな残画のみ）。碑陰は文字なし。文字のサイズは，本文の漢字がヨコ約2 cm，タテ約2～2.5 cm。碑額の漢字が，「迦」を例とすれば，ヨコ11 cm，タテ9.5 cm。

石碑の欠損・表面の剥離のため，次の3カ所の文字が読めない。(1)右上：漢文の1～3行目の上端の文字と碑額の「釈」の「尺」の部分。(2)左下：モンゴル文中央行の下端の文字。(3)左上：碑額の「記」の「言」の部分と「碑」の文字の大部分。

碑陽の右端と左端にタテに幅3.5 cmの帯状の模様がある。帯状模様の長さは，右端の帯が，帯の外側の線で見ると下から高さ61.5 cmまで，帯の内側の線で見ると高さ79.0 cmまで，左端の帯が，帯の外側の線で見ると下から高さ90.1 cmまで，帯の内側の線で見ると高さ93.2 cmまで。

碑文の写真・図面：Намнандорж 1956, p. 14; Zhagvaral 1956, p. 109; Rinčen 1959, p. 131; 胡 1985, p. 12。本報告書では拓影を公刊できないので，碑石の調査データをPlate 17として掲載する。

拓本所蔵機関：モンゴル国科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部。

考察：本報告書に，この釈迦院碑記の漢文部分の訳注，モンゴル文部分の訳注が掲載されている。研究史については，そちらを参照していただきたい。

この碑文で興味深い点は，扱いの異なる2人の公主が登場することである。碑文を立てた駙馬「八立托」とその妻公主「一悉基（臺）」の名前は，2行目と12行目に出てくるが，名前3字は謙遜して他の字より小さい文字で刻まれ，3字が2字分のスペースに収められている。それに対して，8行目冒頭に出てくる「在堂公主」は，改行平出されている。この碑文で改行平出されている語は7カ所あり，いずれも仏教用語，大カンに関係する語など何らかの意味で聖なる語が改行平出されている。従って，この「在堂公主」も敬意を払うべき対象として扱われていることがわかる。このように，この碑文において2つの「公主」の扱いが全く異なるので，この2つの「公主」が別人を指すことは間違いない。なお，「在堂公主」の「在堂」とは，生存する親に対して用いられる表現である。

従来の研究では，張・Hurvitzが，「在堂公主」を「公主一悉基（臺）」の母親と解釈した（Poppe 1961, p.22, n. 20）。しかし，公主とは必ずチンギス・カン家出身の娘であるから，その母親はチンギス=カン家に嫁いできた女性である。チンギス=カン家に嫁いできた女性が「公主」と呼ばれることはあり得ない。従って，「在堂公主」が「公主一悉基（臺）」の母親である可能性はない。残る可能性として考えられるのは，「在堂公主」が「駙馬八立托（Bars Töge）」の母親である場合である。バルス=トゲの母親とは，チンギス=カンの次女チチェゲン（Čičegen）であり，事実「公主」としてバルス=トゲの父トレルチに嫁いだ女性である。モンケにとっては母方の叔母にあたり，皇帝モンケを讃えた碑文の中であっても，その名が改行平出され敬意を払われるに相応しい人物である。以上より，1257年の時点でオイラト族の住地でチンギス=カンの次女チチェゲンが生きていたことが判明した。このときのチチェゲンの年齢は不明であるが，ある程度推定してみたい。まず，チンギス=カンの第3子オゴデイは，『元史』巻2，太宗本紀に太宗十三年十一月辛卯（1241年12月11日）に56歳で死去したとあることから計算して1186年生まれである。それをもとに次女チチェゲンがその前後5年以内に生まれたと仮定すると，1257年の時点でチチェゲンは67～76歳の間であったことになる。

参考文献：Намнандорж 1956; Дамдинсүрэн 1957, pp. 35-36; Rinčen 1959, pp. 130-142; Poppe 1961, pp. 14-23; 胡・白 1985, pp. 11-20; 陳得芝 1983, pp. 251-260; 白 1983, pp. 46-59; 宇野 1993, pp. 69-104。

釈迦院碑記・漢文（宇野伸浩）

Chinese Part of the Inscription in Honor of Möngke Qayan (Nobuhiro UNO)

「釈迦院碑記」は、現在ウランバートル市の民族歴史博物館3階に展示されているが、1955年まで、モンゴル高原西北フブスグル=アイマクの中心都市ムルン市から西方へ約54kmに位置する、デルゲル=ムレン北岸の釈迦院遺蹟の一角に立っていた。釈迦院遺蹟は、1257年（憲宗七年）に、オイラト（Oirat）族の駙馬バルス=トゲ（Bars Töge）とその妻一悉基が、「釈迦院」と呼ばれる寺院を建設した場所であり、寺院を建設するに当たって遺蹟の南辺に「釈迦院碑記」を立てたのである。13～14世紀に、このデルゲル=ムレン周辺から、北方のフブスグル湖西岸ガルハト盆地にかけての地域は、オイラト族の住地であった。もともとはタイガ地帯に隣接するガルハト盆地だけがオイラト族の居住地であったが、部族長クドカ=ベキ（Quduqa Beki）がチンギス=カンに服属して以来、南に住地が拡大したらしく、モンケ時代までに、デルゲル=ムレン周辺までがオイラト族の住地になっていた（宇野1984, p. 176）。クドカ=ベキの息子トレルチ（Törelči）はチンギス=カンの娘チチェゲン（Čičegen）を公主として娶ることを許され、この縁組が、チンギス=カン一族とオイラト族との何世代にもわたる姻戚関係の始まりであった。この碑文を立てたバルス=トゲは、トレルチとチチェゲンから生まれた息子である。当時、オイラト族にとって最大のライバルは、チンギス=カンの第1カトン、ボルテの出身部族コンギラト族であったが、モンケ=カンの時代に、オイラト族は姻族として急速に勢力を拡大し、オイラト族出身のカトンたちがいくつかの重要な地位につき、オイラト族はコンギラト族と肩を並べさらにはコンギラト族を凌ぐ姻族に成長した（宇野1993, pp. 96-99）。その背景として、モンケ=カンの強力なバックアップがあったと考えられ、この碑文の内容が、モンケ=カンを讃えたものであることは、当時の状況から見てうなずけることである。

この碑文は、碑額と本文12行が漢文、本文3行がモンゴル文で刻まれている。ここでは漢文部分のみを取り上げ、モンゴル文部分については、本報告書の松川節の訳注において取り上げることにする。最初に、漢文部分についての従来の研究を整理しておきたい。

1953年に、モンゴル人民共和国科学アカデミーはこの碑文の調査を初めて行い、ウイグル式モンゴル文字と漢字で刻まれた碑文であること、モンケ=カンの名が刻まれていることを発見した。翌年にリンチェン（Ринчен）が調査を行った後、1955年に、この碑文は、ウランバートルに運ばれることになり、国立中央博物館に展示された。

1956年には、この碑文についての最初の研究である、ナムナンドルジ（О. Намнандорж）『モンケ=カンの石碑・宮殿の発見と研究について』（Намнандорж 1956）。この本の中で、漢文部分を担当したのは、ウランバートル国立大学の呂遠明と4人のモンゴル人であり、漢文部分の活字版テキスト（Намнандорж 1956, p. 22. 以下、本稿で「呂のテキスト」とはこの活字版テキストを指す）・注釈・モンゴル語訳を発表した。彼らの研究は、初めてこの碑文を紹介・研究したものとしての価値はあるが、漢文部分のテキストには誤りも多い。翌年に刊行されたダムディンスレン『モンゴル文学概説』第1巻は、『モンケ=カンの石碑・宮殿の発見と研究について』の4種類のモンゴル語訳から1つを若干手直しして載せている（Дамдинсүрэн 1957, pp. 35-36）。

その後、1961年に、ポッペが“Notes on the Monument in Honor of Möngke Khan”を発表した（Poppe 1961）。この論文の中で、碑文の漢文部分については、張琨（Chang Kun）とLeon Hurvitzが担当し、手写テキスト（Poppe 1961, p. 19. 以下、本稿で「張・Hurvitzのテキスト」とは、この手写テキストを指す）・注釈・英訳を発表した。彼らは、呂による上述のテキストの誤りを正した上で、比較的信頼できる英訳を行った。ただし、モンゴル帝国・元朝の専門家ではないため、歴史的背景に関わるような解釈においては、若干誤りが見られる。

最近では、1985年に、胡斯振と白翠琴が「1257年釈迦院碑考釈」を発表した（胡・白1985）。この論文は、従来の研究をふまえた上で、碑文のモンゴル文・漢文部分の解釈、碑文を立てた歴史的背景などについて総合的にまとめた論文である。漢文部分の解釈については、基本的に張琨・Leon Hurvitzの研究に基づいているが、いくつかの新しい解釈を追加している。

今まで、この碑文の拓本が公表されたことはなく、もっぱら碑刻自体の写真によって研究が行われてきた。1956年に刊行された上述の『モンケ=カンの石碑・宮殿の発見と研究について』には、この碑文の写真が掲載されている（Намнандорж 1956, p. 14）。しかし、この写真は不鮮明で文字の判読には適さない。それに対して、同年に刊行されたジャグバル（Н. Жагварал）の*The Mongolian People's Republic*（Zhagvaral 1956）に掲載されている写真はかなり鮮明であり、ある程度判読が可能である。その後、1959年にリンチェンが発表した“L'inscription sinomongole de la stèle en l'honneur de Möngke Qayan”（Rinčen 1959）にも写真が掲載された。なお、リンチェンの論文は、釈迦院遺蹟とこの碑文のモンゴル文部分に関する分析であり、漢文部分についてはほとんど言及していない。

それ以外に、この碑文の歴史的背景について分析した研究として、陳得芝「元外剌部釈迦院碑札記」、白翠琴「斡亦剌貴族与成吉思汗系聯姻考述」があり、1983年に相次いで発表された（陳1983; 白1983）。

本稿の目的は、今回の調査にもとづき「釈迦院碑記」のできるだけ正確なテキストを提示することにあり、併せて判読・現代日本語訳により内容を紹介する<sup>(1)</sup>。この碑文の歴史的背景についての分析は、別の機会に譲ることにしたい。

<sup>(1)</sup> 語句の解釈について、竺沙雅章先生、森田憲司氏、徳永洋介氏から多々ご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

釈文

碑額 釈迦院碑記

- 01 / / / / □ 國外刺隨營居奉  
 02 / □ 附馬八立托 公主 一悉基 投丹惱者切念生居濁世幸遇  
 03 明君爰處爰居長安長樂頼  
 04 天地蓋載之徳叨  
 05 國王水土之恩中心藏之追酬罔及今者 八立托 廣興喜捨之心辦財立 像重發  
 06 菩提之意建寺度僧上報 廣傳之洪庥別冀 逍遙之景貺上祝  
 07 今上皇帝聖壽無疆國泰民安 法輪常轉次冀  
 08 在堂公主福壽増延進去時中吉祥如意再乞自身吉慶四時歌慶賀之權後嗣  
 09 稱心 諸佛應心中之愿四恩總報三遍友資 法界有情俱登  
 10 彼岸 □□□□ 伽藍□□保護□□興□僧尼□情□常住母□□□□  
 11 一草招愆多劫多生好結良因早成 妙果□記  
 12 歲丁巳季夏中旬後五日奉 佛附馬八立托 公主一悉基 立記

訓読

碑額 釈迦院碑記

- 01 ……國の外刺は、營に隨いて居す。……を奉る  
 02 附馬八立托・公主一悉基は、丹惱を投ずる者なり。切（ひそか）に念（おも）えらく、生れて濁世に居するも、幸にして  
 03 明君に遇い、爰（ここ）に處（お）り爰に居り、長く安んじ長く楽しみ、  
 04 天地蓋載の徳を頼み、  
 05 國王の水土の恩を叨（みだり）にし、中心にこれを藏すも、追酬すること及ぶ罔（な）し。今者（いま）八立托、廣く喜捨の心を興し、財を辦じて像を立て、重ねて  
 06 菩提の意を發し、寺を建て、僧を度す。上は廣傳の洪庥に報い、別に逍遙の景貺を冀（こいねが）う。上は、  
 07 今上皇帝の聖壽無疆、國泰く民安く、法輪常に轉ぜんことを祝（いの）る。次には、  
 08 在堂の公主の福壽増延し、進去の時に中り、吉祥意の如からんことを冀（こいねが）う。再（さら）に乞うらくは、自らの身吉慶にして、四時に慶賀の權（よろこ）びを歌い、後嗣  
 09 心に稱い、諸佛心中の愿（ねがい）に應じ、四恩總て報じ、三友遍く資け、法界の有情と俱に  
 10 彼岸に登らんことを、伽藍……保護……興……僧尼……情……常住母……一……  
 11 一草愆（あやまち）を招き、多劫に多生するも、好く良因を結び、早く妙果を成ぜんことを。……記す。  
 12 歲丁巳に在り、季夏中旬後五日、奉佛の附馬八立托・公主一悉基、立記す。

語注

01、國外刺：3字目の「刺」は、呂と張・Hurvitzの両テキストでは「刺」になっているが、「外刺」は部族名 Oirat の漢字転写であるので、「刺」ではなく「刺」が正しく、実際今回の調査で「刺」であることを確認した。また、呂がこの箇所を「□國外刺」と読んだのに対し、張・Hurvitz と胡・白は、「國」と読むのは誤りだと指摘した (Poppe 1961, p. 20; 胡・白 1985, p. 18)。今回採拓した拓本でもこの箇所は文字が一部欠けているが、「外刺」の上の字は、「國」の可能性が高い。その上の字は若干残画が見えるが判読できない。

02、/□附馬八立托：呂のテキストでは、2字目は「佛」の字になっており、張・Hurvitz もそれに従っている。しかし、今回の調査では、この箇所は石碑が欠損しており、「佛」の字を読みとることはできない。前行が「奉」で改行されていること、12行目に「奉佛附馬八立托」という語句があることからみて、呂のテキストは、推測して「佛」を補ったようである。しかし、「附馬」の上には2字ある可能性が高く、そうであるとすれば、1行目とのつながり具合は「奉□□附馬」となるので、12行目と同じ語句を想定して「佛」1字を補うだけでは不十分であろう。

ところで、この碑文には、2行目冒頭のように改行平出されている箇所が数多くある。列挙してみると、3行目「明君」、4行目「天地」、5行目「國王」、7行目「今上皇帝」、8行目「在堂公主」、10行目「彼岸」である。改行平出されている語には明らかに共通点があり、何らかの意味で聖なる語が改行平出されていることが分かる。従って、2行目の冒頭の2字も聖なる語であるはずであり、文脈からして仏教用語が入る可能性が最も高いであろう。

一方、空格の箇所も数多くあるので、次に列挙してみたい。

1字空格：5行目「像」の前。

2字空格：6行目「廣傳之洪庥」の前、「逍遙之景貺」の前、7行目「法輪」の前、9行目「諸佛」の前、「法

界」の前, 10行目「伽藍」の前.

3字空格: 11行目「妙果」の前.

4字空格: 12行目「佛」の前.

この場合も, なんらかの意味で聖なる語の前に空格があることが分かる. とくに仏教用語が多いことがよく分かるであろう.

02, 附馬八立托公主一悉基: 「附馬八立托」とは, オイラト族の駙馬バルス=トゲのことであり, 「八立托」はこの碑文のモンゴル文の Bars Töge に対応する. その妻が「公主一悉基」である. この碑文を建てた両者の名前は, 2字分のスペースに3字を詰めて小さな文字で刻まれている. 「一悉基」の「一」がよく判読できないが, 12行目にもこの公主の名が刻まれていることから「一」と推定できる. 「基」の字は, 「土」の部分「之」のような形になっているが, 唐「褚遂良文皇哀冊」に「基」の似たような字体があるので(伏見冲敬『書道大字典』上巻, 東京, 角川書店, 1974, p. 430), これは「基」であろう. 張・Hurvitzの英訳では, 「一悉基」をモンゴル名 Isigi と解釈している(Poppe 1961, p. 21.).

02, 切念: 1字目の「切」について, 張・Hurvitzは, 英訳では“keenly aware”と訳しながらも, この「切」は音通の「窃」の意味である可能性があり, その場合は“humbly aware”と訳すべきだと指摘した(Poppe 1961, p. 20). 確かに, この「切」は「窃」の音通と解釈すべきであり, 「切念」を「ひそかにおもう」と訓読する. ただし, 「切」に文字通りの強い意味があるわけではない.

03, 明君: 1字目は, 石碑の欠損部分にかかっており, 若干残画が見えるが, 判読しにくい. 呂が見たときにはまだ欠損が少なかったのか, あるいは文脈から推定したのかはつきり分らないが, 呂のテキストでは「明」となっている. 張・Hurvitzは, 写真からは判読できないとしながらも, 呂のテキストに従った(Poppe 1961, pp. 19-20). ここでも, 呂の説に従っておく.

03, 爰處爰居: 「爰」は「ここに, ここにおいて」の意. 『詩経』「邶風擊鼓」に「爰に居り爰に處る, 爰に其の馬を喪う, 于以にか之を求む, 林の下に」【爰居爰處, 爰喪其馬, 于以求之, 于林之下】とあり, 『詩経』「小雅・斯干」に「妣祖に似續し, 室を築くこと百堵, 其の戸を西南にす, 爰に居り爰に處り, 爰に笑ひ爰に語る」【似續妣祖, 築室百堵, 西南其戸, 爰居爰處, 爰笑爰語】とある(胡・白 1985, p. 18).

04, 天地蓋載之徳: 呂と張・Hurvitzの両テキストは, 3字目を「覆」としているが, 今回の調査で「蓋」であることが判明した. また, 呂のテキストでは「之」の字が脱落しており, 張・Hurvitzのテキストは「之」を補い, 胡・白も呂のテキストに「之」が脱落していることを指摘した(胡・白 1985, p. 18). 今回の調査でも「之」の字があることを確認した.

06, 菩提: 1字目はつぶれて判読できないが, 呂と張・Hurvitzはともに「菩」と読んでおり, それに従う.

06, 建寺度僧: 呂のテキストでは「建寺□僧」となっている. 張・Hurvitzは, テキスト上では「建寺 僧」のように3字目を空白にしながらも, 解説の中で「度(僧尼に許可の符牒を与える)」を復元する案を仮説として提示し, 「私は寺を建て, 僧の任命を後援した(I have built monasteries and sponsored the ordination of clergy)」と訳した(Poppe 1961, pp. 19-21). 今回の調査で, やや不鮮明ではあるが, 「建寺」の後に「度」の字を確認することができたので, 張・Hurvitzの読みが正しいことが判明した.

06, 廣傳之洪麻: 呂, 張・Hurvitzの両テキストは, いずれも「傳」を「博」とするが, 今回採取した拓本からは, 偏がにんべんに見えるので「傳」と改める. また「洪麻」は, 呂のテキストでは「洪麻」となっているが, 張・Hurvitzと胡・白は, 写真に基づいて「洪麻」が正しいとした(Poppe 1961, pp. 19-20; 胡・白 1985, p. 18). 今回の調査で, 「洪麻」であることを確認した. 胡・白は, 「麻」は「福蔭」の意, 「洪麻」は「洪福(大きな幸福, 盛運)」の意味であるとす.

06, 逍遙之景祝: 最後の「祝」の字は, 「たまもの, 人から贈られたもの」の意であり, 呂のテキストでも, 張・Hurvitzのテキストでもこの字に読んでいるが, 前後の文脈から必ずしもしっくりこない. 隣の「兄」の部分が, 2字下の「祝」とはやや異なることも気になる. 一応, 従来のテキストに従って「祝」の字を入れておく.

07, 今上皇帝: 2字目はつぶれてほとんど読めないため, 呂のテキストでは「今□皇帝」となっており, 張・Hurvitzのテキストでも2字目は空白にしている. しかし, 文脈から「上」と推定したい. モンゴル文の中央行がモンケ=カン(Möngke qayan)の長寿を願う内容であり, 「今上皇帝, 聖壽無疆」に対応していることから, この「今上皇帝」がモンケを指すことは明らかである. 漢文部分末尾に記されたこの碑文を立てた年月日「丁巳季夏中旬後五日」とは, モンケ在位中の「憲宗七年六月二十五日」であり, 西暦1257年8月6日にあたる.

07, 聖壽無疆: 1字目は, 呂のテキストでは, 「主」の下に「王」を2つ並べたような文字が書かれているが, 今回採拓した拓本では, 上の部分も「王」である. この「壘」は, 『宋元以來俗字譜』など中国の異体字を収録した文献には見いだせないが, 朝鮮国字に存在し, 「聖」の俗字である(オバタ=ライマン 1988, p.133; 鮎貝 1972, p.121). なぜ朝鮮国字に含まれる文字がこの碑文に使用されているかについては, 現在のところよく分からないが, 「聖」であれば「聖壽無疆」となり, 意味がよく通じる.

この「上祝今上皇帝聖壽無疆」のように「祝……聖壽無疆」となる用例は, 元代の碑文類では, 1250年整屋重陽萬

壽宮聖旨碑「與俺告天祝延聖壽無疆者」（蔡 1955, p. 16; 陳垣 1988, pp. 444, 446），純陽宮令旨碑及請潘公住持疏に合刻された文書「敦請潘公大師住持永樂鎮純陽宮・平陽府長春觀，為國焚修祝延聖壽無疆者」（陳垣 1988, pp. 491-492）が確認される。また編纂史料にも「聖壽無疆」は散見する。

07, 在堂公主：「在堂」とは、親が生存していることを意味する語である。従って、この「在堂公主」は、バルス=トゲの母親である存命の公主を指すと考えられる。バルス=トゲの母親とは、チンギス=カンの娘チチェゲン Čičegen であり、オイラト族のトレルチに嫁いだ公主である（陳得芝 1983, pp. 253-254; 胡・白 1985, pp. 14-15.）。この碑文で、バルス=トゲの妻である公主一悉基は、謙遜して小さい文字で記されているのに対し、この「在堂公主」は改行平出して記されており、明らかに扱いが異なる。これはチンギス=カンの娘である公主に対して敬意を表したためであろう。これまで、この碑文にチンギス=カンの娘が登場することを指摘した研究はない。張・Hurvitz は「在堂公主」を“Princess in the palace”と英訳し、注でこの人物を公主一悉基の母親と解釈している（Poppe 1961, p. 22, n. 20）。しかし、公主とは必ずチンギス=カン一族出身の女性であり、かつ当時のモンゴル族の婚姻が外婚制であることを考えれば、公主の母親が公主であることはありえない。

08, 進退時中：張・Hurvitz は、これを“her comings and goings may be timely”と訳し、胡・白はこれを「進退得時；起居坐臥，四時如意」と解釈している（Poppe 1961, p. 22; 胡・白 1985, p. 18）。

08, 四時歌慶賀之權：最後の「權」の字について、張・Hurvitz は、呂のテキストでは「權」となっているが「懷」の誤りではないかと指摘した（Poppe 1961, p. 20）。しかし、今回の調査でこの箇所は、「權」の俗字「權」であることが判明したので、呂のテキストが正しい。

09, 諸佛：1字目を、呂のテキストは「請」と読んでいるが、張・Hurvitz のテキスト及び胡・白も「諸」が正しいとした（胡・白 1985, pp. 18-19）。今回の調査でも「諸」であることを確認した。

09, 四恩總報：呂のテキストでは、「四恩□報」となっている。一方、張・Hurvitz のテキストは3字目を「總」と写した。今回の調査で3字目は「總」の俗字「總」であることが判明したので、張・Hurvitz のテキストが正しい。「四恩」については諸説あり、『大乘本生心地観経』には、父母・衆生・国王・三宝（仏・法・僧）の恩、『釈氏要覧』には、国王・父母・師友・檀越（施主）の恩、『正法念処经』には、母・父・如来・説法法師の恩、『盲安杖』には、天地・師・国王・父母の恩とある（胡・白 1985, p. 18-19）。

09, 三友：張・Hurvitz の注では、この「三友」を『論語』季氏篇の「三友」すなわち「直（率直な人）、諒（誠実な人）、多聞（見聞の広い人）」の意に解し、胡・白もその説に従っている（Poppe 1961, p. 22, n. 22; 胡・白 1985, p. 19）。しかし、この「三友」は「三有」の音通であり、『論語』の「三友」とは関係ない。「三有」とは、三界（欲界、色界、無色界）に生死流転するもの、迷いを破り得ない人間を指す。同じような文脈における「三有」の用例としては、例えば『廣弘明集』（三十卷）に、「行道以報四恩，立德以資三有」（卷十一辯惑篇第二之七）、「弘善以報四恩，立德以資三有」（卷二十五僧行篇第五之三）とある。

09, 俱：呂のテキスト、張・Hurvitz のテキストでは、「俱」となっている。張・Hurvitz は、テキストでは「俱」と写しながらも、文脈から「俱」でなければならぬと指摘し、胡・白もそれに従った（Poppe 1961, p. 20; 胡・白 1985, p. 19）。今回の調査で、この箇所は文字そのものが「俱」ではなく「俱」であることが判明した。

10：10行目は3字目以下がつぶれており、きわめて判読しにくい。呂、張・Hurvitz のテキストでは、「護」「興」「母」「二」の4字を読みとっている。「二」の文字は、今回採拓した拓本では、字形からしてむしろ「一」のように見える。この4字以外に「伽藍」「保」「僧尼」「情」「常住」の8字を読みとることができた。「伽藍」の次の字は「興」あるいは「興」のように見える。残念ながら文意は不明であるが、2字空格の後に「伽藍」の語があることが判明したことは興味深い点であり、仏教用語など聖なる語の前に空格を入れるというこの碑文に一貫したスタイルに合致していることが分かる。なお、「伽藍」の前の空格に、引っかけて書いたような「王」の文字があるが、これは後世の書き込みであろう。

11, 早成妙果□記：「早成」の後の4字については、字がつぶれていてほとんど読めない。そのため、呂と張・Hurvitz の両テキストでは、「早成」以下は空白になっている。我々の拓本でも、この箇所は不鮮明であったが、残画の形からなんとか「妙果」「記」の字を推定できる。「記」の上の字については、前後の文脈と残画から、「謹」である可能性が考えられよう。「妙果」とは「みごとな結果。妙因、妙行によって得た証果、すなわち仏果。さとりの」意である（中村元『佛教語大辞典』東京、東京書籍、p. 1302）。

12, 歳在丁巳：「丁巳」の上は、呂と張・Hurvitz のテキストでは空白になっている。今回の調査で採拓した拓本でも、この部分は判読しにくいだが、いくらか残画が見えるので、文字があることは間違いない。前後の文脈と残画の形から推定するならば、「歳在」である可能性が高い。

12, 公主一悉臺：呂、張・Hurvitz の両テキストでは、「一悉基」と写している。2行目と12行目の公主は、文脈から同一人物と思われるので、両方とも「一悉基」である方がすっきりする。しかし、今回の調査で、12行目に現れる公主名の3字目は「基」ではなく、「臺」の俗字「臺」であることが判明した。文脈から見れば、2行目と12行目の公主は明らかに同一人物と思われるにもかかわらず、なぜ公主名の3字目が異なるのかについては、現在のところよく分からない。

現代日本語訳

釈迦院碑記

……国のオイラト族は、宿営に居住する。奉……の駙馬バルス=トゲと公主一悉基は、誠心誠意を注ぐ者である。思うに、生まれてから濁ったこの世に住んでいるが、幸運にも明君に出会うことができ、ここにずっと居住し、長く安楽に過ごし、天が蓋い地が載せていることの徳に頼り、国王の水土の恩恵をみだりに受け、心の中にこのことを思っているが、後から報いようとしても受けた恩恵には及ばない。そこで今、バルス=トゲは、喜捨をする心を広く抱き、財を投じて仏像を立て、さらに仏道を求める心を抱き、寺を建て僧を得度す。（このようにして）広くゆきわたった御庇護に報い、別に逍遙の賜物をこいねがう。まず、現在の皇帝の寿命が無限であり、國が泰平で民が安逸であり、仏法が常に行われることをいのる。次に、母上である存命の公主の幸福が増し寿命が延び、身の振る舞いが時の宜しきに従い、幸いが思うままであることをこいねがう。さらに、自分の身が幸福であり、一年中慶賀の歡びを歌い、子孫が自分の望みにかない、諸仏が心中の願いに応じ、四恩にすべて報い、三有をあまねく助け、全宇宙の生きとし生けるものとともに涅槃の境地に達することを請うものである。……伽藍……僧尼……

一草が過ちを招き、長い間に何回も生を受けているが、よく良い因縁を結んで早く妙果（さとり）を成就できますように。……記す。

丁巳の年（憲宗七年）の六月二十五日（西暦 1257 年 8 月 6 日）に、奉仏の駙馬バルス=トゲと公主一悉基（臺）が、この碑記を立てる。

釈迦院碑記・モンゴル文（松川 節）

Mongolian Part of the Inscription in Honor of Möngke Qayan (Takashi MATSUKAWA)

1953 年に発見された『釈迦院碑記』碑文は、末尾にウイグル文字モンゴル文 3 行が刻されていることよりモンゴル研究者の注目を集め、1956 年にモンゴル人民共和国のナムナンドルジが最初の研究を発表して以来、ダムディンスレン (Дамдинсүрэн 1957)、リンチェン (Rinčen 1959)、ポッペ (Pöppe 1961)、リゲティ (Ligeti 1972) らが次々と新たな読みを公表してきた。

これらの文献学的研究が一段落した後、1980 年代に至ってからは、中国の歴史学者、陳得芝 (1983)、白翠琴 (1983)、胡斯振・白翠琴 (1985) が本碑文建立の歴史的背景に関わる研究を発表している。

本碑文の建立年は、すでにナムナンドルジによる研究以来、①漢文面に「丁巳」年という紀年があること、②モンゴル文第 2 行がモンケ=カーンの長寿を祈願する内容であることから、モンケ在世中の丁巳年、すなわち 1257 年に比定されており、この年代についてはすべての先行研究で見解が一致している<sup>(1)</sup>。それゆえ、本資料は、数少ない 13 世紀のモンゴル語資料のうちでも、1260 年のクビライ即位前の時代に属する貴重なものとみなせる。

ところで、クビライ即位前の時代に属するモンゴル語資料のなかに、「漢文発令文のモンゴル語添書」という独特な形式を持つ 2 点が知られている。

(1) 河南省濟源市十方大紫微宮（現存）ネズミの年（庚子、西暦 1240）懿旨碑添書（3 行）。

(2) 陝西省草堂寺（現存）コデン（Köden > 闊端）太子令旨碑添書：第 1 截 = 癸卯年（西暦 1243）、第 4 截 = 丁未年（西暦 1247）、それぞれ 1 行ずつ。

本碑文は、内容的には釈迦院の建立を記念するものであり「発令文」ではないが、碑文に刻された文書として、主文となる漢文の末尾にその漢文の内容をダイジェストしたモンゴル語が「添え書き」されるという形式を踏んでいる点では、上記 2 点と共通しているといえる<sup>(2)</sup>。

テキスト・和訳

- 01 [2]            uruγun uruγiγar kedün kedün uyes-te  
 02 [1]    Möngke qaγan tümen tümen nasulatuγai kemejü Bars-Tüge bosqaγul///  
 03 [3]            kürtele aṅe T'P'RYXTW buyan kürtügei
- 01 [2]            子々孫々を通して幾々に

<sup>(1)</sup> なお、先行研究では、碑文の建立者であるバルス=トゲ (Bars-Töge) が『元史』憲宗本紀の憲宗 7 年 (1257) 冬の条に登場する「八里土」に比定する可能性が指摘されているが、これは不可能である。憲宗本紀当該箇所の八里土はモンケの長子バルト (Baltu > 班秃 ~ 班都) である。『元史』巻 106 后妃表・憲宗の条及び『元史』巻 107 宗室世系表・憲宗諸子の条を参照。

<sup>(2)</sup> この形式については、中村・松川 1993, pp. 24-26; 松川 1997, pp. 87-88 を参照。

- 02 [1] モンケ=カーンよ、万々歳生き永らえ給えとて、バルス=トゲが建立し……  
 03 [3] 至るまで、この良縁をもつ (?) 福德が至るように。

訳注

[1-3]: すでにポッペによって提案されたように、本碑文のモンゴル文3行は、著しく抬頭された第2行を最初に読み、続いて第1行→第3行と読まなければ文意をなさない。

01, **uruṯun uruṯiyar**: 「子々孫々を通して」。 *uruṯ-un uruṯ* に造格 *-iyar* が接続した形。造格 *-iyar* は、場所・時間の経過をあらわす。 *uruṯ-un uruṯ* は、 *uruṯ-un uruṯ-a kürtele* 「子孫的子孫行到了」という形で『元朝秘史』にも類出する。

01-03, **kedün kedün uyes-te kürtele**: 「幾々代に至るまで」。名詞+与位格語尾+ *kürtele* で「～に至るまで」の意。 *uyes* は *üye* 「世代」の複数形。ナムナンドルジとリンチェンは *noyas* 「ノヤンたち」と読んだが、ポッペによって *uyes* と訂正され、以後の研究者もポッペに従っている。本稿もポッペの読みを支持する。

02, **Möngke qaṯan**: いうまでもなく、チンギス、オゴデイ、グユクにつぐモンゴル帝国の最高統治者モンケを指す。MWNNKK' と第一音節が後舌形で記されるのは、13～14世紀ウイグル文字モンゴル語の特徴で、バスバ文字モンゴル語の表記にも影響を与えている。 *qaṯan* 「カーン」は、 *qan* 「カン」と並んでモンゴルの最高統治者が用いた称号。これらの称号は、突厥の時代にすでに並用されていたが、チンギスは「カン」号のみを用い、続くオゴデイは「カーン」号、グユクは再び「カン」号を用いていた。モンケの場合、本碑文及びペルシア語諸史料に見られるように「カーン」号を用いたと見なされてきたが、1987年に中国河南省の少林寺から新たに発現した『少林寺聖旨碑』の第一截(1253年モンケ発令の命令文)モンゴル文面に「モンケ=カン」とあらわれることより、少なくとも1253年の時点でモンケは「カン」号を称していたことが確実となった(中村・松川1993, pp. 63-64)。

03, **T'P'RYXTW**: 本碑文のモンゴル文面でもっとも難解な一語。ナムナンドルジ、ダムディンスレン、リンチェンによる *dabariṯtu* (*dabari-ṯtu*) 「良縁を持つ」という読みは、ポッペによって「文法的にはあり得るが、どこにも在証例がない」として退けられ、新たに *dabariṯunu* (*dabari-ṯun-u*) 「過ぎゆくところの」という読みが提唱された(Poppe 1961, pp. 15-16)。その理由は、 *dabariṯun* (pl. < *dabariṯui*) が *dabariṯun mongṯol čerigüd* 「過ぎゆくモンゴル諸軍」という形で13～14世紀のモンゴル語文献に在証されるからである。両見解ともに、この語が *dabari-* 「過ぎる」を語幹と見なしている点で、意味上の大きな差は生じていない。続く *buyan* 「福德」を修飾して、「巡りゆく福德」、すなわち「良縁を持つ福德」という方向で解釈する点では一致していると言えよう。やや異なった読みを提示しているのはリゲティで、この語を *jabariṯtu* と転写するが、根拠や解釈は示されていない。

今回採取した拓本によると、問題の語はナムナンドルジ、ダムディンスレン、リンチェンと同じく **T'P'RYXTW** と読む可能性がもっとも高いが、リゲティのように、語頭を *taw* 字ではなく *yod* 字で読む可能性も捨てきれない。それゆえ、本稿では暫定的に「良縁をもつ」という訳を与えるに止める。

## 宣威軍城址 Fortresses of Xuanwei Commandery

村岡 倫・松田孝一

(Hitoshi MURAOKA / Kōichi MATSUDA)

調査場所：ウブルハンガイ=アイマクのハイルハンドラン=ソムから約 30 km. 車で 86 分. 北緯 46 度 09 分 ~ 11 分, 東経 102 度 11 分 ~ 12 分.

調査日時：① 1996 年 8 月 17~20 日；② 1998 年 8 月 19~22 日.

調査者：① 森安, 松田, 片山, 大澤, 松川, 松井, オチル, ボルド, バヤル, バツトルガ；② 松田, 村岡, 宇野, 松川, 中村, オチル, ダシバトラフ, ガルサンツェレン, バヤル, グンチンスレン.

調査方法・作業内容：① 第 1 城址・第 2 城址・第 3 城址の規模を, GPS による経緯度, 高度計による高度調査, メジャー及び自動車により計測し, 平面図を作成. 付近の山上から松川が写真・ビデオ撮影. 聞き取り調査.

② 第 1 城址・第 2 城址・第 3 城址に存在する無数の穴の数とその位置を記録. 第 1 城址は村岡・ダシバトラフ, 第 2 城址は松川・ガルサンツェレン・グンチンスレン, 第 3 城址は松田・オチル・バヤルがそれぞれ担当した. さらに, 各ポイントでの GPS 計測, デジタル=メジャー等での計測を行い, 各城址のデータを先行調査の数値と突き合わせ, 計測値を記録した. 各城址を中村を中心にほぼ全員が写真撮影, 松川がビデオ撮影, 近くの高地からも各城址の遠景を写真・ビデオに撮影した. 第 1 城址南側東寄りに位置する多羅尊廟では, 村岡・中村が瓦・レンガを採集, 宇野が城址内の礎石・階段等をポラロイドに撮影しサイズを記録, モンゴル側が城址南側にある階段東側の石の傾斜桁に残るチベット文字を拓本に取った. 松川・オチルによる聞き取り調査をもとに「宣威軍碑」が立っていたと思われる場所の特定を行った. モンゴル側が, 考古学者バヤル・グンチンスレンを中心に第 2 城址の穴のひとつを発掘した.

遺蹟の現況：宣威軍城址（ホクシン=テール城址）については, 従来より 3 つの城址の存在が知られている. 3 城址ともはっきりとした土塁が残っており, 外城・内城ともに確認できる. ペルレーは, 3 つの城址を北から南へ順に第 1 城址・第 2 城址・第 3 城址と番号を付けたが, 何らかの理由で第 2 と第 3 の城址の説明に混乱が生じ, その報告では第 2 城址と第 3 城址の図が逆になっている (Пэрлээ 1966, pp. 102-106). これは既に堀江 (1994, pp. 15-18) が指摘し, あらためて北から順に第 1 城址・第 2 城址・第 3 城址とした (つまり, ペルレー報告の第 2 城址・第 3 城址の番号を入れ替えた). 今回の調査では堀江に従ってそれぞれの城址を呼ぶことにする. 3 つの城址は, 東流するテール河の支流によってそれぞれ隔てられている. テール河は我々が到着した日 (8 月 19 日) には, ほとんど水の流れがなかったが, 翌日からの雨により, 比較的水量が豊富になった. 第 1 城址には外城の外側に外外城が存在するが, その形状, 用途, 並びに南北東に存在する外外城が西側のみ見られないことが確認された. 第 1 城址は, これまでペルレーの報告 (Пэрлээ 1966, p. 104) でも堀江の報告 (堀江 1994, p. 14) でも東西 800 m, 南北 600 m と, ほぼ正確な長方形とされて来たが, 1996 年度の我々の調査ですでに東西 700 m, 南北は東側が 770 m, 西側が 580 m であり, 正確な長方形ではないことが明らかになっている. 城址の中央北寄りにツァガン=トルゴイという小山があり, 内城はこれを囲む形で残存している. 松川・オチルの聞き取り調査によって, 「宣威軍碑」はこのツァガン=トルゴイの斜面に立っていたことが分かった. 確かに斜面の南側, 小山の頂上から 39.8 m 下った中腹に, つまり城址の入り口の方向を見る形で, その痕跡が見て取れた. 碑石を置いたであろう台座と, ほぼ同形の 2 つのかませ石も発見された.

第 1 城址のすぐ南側東寄りには, 付近の人々がダル=エヒーン=スム (多羅尊廟) と呼ぶ, 南側に階段を伴い, 北側が突出した凸型の台状の遺構がある. サイズは東西が 10.35 m, 南北が 13.15 m, 階段は幅 1.86 m, 遺構内は瓦・レンガが多数散乱している.

第 2 城址についてはペルレーは, 南北 400 m (東西の記載はない) とし, 第 1 城址と同じように, 正確な長方形として平面図を描いている (Пэрлээ 1966, p. 106) が, 実際は南北の東側 380 m, 西側 460 m, 東西は北側が 430 m, 南側が 450 m と, これも正確な長方形ではないことを確認した. この城址はタヒダク=トルゴイと呼ばれる小山の南斜面にあり, 北側から南側にかけて低くなっていく. その高低差はかなりあり, 10 数 m にも及ぶ. 内城と外城は間隔が 33 ~ 34 m, 石が露出しており, その跡は 3 つの城址の中では最もはっきりとしている. また, この城址の東西南北には石で組んだ門が見られる. 東門は城址北東の角から 239.5 m の地点にあり, 幅 100.0 cm, 西門は北西の角から 201.2 m に位置し, 幅は内城側で 171.0 cm, 外城側で 153.0 cm あった. 北門は北東の角から 88.5 m に位置し, 幅 186.0 cm であった, 南門は南東の角から 191.0 m の地点にあり, 内城側は幅 310.0 cm, 外城側は 414.0 cm と最も大きい. この南側は石の露出が多く, 南側へテール河の支流へ落ち込むような斜面になっているが, 南門の外側つまり南側に石で組まれた台座状の遺構が見られる.

第 2 城址の南側の第 3 城址も小山の斜面にあるが, 第 2 城址ほど城址内の高低差はない. ペルレーはこの城址も長方形として平面図に描いており, 南北 600 m (東西の記載はない) としている (Пэрлээ 1966, p. 105). しかし, 1996 年の略測によって, 東西南北ともに約 700 m のほぼ正方形であることを確認した. 第 3 城址は独特の形をしており, ペルレーは城址の東側と西側に突出した部分を平面図に書き込んでいるが, この突出部分は, 北側と南側にもあることが確認できる. 形状は同じである. また, 3 つの城址には合計 1240 もの穴が見られるのも大きな特徴であり (直径約 2 ~ 6 m

のものが、第1城址に518個、第2城址に217個、第3城址に505個ある）、これは堀江の報告（堀江1995, p. 506）以来、注目される場所である。見たところ、穴は周囲に石垣のある穴とない穴の2種類が混在している。

遺蹟の景観：行動記録1998年8月18～22日参照。

遺蹟の図面：図面としては、ペルレーが1965年の調査で作成の図面（Пэрлээ1966, pp. 103-106）と、堀江が1994年の調査でペルレーの図面を修正したものがあ（堀江1994, p. 18）が、上述したように正確なものではない。今回、調査の中で計測した数値に基づいて、松井が平面図を作成して掲載しておくことにする（Plates 18a-18c）。穴の分布状態については、バヤルの作成した第3城址の平面図（Plate 18d）を参照。

考察：宣威軍城址については、城址建設とその命名の由来を記した元朝クビライ時代の碑文である「宣威軍碑」も残され、ペルレー、ハンドスレン、堀江などの一連の研究があり、元朝時代のものであることはすでに証明済みである。ここは元朝クビライ政権時代以後の西方防衛の拠点であった。また、堀江が指摘した通り（堀江1988, p. 168）この城址はモンゴリアで発見された漢人軍団の駐屯地の遺蹟としては唯一の事例であり、非常に重要なものであると言える。

3つの城址内に残されている合計1240個以上にも及ぶ穴（直径約2～6m）についてペルレーは報告しておらず、堀江が1991年の調査で初めて注目し、その用途を食糧貯蔵庫の穴と考えた（堀江1995, p. 506）。このような食糧貯蔵庫としての穴は、長春真人西遊記に「八刺喝孫は漢語にて城為り。中に倉廩有り。故に又呼び倉頭と曰ふ」（蒙古史料四種本, p. 284）とみえ、また元朝時代の大都～上都間にあったことを杉山が指摘しており（杉山1996, pp. 23-24）、それと繋がるものであろう。しかし、もう1つ、オチルが考える兵士の居住用のものという見方があり、後に堀江も1994年の再調査で兵卒が居住した跡と自らの見解を修正した（堀江1994, pp. 20-22）。今回、モンゴル側が行った発掘により、鉄製のヤジリや鎧の一部と考えられる鉄片、牛と羊の骨が出土したが、城址の穴の用途としては両者とも可能性が残り、いまだ確定的なことは言えない。また、小型の鉄製のハンマーも出土しており、この穴に関しては工房だったのではないかという意見も出された。今回の発掘は、周囲に石垣のある穴1つだけであり、他には石垣のない穴も数多くある。果たしてその2種類の穴が同じ用途であったのかは疑問であり、1200以上にも及ぶ穴が全て同じ目的で使用されたと考えるより、いろいろな用途があったと考える方が自然ではないだろうか。いずれにせよ、最終的な結論を出すには、今後のさらなる調査が必要であるが、これが、モンゴリアに駐屯した漢人兵士たちの生活を知る貴重な手掛かりとなることは確かであろう。

城址からテール河を南に下った場所に、直径50mほどのフーフドイン=ツォーノグという池がある。オチルは「宣威軍碑」に記される「其の水に就きて溜めて以て池と爲す」というのは、この池ではないかと推測する。最も南にある第3城址からでも2kmほど離れており、また、水をためて作られた人工的なものというより、地下の伏流水が浸み出て形作られている池のようであり、断定はできない。今後も検討が必要であろう。

参考文献：Козлов1928, pp. 27-29; Пэрлээ1966, pp. 100-106; Хандсүрэн1966, pp. 107-116; 堀江1988, pp. 141-174; 堀江1994, pp. 12-27; 堀江1995, pp. 495-515; 杉山1996, pp. 23-24.

## 宣威軍碑

### Chinese Inscription on the Establishment of Xuanwei Commandery

村岡 倫 (Hitoshi MURAOKA)

調査場所：ウランバートル市，民族史博物館。

調査日時：① 1996年8月13日；② 1998年7月26日。

調査者：①松田，松川，松井；②松田，村岡，宇野，中村，松川，オチル，ダシバトラフ，ガルサンツェレン。

調査方法・作業内容：①計測，写真・ビデオ撮影；②中村・松川・村岡が写真撮影，松川がビデオ撮影，宇野がポラロイド写真を撮影後，村岡・中村が巻き尺で計測，拓本は松田・オチルを中心に2セット採取。

碑文の現況：この碑文は，セル=オドジャブによって 1958 年にウブルハンガイ=アイマクのハイルハンドラーン=ソムの東北にある宣威軍城址（ホクシン=テール城址）からウランバートルに運ばれ，中央博物館（現：自然史博物館）に収蔵された（Хандсүрэн 1966, p. 107）。現在は民族史博物館3階のモンゴル時代の部屋にケースなしで台の上に斜めに置かれて展示されている。亀跌はない。

碑文の大きさは，高さ 91 cm，幅は上部で 61 cm，中央部 63.5 cm，下部 64 cm。厚さは上部で 13.5 cm，中央部 17 cm，下部 16.5 cm であった。保存の状態はよいが，文字が肉眼で読めるのは石膏をつめて見やすくしているからであり，石膏が残っていない文字はやはり読みにくい。平板ではなく，碑面はかなりうねっている。もともとこのような形状のものを使ったようだ。特に左下の部分は，はじめからここが削られていたらしく，そのため彫りが浅くかなり読みにくい，拓本にしてみると判別できるようになった文字もある。

文字の種類は漢字。右から 20 行，1 行 20 字。上部に右から「宣威軍」と碑額があり，この 3 字は「宣」がタテ 10 cm，ヨコ 8.5 cm，「威」がタテ 11.8 cm，ヨコ 11 cm，「軍」がタテ 10.5 cm，ヨコ 7.5 cm となっている。本文の文字はタテ 2.5～3 cm，ヨコはほぼ 2 cm である。

碑陰に文字はないが，中央から若干左寄り（碑文の左端から 16 cm）の箇所にタテ 14 cm，ヨコ 10 cm，深さ 1 cm ほどの楕円形の穴がある。これがどのような経緯で出来たのか，あるいは何の用途があったのかは不明である。

碑文のスケッチ・復元図・写真：Хандсүрэн 1966, p. 112 には原碑ではなく，原碑に基づいたと思われる録文の写真が掲載されている。碑文そのものの写真は Rachewiltz 1987, p. 14; 堀江 1995, p. 513; 松川 1998, p. 43 にそれぞれ掲載。今回，スケッチは村岡が担当し，数値を入れた図 (Plate 18e) を掲載しておく。

拓本所蔵機関：モンゴル国科学アカデミー歴史研究所；大阪大学文学部。

考察：この碑文を最初に発見したコズロフは，その内容を，クビライがアリク=ブケとのカーン位争奪戦に勝利を収めたのを記念して立てた碑文である（Козлов 1928, pp. 27-29）としたが，これが誤りであることは，既にラケウिल्ツ・堀江によって明らかにされている（Rachewiltz 1987, pp. 5-14; 堀江 1988, pp. 141-174）。すなわち，この碑文は，至元 13 年（1276）勃発の「シリギの乱」に伴い，カラコルム防備のために至元 15 年（1278）に構築された「宣威軍」城の完成とその命名を記念して立てられた碑文である。

内容については上記 2 氏の録文と訳文が知られており，特に新知見はない。しかし，文字に関しては，今回の調査で明らかとなったものがあるので記しておく。まず，2 氏が不明とした碑文の左下のいくつかの文字が，今回の調査で判明した。18 行目「左衛親軍千戸張温阿塔海」の下は，ラケウिल्ツ・堀江ともに不明としている（Rachewiltz 1987, pp. 7, 13; 堀江 1995, p. 501）が，「郝瑾劉繼英」と読める。また，堀江は 19 行目「立石」の下には見えないものの文字があると考えたが，これはやはり文字はないようだ。さらに，ハンドスレン以来，20 行目は「百戸高聚」と読んでいたが，「高」は誤りであり，正しくは「馬」である。

また，ハンドスレンは 1 行目の書き出しを「皇帝福蔭裏」としたが（Хандсүрэн 1966, p. 112），初め，堀江は 1988, pp. 145-146 で，「蔭」という字体は存在せず，これを元朝時代の碑文に類見する常套句「皇帝福蔭裏」であると訂正した。ラケウिल्ツも同じ見解である（Rachewiltz 1987, p. 7）。その後，堀江は 1991 年の碑文の調査で，「蔭」はやはり「蔭」と読めることを報告している（堀江 1995, p. 499）。今回の調査でもこれは検討課題であったが，調査の結果，「蔭」や「蔭」ではなく，「蔭」である可能性が高いという結論に達した。この文字は，確かに「蔭」とするには「まだれ」の 2 画目が左に長すぎるように見える。そのため，上記 3 氏は「くさかんむり」と識別したのであろうが，明らかに 9 字目の「蓋」の「くさかんむり」とは異なる。また，「陰」の部分の「こざと」もかすかに見える。ハンドスレン・堀江がこの部分を「こざと」ではなく「月」としたのは，「まだれ」の 3 画目と「こざと」の 3 画目を，「月」の 1 画目・2 画目と考えたからであろう。確かに微妙ではあるが，他の文字と比較しても「月」とするには無理があり（3 行目の「月」，8・9 行目の「有」と比較せよ），しかもこれまで確認されていない字体である。また，何よりも元朝時代のこの常套句は「皇帝福蔭裏」と書かれることが多い。蔡 1955 所載の元朝時代の碑文でも全て「福蔭」である。

ハンドスレン・堀江は 4 行目下から 5 文字目を「建」と読んだ（Хандсүрэн 1966, p. 112; 堀江 1995, p. 501）。ラケウिल्ツは宣威軍碑の写真と訳文を載せているが釈文はない。そのため，碑文の 1 文字 1 文字をどう解釈したかは定かでは

ないが、その訳文によれば、この文字を「建」ではなく「連」と読んだようだ。しかし、原碑および拓本を見る限り、やはり「建」で正しい。

参考文献：Козлов 1928, pp. 27-29; Пэрлээ, 1966, pp. 100-106; Хандсүрэн 1966, pp. 107-116; Rachewiltz 1987, pp. 5-14; 堀江 1988, pp. 141-174; 堀江 1994, pp. 12-27; 堀江 1995, pp. 495-515. 松川 1998, p. 43.

釈文・句読・訓読は堀江 1995, pp. 501-502 によった。注釈は Rachewiltz 1987, pp. 7-14; 堀江 1988, pp. 145-147; 堀江 1995, pp. 498-500 を参照。18, 19, 20 行目は前述の通り、今回の調査で補った。

## 釈文

### 宣 威 軍

- 1 皇帝福廕裏昭勇大將軍淮東左副都元帥左衛親
- 2 軍都指揮使賈忙古解扶觀兒至元十五年四
- 3 月內率領侍衛精銳親軍池北出征於十月內
- 4 到於亦都山創立屯所因其山復建其城就其
- 5 水滸以爲池觀其形勢險阻雖克國之金城仲
- 6 升之玉關亦何加於此屯駐之久偶因暇日就
- 7 於射所軍僚參佐畢集射畢賈公曰霄壤之間
- 8 有物必有其名未有有物而無其名者也孔
- 9 子欲治衛必也正名又問官名於郊子蓋以有
- 10 其物而不可無其名故耳名之時義大矣哉今
- 11 城塹若此之壯麗然而未有其名於予心甚慊
- 12 僉曰公言甚切然則名何爲可公久之曰
- 13 當今
- 14 聖上運應千齡威加四海茲僕與汝等仗
- 15 聖君神武之威戮力戡亂意以此城名曰宣威軍不
- 16 亦可乎僉曰然
- 17 皆大元至元拾伍年拾貳月有伍日 記
- 18 左衛親軍千戶張溫阿塔海郝瑾劉繼英
- 19 玉欽游進劉禹綰管王通 立石
- 20 百戶馬聚 刊

## 句読

皇帝福廕裏，昭勇大將軍・淮東左副都元帥・左衛親軍都指揮使賈忙古解扶觀兒，至元十五年四月內，率領侍衛精銳親軍池北出征。於十月內，到於亦都山，創立屯所。因其山復建其城，就其水滸以爲池。觀其形勢險阻，雖克國之金城仲升之玉關，亦何加於此。屯駐之久，偶因暇日，就於射所，軍僚參佐畢集。射畢，賈公曰，霄壤之間，有物必有其名。未有，有物而無其名者也。孔子欲治衛，必也正名。又問官名於郊子。蓋以有其物而不可無其名故耳。名之時義大矣哉。今城塹若此之壯麗。然而未有其名，於予心甚慊。僉曰，公言甚切。然則名何爲可。公久之曰，當今，聖上運應千齡，威加四海。茲僕與汝等。仗聖君神武之威，戮力戡亂。意以此城名曰宣威軍，不亦可乎。僉曰，然。皆大元至元拾伍年拾貳月有伍日記。左衛親軍千戶張溫・阿塔海・郝瑾・劉繼英・玉欽・游進・劉禹・綰管王通立石。百戶馬聚刊。

## 訓読

皇帝の福廕に、昭勇大將軍・淮東左副都元帥左衛親軍都指揮使の賈忙古解扶觀兒は至元十五年四月の内に侍衛の精鋭なる親軍を率領して、北に池（ゆ）きて出征す。十月の内に亦都山に到り、屯所を創立す。其の山に因りて復た其の城を建て、其の水に就きて滸（た）めて以て池と爲す。其の形勢の險阻なるを觀（み）るに、克（＝充）國の金城・仲升の玉關と雖も亦何ぞ此に加わらんや。屯駐すること之れ久しうするに、偶ま暇日に因りて、射所に就きて、軍僚・參佐畢く集まる。射畢わるや、賈公曰く「霄壤之間、物有らば必ず其の名有り。未だ有らざるは、其の物有れども其の名無き者なり。孔子衛を治むるに、必ずや名を正さんことを欲す。又官名を郊子に問う。蓋し其の物有らば其の名無く可からざるを以ての故のみ。名の時義大いになるかな。今、城塹此の若く之れ壯麗たり。而るに未だ其の名有らざるは、予の心に於いて甚だ慊（うら）みとす」と。僉（みな）曰く、「公が言、甚だ切なり。然らば則ち何れに名づくるが可ならんか」と。公之を久しうして曰く、「當今、聖上の運は千齡に應じ、威は四海に加わる。茲に僕は汝等とともに聖君の神武の威に仗（たよ）り、力を戮（あわ）せて亂に戡（か）つ。意（おも）うに、此の城を以て名づけて宣威軍と曰わば、亦可ならざらんか」と。僉曰く、「然り」と。皆（とき）に大元至元拾伍年拾貳月有伍日、記す。左衛親軍千戶張溫・阿塔海・郝瑾・劉繼英・玉欽・游進・劉禹・綰管王通、石を立つ。百戶馬聚、刊（きざ）む。

## 現代日本語訳

皇帝（クビライ=カーン）の福廕に、昭勇大將軍・淮東左副都元帥左衛親軍都指揮使の賈忙古鰲扶親兒は至元十五年四月（西暦1278年4月24日～5月22日）に、侍衛の精鋭なる親軍を率いて、北へ向かって出征した。十月（10月18日～11月15日）に亦都山に到着し、駐屯所を創立した。その山を利用して城寨を建設し、その河を利用して水をためて池をつくった。その地形の険しいところを見れば、（趙）克（=充）国の金城・（班）仲升（=班超）の玉関でさえも、これに勝るものではなからう。駐屯すること、長きに及んだ頃、暇日、（競技のため）射場に軍僚・參佐がことごとく集まるということがあった。弓射（競技）が終わると、賈公は言った。「天地の間、物があれば、必ずその名がある。ないものというのは、その物があってもその名がないものである。孔子が衛を治めた時、必ず名を正そうと欲した。また彼は官名を郷子に尋ねた。その唯一の理由は、物があれば、その名があるべきだからである。名が時勢に合った意味を持つというのは、偉大なことではないか。今、城や壘壕はこんなに壮麗である。しかし、まだその名がないのは、私にはたいへん不満である」。皆は言った：「公の言葉はたいへん重要である。それならば何と名付けるのが良いであろうか」。公はしばらく間をおいて言った：「今、神聖なる皇帝の幸運は千年の時を結び、その威光は四海（全世界）をおおっている。ここに私めは汝等とともに聖君の神聖なる武力の威光に頼り、力を合わせて反乱を鎮めようとしている。私が考えるに、この城を名づけて宣威軍と呼べば、いかがであろうか」。皆は言った：「それはよい」。時に大元至元十五年十二月有五日（西暦1279年1月18日）に記した。左衛親軍千戸張温・阿塔海・郝瑾・劉繼英・玉欽・游進・劉禹・総管王通が石を立てた。百戸馬聚が刻んだ。

## フイテン=ゴル岩壁銘文 Rock Inscriptions of Khuiten-gol

中村 淳・松川 節・松井 太

(Jun NAKAMURA / Takashi MATSUKAWA / Dai MATSUI)

調査場所：ダルハン=オール=アイマクのダルハン市から東へ車で約3時間。車の距離計で80 km。東経106度42分16秒，北緯49度26分47秒。

調査日時：1998年7月29日～30日。

調査者：松田，村岡，宇野，松川，中村，オチル，ダシバトラフ，ガルサンツェレン。

調査方法・作業内容：写真撮影者は，松田・村岡・宇野・松川・中村・ダシバトラフ・ガルサンツェレン。ビデオ撮影者は，松川。スチール製巻き尺，デジタル=メジャーによる計測者は，松田・村岡・中村。モンゴル側と日本側（松川・中村）が，交替で銘文について調査。その後，両者でお互いの読みを1字1字確認する方法を採った。その際，ウイグル文字銘文については松井が，パスパ文字銘文については中村が，事前にモンゴル側より送られた写真等をもとに作成したテキストと照合した。銘文はかなり高いところにもあったので，文字の確認作業では脚立を使用。

遺蹟の現況：銘文を有する岩壁は，フイテン=ゴルと呼ばれる河に面する。河幅は目算で4～6 m。岩壁にそって北西から南東にむかって幅3.1 mの未舗装道路がのびる。銘文のすぐ下から未舗装道路沿いに計ったところ，宿营地前のキルギス=フルまでの距離は300 m。フイテン=ゴルから道路までの距離は，巻き尺で計測して11.5 m。デジタル=メジャーによる計測で，銘文のすぐ下の道路上に立って見える岩壁の幅は36 m，岩壁全体の幅は66.5 m。岩壁の高さは，5 mの巻き尺の長さを頼りに目算したところ，最も高い場所で約16 m。銘文の書かれている壁面は，地上から高さ6 mのところであり，真西を向いている。岩壁全体は，銘文を有する壁面の下，地上高6 m位までは草が覆っているが，それより上は緑もまばらで切り立った岩肌を見せている。銘文のある壁面自体はかなり大きくそこだけ平らであるが，岩壁途中より生えた木が邪魔していて，道路上からはよく見えない。まして銘文がそこにあることはわからない。銘文壁面の高さは3.40 m，幅は中央部で2.23 m，最下部で1.36 m。壁面にはいくつもの細かな亀裂が走っている。壁面の前には2×5.5 mの平らな広場があり，最近のものと思われる焚き火あとや酒瓶，お供えのトグルク紙幣やマッチが見られる。壁面は土ほこり等で薄汚れていて銘文は見えにくい状態にあり，加えて，銘文の上に木の燃えかすで書いたと思われる落書き（1998年6月13日付け）があったが，水できれいに洗い落とすと，墨書が浮かび出てきた。その他にも岩壁のあちこちに，赤い顔料で書かれた青銅器時代の岩絵とならんで，現代の落書きが見られる。

遺蹟の景観：行動記録参照。

銘文の現況：パスパ文字銘文の各行は，広場地面より207 cmのところより書き始められる。全9行で，1行目の左より9行目の右までは23.5 cm。銘文の状況は，かすれたところが多く，また字形が崩れており，最初の数行を除くと文字を読みとることもままならない。

つぎに従来よりその存在が知られていたウイグル文字銘文であるが，パスパ文字銘文のすぐ下に書かれる。両銘文の間には壁面を横断するように，右下さがりの亀裂が入っている。パスパ文字銘文の各行末尾ならびにウイグル文字銘文の各行冒頭は，この亀裂の線に沿うように記されている。銘文は全11行。6行目より11行は，5行目より5.5 cm下に頭をそろえて書かれるが，これは書式等の問題ではなく，ちょうどこの箇所亀裂が下がっており，それにあわせて下げたものと考えられる。1行目の左6 cm空けて，パスパ文字で *môn* と記される。第1行は長さ22.5 cm，最も長い第3行は37.2 cm。パスパ文字銘文に比べれば，残存状態は若干良い。

さらに今回の調査において，従来知られていた両銘文の下部より，あらたにウイグル文字の銘文が20数行分発見された。最も左の行頭は地面より134 cm。そのすぐ右に，壁面上部の青銅器時代の岩絵を模した墨絵が1点確認される。墨絵は，横5.5×縦17 cmの長方形の中に二列の点を打ったものである。左列には1点のみ，右列には5点が確認できる。墨絵の左側，横22×縦29.5 cmの空間に，確認できただけで11行の銘文がある。そのすぐ右下，横22×縦24 cmの空間にやはり11行ほどの銘文がある。後者の最初の5行は，1単語ずつ。ただし，いずれも墨が非常に薄く，単語が数語読みとれるかどうかという状態である。加えて，テキストを詳細に検討する時間もなく，モンゴル側と相談して，今回はあらたに銘文が発見されたという事実と若干の情報のみを報告することとした。

考察：本銘文のうち，まずパスパ文字銘文は，岩壁にパスパ文字で記されたものとしては，現在のところ唯一のものである。ウイグル文字銘文は，タイハル大岩とイフ=テンゲリン=アムとに確認されている。いずれも，青銅器時代から現代にわたる「落書き」が同時に存在するという共通点を持っている。しかしながら，タイハル大岩の銘文はいずれも短く，判読に苦しむものが多い。一方，イフ=テンゲリン=アムの銘文は，行動記録にもある通り，近年に上書きされていることが確認されており，原状を回復することができない限り，研究する価値を持たない。このような状況下で，ウイグル文字銘文が出現した意義は大きい。

さて，本銘文は，オチルが文字を記した岩があるとの情報を頼りに現地付近を探索した結果，発見されたものである。その存在は，1998年にウイグル文字銘文ならびにパスパ文字銘文のアイ=コピーとともに報告された（Oчир 1997）。オチル自身はこれまでも3度の調査を試みており，今回で4度目になるという（第1次=1980年，第2次=1986年，第

3次=1997年)。ちなみに、*Очир* 1997に掲載されるアイ=コピーは、第3次調査の際に同行したガルサンツェレンらが銘文の上に透明のシートを直接かぶせ、その上からなぞったものである。また、調査前に日本側に郵送された写真は、同じく第3次調査の際に同行したカメラマンによって、夕方から夜にかけて撮影されたもの。テキストが発表されるのは、今回がはじめてである。

従来よりその存在を確認していたパスパ文字の銘文とウイグル文字の銘文は、現物に接して見ると、墨の濃さや筆の太さ等より見て、同一人物の手によって書かれたものと考えられる。ウイグル文字銘文の第1行左に書かれたパスパ文字 *môn* は、上部のパスパ文字銘文の第1行の書き出し *moñ* とほぼ同じであり、字形も酷似している。おそらく銘文の筆記者は、まず現在ウイグル文字銘文があるところにパスパ文字で銘文を書き記そうとしたが、何らかの理由で *môn* とのみ書いて一旦、筆をおき、あらためてその上側にパスパ文字銘文を書いた。ついでウイグル文字の銘文を書いたものと考えられる。この点に関して、モンゴル側、日本側ともに見解が一致した。そうであるならば、片方がパスパ文字で書かれている以上、両銘文の作成は、パスパ文字制定の年である1269年より後のものということになる。

すでにその存在が知られていたパスパ文字・ウイグル文字銘文は両者とも、聖旨 (*jarliq*) 等に見られるモンゴル時代特有の冒頭定型句が確認される。ただし、パスパ文字銘文では、聖なる単語が改行平出されない場合があるのに対して、ウイグル文字銘文ではそれがなされているという相違点がある。また、パスパ文字銘文の冒頭は、ほぼ聖旨 (*jarliq*) の冒頭定型句通りであるのに対して、ウイグル文字銘文の方は、皇帝以外の発令文に見られる定型句となっている。筆記者が同じであることはまず間違いないが、とすれば、両者の間にこのような違いが存在すること自体、興味深い。次の段階として、内容の比較を行ないたいところであるが、残念ながらパスパ文字銘文については、比較に供するだけのテキストを提供できない。ただ、ウイグル文字銘文第5行に *ilči* を読むことはモンゴル側・日本側とも一致している。それに対して、パスパ文字銘文第8行に、中村は現地において *elči* と読む案を示した。中村の意見に対してモンゴル側は判断を保留したが、もしこの読みが正しければ、ここに両者を結びつける手がかりがもう一つ得られたことになる。

おそらくは、これらの銘文は、何らかの公務を帯びた使臣 (*ilči*) が、途中ここに立ち寄って記していった「落書き」であろうと思われる。しかしながら、落書きであるからといって捨て置かず、ささやかな手がかりをも見逃さず、研究していく姿勢が必要であろう。今後、我々に課された責めとしたい。

なお、新たに発見された銘文については、筆致等から見て、複数の筆記者が書いたものと思われる。ただし、いくつかの文章からなっているのかは、判然としなかった。パスパ文字銘文ならびに先のウイグル文字銘文とは、いずれも異なる手になるものと判断した。

研究： *Очир* 1997.

フイテン=ゴル墨書・パスパ文字銘文 (中村 淳)

'Phags-pa Mongolian Inscription of Khuiten-gol (Jun NAKAMURA)

| テキスト   | 和訳              |
|--|-----------------|
| 01 <i>moñ[-k'a] deñ-ri-yin</i><br><i>moñ[kə] deñri-yin</i>     | とこしえの天の         |
| 02 <i>k'u-č'un-t'ur ye-kä su</i><br><i>küčün-tür yéke su</i>   | 力に、大いなる威福の      |
| 03 <i>ja-li-yin 'i-bä'an-dur</i><br><i>jali-yin ibe'en-dür</i> | 輝きの加護に、         |
| 04 <i>q'anu jar-lq...</i><br><i>qān-u jarliq...</i>            | カーンのおおせ。 . .    |
| 05 <i>t'u-yin ni .i .u k. .u da 'u ga m. p.</i>                | . . . . .       |
| 06 <i>'e m. . . . . k.u. ñ r.i. . .</i>                        | . . . . .       |
| 07 <i>.u . . . . . ma ru g. .</i>                              | . . . . .       |
| 08 <i>'e-l-č'i ra .. yu. .u . . . d.</i><br><i>dči</i>         | 使臣(?) . . . . . |
| 09 . . . . .   | . . . . .       |

語注

01: *moñ* の *o* 字のまん中に *o* を示す線を確認できなかった。ウイグル文字銘文の左側に記されたパスパ文字は *môn*。また、文脈上、*moñ-k'a* と綴られるはずであるが、*-k'a* 字は確認されず、スペースもない。

01-04: 皇帝の発令文である聖旨 (*jarliq*) の冒頭定型句は、発令文原物では必ず3行で書かれる。しかし本命文では、原則通り聖なる語が改行平出されず4行にわたっている。その他、綴りにも例外的なものが見られる。例えば、典型的な冒頭3行を有する少林寺聖旨碑第4截 (中村・松川 1993, pp: 48-49) と比較してみると、第4截第1行に *k'u-č'un-d'ur*

とあるのに対して本銘文第2行ではk'u-č'un-t'ur, 第4截第2行に-i-h-än-durとあるのに対して, 本銘文第3行には'i-bä-an-durとなっている。また, 第4行目 q'anu jar-l.q = qän-u jarliq に属格が現れるのも例外的である。

05-09: ここに示した Transliteration は, あくまで可能性が高いものという程度である。唯一8行目冒頭にようやく 'e-l-č'i = elči と読んだが, ただし前述の通り, この案に対してモンゴル側は判断を保留した。また, モンゴル語で記された発令文には elčin と複数形で出てくるのが普通であるが, ここでは次の文字要素が -n であるか確定できなかったという問題点もある。

フイテン=ゴル墨書・ウイグル文字銘文 (松川 節・松井 太)

Uighur-Mongolian Inscription of Khuiten-gol (Takashi MATSUKAWA / Dai MATSUI)

0 mōñk[']  
 1 mōngke tngri-yin küčün-tür  
 2 qayan-u suu-tür bi öčüken mayui  
 3 C(..)KWN-W (.....)bičig an-e (.....)(...)ču qada  
 4 -tür bičig bičijü gün bolyan ɣajar tngri bayiqu-yin  
 5 belgetü-yin tula čayaɣan-bar yabuyan ilčin-ber  
 6 yabuɣin üjen Č'(.....)JW yabun atuyai  
 7 kemen bičig bičijü talbiba  
 8 (.....) atuyai takiy-a jil  
 9 yisün sar-a-yin qorin  
 10 naiman-a (.....)  
 11 bolyai

0 とこしえの  
 1 とこしえの天の力に,  
 2 カアンの威福に, 私, 卑小にして劣悪な  
 3 ……文書(を?)この…岩壁  
 4 に文書を書いて, 深く知らせめ, 地神・天神がいる,  
 5 善き兆しがあるので, きまりによって行く使臣として  
 6 行くものたちは, 見て…して行くように。  
 7 と言って, 文書を書いて残した。  
 8 ……いるように。鶏年  
 9 九月の二十  
 10 八日に, ……  
 11 なった。

#### 語注

1-2, mōngke tngri-yin küčün-tür qayan-u suu-tür: この冒頭定型句については, 中村・松川 1993, p. 16; 松川 1995, pp. 38-40 を参照。

2, öčüken mayui: 「小さく悪い; 卑小にして劣悪な」。現地でも実見したところ, 最初の語は ''čWNWK'N と書かれていた。しかし, ここでは öčüken 「小さい」と転写したオチル説を支持したい。なぜなら, 書記や書写者が自らを卑下して「小さく悪い; 卑小にして劣悪な」と称することは, トゥルファン出土のソグド語文献・ルーン文字古トルコ語文献や 9~10 世紀敦煌出土ウイグル語文献など, モンゴル時代以前の中央アジア諸文献に類見するからである (MOTH, No. 5, line 58; 吉田 1993, pp. 132-133; 森安 1997, p. 51)。

4, ɣajar tngri: tngri 命令文をはじめとして多くのモンゴル時代文書では, tngri 「天」は「聖なる語」として抬頭されるが, 本処ではその扱いを受けていないのが留意される。

5, čayaɣan: オチルの読みに従うが, この語は 13~14 世紀の文献には在証されていない。

## ハルホル=ハン遺蹟 Site of Kharkhul-Khan

松田孝一 (Kōichi MATSUDA)

調査場所：アルハンガイ=アイマクのエルデネマンダル=ソムの中心より南へ9km、車で約13分のバルガスニ=タル、北緯48度28分、東経101度20分。

調査日時：①1996年8月29日；②1998年8月8日～10日。

調査者：①松田、松川、松井、オチル；②松田、村岡、宇野、中村、松川、オチル、ダシバトラフ、ガルサンツェレン。

調査方法・作業内容：①遺蹟のGPS計測、穴の分布調査；②遺蹟測量、瓦・レンガの採集（全員）、写真撮影（松川）、ポラロイド写真記入（宇野）、ビデオ撮影（松川）。

遺蹟の現況：遺蹟は、唯一高い城壁をもつ第1城址のほか、把握した限りで、第1城址の外に低い土塁の遺蹟がおよそ12ヶ所に展開している。計測できなかった広大な集落址も存在する。第1～第8遺蹟の位置は地図上に表記した。略測では、第1城址の城外北西、第3城址北東壁外側に立っている鹿石（高さ164cmの四角柱、底部やや上で28×29cm、頂部やや下で26×32cm）を規準点として各遺蹟の位置をデジタル=メジャーで計測、記録した。鹿石は、第9遺蹟のマウンド最高点と第3城址のマウンド最高点（両点は航空写真で判定）を結ぶ線の延長上にあり、かつまた第3城址の北東壁より42.5mの地点に位置する。

### 【第1（遺蹟）城址】

- 城壁：第1城址の方形の中心軸は磁北から西にずれた方向を向く（北西壁で北60度、北東壁で北144度、南東壁で北238度、南西壁で北316度）。Plate 19cに示したように、高い城壁で囲まれ、各面の壁の四隅には土塁が高まった頂点がある（ここに角楼があったとされる）。そこから土塁は裾までなだらかに傾斜している（各約20m）。壁の端と端の間を航空写真から読み取ると、北西壁340m、北東壁375m、南東壁340m、南西壁375mの四角形。4隅の頂点間の実測値は、北西壁307m、北東壁333m、南東壁305.8m、南西壁335.8m。南東壁の南端付近の土が深く抉られており、そこで計った城壁の幅は8m。抉られた城壁の土盛りの断面に版築構造が見え、又、その付近の城壁表面に黒いレンガが積み上げられているのが露頭している。
- 城門：城壁各面の中央に1つずつ、合計4門が設置されている。門は、出入りに使用される門道とその両側の城壁の高さに積み上げられた石の門壁で構成されている。各門へは、城外からスロープでなだらかに高まり、門道床面は、内外の地表面より高い。門の外側では、土が石積み下部を埋めている。4門のうちで、南東門だけが比較的石積みがよく残っており、北東門では北側の外面の石積みだけが頂点まで建っている（この石積みを横から見ると、板石の間に石灰、しっくい塗りが塗り込まれて石が接着されている技術を観察することができる）。北東門の石積み以外の部分や、南西門と北西門は崩れたままである。南東門の門道の側面の石積みの幅は340cm（東側）～367cm（南側）、高さは城壁の内側で323cm（東側）、315cm（南側）。城壁の外側の計測で、石積み頂点から門道の床面まで61cm（東側）、173cm（南側）。南東門の門道の幅は646cm（外側）、840cm（内側）で、城壁内側で広がっている（MSSP, p. 76, fig. 52）。
- 城内遺蹟配置：城址内には、南東門から北西へまっすぐのびるレンガ道があり、その北西に、最大の中央マウンドを含めて4ヶ所のマウンドが北西門の方向へ並んでいる。この並びが城址の中心軸である。この他、城址内には、中央マウンドから見て、南隅方向に大小2個、西隅と北東に1個のマウンドがあり、北隅に近いところに窯址があった。また、マウンド上に瓦・レンガ・礎石が残存し、マウンド以外のところにも立石があり、放置された石も見られる。
- レンガ道から南マウンド：レンガで舗装された道（幅5.6m、長さ174m）のレンガは薄く表土に覆われている。レンガ道の北西端に南マウンドがある。このマウンドは、大きな方形（裾の一辺16m程度、高さ2.3m、マウンド上の北西辺11.6m、南東辺11.3m）から、北隅の角の小さな方形（南西辺1.2m、南東辺4.3m）が取り去られた形になっている。裾は南東側でなだらかなスロープ（傾斜面10.3m）になっている。マウンド上の南西部に少し地面が方形に高まったところがある（高さ50cm）。そこに4個の礎石が、不規則に残されている。それ以外に10個、さらに南東側や北東側の裾に3個、合計17個の礎石が南マウンドとその付近に残っている。普通の瓦、緑釉瓦が残っている。「王」字に似た浮き彫りマーク（王）入りのレンガ1個がマウンド南西端にあったが、別の場所から持ってこられたものであろう。
- 中央マウンド：南マウンドの北西に中央マウンドがある（両マウンドの端の裾から裾までの距離15.7m）。両マウンドの間の空間に柱石が1個、空間を南西へのぼした場所、中央マウンドの南方向にさらに1個ある。位置は、バルシの図面を参照（MSSP 1912, p. 75）。中央マウンド（裾の一辺30m程度の方形、高さ3.65m、マウンド上の南西辺18.5×南東辺18.5m、マウンドの下の南西辺29.6m、南東辺28.7m）は発掘を経ており、マウンドの南東側ののり面の土がはがされている。マウンドの土台となった、レンガの3段の階段状の積み上げとさらにその下の土台の積み石が露頭している。取り除けられたレンガはマウンドの西側、南側に何ヶ所かに小山に積み上げられている。「卍」の浮

き彫りマークの入ったレンガがひとつ見出された。発掘は南東側ののり面の北西裏側、すなわちマウンドの上面でも行われており、そこも掘られたままに残され、もともと土中に埋まっていた礎石6個が露頭している。それらから、このマウンドが、かつて建築物のあったもとのマウンドの外側に板石を積み、その上にレンガを重ね、さらに版築で土を被せた構造であることが窺われる。普通の瓦（丸瓦もある）、緑釉瓦がある。ただ、緑釉瓦の数は少ない。

- (6) 小マウンド：中央マウンドから、中心軸上を北西へ、土盛りの道（幅 7.9 m、長さは中央マウンドの上面から 16.0 m）がのび、その先に小マウンドがある（高さ 1.22 m、マウンド上の南西辺 10.7×南東辺 12.9 m）。小マウンド上に礎石が9個残されている。普通の瓦以外に緑釉瓦もあった。
- (7) 北マウンド：小マウンドの北西に北マウンド（裾の一辺 20×17.5 m 程度、高さ 2.3 m、マウンド上の南西辺 10.2 m、南東辺 10.1 m）がある。マウンド上には普通の瓦が残っている。北マウンドから北西門までは 57.4 m。北西門の城外に低いマウンドが一つ見える。
- (8) 南小マウンド：中央マウンドの南の柱石から南 11.3 m に小さい不定形（円環を半分にした勾玉形）マウンド（5.9×9.9 m）がある。地表にレンガが大量に散乱していた。
- (9) 南隅マウンド：航空写真から判読した地図の数値で、裾が南西辺 45 m、南東辺 27.5 m、マウンドの上の南西辺 35 m、南東辺 20 m。高さは約 2 m。瓦・レンガなどが残されている。一部分発掘の跡があった。このマウンド外の南西側と南側（第1城址の南西壁、南東壁を2辺とし、さらに北西辺 39 m、北東辺 80 mの四角形の範囲）には礎石が大小16個、乱雑に転がっていた。一つ所に固まらず、あたかも地表に星座を描くように散在している。マウンドの上下に普通の瓦があり、緑釉瓦はない。
- (10) 西隅マウンド：高さは極めて低い。
- (11) 北隅側マウンド：高さは極めて低く、計測不能。マウンド上の北辺 7.58 m、東辺 4.7 m、南辺 7.2 m、西辺 5.9 m。普通の瓦、緑釉瓦・レンガが残存している。
- (12) 北東隅の窯址：二つの円形マウンド（直径 11.8 m と長径 9 m ×短径 7 m、端から端まで 22.2 m）が接合した形となっている。それぞれの円の中に半月形の窯の縁と思われる薄茶色の部分が露頭している。

【第2（遺蹟）城址】第1城址の南方向に第2城址がある（第1城址の南隅頂点から城址内のマウンド礎石（図面礎石配置の右端、上より）まで、北 212 度、376.6 m）。低い土塁の壁（北西壁 118.8 m、北東壁 149.6 m、南東壁 114.6 m、南西壁 157.4 m、幅 6.8 m、高さ 0.4 m）が方形に囲んでいる。北西壁は北 58 度、北東壁は北 144 度、南東壁は北 236 度、南西壁は北 328 度の方向。北西と南東と南西壁の各中央外側には「へ」字型の土塁の突起あるいは独立の土塁がある。北東壁にそれは見えない。北東壁の北部分（北端より 24.4 m）にレンガで地面を舗装したところ（幅 10 m）があり、城壁内に続いている。中央に円形のマウンド（外接四角形東西 29.1 m、南北 30.3 m、高さ 1.25 m）がある。マウンド上には6個の礎石が配置され、普通瓦、緑釉瓦も残っている。中央マウンド及び中央のマウンドから北西の壁までの地表、北西壁、南西壁の西端から中央までの部分に瓦・レンガが落ちている。城址西端から外へ 11 m のところに大きな円石（直径 1.04 m～0.95 m）が地表に見えている。

【第3（遺蹟）城址】第1城址の北西方向に第3城址がある（第1城址の北西門から北 252 m、鹿石からこの第3城址の北東壁まで 42.5 m）。低い土塁の壁（北西壁 128.8 m、北東壁 133.3 m、南東壁 124.4 m、南西壁 126 m）が方形に囲んでいる。北西壁は北 40 度、北東壁は北 130 度、南西壁は北 315 度。北西壁と南東壁には切れ目（北西壁の西端から 58.8 m、北端から 60 m、幅 10 m、南東壁の東端から 78.4 m、南端から 36 m、幅 10 m）があり、ここが門である。城址中央（南東壁から 70 m、南西壁から 30.5 m、北西壁から 35 m、北東側のマウンドから 32 m）に、円形マウンド（外接四角形北西辺 34.4 m、北東辺 18 m、南東辺 30.5 m、南西辺 23 m、高さ 1.2～1.35 m）がある。マウンド上に礎石が6個配置されている。普通瓦と緑釉瓦が残されている。中央マウンド北東側（北西壁から 41.5 m、北東壁から 8 m、中央マウンドから 32 m）に小マウンド（内接四角形、北西辺 18.5 m、北東辺 16.5 m、南東辺 18.5 m、南西辺 18 m、高さ 0.55 m）がある。中央マウンドの南側、南隅付近に2個の石が残されている。

【第3（遺蹟）城址の北東側のマウンド（図面省略）】第1城址から 419 m、第3城址から 7 m、鹿石の北 270 度、19 m に円形のマウンド（直径 26 m、高さ 0.725 m）がある。マウンドの外に石が1個残されている。

【第4（遺蹟）城址】第1城址の北 800 m（航空写真から判読）に第4城址がある。第4城址には、中央の主城址とそれより小さい規模の城址等の遺蹟が、主城址の北東壁と南西壁の外側にある。

(1) 中央の主城址：周囲は、低い土塁（高さ 40～50 cm、南東壁で幅 3.5 m 程度）の城壁（北西壁 170 m、北東壁 186.5 m、南東壁 157 m、南西壁 204 m）で囲まれている。北隅は外へ張り出した不定形の部分（22×39.5 m）がある。北西壁と南東壁の中央に切れ目（南東壁は東隅から 72 m、幅 10 m、北西壁は西隅から 65 m、幅 10 m）がある。この2ヶ所の切れ目を結ぶ中心軸上に3個のマウンドが並んでいる。

①南東マウンド（南西辺 15 m、南東辺 25 m、高さ 90 cm）の上には礎石が12個整然と並んでおり（礎石間各 3 m、中央のみ1ヶ所 4 m）、南東側のマウンド下で、マウンドに接して2本の柱石がある。マウンド上に普通の瓦、緑釉瓦が多数残存し、レンガが散乱している。

②中央マウンドは、北西側の大方形マウンド（32×32 m、高さ 1.7 m）の南東端中央から、小方形マウンド（南西辺 12 m、南東辺 14 m）が南東側へ凸型に突き出した形で付属している。大方形マウンドには4個の礎石が整然と正方形

(25×24~25 m) を形づくって配列され、南東辺の両端よりに各1本の立石がある。突き出た小方形マウンドの南東辺の両端にも各1本の立石が立っている。普通の瓦と緑釉瓦が残されている。

- ③北西マウンド：中央マウンドの大方形マウンドの北西側中央から中心軸上を北西へ渡り廊下風に土塁（幅3m、長さ22m）がのびており、その先に正方形マウンド（19.5×19.5m、高さ1.4m）がある。マウンド上（北西辺13m、北東辺12m）には12個の礎石が整然と並んでいる。
- ④脇マウンド：上記の中心軸の3個のマウンドの両側に等間隔に離れて、片側各4個、計8個の方形マウンド（一辺10~20m、高さ60~110cm）があり、全体として11個のマウンドは左右対称形に配置されている。その他に南部分に1ヶ所（発掘されたような直径5mの穴がある）、南西壁の土塁上（南隅から22mの位置、長さ12m、幅は城壁より広い）に1ヶ所、北東壁の土塁上（東隅から92mの位置、長さ28m、幅は城壁より広い）に1ヶ所、北隅に1ヶ所のマウンドがある。
- ⑤残置礎石等：中央大方形マウンドの東と南（中心軸の左右対称の位置付近）の平地、一部はマウンド上に、それぞれ礎石が11個、9個残置されている。別に北東壁と脇マウンドの間に礎石1個、石臼2個が残されている。主城址の外に、中央に窪みを掘りこんだ石（長さ1.7m、両端幅51~43.5cm、高さ24cm、窪みの中央部の幅26cm、長さ1.4m、深さ14cm）がある。

(2) 北東城址：上記の主城址の北東側に低い土塁で囲まれた方形の小城址（北西壁91m、北東壁86m、南東壁83m、南西壁86m）が付属している。南西壁は主城址の北東壁の一部と共通である。4壁の各辺中央に、1個ずつの方形のマウンドを配置し、中央部分に中心マウンド（北西辺25m、北東辺34m、南東辺22m、南西辺34m、高さ1.2~2.05m）がある。城壁上のマウンドのうち北西、北東、南西のものは、城址内にはみ出し、南東壁上のマウンド（南西辺16m、南東辺18m、高さ1m）は城壁外にはみ出す配置である。礎石は、北西壁のマウンド（南西辺15m、南東辺15m、高さ0.7m）には残されていない。北東壁のマウンド（南西辺28m、南東辺15m、高さ0.8~0.95m）とマウンド外に各1個、南西壁のマウンド（南西辺31m、南東辺13m、高さ0.9m）とマウンド外にそれぞれ3個と8個、南東壁のマウンドに7個があり、中央のマウンド上の北西辺の両端に各1本の立石がある。中央のマウンドには普通瓦と緑釉瓦が残されている。この小城址の北壁の西端から22mに北へさらに城壁の続きの土塁がのび（39.5m）、主城址の土塁の北隅（不定形）となっている。

(3) 南西遺蹟（図面省略）：中央の主城址の南西に付属する遺蹟は、主城址南西壁上のマウンド（南西辺16m、南東辺18m、高さ0.6m）の他に、方形マウンド（南西辺15m、南東辺14m、高さ0.45m）、さらに土塁と不定形のマウンド3個が複雑に分布する区画（南西辺105m、北西辺34~39m）、及び土塁で囲まれた一画（南西壁38m、南東壁51m）が、北西辺110m、南西辺105m程の範囲に展開している。

【第5（遺蹟）城址】第1城址の北方向に第5城址がある（鹿石より北64度、266m、第1城址の北隅から450m、航空写真測量地図で、第1城址北端よりマウンド中央まで415m）。低い土塁の壁（北西壁96.7m、北東壁91.3m、南東壁101m、南西壁96.7m）が方形に囲んでいる。北西壁は北52度、北東壁は北140度、南東壁は北230度、南西壁は北320度の方向。北西壁と南東壁の中央に切れ目（北西壁は、北端から44.4mのところから幅9m、南東壁は、南端から43mのところより、幅8m）がある。城址中央（北西壁から40m、北東壁から35m、南東壁から31m、南西壁から34m）に円形マウンド（内接六角形、北辺から22, 16, 8, 20, 17, 7m、高さ1.5m）がある。マウンド上に3個、マウンド外の南側に2個礎石が残されている。城址北端から北へ23.7m、さらに北西へ26.5mに、大きな石が1個ずつある。普通瓦が残されているが、緑釉瓦は発見されなかった。

【第6（遺蹟）城址】第4城址の西方向に第6城址がある（鹿石の北400m。航空写真測量地図で、第1城址北西門から第6城址の中央マウンドの南角まで704m）。低い土塁の壁（北西壁207m、北東壁170m、南東壁168m、南西壁210m）が方形に囲んでいる。北西壁、北42度、北東壁、北132度、南東壁、北219度。城址内に3個のマウンドが並ぶ。南マウンド（マウンド上の北西辺13m、北東辺23m、南東辺20m、南西辺15m、高さ0.805m）、中央マウンド（マウンド上の北西辺35m、北東辺20m、南東辺35m、南西辺20m、高さ0.9m）は方形のマウンドで、北マウンドは、不定形（南東部分23~24×11mの方形と北西部分22.5×12.5m、高さ0.5mの一部分欠けた方形が接している）である。この3個のマウンドの西北側に土塁に区切られた区画がある。また、この遺蹟の北西壁の外側49mのところ低い土塁で囲まれた区画（北西辺36m、北東辺22m、南東辺36m、南西辺22m）がある。

【第7（遺蹟）城址】第4城址の北方向に第7城址がある（鹿石から北20度の方向850m、航空写真測量地図で第1城址の北西門から第7城址の南端まで1080m）。低い土塁の壁（北西壁50m、北東壁63.6m、南東壁52m、南西壁65.6m）が方形に囲んでいる。城址内中央（北西壁から29m、北東壁から17.3m、南東壁から16m、南西壁17.3m）にマウンド（北西辺17.3m、北東辺19.3m、南東辺15m、南西辺20m、高さ0.96m）がある。

【第8遺蹟】第5城址の北東方向に第8遺蹟がある（航空写真測量地図で第1城址北西門から北60度の方向825m）。この遺蹟は主マウンド（北西辺28m、北東辺18m、南東辺29m、南西辺20m、高さ0.8m）とその南東辺側に位置する2個の小さなマウンド（主マウンドの東12mのマウンドは11~12.5mの方形、高さ0.4m、主マウンドの南東8mのマウンドは、一辺9.5~12.5mの方形、高さ0.5m、2個の小マウンドは12m離れている）、合計3個の土塁で構成される。現地では気づかなかったが、航空写真を詳細に検討すると、このマウンドは、大きな土塁の壁（325×125m）

に囲まれている一画の中央やや北西よりに位置しているように見える。

- 【第9遺蹟】第3城址中央マウンドからこのマウンド(40.4×15~21.7 m, 高さ0.4 m~1.25 m)の最高点まで北218度, 295 m. レンガが散乱するが, 瓦はない。
- 【A遺蹟】鹿石から北東400 m. 直角に曲がる148 mと135 mの2本の土塁の内側にある2個のマウンド(14×10 m, 高さ0.55 mと10×10 m, 高さ0.5 m), 及び土塁から14 m離れたところにある土塁(17×12 m)で囲まれた一画とそこからさらに13.5 m離れたところの円形のマウンド(直径9 m). **Plate 19c**に略図のみ示す。
- 【B遺蹟】鹿石から, 北34度, 78 mの遺蹟. 低い土塁の壁(北西45 m, 北東48 m, 南東45 m, 南西48 m)が方形に囲んでいる。**Plate 19c**に略図のみ示す。
- 【C遺蹟】第1城址から真北のハヌイ河の岸辺にある2個の土塁(30×14 m, 高さ1.05 mと19×13 m, 高さ0.9 m). 2個の土塁は一本のものが途中で間が切れている。普通瓦のみで, 緑釉瓦はない。**Plate 19c**に略図のみ示す。
- 【窯址】第1城址内の窯址以外に, 鹿石の北西100 mほどのところに, 窯址があり, 焼けた残滓があった。
- 【独立大石】第4城址の中央マウンドの南に凸型の小方形マウンドの南東辺の両端各1本の大柱石の南柱石より北241度, 220.4 mの地点に大石(直径125 cm)がある。
- 【集落址その他】第1城址の北東門の北東方向, 第5城址, 第8城址の南東方向には集落址があり, 土塁で区切られたおびただしい区画が存在する。広大なために測量はGPS測定のみ。その他, **Plate 19a**において10としたマウンド, 同じく11とした城址も存在することが航空写真から判明する。また北西門の外すぐにも小マウンド(**Plate 19a, 12**)がある(未測量)。

遺蹟の景観: 行動記録参照。

図面: ラドロフの遺蹟プラン(Atlas, pl. LXIII)とスケッチ(Atlas, pl. LXVIII)がある。ラドロフは, この遺蹟地図 pl. LXIIIのタイトルを「フニン河(Хунынъ гол)沿岸の遺蹟図」と誤って記している。正しくは, 「ハヌイ河(Хануй гол)沿岸」とすべきところ。遺蹟プランでは, 第1・3・4・5城址を載せる他, 集落址の分布の表現が優れている。スケッチは, 第4城址から見た, 第1城址の遠景, 第1城址内の北マウンド・小マウンド・中央マウンド, さらに南東門を含むシーンのスケッチ, 第4城址の中央マウンドの凸型張り出し部分を前から見た景観, 第1城址の礎石。また, パルシの図面・報告がある。第1城址の遺蹟プランと中心軸上の南西門, 南・中央・小・北マウンド, 礎石のスケッチを載せている(MSSP, pp. 75-76)。

1994年の予備調査では山上からのスケッチを描き, 第1城址の全体像を把握した(**Plate 19c**)。また1998年の現地での略測の記録に基づいて, 各城址・遺蹟の個別の図面を作図し, それらを一覽としている(**Plate 19b**)。さらに, モンゴル国国土地理院よりオチルが正式入手した遺蹟一帯の航空写真をもとに可能な限り各遺蹟(第1~9)の位置を確認し, その位置に上記の個別遺蹟の略測図を貼り付けたものである(**Plate 19a**)。

今後, 図面・地図の精度を上げる追加情報が期待され, ハルホル=ハン遺蹟の完全なプランが提示される必要がある。

考察: 第1城址は中央マウンドの発掘跡に見られるようにレンガが積み上げられた下層には, 大きな礎石(55×50 cm, 77×77 cm)が埋まっている。もとの建築物の床面は現在のマウンドよりも低かったということになる。オチルは, 上層は16~17世紀, 下層は13~14世紀との仮説を述べた。上層にあるレンガの積み方は, ツァガン=バイシン(17世紀初頭)のレンガの積み方(Atlas, pl. LVIIを参照)と酷似しているところがある。したがって, レンガ積みの上層部分の建築がおよそそのころのものとする仮説には妥当性がある。モンゴル時代の特色を示す緑釉瓦は, 中央マウンドには少ないが, その他の中心軸上の各マウンド, 東マウンドなどには多数存在しており, モンゴル時代の建築物が第1城址にもともとあったことは確実である。中央マウンドの下層を13~14世紀の建築址と比定する仮説は, 今後十分に比較検討し, 比定がなされなければならないが, 妥当なものであろう。

ポターニン(Потанин)は1893年の『西北蒙古誌』の中で, この遺蹟について, この地出身のチリンドルジというザイン=シャビから, ハヌイ河の南岸に粘土造りの房子と耕地の址が拡がり, 遺蹟地帯中央やや南にウラン=バルガス(ハルホル=ハン遺蹟の別名)という城壁都市址があり, 地面から種々の鉄製品を掘り出したこと, その都市に住んでいたハンは首都を北京に移したという伝説, 都市傍らにイフ=ノール湖, 塩湖ザブイスト=シャンド湖があり, もとこの湖には塩がなかったが, ハンが馬車1000台の塩をゴビのジャンジ=バイセ旗のボルブ湖から運び, 塩湖となったとの伝説を聞いたことを記録している(ポターニン1945, pp. 154-155)。

パルシは1909年に北モンゴルの調査でハルホル=ハン遺蹟(Kharakhulu Khan Balgas)を訪れ, 主として第1城址について詳細な記録を残した(MSSP, pp. 75-77)。城址は, イフ=ハヌイ=ノール湖近く, サイド=ワン廟(位置不明)のほぼ真北, 354×308 mの長方形の城壁, 4隅(東西南北)に楼閣(角楼)址, 各壁中央に1門。北西門近くに建物群遺址(中心軸上の遺蹟のこと)。南と西の角楼の傍に建物址(南隅マウンド, 西隅マウンドのこと)。城壁は, 焼成レンガで建築, 幅約15 m, 高さ約2 m。角楼は瓦葺きと推定。各門の補強に, 石灰モルタルのスレートを積み, しっくい塗った板石で作られた4本の支柱があり, その間をレンガ積みがうめる。北西門の傍の建物群の中でいる最大のもの(中央マウンドのこと)がもっともよく保存され, その廃墟は28.72×28.70 m, 高さ約3 m。側壁の厚さ約70 cm(マウンドの外縁の厚さを計測), 外側は焼成レンガ, 内側は日干しレンガ積み。この北西に小さな建物があり, 高さ約1 mあまりの堆積が残る。堆積の平らな表面に7個の四角形の石, 柱礎と推定。南西端の堆積の表面は, もっとも外の柱を越える

まで続くので、南西端に戸口があったと考えられる。建築群址のもっとも外側（北マウンドのこと）は高さ約 2 m、広さ 14×14 m、焼成レンガを有している。二つの廃墟は、同じく、焼成レンガで築かれた建物の残りである。レンガは粗い砂礫まじりの粘土製。日干しと焼成の双方がある。レンガはサイズで 34.5×16.5×6.5 cm など 4 種、他に床レンガは緑が曲がっており、屋根瓦は中国風で、大多数は暗灰色の瓦、多くが赤く焼成されている。いくつかは明緑色の釉薬を施す。

城外に住宅址、四角形で 15×20 m ほどの低い堆積。都市の囲郭の外に並行に走る小道群の端に集まっている。北西の門から推定 150 m に独立の大きな建物址（第 3 城址か）がある。この城塞——あるいは少なくとも壁に囲われた君主の宮殿——が火災で破壊されたと推定。

パルシの第 1 城址に関する記録は、遺蹟の現状を伝えるものとしてはきわめて詳細であり、瓦・レンガの残存状況から中国風の建築物の存在を指摘し、それらが火災で焼失したであろうことを現場の焼けた炭化の状況から推定している点は重要である。

マイルスキーは 1919 年にこの遺蹟を訪れて、第 1 城址と城外について、次のような記録を残している。第 1 城址について、城址はハヌイ河岸から 3 km、城壁の一辺 300 m、厚さ 5 m、高さ 6 m。4 隅の高まりにもと見張り台の存在を想定。花崗岩で作られた 4 門。北門（我々のいう北西門）にもと高い望楼ないしは塔があったと断定<sup>(1)</sup>。1 辺 22 m の四角形の（南）マウンド、30×22 m の（中央）マウンド、その北側の礎石、レンガや磨かれた石が覆ういくつかのマウンド、いたるところの大量の出来のよい瓦片、普通にある緑釉瓦の層、半ば地面に埋まった古い供物壇に似たいくつかの大石に言及。また第 1 城址以外に関して、少し離れたところに、大量の花崗岩の石や板石、粘土でできた飾りなどがある多くのマウンドの存在、花崗岩でできた水がめ<sup>(2)</sup>、第 1 城址北門から 0.5 km の 2 個の大きな花崗岩の石（建物の柱石か記念物の破片と推定）に言及。書いたものはどこにもなかったと記している。ポターニンの記録した伝説を再録するとともに、さらにここに居住したハンについての別の伝説を記録している（Майский 1959, pp. 105-106）。

ペルレーはこの遺蹟に関して次のように記載している（Пэрлээ 1961, pp. 105-106）。1957 年にドルジスレン（Ц. Доржсүрэн）が簡単な調査を実施した。（第 1）城址の 4 隅にレンガ作りの保塁がある。現在はないが、碑文が南門前にあった<sup>(3)</sup>。レンガの焼成窯址、皮革なめしの伝説のある硝石湖、農業用水路跡出土の鉄鋤の破片等から手工業、農業に有効な場所だと指摘。またハラホル=ハンについて、ハラホルという名の人名 4 人を挙げ、同定を試みている（Пэрлээ 1961, pp. 119-120）。ペルレーの報告のうち、灌漑用水路の存在は重要である。今回の調査では、明確にそれと考えられるものを探索し得なかったが、第 1 城址の城外北西側に城壁に並行に通る溝を 1 本見た。

今回の調査は、遺蹟各所を網羅的に記録を残した点で画期的といえる。第 2 城址の低い囲郭の四面の土塁の中央に付された「へ」字型の突起には、土塁に接続したものと、分離して独立しているものがあるが、その両方とも、オルト=タミル河のホーチン=オリヤスタイという城址（770×775 m）の城壁の門に付されている突起に同じ形態のものをみるることができる。第 2 城址の突起の部分の土塁は門となる切れ目が明瞭でないか、あるいは逆に土がその部分盛り上がっている（南西壁）ところがあったが、ホーチン=オリヤスタイ城址は、そこが 4 門になっている（MSSP, pp. 77-78）。

パルシは、ホーチン=オリヤスタイの土塁を「柵壁（Palisadenmauer）」と記す（MSSP, fig. 54, 55）。低い土塁が防衛や家畜の進入阻止に効果を持つためには、その上に柵が必要である。パルシは土塁の高さを記録していないが、ハラホル=ハンの諸城址などの高さ数十 cm 程度の低い土塁の上に柵が構築されていたと考えることは合理的である。カルピニは、グユク=カン選出の宮廷会議が行なわれているトレゲネのもとに滞在、そこに推定 2000 人を収容する大天幕と、その周囲にめぐらされた装飾付きの木柵、木柵に設備された 2 つの大門があったことを記録している（護雅夫訳『カルピニ・ルブルク 中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、1965, pp. 76-77）。モンゴル時代の城址の周囲を区切る高さ数十 cm の低い土塁は、カルピニが記録する 2000 人収容の大天幕を囲む木の柵が設営される土台と考えることに無理はない。ウイグル時代のタリアト碑文にも玉座と cit（「柵」などの訳あり）の言及がある（行動記録 1996 年 8 月 28 日）。このような低い土塁と柵の構造については今後さらに検討される必要がある。

ハラホル=ハン遺蹟について言及する文献史料はない。白石典之は、カラコルム遺蹟の研究（白石 1998, p. 63）の中で、都市設計のプランが宋尺によって行われていたことを指摘している。中国の尺度によって都市プランが作られていることを明らかにした重要な指摘である。ハラホル=ハン遺蹟の都市プランがどのような規準によってなされたかについても、今後検討が加えられることを期待したい。

参考文献：Atlas, pls. XLIII, LXVIII; Потернин 1945; Майский 1959, pp. 105-106; Пэрлээ 1961, pp. 105-106, 119-120; MSSP, pp. 75-77; 白石 1998, p. 63.

(1) 我々が未測量の小マウンドを指すのかもしれない。

(2) 第 4 城址（1）⑤にみた、中央に窪みを掘りこんだ石のことであろう。

(3) ただし、パルシ（MSSP, pp. 75-77）はこの碑文について何も報告していないので、彼が調査に訪れた時点でこの碑文は存在していなかったと考えられる。

## シャーザン=ホト遺蹟 Site of Shaazan-Khot

松田孝一・宇野伸浩

(Kōichi MATSUDA / Nobuhiro UNO)

調査場所：ウブルハンガイ=アイマク，バヤンゴル=ソムから約 25 km，車で約 35 北緯 49 度 40 分，東経 103 度 41 分，高度 660.9 m.

調査日時：① 1996 年 8 月 16 日；② 1998 年 6 月 9 日；③ 1998 年 8 月 23 日.

調査者：① 森安，松田，松川，大沢，片山，松井，オチル，ボルド，バツトルガ；② 白石，バヤル，バツトルガ；③ 村岡，宇野，オチル.

調査方法・作業内容：①では，簡易測量，遺蹟見取り図の作成，計測，松田，片山，松川，松井，バツトルガ，スケッチ記入松川，バツトルガ，景観調査，緑釉破片の採集松田，写真，ビデオ撮影松川．②では，白石，バヤル，バツトルガによる測量．③では，村岡による瓦・レンガの採集，宇野による礎石の写真撮影，オチルによる陶磁器の破片採集．陶磁器片は歴史研究所に持ち帰り，写真撮影．

遺蹟の現況：遺蹟は，オンギ河岸の西 550 m の平原の中に展開している．遺蹟の北の端に，土塁に四角く囲まれた城址が東西に 2 つ並んで残存している．東側の城址は，北壁 66.7 m，南壁 65.9 m，東壁 86 m．西側の城址は北壁・南壁とも 61 m，南北うちのり 60.5 m．土塁の幅は 4 m，高さは数十 cm 程度と低い．この 2 つの城址は遺蹟全体の中で顕著に目視され，都市の主要部分であると判断される．遺蹟内には他に多くの土塁が残存し，ペルレー (Перлээ 1961) や白石 (1998) の図面に描かれている．それらは，1996 年の調査で目視したところでは，もともとどのような全体形のどの部分なのか判然としなかった．

この東西城址の北壁の線はひとつながりの一線となっている．南北の長さは，西側の城址が短い．大きさの違う方形の城址がくつつくパターンのプランは，モンゴル時代の遺蹟によくある (メルヒー=トルゴイ，バヤン=ゴル) が，どのような理由からかは不明．東側の城址には，南壁の東端から 41 m に土塁の切れ目があり，ここが出入り口であったと考えられる．

東側城址の中央，やや北よりに円形のマウンド (直径 24 m，高さ 1.2 m) がある．白石図面 (Plate 20a) では，方形のマウンド上に円形マウンドが重なる形で，正確に測量されている．西側の城址には，やはり北よりに方形のマウンドがある．マウンドから北壁までは 8 m，ペルレーの図面に描かれているマウンドは，松田等の調査の際には，東側城址の南壁とみなされた．Plate 20a では三日月型に描かれている．マウンドの東西幅 19 m，南北幅 18.5 m．東側城址の円形マウンドには，2 個の礎石が残されている．2 個の礎石の間隔は 4.6 m．1 個は半分ほどが地表から出ている．この礎石から北壁までは 30 m である．その大きさは，底面が一辺が 67~68 cm の正方形，高さが 37 cm の直方体．この直方体の上面に高さ 3.5 cm，直径 55.5 cm の円柱状の盛り上がりが付いている．円柱の基壇となる盛り上がりである [以上，松田]．

マウンドの周辺には瓦が多く散乱する．緑釉瓦は少なく，それ以外の瓦が多い．レンガは少ない．陶磁器の破片が数多く散乱する [宇野]．

シャーザン=ホトと呼ばれるのは，ここから磁器片 (Шаазан) が相当多く発見されるからである．いくつか磁器片を見出したが，その中にキリル文字が書かれていたものがあり，表面から採集したものは年代考察の資料にし難い．遺蹟は，この東西の 2 つの城址から南へのびている．上述のように，土塁の高まりはあまりないが，目視では，7ヶ所のマウンドをみとめた [松田]．

遺蹟の景観：1996 年 8 月 16 日の行動記録参照．バヤンゴル=ソムより下流のオンギ河の右岸には，標高 1420~1450 m の帯状の高台が連なっており，その尾根上に道がある．遺蹟はその尾根上の道から河に向かって数十 m 下ったところにある．遺蹟からの景観は，道のある高台の方面に帯状の低い丘が見えるが，その外はほとんど真っ平らな河岸の平地である [宇野]．

図面：ペルレーが，オンギン=ハルガニ=ゴルのシャーザン=ホトとして図面を掲載している (Перлээ 1961, p. 111, pl. 26)．本報告書ではペルレーの図面に 1996 年の調査結果に基づく略測図を併せ掲げる (Plate 20b) とともに，白石作成の最新の図面 (Plate 20a) を提示する．

考察：ペルレーは，シャーザン=ホトから発見された磁器と中国貨幣等から，シャーザン=ホトを元代の都市遺蹟であると見なしている (Перлээ 1961, p. 103)．『集史』には，オゴデイが，冬にオンギ方面に滞在し，付近で狩猟して過ごしたことが記載されている (Boyle 1971, p. 64)．オゴデイのオンギの滞在の中心地がこのシャーザン=ホトである可能性について，ペルレーは問題提起しながらも，オンギは，冬営地であるから，シャーザン=ホトが位置するゴビ地域ではなく，ハンガイ方面にあったと考えている (Перлээ 1961, p. 103)．オンギ河はハンガイから南流するから，オンギ冬営地をハンガイに結びつける案も可能であるが，その他に両者を関連づける根拠は示されていない．一方，シャーザン=ホトでは，モンゴル時代の宮殿を葺いたと考えられる緑釉瓦や大きな礎石が発見されており，ここに，皇族の宮殿が存在したことは明らかである．シャーザン=ホト以外にオンギ河沿いに，緑釉瓦や大きな礎石の出土した場所は，管見の限りでは知られていない．

オゴダイがオンギに冬営したという明確な記事は漢籍資料中に存在しないが、カラコルム万安宮の建設工事が始まった1235年より後、1237年と1238年の冬、野馬川という場所で狩猟し、グユクは1247年冬、ウテグ=クラン（野馬）で狩猟している（『元史』巻2、太宗本紀）。野馬川は、『混一疆理歴代国都之図』にカラコルム（和寧と表記）からかなり離れた位置ではあるが、南方向に記載されており、ゴビ地域にこれを比定することは可能であろう。モンケは1253年冬、オンギに滞在し（同書巻3、憲宗本紀）、またクビライも対アリク=ブケ戦争の時にカラコルムに近づいた後、アリク=ブケの4個のオールドとコルゲンのオールドを発見し、それらを再建してオンギ河で冬営している（Boyle 1971, p. 254）。オンギ河流域から野馬川一帯は、オゴダイがカラコルムに遷都して以来、カンの冬営地で、御猟場であったことが知られる。緑釉瓦や宮殿礎石などの詳細な検討から、万安宮との関連が明らかになれば、カンの宮殿であった可能性はさらに明確となろう〔松田〕。

ルブルク『旅行記』第27章10節にその後、我々は、常に北へと進みながら再び山地をのぼった。ついに聖ステファノの日（12月26日）に、我々は、小山一つ見えないほどの、海のように大きな平原に入った。そして、その翌日の聖ヨハネの祝日（12月27日）に、我々はかの大君主の宮廷に到達した」という記事がある（Wyngaert 1929, pp. 242-243）。今回、オンギ河の南方をバヤンゴル=ソムへ向かう途中で、四方八方すべて地平線が見えるような場所を通過した。ルブルクの記述との関わりを想定させる景観であった。GPS測定値は、北緯45度50分44~46秒、東経103度05分20秒~08分37秒。バヤンゴル=ソムまでの距離は約30km、車で45分。旧ソ連製の地図上では、第3ブリガードの西にあたる：このような地形は、オンギ河流域ではここだけとは限らないので、ルブルクが記した「海のような大きな平原」のあくまで一つの候補である。そこを通過した翌日にモンケの宮廷に到着したというルブルクの行程からすると、距離的にはちょうどよい地点〔宇野〕。

参考文献：Пэрлээ 1961, pp. 103, 111; Boyle 1971, p. 64.

# ツァガン=バイシン遺蹟・ツォクト=ホントイジ碑文・岩壁銘文 Site of Tsagaan-Bayshin and Mongolian-Tibetan Inscription of 1617

松田孝一 (Kōichi MATSUDA)

調査場所：ツァガン=バイシン遺蹟，ツォクト=ホントイジ碑文は，ボルガン・アイマクのダシンチレン=ソム（から東北，車で45分，35 kmの地点）。北緯48度01分，東経104度21分。高度1020～1025 m。岩壁銘文は，北緯48度08分，東経104度19分，高度975 m。ツァガン=バイシンから車で35分，20 km程，GPS測定数値にもとづく地図上の直線距離で約13 kmの場所。

調査日時：1998年8月1～2日。

調査者：松田，村岡，宇野，中村，松川，オチル，ダシバトラフ，ガルサンツェレン。

調査方法・作業内容：（拓本各1セット採取/写真・ビデオ/瓦・レンガ採集/計測）

遺蹟の現況：城郭は，外壁にうすいベージュ色のしっくい塗りが塗り付けられている。城郭の中心となる方形部分は，北西壁面53.6 m，北東壁面30.1 m，南東壁面57.7 m，南西壁面32.2 mの4面によって構成されている。北西壁面の線は，北から40度東へずれている。北東壁面の外側，南角外側にそれぞれ小さな方形の施設が附属しており，南東壁面の東角端には城郭と階段でつながった舞台状の方形の区画がある。

ラドロフのスケッチ（Atlas, pl. LIII-LIX, ただし LIV は誤って XLIV と丁付けされている）と比べると全体として崩壊が進み，南西，南東の外壁面〔南角の高さ6.31 m，東角（Atlas, pl. LV-1の左端）の残存高5 m，上部が崩落，推定の高さ5.54 m，北角（Atlas, pl. LV-2の左端）は崩壊，西角（Atlas, pl. LV-2の右端）は足場なく計測不能〕はまだ残っているが，外壁表面に塗られたしっくいは，半分ほどはげ落ちている。北東壁面は全体の1/3ほどが崩れている（Atlas, pl. LV-1の右端，LV-2の左端）。北西の壁面が最も崩壊が進んでおり，1/3を残すのみである。Atlas, pl. LV-1, 2に見える塔状の施設は最早存在しない。Atlas, pl. LIII-2の黒い方形部分が塔のあった場所と考えられる。

城郭内の平地の高さは，城外の地表面より高くなっている。西から東へ，また北から南へ下る傾斜地に城址があるので，城郭外の地表面との高度差は外壁の場所で異なるが，高度差の大きな南東壁面の外側で5 m近くあった。城郭内平地の周囲を囲う形で城の外縁にレンガの壁が積みあがっている。城郭内の平地から外縁壁の高さは，南角の方形の附属の施設と城壁との接点で2.63 mであった。このレンガ積み部分より下の基礎部分，すなわち，城壁の外の地表面までの土台部分は主に石で積み上げられている。

城郭内には，レンガで積み上げられた壁が囲う部分が4ヶ所あるが，その壁は崩壊が進み，完全に残っているものはなく，崩れたレンガは平地にうずたかく積もっている。そのうち北角側と南側2ヶ所は，広間となっており，どちらも風除けのように広間を囲んで北東面，北西面，南西面の三方に（北角側の広間では南東面の一部も）壁が，囲んで立っており，広間の南東側は平原を見晴らすように開かれている。その広間から南東方向を向くとその先の南東面のレンガ積みの外縁壁にアーチ型の穴が空いている。南広間（Atlas, pl. LIV-1, 2図の一番高い壁）から見える南東面の外縁壁のアーチ型の穴（Atlas, pl. LVII-2）は見通すためだけのもので，外に何の施設もないが，北角側の広間の南東面の外縁壁のアーチ型の穴の外には階段（最上段の幅2.04 m: Atlas, pl. LVI-1はこれを下の舞台側から見上げている）が続いており，階段（この階段の下はくぐり抜けるアーチ型のトンネルの通り道となっている。Atlas, pl. LIX-2はそのアーチ型のトンネルの通り道を横から見たものである）の降りきったところには，上記の方形の舞台（北東面10.9 m，北西面13.9 m，南西面10.74 m）がある。さらにその舞台の南東のはしから階段（最下段の幅2.26 m）が地面まで続いている。

オチルは，上記の広間は，儀式用のオルドを設営するところであろうと説明した。また，ラドロフのアトラスに掲載されている城郭内部のプラン（Atlas, pl. LIII-2）は，全体としては極めて精度の高いものではあるが，南の広間の南東前壁は，南東方向を見通すために本来あってはならないもので，ラドロフの図面（Atlas, pl. LIII）に記入されている南東前壁を表す線は不要であると指摘した。実際に壁らしきものはなかった。ただ，ラドロフの図面からは，その調査当時の壁の高さはわからない。床面に低い壁，敷居程度のものがあり，現在は崩れたレンガの下に埋没しているのかもしれない。

外縁壁の下部には石で積み上げたところもあるが，大半がレンガによって組み立てられている。そのレンガの積み方（Atlas, pl. LVII-2下左図）は，ハルホル=ハン第1城址のレンガの積み方，石の積み方と共通点がある。

城外南東側の地面に石臼（Atlas, pl. LVIII-18, 20）などの農具がいくつか放置されている。Atlas, pl. LIX-4の亀石（碑文を立てるほぞ穴がないので亀趺ではない）は現在は見当たらず，付近の牧民のチョイドル氏によれば，どこかに持ち去られてしまったという。城郭外のほぼ南37 mに窯跡があり，窯跡の内外に，窯壁の破片の固まりが残されている。釉薬がこびりついた破片もあり，中には緑釉がこびりついたものもある。焼成した緑釉瓦もあるが，それらは元代の緑釉瓦とは色が異なる。

ツォクト=ホントイジの碑文は，ツァガン=バイシンから西へ254.44 mのところの小高くなったマウンドの上に立つ。マウンドの形状は，碑文から北へ30 m，南へ46 m，西へ27.5 m，東は，ゲルの方向へ緩やかな下り坂。亀趺はなく，方形の台座の上に立つ。碑石の高さ229 cm，西面の底部の幅93 cm，上部・底部とも厚さ25～26 cm。台座は，東より時計周り

に 167 cm, 107 cm, 144 cm, 107 cm, 高さ 118.5 cm. 碑文周囲に長方形の形に列石 (7.05×7.90 m). 西面が真西より 12 度南に傾いている. 東面にチベット文 46 行, 西面にモンゴル文 23 行, 上部にチベット文 4 行. 丁巳 (1617) 年, Sedkisi ügei čindamani süme を始めとする六寺の建立落成を記念する内容である. ラドロフのアトラスには, 碑文の拓本写真が採録されている (Atlas, pls. LX-1, 2). このラドロフの拓本写真に依拠してフートが研究を行い (Huth 1894), ポズドニエーフは碑文の別の写しからさらに複写をとって研究した (Позднеев 1896, pp. 468-469; Pozdnejev 1971, pp. 309-310). また, 翻訳については, フート, ポズドニエーフのものがある (Huth 1894; Позднеев 1896, pp. 469-472; Pozdnejev 1971, pp. 310-312). その後, 1926 年にはポッペと助手のバンバーエフがこの遺蹟を調査し, Atlas 採録の碑文の不鮮明個所の良好な拓本を採取して研究している (ポッペ 1942, pp. 217-223; バンバーエフ 1941, pp. 71-72). また, 岡田英弘が 1968 年にツォクト=ホンタイジに関する諸史料を整理, 分析した. その際にフートの録文 (Huth 1894) を引用し, またドルジスレン (T. Dorjasuren) の遺蹟・碑文に関する現状と 1930 年と 1949 年の発掘に関する報告の全文も再録している (岡田 1968, pp. 114-115).

崖壁銘文については, 行動記録参照. 碑文・崖壁銘文の内容はポッペの述べる通り. 上記 2 碑文は 17 世紀のもので, モンゴル時代を分担する日本側の研究の対象とはしていない.

#### 遺蹟の景観：行動記録参照.

考察：ツァガン=バイシンには, 1889 年にヤドリツェフ, 1891 年にクレメンツが訪れ, 1933~1934 年にブキニチが少し発掘した. それらをベルレーは次のように要約している. 建物の外見はお堂の形で, 中国の屋根瓦で葺いてあった. 城塞の周囲に建物址がたくさんあり, かなりの人口があった. クレメンツによれば, 城塞は古い建物の上に建てられている. 大きさは南西 119 フィート, 南東 208 フィート, 北東 109 フィート, 南西 203 フィート (これらの数値は我々の簡易なデジタル=メジャーの計測値と若干差異がある) で, 1627 年から 1630 年の間に戦火を受けて荒廃した (Пэрлээ 1961, pp. 121-122).

岡田 1968 が再録する Dorjasuren, *Ruins of Khung Taiji Castle* の, この城塞についての解説の要点は以下の通りである. 1581年に生まれたツォクト=タイジは, 仏教がモンゴルに広まった当時の強力な推進者で, 貴重書を収集し, 読書家で, かつ 1601 年から 17 年間かけて 6 寺院と城を建設した. そのひとつがトラ河沿いのタンソグ谷 (Tansog tal) のハロン=ズルフ (Халуун Зурх) 山脈の南麓にある Sitgeshgui Chindmana 寺である. ツォクト=タイジは, そこに城を有し, 「ツォクト=タイジの白い館」として知られている. 4m の高さの壁があり, 約 6m の高さの塔があり, 40m 以上の長さがある.

1930 年の発掘で, 芸術的な装飾をもつ非常に多数の住居と宗教的建築物廃虚があったことが示され, 龍や花の形のような建築装飾などがあり, 農業を示す石臼, 灌漑溝跡が発見された. 城南 (ママ) で亀趺上のティベット・モンゴル語碑文が専門家によって解説された.

碑文の亀趺と位置は, ラドロフの Atlas も我々の調査も同じで, このドルジスレンの記述は誤解か. 1930 年の発掘というのは, ブキニチによる 1933 年の発掘を指すものであろうか. 岡田は, ドルジスレンの記述から, モンゴルの居城と農園の経営をモンゴルのバイシンの特徴として注目している.

参考文献：Ядринцев 1892b; Huth 1894; Позднеев 1896, pp. 468-469; Pozdnejev 1971, pp. 309-310; バンバーエフ 1941, pp. 71-72; ポッペ 1942, pp. 217-223; 岡田 1968, pp. 114-115.

## ХӨГШИН ТЭЭЛИЙН БАЛГАСАНД ЭРТНИЙ СУДЛАЛЫН МАЛТЛАГА СУДАЛГАА ХИЙСЭН ТУХАЙ

**1. Зорилго.** Монгол-Японы хамтарсан <<Бичээс>> төслийн хайгуулын хэсэг ойрын жилүүдэд эл балгасыг үзэж танилцан тойм зураг үйлдэж судалгааны баримт мэдээллийг илүү тодотгон сэргээж шинэ баримт нотолгоогоор баяжуулан дундад зууны монголын түүхийн энэхүү өвөрмөц дурсгалыг бүрэн хэмжээгээр эрдэм шинжилгээний эргэлтэнд оруулах зорилго тавьж байна.

- 2. Хугацаа.** 1) 1998 оны 8-р сарын 16-18-нд Хар Хоринд  
2) 1998 оны 8-р сарын 18-28-нд Хөгшин Тээлийн балгаст.

**3. Бүрэлдэхүүн.** Дурдсан хугацаанд малтлагын ажлыг ШУА-ийн Түүхийн хүрээлэнгийн эрдэм шинжилгээний ахлах ажилтан, дэд доктор Д.Баяр, эрдэм шинжилгээний ажилтан, дэд доктор Б.Гүнчинсүрэн нар удирдан гүйцэтгэж, тус хайгуулын хэсэг бүрэн бүрэлдэхүүнээрээ оролцож ажиллав.

**4. Дурсгалын судлагдсан байдал.** Өвөрхангай аймгийн Хайрхандулаан сумын нутаг Хан хөгшин ууланд орших Юан гүрний үед холбогдох энэхүү эртний балгасыг анх 1926 онд П.К.Козловын удирдсан Оросын Газар зүйн нийгэмлэгийн Монгол-Түвэдийн шинжилгээний ангийнхан гүймэг судлан тодорхойлж, тэнд байсан бичигт хөшөөний хуулбар болон гэрэл зургийг татаж авч уг бичээсийн орос орчуулгыг нийтэлжээ [1].

Уг хөшөөг 1957 онд эртний судлаач Н.Сэр-Оджав анх байсан газраас нь авчирч 1958 онд музейд тавьсан нь одоо Монголын Үндэсний Түүхийн музейн үзмэрт байна. 1965 онд эрдэмтэн Х.Пэрлээ энэ нутгаар хайгуул судалгаа хийж балгасны тойм зургийг анх үйлдэн нийтлүүлжээ [2]. Тэрчлэн мөн үеэс нангиадач Ц.Хандсүрэн П.К.Козловын нийтлүүлсэн хөшөөний орос орчуулга, Түүхийн хүрээлэнгийн гар бичмэлийн санд байгаа нэр үл мэдэгдэх хүний нангиадаар нь хуулбарлан уншсан эхтэй харьцуулан уншин нийтлүүлсэн байдаг [3].

1988 онд Монгол-зөвлөлтийн түүх соёлын хамтарсан экспедицийн Хангайн анги энэ нутгаар дайран өнгөрөхдөө Хөгшин тээлийн балгасны чулуун барилгын суурийг үзэж, дээврийн нөмрөг болон тосгуур ваарын зарим дээж авчирсан нь одоо Түүхийн хүрээлэнгийн археологийн лабораторид буй [4].

Энэ бүх судалгааны үр дүнд энэхүү Хөгшин тээлийн балгас нь XIII зууны үе буюу Хубилай хааны үед холбогдох, хааны томилон илгээсэн цэрэг сууж байсан балгас болох нь нэгэнт тодорхой болсон ба харин энд гүймэг хайгуул судалгаа хийж байснаас бус эртний судлалын жинхэнэ малтлага хийж тухайн үед, тухайн дурсгалд

холбогдох эд өлгийн биет баримтыг илрүүлэн олж байсан нь үгүй юм. Иймд энэ удаагийн шинжилгээнд, тус балгадны аль нэгэнд бага хэмжээний ч атугай малтлага хийж, тэнд буй олон хонхор чухам юу болохыг урьдчилан тогтоохыг гол болгосон болно.

### *Гүйцэтгэсэн ажил*

*Дурсгалын төрх байдал.* Эртний энэхүү хотын туурь нь Хангайн нурууны баруун урд үзүүр Хан хөгшин хэмээх уулын зүүн биед гурван тусдаа шороо чулуу тавьж барьсан хэрмээс бүрдэнэ.

Судалгааны тэмдэглэлд I хэрэм хэмээх нэрээр бүртгэгдсэн их гал хэрмийг Хан хөгшин уулын зүүн суга Их модны ам хэмээх уужим цэлгэр амны хойт хамрыг дамнуулан барьсан ба энэхүү хэрмийн дотор Цагаан толгой хэмээх, өмнө нь бичигт хөшөө байсан бяцхан гозгор уул оржээ. Уг хэрэм дөрвөлжиндүү хэлбэртэй, ертөнцийн зүг чигийн дагуу байрлалтай, давхар чулуун хүрээтэй бөгөөд хүрээний гадуур хонхор шуудуун хүрээтэй. Үүний баруун хана нэлээд богино тул яг дөрвөлжин бус, өмнөд хана нь ташуу чиглэлтэй ажээ. Баруун ханын урт 580 м, хойт хана 700 м, зүүн хана 770 м, өмнөд хана 700 м байна. Хэрмийн дотор талд, зах хөвөөгөөр нь болон төв хэсгээр олон хонхор нүх байх ажээ.

Энэ хэрмийн зүүн өмнө <<Дарь эхийн сүм>> хэмээх чулуун довжоот барилгын үлдэгдэл, уг хэрмийг барьсан хамрын урд хормойд байна. Энэ барилгаас урагш хоёр зуугаад метр зайд, П.К.Козловын тэмдэглэлд гардаг Их модны амны 2 хүн чулуу байрлаж байсан 2 чулуун хашлагын үлдэгдэл байна. Энэхүү 2 хүн чулуу нь одоо Өвөрхангай аймгийн Орон нутгийн судлах музейд ямар ч хаяг тодорхойлолтгүй байгаа.

Хоёрдугаар хэмээн тодорхойлсон хэрмийг Их модны амны урд хамар дээгүүр дамнуулан барьсан бөгөөд мөн адил ертөнцийн зүгийн дагуу зөв байрлалтай, дөрвөлжин боловч бас л дээрхийн адил нэг хана нь бусдаасаа богино тул өмнөд хана ташуу байдалтай ажээ. Үүний хэмжээ хойт тал 430 м, баруун тал 350 м, өмнө тал 400 м орчим, баруун тал 460 м болно. Энэ нь мөн хоёр давхар хэрэмтэй, хоёр хэрмийн завсраар болон голын зайн хөвөөгөөр олон хонхор нүхтэй. Энэ хэрмийн баруун урд өнөцгийг шүргэн Бага тэргил хэмээх горхи урсана.

Гуравдугаар хэрмийг эдгээрээс урагш орших Бага тэргил буюу Бага модны амыг дамнуулан барьсан байна. Гадуураа чулуун хүрээтэй, үүний дотуур усан сувгийн хонхор ор мэдэгдэх ажээ. Энэ нь бусдаасаа их л өвөрмөц зохион байгуулалттай, ерөнхийдээ гурван давхар хүрээлсэн хэрэмтэй, дөрвөн талдаа

хаалгатай, хаалга тус бүрийг гадна талаар нь тал дугуйрсан гурван давхар далдавчаар хаасан байна. Үүнийг мөн ертөнцийн зүг чигийн дагуу барьсан ба бүх талууд нь ижил тэг дөрвөлжин хэлбэртэй, талуудын урт 700 м орчим юм. Энэ хэрмийн дотор талаар хүрээлсэн хоёр эгнээ олон хонхор нүх байхаас гадна төв дунд нь нэгэн эгнээгээр цувуулж дөрвөлжилсэн хонхрууд, тэрчлэн баруун хэсэгт хөндлөн хэдэн эгнээ цуварсан хонхрууд байх ажээ.

Бид юуны өмнө гурван хэрмийн ерөнхий байрлал, хэлбэр дүрсийг тодорхойлох ажилд орж, тал талд нь гарч тойрон уулын орой, өндөрлөг газраас ажиглан хэлбэр дүрсийн талаар саналаа нэгтгэв. Ингээд хэрмийн дотуур байгаа олон хонхор нүхийг тоолж тойм зурагт тусгах ажил гүйцэтгэв. Энэ ажилд бид гурван хэсэг болсон хүмүүсээ хуваарилаад тус гурван хэрмийн доторхи нүхийг тоолох ажилд орлоо.

Шинжилгээний ангийн япон талын ахлагч Мацуда болон А.Очирын хамт хамгийн өмнө захад буй гуравдугаар хэрмийн доторхи нүхийг тоолох ажлыг гүйцэтгэлээ. Тэр өдөр бороо орж, ажиллах нөхцөл тааруухан байсан тул тун яаруу сандруу, тоймлосон байдлаар ажилласан боловч энд буй хонхрын тоо бүр нарийн бус гэхэд нэлээд ойролцоо үнэн зөв гарсан гэж үзнэ.

Уг хэрмийн доторхи хонхрууд нэлээд зөв сайн зохион байгуулалттайгаар хэрмийн ханын дотор талаар дөрвөн ханыг даган байрласан ба ихэнхдээ 2 эгнээ, зарим хэсгээр 3 эгнээ цувран байрлажээ. Нүх тус бүрийн хэмжээ ойролцоогоор 2-3 м голчтой, тойроод чулуун хүрээтэй байсны ор үлдэгдэл мэдэгдэх ба үүнийг зориуд их хөдөлмөр зарцуулан байгуулсан нь илт мэдэгддэг. Энэхүү захаар тойрон байрласан хонхруудын зэрэгцээ, хэрмийн төв хэсэгт дөрвөлжин хэлбэр үүсгэн байгуулсан нүхнүүд байгаа нь тал тус бүртээ 10-12 хонхортой ажээ. Энэхүү дөрвөлжингийн хананд нийтдээ 40 нүх байх ба үүнийг тойрсон, янз бүрийн байрлалтай 36 нүх, төв дунд нь 4 том хонхор байх ажээ. Төв хэсэгт 80 нүх байна.

Хэрмийн өмнөд ханыг дагаж 72 нүх мэдэгдэх ба үүний дотор талаар хоорондоо нэлээд тасалдсан хоёр дахь (гурван эгнээ ч гэж болох) эгнээний хонхрууд байгаа нь 55 ширхэг мэдэгдэж байна. Өмнөд хэсэгт нийт 127 нүхтэй.

Баруун ханын гадна эгнээнд 59 нүх байна (өмнөд ханынхад орж тоологдсон хамгийн захын нүх энд ороогүй). Дотор талын давхар эгнээнд нь 53 нүх тоологдох ба энд огт эгнээнд ороогүй сондгой байрлалтай нүхнүүд, огт ондоо тэс хөндлөн цуварсан эгнээ хонхрууд ч орно. Баруун хэсэгт нийтдээ 112 нүх байна.

Хойт ханын гадна эгнээнд 54 нүх, хойт хаалганы харалдаа сондгой 2 нүх, дотор эгнээнд тасархай болон тусдаа бөөгнөрсөн 37 нүх мэдэгдэнэ. Хойт хэсэгт нийтдээ 93 нүхтэй.

Зүүн ханын гадна эгнээнд 66, дотор талаар нь янз бүр байрлалтай 81, зүүн хаалганы орчим сондгой 2 хонхор байна. Ингээд зүүн хэсэгт нийтдээ 159 хонхортой.

Ингээд энэхүү хэрмийн дотор нийтдээ 571 хонхор тодорхой мэдэгдэж байна. Цаашид энд бүр нарийвчилсан топографийн зураглал үйлдэж их, бага хонхор болгоны тоог нарийн гаргавал үүнээс ч илүү тоо гарч болох юм.

### *Малтлага*

Гурван хэрмийн доторхи олон хонхор нүх нь чухам юу болох, ямар зохион байгуулалт, зориулалттай болохыг ямар нэгэн хэмжээгээр тодотгох зорилгоор эдгээрийн аль нэгийг малтан шинжих шаардлага гарсан билээ. Ингээд хоёрдугаар хэрмийн өмнө ханыг даган байрлхмн өмнөд эгнээний зүүн талаас гуравдугаар нүхийг малтаж үзэхээр сонгож авлаа.

Энэхүү хэрмийг, <<Дарь эхийн сүм>> хэмээх чулуун довжоот барилгын ор үлдэгдэл байгаа Их модны амны урд хамар дээгүүр дамнуулан барьсан бөгөөд бидний малтахаар сонгон авсан нүх нь хамрын гүвгэрийн урд энгэрт, хойноос урагш налуу тэгш талбайд байх ажээ. Энэ нь дөрвөлжилж орсон чулуун хүрээтэй байсан ба хүрээний зүүн хэсэг нэлээд сайн хадгалагдан үлдсэн, баруун талын чулуу цөөрч анхны хэлбэр төрхөө алдсан байдалтай. Уг хүрээний хэмжээ өргөнөөр 4,5 м, уртаар 7,5 м орчим бөгөөд нэлээд том чулуудыг нэг эгнээгээр цувуулан өрж хийсэн байжээ. Үүний голд уртаар 4 м, өргөнөөр 3 м, гүнээрээ 40 см орчим хонхор байгаа нь нэлээд эдгэрэн битүүрч өвс ногоо ургажээ. Энэхүү нүхний газар зүйн байрлал нь хойт өргөргийн  $46^{\circ}10'40''$ , зүүн уртаргийн  $102^{\circ}12'08''$ , газрын өндөр далайн төвшнөөс дээш 2095 м байна.

Бид чулуун хүрээг оролцуулан 8 х 7 м хэмжээтэй талбайд тус бүр 1 х 1 м хэмжээтэй тор үүсгэн малтлагын шугам татав. Хоног хугацаа бага, бороо орж ажиллах боломжоор хомс байсан тул энэ талбайн зөвхөн нэг талыг нь малтаж үзэх зорилт тавьж, нийт талбайн зүүн хэсгийг гүнзгийлэн малтсан болно.

Хөрсний дээд үеийг малтахад зүлэг ногоо бүхий өнгөн хөрсний дороос нэлэнхүйдээ хүрэн хөрс гарч байлаа. Энэ төвшингийн малтлагаас, зүүн ханын хэсгээс сумны нарийн төмөр зэв, жижиг төмөр алх, хуйлаастай нимгэн төмөр, хавтгай нимгэн гууль бололтой зүйл, хэсэг хэсгээр жижиг ясны хамт олдсон. Тухайн төвшинг гүйцээн малтаж хоёрдугаар үеийн малтлага эхлэхэд уг малтлагын зүүн ханыг дагуулан чулуу эгнүүлэн дэвсэж шал хийсэн мэт байдал харагдав. Гүнзгийлэн

малтахад үнэхээр зүүн ханын орчимд гурван эгнээгээр чулуу дэвсэж шалласан бөгөөд харин төв хэсэг рүүгээ энэ нь алга болж ердийн хүрэн хөрс гарч байлаа. Энэ байдлыг харахад уг нүхний зүүн хэсэгт өндөрлөсөн тавцан мэт догол гаргаж чулуугаар өнгөлсөн ба төв хэсэг рүүгээ чулуу байхгүй гүнзгийрсэн байдалтай байна. Бид чулуу дэвссэн хэсгийг хөндөлгүй орхиж төв хэсэг рүү нь дахин нэг үе гүнзгийлэн малтав. Энэ төвшингийн малтлагаас төмөр зэвний шилбэ, хавтгай цул төмөр, малын чөмөгний яс зэрэг зүйл гарч байна. Малтлагын хойт хана орчмоос 50-иад см гүнд чулуутай холилдсон шаварлаг ул хөрс эхлэн гарсан ба нүнзгийлэх тутам бүхэлдээ ул хөрс гарах байдалтай болсон. Малтлагын баруун тал уг хонхрын төв хэсэгт малын хавирганы яс, хэсэг үйрсэн яс, сумны зэв мэт шөвгөр төмөр зэрэг зүйлс бараг нэг дороос олдлоо. Эдгээр нь хүрэн хөрс, шаварлаг ул хөрс хоёрын уулзвар зааг дээр байв. Энэ төвшинд мөн нүх бүхий хуягны ялтас төмөр олдлоо. Эдгээрээс урагш мөн ижил төвшинд хонхрын төв болон урд ханын орчимд нэлээд талбай эзэлсэн шатсан нүүрс бүхий толбо илрэн гарсан болно. Ингээд нэгэнт ул хөрс илэрсэн тул малтлыг зогсоож дэвсгэр зураг болон зүсэлтийн зургийг үйлдэв.

Малтлагаас гарсан шороогоор нүхээ буцаан дарж анхны байдалд нь оруулахдаа малтлага үйлдсэн тухай бичиг үйлдэж гялгар уутанд хийн хамт булсан болно.

Нөхцөл байдлаас шалтгаалан уг хонхрыг бүтэн талбайгаар нь малтаагүй ч тал хсгийг нь малтаж, уг зүйлийн зохион байгуулалт, учир холбогдлыг нь бага ч атугай тодруулах эд өлгийн баримт, хүний ажиллагааны ул мөрийг илрүүлж оллоо. Малтсан байдлаас ажиглахад уг хонхрын нэлээд хэсэгт 60-70-аад см-ийн гүнд буюу ул хөрсөнд тултал малтаж, харин зүүн ханын орчимд 20-30 см гүнд догол тавцан үлдээж, түүнийгээ 3 эгнээ хавтгай чулуугаар өнгөлсөн байна. Эдгээр чулууны дээрээс болон түүнээс доош төвшинд буюу чулуугүй бусад хэсгээс эд өлгийн олдвор, малын ясны үлдэгдэл гарсан. Хари хүн оршуулсан булшны шинж тэмдэг болох, булшны нүх, авсны мод, хүний яс зэрэг зүйлс гарсангүй. Үүнээс үзэхэд энэ нь булш оршуулга бус харин хүн оршин сууж байсан оромж байрны үлдэгдэл бололтой. Учир эндээс зэр зэвсгийн зүйлс, хөдөлмөрийн багаж зэвсэг, сав суулганы лдэгдэл, малын яс, гал түлсэн ором зэрэг зүйлс илэрсэнд оршино.

#### *Олдворын зүйлс*

Малтлагаар илрэн олдсон цөөн тооны эд өлгийн холбогдолтой олдворыг үүрэг зориулалтаар нь үндсэн 3 хэсэгт хуваан үзэж болох юм.

I. Зэр зэвсгийн зүйлс. Малтлагын явцад янз бүрийн гүнээс сумны 8 ширхэг төмөр зэв олдсон. Эдгээр нь ерөнхийдээ нэлээд ойролцоо хэлбэртэй боловч дотроо

хэлбэр дүрс, үүрэг зориулалтын хувьд ялгаатай байна. Түүнчлэн эдгээрээс гадна сумны зэвтэй хэлбэрийн хувьд төстэй 2 нимгэн төмөр эдлэл олдсоныг яг сумны зэв гэж нотлох боломжгүй тул энд оруулсангүй. Ингээд зэв тус бүрийг тодорхойлон бичвэл:

1-р зэв (H-5, h=-23 см) Их бие хавтгай, урт сурвалжтай, үзүүр шуумгай боловч хошуу богино, хүзүү урт, хануур сумны төрөлд орно. Ерөнхий урт 11,2 см, мөтгийн өргөн 15 мм, сурвалжийн урт 5 см, хүзүү 5,1 см. Ийм зэвийг оросын судлаач Ю.С.Худяков монгол зэвийн хоёрдугаар хавтгай зэвийн бүлэгийн 1-р буюу <<ассиметрично-ромбические>> хэмээх хэлбэрт оруулан үзжээ [5]. Түүнийг тодорхойлж тодруулснаар ийм төрлийн зэв Байгал орчмын нутаг, Өвөр Байгал болон Монгол, Тувад олджээ [6]. Түүнчлэн польш судлаач В.Свентославскийн судалгаагаар ийм зэв Польш, Унгар, Словаки зэрэг монгол цэрэг байлдаж байсан нутгаас ч олддог байна [7].

2-р зэв (H-5, h=-23 см) Дээрхтэй яг ижил хэлбэр хэмжээтэй.

3-р зэв (G-4, h=-20 см) Мөн их бие нь хавтгай, богиновтор сурвалжтай, хэлбэрийн хувьд, мөтгө урт, хүзүү богино, өргөн 1,4 см, ерөнхий урт нь 8,5 см. Сурвалж 2,7 см, мөтгө 3,5 см орчим.

4-р зэв (F-5, h=-27 см) Дээрхтэй төстэй боловч бага зэргийн ялгаатай. Ерөнхий урт 9,4 см, сурвалж 3 см, өргөн 1,4 см мөтгө 4 см, хүзүү 2,6 см орчим.

Энэ нь З.Батсайхан, Г.Мэнэс нарын тодорхойлсноор хошуумал сумны ангилалд орох бололтой [8]. Ю.С.Худяков үүнийг хавтгай зэвийн бүлгийн 14-р буюу <<эллипс>> хэлбэртэй гэж үзсэн ба Байгал орчим, Өвөр Байгал зэрэг хийгээд Монголын Хар Хорумаас олдсон гэж тодорхойлжээ [9].

5-р зэв (G-5, h=-25 см) Үзүүр тал руугаа өргөссөн нарийн бөгөөд шулуун хошуутай, нэлээд урт. Урт хэмжээ 12,5 см, сурвалжийн урт 5,8 см. их бие нь 4 талтай. Цавчуур зэвсийн бүлэгт орно [10]. Ю.С.Худяков үүнийг долдугаар бүлгийн (тэгш өнцөгт) 1-р хэлбэр <<томары>> хэмээх ангилалд оруулж Өвөр Байгалын баруун хэсгээс олдсон гэж үзжээ [11].

6-р зэв (G-3, h=-30 см)-ийг мөн үүнтэй ижил гэж үзэж болох ба гагцхүү сурвалж арай богино байна. Үүний урт 10,2 см, сурвалж нь 2,8 см байна.

Түүнчлэн 7-р (G-4, h=-15 см) 8-р (E-3, h=-45 см) зэвүүд ч үүнтэй ижил бололтой бөгөөд гагцхүү хүзүү элэгдсэн байдлаас болж хэлбэр нь арай өөрчлөгдсөн мэт.

Малтлагаас хуягийн төмөр ялтас бололтой нэгэн төмөрлөг эд олдсон нь нэг тал нь өргөн, гурвалжилсан өнцөгтэй, хавтгай нимгэн, таван өнцөгт хэлбэртэй

бөгөөд гадуураа зэвэнд идэгджээ. Үүний нэг хошууг шулуунаар нь яльгүй нугалсан мэт. Энэхүү нугалаасан дээр нэг нүхтэй. Урт нь 7 см, өргөн тал нь 6,8 см, нарийн тал нь 2,8 см. Хуяг нь бие хамгаалах хэрэгслийн хувьд байлдааны зориулалттай хамгаалалтын хэрэгслэлийн тоонд орно.

II. Хөдөлмөрийн багаж зэвсэг. Энэхүү малтлагаас олдсон нэгэн сонирхолтой олдвор бол төмөр иштэй, жижиг төмөр алх юм. Энэ нь малтлагын G-6 талбайгаас 27 см-ийн гүнээс олдсон. Уг алхны цохилуурын хэсэг нь дөрвөлжин ба оройн хэсэг нь нарийссан, гонзгой дөрвөлжин нүхэнд нарийн 4 өнцөгт бариулыг гагнаж бэхэлжээ. Бариулын урт 6,7 см, өргөн 0,7-0,9 см, зузаан 0,5 см орчим. Цохилуур толгойн хэсгийн өндөр 5,9 см, өргөн нь 0,8 см, зузаан 1,3 см (гол хэсгээрээ). Энэ алхны иш богино, толгой жижиг байгааг үзэхэд том юм хүчтэй цохиход зориулсан бус, харин жижиг зүйлийг хөнгөн давтан цохиж нэлээд уран нарийн ажил хийхэд зориулсан нь мэдэгдэж байна. Үүгээр эндээс олноор олдож буй сумны зэвийг дархлан хийдэг байсан байж болох юм.

III. Сав суулганы зүйлс. Малтлагын G-4 талбайгаас 34 см-ийн гүнд ваар савны нэг бяцхан хэлтэрхий олдсон. 0,5 см зузаантай бөгөөд нэлээд нарийн ширхэгтэй шаварлг эдээр сайн хатууруулан шатааж хийсэн, толигор жигд гадаргуутай, шаргал саарал өнгөтэй, паалант ваар савны хэлтэрхий юм.

Түүнээс гадна G-5 талбайгаас нимгэн зэс буюу гуулин эдийн хэсэг олдсон нь нэг захыг нимгэн эргүүлж эмхэрдсэн байгаа нь сав суулганы амсрыг эргүүлж эмхэрдэн бэхэлсэнтэй төстэй тул ямар нэг ахуйн хэрэглээний жижиг сав суулганы хэсэг байж магадгүй гэж үзлээ. 6 х 5,3 см орчим хэмжээтэй, маш нимгэн, гадуур нь нэг талдаа яльгүй цүлхгэр, сав суулганы бөөр хана мэт байдалтай.

IV. Учир тодорхойгүй төмөр эдлэлүүд. Малтлагын явцад олдсон төмөрлөг эдлэлийн дотор чухам юунд зориулан хэрэглэж байсан нь тодорхой мэдэгдэхгүй зүйлс, түүнчлэн ямар нэг эд зүйлс хийхээр зориулан бэлтгээд дутуу орхисон болов уу гэмээр зүйлс байна. Үүнд:

1. E-4 хэсэгт 60 см-ийн гүнээс яльгүй махийлгаж зассан нимгэн шулуун төмөр, сумны зэв мэт хурц үзүүртэй 2 нимгэн төмрийн хамт олдсон юм. Энэхүү урт нимгэн төмрийн урт (байгаа байдлаараа) 10,7 см, махирыг тэнийлгэсэн байдлаар үзвэл 12 см, өргөн нь 0,7 см, зузаан нь 1-2 мм орчим юм.

Сумны зэв мэт 2 төмрийн нэг нь 5,7 см урт, 15 мм өргөн, нөгөө нь 4 см урт, 1,2 см өргөн (хошуунаасаа эмтэрч унасан тул өргөний хэмжээ бүрэн бус). Эдгээр нь өөр өөр хэлбэртэй. Эхнийх нь хэрэв сум буюу зэв гэж үзэж тайлбарлавал хүзүү урт, мөтгө буюу нарийн хэсэг нь богино, яльгүй махийсан байдалтай. Нөгөө нэг нь хүзүү,

мөтгийын хэмжээ тэнцүү 2,1 см, их бие нь хавтгай, тэгшээрээ байна. Харин нэг (ир) талыг яльгүй нугалсан байдалтай ажээ. Эдгээрийг байлдааны зэв буюу ангийн сум гэхэд арай боломгүй, учир зориулалт нь тодорхойгүй байна.

2. G-5 хэсэгт 19 см-ийн гүнээс нимгэн төмрийг бөөрөнхийлөн хуньж хийсэн учир тодорхойгүй төмөр эдлэл олдсон. Үүний нэг тал нь нөгөө талаасаа өргөн, ерөнхийдөө цүлхэн хэлбэр оруулж ауйлсны задгай тал нь хоорондоо нийлж онгорхой байна. Урт нь 9,2 см, өргөн тал нь 4,4 см, нарийн тал нь 1,6 см, цүлхэн хэсгийн зузаан 1,6 см.

3. E-3 хэсэгт 45 см-ийн гүнээс ямар нэг эдлэл хийхэд зориулан бэлдсэн бололтой зурвас төмрийн хугархай гарлаа. Урт нь 6 см, өргөн нь 1,8-1,9 см, зузаан 0,6-0,7 см, нэг талыг нь хугалж авсан мэт оромтой, нөгөө тал нь ч яг тэгш бус.

V. Малтлагаас бод болон бог малын ясны хэсгүүд нэлээд гарсны ихэнх нь үйрч бутарсан жижиг хэсгүүд болно. Арай том хэсгүүдийг хараахан тодорхойлж амжаагүй байгаа тул энд оруулсангүй.

VI. E-4, E-5 хэсгүүдэд 60 см орчим гүнд нэлээд талбай эзэлсэн нүүрс бүхий шатаагдсан толбон илэрсэн. Эндээс нүүрсний дээжийг түүвэрлэн авсан ба одоогоор ямар нэг шинжилгээ хийгдээгүй байна.

### **ДУГНЭЛТ**

Хөшөөний бичээст өгүүлснээс үзэхэд, Хубилай хааны цэргийн жанжин Хуай мөрний зүүн этгээдийн дэд Юань-шуан, зүүн жигүүрийг хамгаалах шадар цэргийг захирагч сайд Цзямангудай 1278 онд шилдэг хурц шадар цэргийг дагуулан умар зүг байлдахаар гарч Иду ууланд хүрээд тэр газартаа хот суурин байгуулан суужээ. Ингээд уул хот цайздаа нэр өгөх шаардлагатайг зөвлөлдөн хэлэлцээд <<Сүр бадруулагч цэргийн хот>> хэмээн нэрлэсэн ажээ. Тэр баатрыг дагалдан явсан мянгатын даргае Чжан Вэнь, Ачахай нар байсан бөгөөд хааны зарлигаар гавшгай давшигч, туслан захирагч дарга Лю юй бичгийг бичиж хөшөөний бичээсийг сийлжээ [12].

Түүнээс гадна эртний энэ балгасны талаар нутгийн ард түмний дунд сонирхолтой домог хадгалагдан үлдсэнийг 1926 онд П.К.Козлов тэмдэглэн авч нийтлүүлсэн байдаг [13]. Уг домогт өгүүлснээр, эрт урьд цагт энэ нутагт хоёр өөр овгийн хоёр хаан нутаг зэрэгцэн оршин сууж байжээ. Эдний нэг нь Мааньт хэмээх газраас хойшхи газар нутгийг эзэмшин суух ба хонь гаралтай, киргиз буюу монгол хүн байсан гэнэ. Нөгөөгийнх нь нутгийн хойт хязгаар Тээлийн даваа бөгөөд Хан хөгшин уулын өмнөд биед нутагладаг, чонын удам угсааны хүн байсан, нэр нь Чинос

гэдэг, түүнээс Чингэс хааны овог угсаа эхэлсэн гэдэг. Эдний хооронд дайн болж Чинос нь Их модны аманд хориглон шивээлж эсрэг этгээдээ бутцохисон бөгөөд дараа нь чоно овгийнхон хонь овгийнхныг бүгдийг нь барьж идсэн хэмээжээ.

Хөшөөний бичээс хийгээд нутгийн домгийг тухайн үеийн түүхийн бодит үйл явдалтай харьцуулан үзэхэд тун сонин бөгөөд тэрхүү домог яриа нь үнэхээр эрт урьд цагт энэ нутагт болж өнгөрсөн түүхэн бодит үйл явдлыг тусгажээ.

Энэ үе нь Монголын түүхэнд гарсан нэн их үр дагавар бүхий бодит үйл явдалтай тохирч байгаа бөгөөд Хубилай хаан өвөг дээдсээс уламжилсан ёс заншлыг зөрчин өөрийгөө хаанд өргөмжлөн улс орны төвийг өмнө зүг нүүлгэн шилжүүлж нангиад газар төвлөрөөд байсан бөгөөд энэ явдлыг эсэргүүцсэн Хайду, Наян нарын бослого тэмцэл гарч, монголчууд өөр хоорондоо тэмцэлдэн хямарч байсан үе билээ. Хан хөгшин ууланд хот цайз байгуулж, хөшөө босгон үйл явдлаа алдаршуулж асан энэхүү их цэрэг нь уг бослого тэмцлийг даруулахаар Хубилай хаанаас томилон илгээсэн цэрэг болох бөгөөд орон нутгийн домог ярианд энэ үйл явдал үнэн бодитойгоор тусгалаа олсон байна.

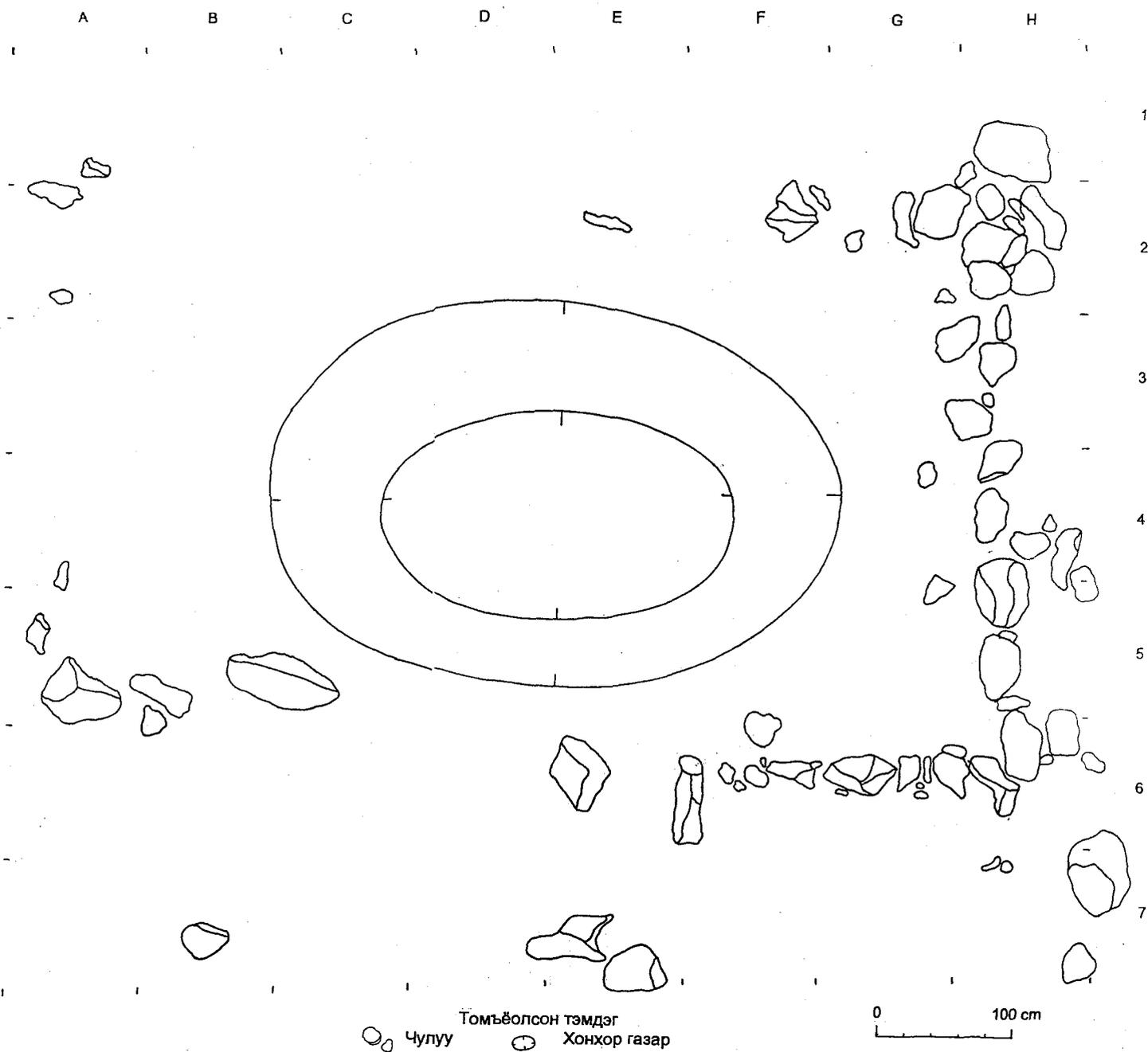
Уг хот цайзын үлдэгдлийг шинжиж үзэхэд олон жилээр байнга оршин сууж байсны шинж тэмдэггүй, түр зуур аян дайны зориулалтаар бэхлэн барьсан шинжтэй байх ажээ. Уг цэргийн ангийн бүрэлдэхүүний талаар тэмдэглэж бичсэн зүйл үгүй боловч уг балгасны шинж байдал, хөшөөний бичээст гарах хүний нэр, хятад үсгээр хөшөө сийлэн хийсэн зэргээс үзэхэд цэргийн бүрэлдэхүүний зонхилох хэсэг нь хятад цэрэг байсан бололтой. Цайз хэрмийн доторхи олон хонхор нүх нь хятад цэрэг түр хугацаагаар оршин суух нүхэн гэр байсны үлдэгдэл гэж үзмээр юм. Харин монгол цэрэг бол гэр майханд суух учир ямар нэгэн ул мөр үлдэх ёсгүй. Хэрэм цайзны хана дагуулан олон нүхэн гэр байгуулж хятад цэрэг суугаад төвийн хоосон их зайгаар монгол цэрэг гэр майхан барин сууж байсан байж болох юм.

Бидний малтан судалсан нэгэн хонхрын малтлагаас цэрэг дайны зориулалттай байлдааны төмөр зэв, тэдгээрийг үйлдвэрлэн хийх багаж зэвсгийн зүйлс, хүн сууж, гал түлэн хоол хүнсээ болгож байсны ор мөр зэрг зүйлс гарч байгаа нь цэрэг эрсийн түр хоргодон орших оромж сууц байсныг гэрчилж байна. Эндээс олдож буй төмөр зэвүүд нь тухайн үед нүүдэлчин монгол цэрэг эрсийн зэвсэглэлд нийтлэг байдаг төрөл хэлбэрийн зүйлс болно.

## НОМ ЗҮЙ

1. П.К.Козлов. Краткий отчет о Монголо-Тибетской экспедиции. Государственного Русского Географического Общества 1923-1926 гг. //Северная Монголия. III. Ленинград, 1928, стр. 27-29
2. Х.Пэрлээ. 1965 оны археологийн шинжилгээний олзноос. //Эрдэм шинжилгээний өгүүллүүд. SH. t. VI, f. 10, тал 100-106
3. Ц.Хандсүрэн. Хөгшин тээлийн хөшөөний бичгийг унших нь. //Эрдэм шинжилгээний өгүүллүүд. SH. t. VI, f. 11, тал 107-116
4. В.Е.Войтов., Д.Баяр. Отчет Хангайского отряда СМИКЭ за 1986 г. ШУА-ийн Түүхийн хүрээлэнгийн Гар бичмэлийн сан
5. Ю.С.Худяков. Вооружение Центральноазиатских кочевников в эпоху раннего и развитого Средневековья. Новосибирск, 1991, стр. 104-105
6. Там же. стр. 118
7. Witold Swietoslowski. Archeologiczne slady najazdow tatarskich na Europe srodkowa w XIII w. Lodz, 1997, pp. 36-37, 40-41, 46-47, 48-49, 60-61
8. З.Батсайхан., Г.Мэнэс. Харвуулын сумны тухай нэгэн тэмдэглэл. //Археологийн судлал. SA. t. XV, f. 9, тал 93
9. Ю.С.Худяков. Дурдсан зохиол. тал 113
10. Базарсүрэн. Их Монгол улсын цэргийн харвуул зэвсэг (XII-XIII зуун). Дэд докторын зэрэг горилсон диссертаци.
11. Ю.С.Худяков. Дурдсан зохиол. тал 116
12. П.К.Козлов. Дурдсан зохиол. тал 28-29
13. Мөн тэнд. тал 28-29

1-р зураг. Малтсан хонхорын гадаад байдал.  
 Өвөрхангай, Хайрхандулаан, Хөгшин Тээлийн  
 балгас. 2-р хэрэм, 3-р хонхор

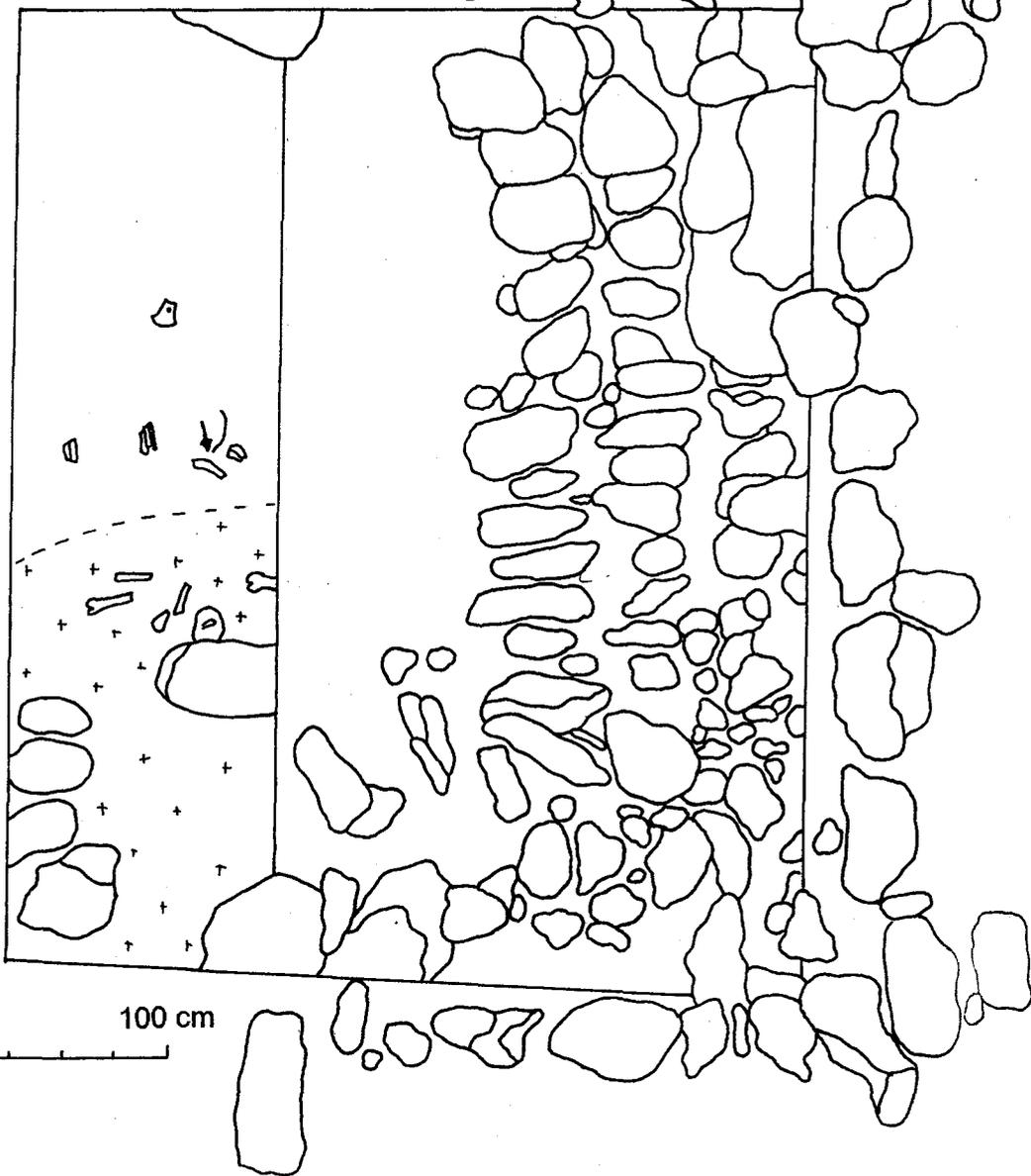
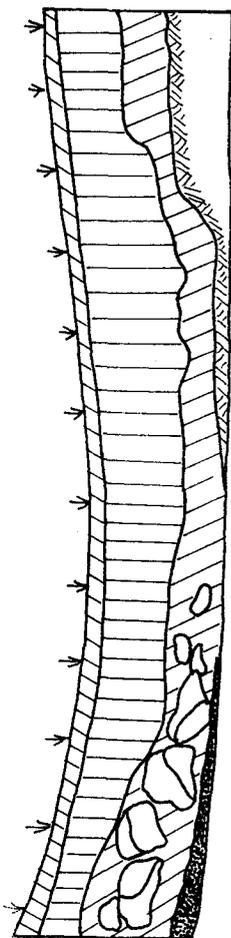
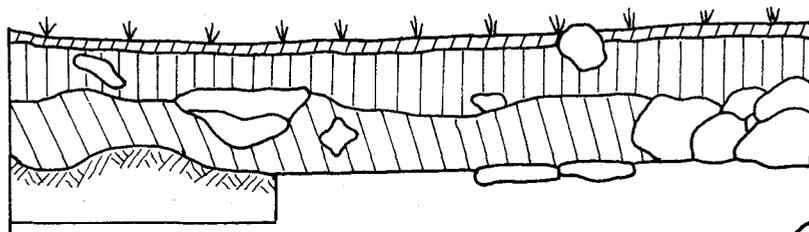


2-р зураг. Малтлагын 1-р түвшин. Гүн 15-34 см.



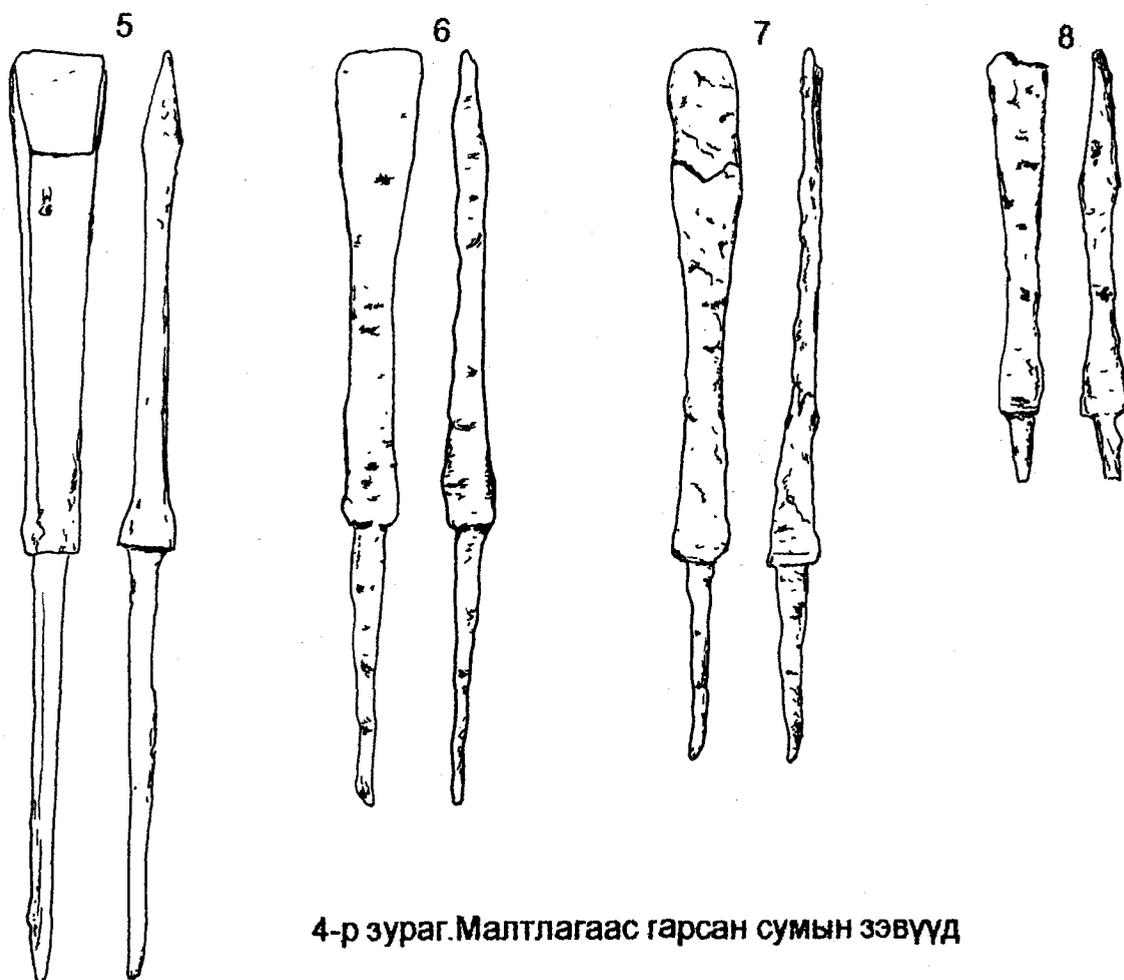
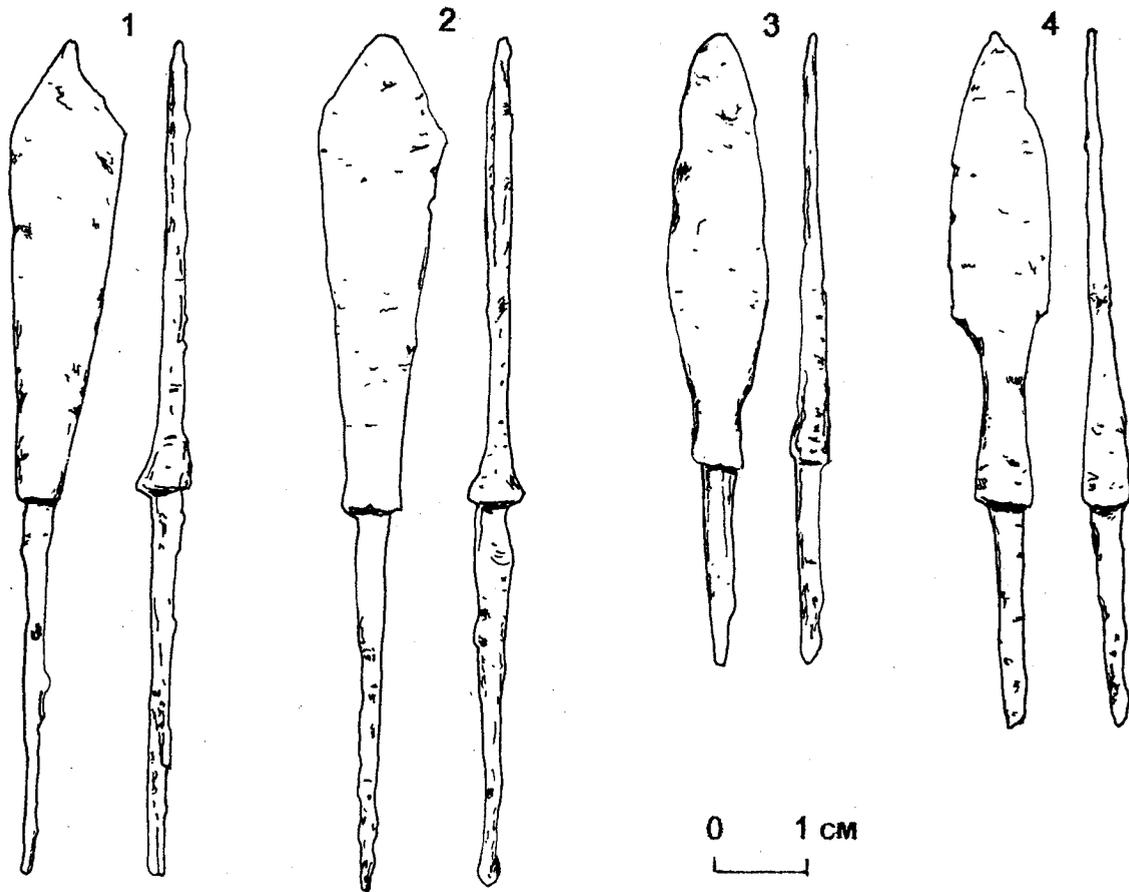
- Томъёолсон тэмдэг
- Чулуу
  - Малтлагын хил
  - ← Сумын зэв
  - ▨ Төмрийн өөдөс
  - △ Ваар савны хэл
  - ◇ Яс
  - └ Төмөр алх

3-р зураг. Малтлагын 2-р түвшин ба хойт, баруун ханын зүсэлт. Гүн 60-78 см

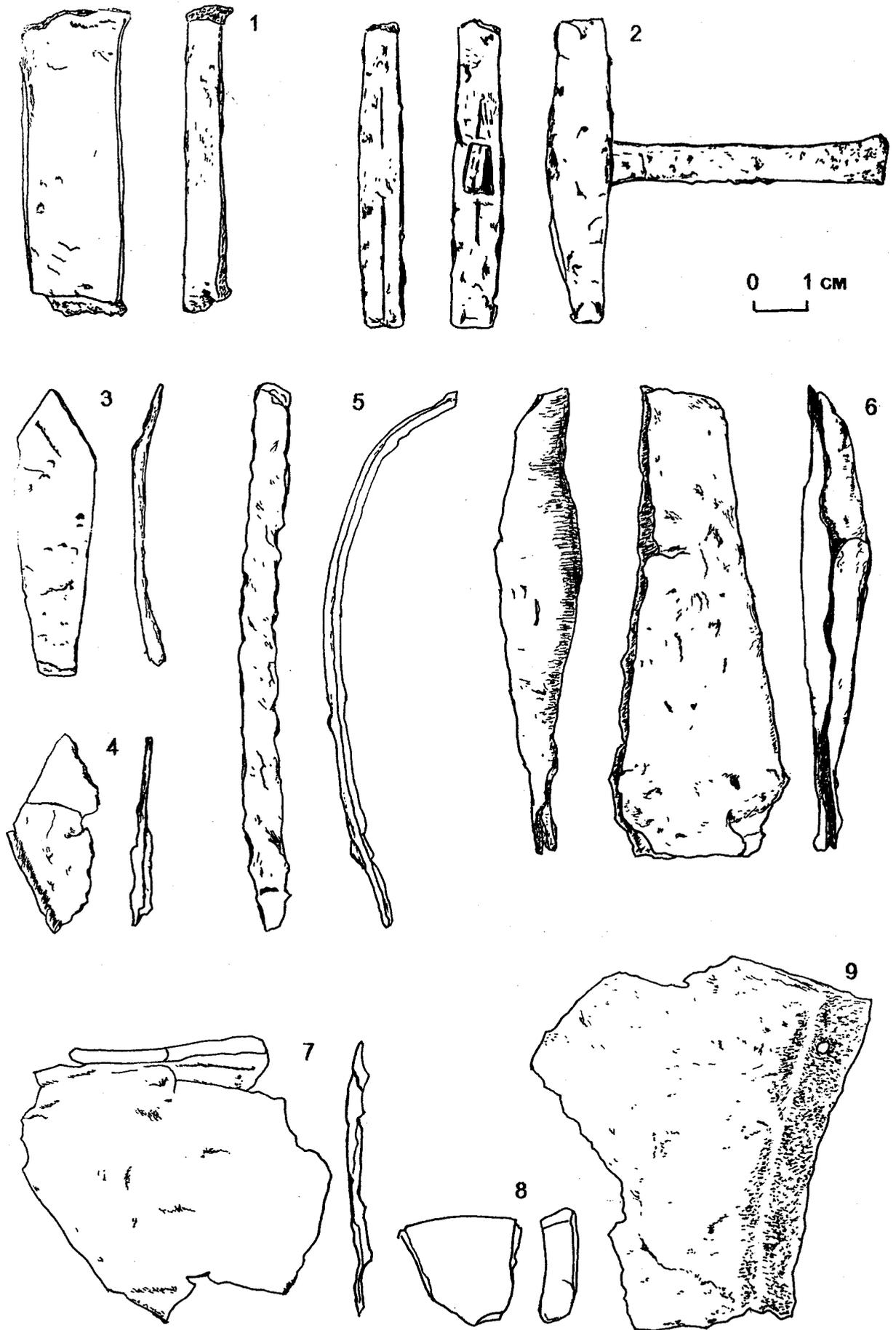


0 100 cm

- Томъёолсон тэмдэг
- |              |               |                    |
|--------------|---------------|--------------------|
| Өнгөн хөрс   | Нүүрсэн үе    | Үйрсэн яс          |
| Хүрэн хөрс   | Нүүрсэн толбо | Хуягийн ялтас      |
| Хайрган хөрс | Яс            | Сумын зэв ба төмөр |
| Ул хөрс      |               |                    |



4-р зураг. Малтлагаас гарсан сумын зэвүүд



5-р зураг. Малтлагын бусад олдвор  
 1, 2, 3, 4, 5, 6, 9 - төмөр  
 7 - ваар эдлэл 8 - гууль

## 図版一覧 List of Plates

- Plate 1a** ブグト碑文の計測図 (片山・吉田) Bugut Inscription with Measurements (KATAYAMA & YOSHIDA)
- Plate 1b** ブグト碑文の亀趺 (片山・吉田) Tortoise-Shaped Socle of Bugut Inscription (KATAYAMA & YOSHIDA)
- Plate 1c** ブグト碑文側面図 (БАЯР) Side View of Bugut Inscription (БАЯР)
- Plate 1d** ブグト碑文側面図 (БАЯР) Side View of Bugut Inscription (БАЯР)
- Plate 1e** ブグト碑文正面図 (БАЯР) Front View of Bugut Inscription (БАЯР)
- Plate 1f** ブグト碑文背面図 (БАЯР) Back View of Bugut Inscription (БАЯР)
- Plate 2a** オンギ遺蹟平面図 (大澤) Plan of the Site of Ongi (ŌSAWA)
- Plate 2b** オンギ遺蹟の石槨・亀趺 (大澤) Stone Coffin and Tortoise-Shaped Socle, Ongi (ŌSAWA)
- Plate 2c** オンギ遺蹟の石人・石羊 (大澤) Stone Statues of Men and Sheep, Ongi (ŌSAWA)
- Plate 2d** オンギ遺蹟バルバル計測値表 (大澤) Measurements of Balbals Belonging to the Site of Ongi (ŌSAWA)
- Plate 3a** オンギ碑文の断片 (片山) Fragments of Ongi Inscription (KATAYAMA)
- Plate 3b** オンギ碑文筆写コピー (大澤) Eye-copy of Ongi Epitaph (ŌSAWA)
- Plate 3c** オンギ碑文筆写コピー (大澤) Eye-copy of Ongi Epitaph (ŌSAWA)
- Plate 4a** イフ=ハヌイ=ノール遺蹟平面図 (大澤) Plan of the Site of Ikh-Khanui-Nor (ŌSAWA)
- Plate 4b** イフ=ハヌイ=ノール遺蹟推定復元図 (大澤) Plan of the Site of Ikh-Khanui-Nor as Reconstructed (ŌSAWA)
- Plate 4c** イフ=ハヌイ=ノール遺蹟・遺物 (大澤) Archaeological Remains, Ikh-Khanui-Nor (ŌSAWA)
- Plate 5a** シヴェート=オラーン遺蹟平面図 (БАЯР) Plan of the Site of Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5b** シヴェート=オラーン台石 (БАЯР) Base Stone of an Inscription, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5c** シヴェート=オラーン遺蹟石羊 (БАЯР) Stone Statues of Sheep, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5d** シヴェート=オラーン遺蹟石羊 (БАЯР) Stone Statues of Sheep, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5e** シヴェート=オラーン遺蹟石羊 (БАЯР) Stone Statues of Sheep, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5f** シヴェート=オラーン遺蹟石獅子 (БАЯР) Stone Statues of Lions, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5g** シヴェート=オラーン遺蹟石獅子 (БАЯР) Stone Statue of a Lion, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5h** シヴェート=オラーン遺蹟石人 (БАЯР) Stone Statue of a Man, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5i** シヴェート=オラーン遺蹟石人 (БАЯР) Stone Statue of a Man, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5j** シヴェート=オラーン遺蹟石人 (БАЯР) Stone Statues of Men, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5k** シヴェート=オラーン遺蹟石人 (БАЯР) Stone Statues of Men, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 5l** シヴェート=オラーン遺蹟石人 (БАЯР) Stone Statues of Men, Shiveet-Ulaan (БАЯР)
- Plate 6** カラ=バルガスン第二碑文 (大澤) Qara Balgasun Inscription II (ŌSAWA)
- Plate 7a** ムハル遺蹟の亀趺 (大澤) Tortoise-Shaped Socle, Mukhar (ŌSAWA)
- Plate 7b** ムハル遺蹟の亀趺のタムガ (大澤) Tamghas on the Tortoise-Shaped Socle, Mukhar (ŌSAWA)
- Plate 7c** ムハル遺蹟の亀趺のタムガ乾拓 (吉田) Rubbings of the Tamghas on the Tortoise-Shaped Socle, Mukhar (YOSHIDA)
- Plate 7d** ムハル遺蹟平面図 (Войтов 1996 より引用) Plan of the Site of Mukhar (Войтов 1996, p. 41)
- Plate 8** キョル=テギン亀趺銘文 (片山) Tortoise-Shaped Socle of Köl-Tegin Inscription (KATAYAMA)
- Plate 9a** イフ=ホショートゥ遺蹟平面図 (大澤) Plan of the Site of Ikh-Khoshoot (ŌSAWA)
- Plate 9b** イフ=ホショートゥ遺蹟の石人 (大澤) Stone Statues of Men, Ikh-Khoshoot (ŌSAWA)
- Plate 9c** イフ=ホショートゥ遺蹟の石人 (大澤) Stone Statues of Men, Ikh-Khoshoot (ŌSAWA)
- Plate 9d** イフ=ホショートゥ遺蹟の石獅子断片 (大澤) Fragments of Stone Statues of Lions, Ikh-Khoshoot (ŌSAWA)
- Plate 9e** イフ=ホショートゥ遺蹟の石羊・円錐形石片 (大澤)  
Stone Statues of Sheep and Unidentified Cone-Shaped Stone, Ikh-Khoshoot (ŌSAWA)
- Plate 9f** イフ=ホショートゥ遺蹟の石槨断片 (大澤) Fragment of the Stone Coffin, Ikh-Khoshoot (ŌSAWA)
- Plate 9g** イフ=ホショートゥ遺蹟のマウンド中央より採取した瓦・磚 (大澤)  
Tiles from the Mound, Ikh-Khoshoot (ŌSAWA)
- Plate 10a** テス碑文計測図 (大澤) Measurements of Tes Inscription (ŌSAWA)
- Plate 10b** テス碑文筆写コピー (大澤) Eye-copy of Tes Epitaph (ŌSAWA)
- Plate 11a** シネウス遺蹟平面図 (MSSP, p. 59 の図面に増補)  
Plan of the Site of Šine-Usu (MSSP, p. 59, reproduced with additional information)
- Plate 11b** シネウス碑文と亀趺 (森安・片山)  
Šine-Usu Inscription and the Tortoise-Shaped Socle (MORIYASU & KATAYAMA)
- Plate 11c** シネウス碑文の亀趺 (БАЯР) Tortoise-Shaped Socle of Šine-Usu Inscription (БАЯР)
- Plate 11d** シネウス碑文の計測図 (森安・片山) Measurements of Šine-Usu Inscription (MORIYASU & KATAYAMA)
- Plate 11e** シネウス碑文の行の進み方 (森安) Line Arrangement on the Four Faces of Šine-Usu Inscription (MORIYASU)
- Plate 12a** バイバリク遺蹟全体平面図 (白石) Map Showing Bay-Baliq Area (SHIRAIŠHI)
- Plate 12b** バイバリク遺蹟第一城址平面図 (白石) Plan of the Fortress No. 1, Bay-Baliq (SHIRAIŠHI)
- Plate 12c** バイバリク遺蹟第一城址平面図 (林) Plan of the Fortress No.1, Bay-Baliq (HAYASHI)
- Plate 12d** バイバリク遺蹟の石獅子 (БАЯР) Stone Statue of a Lion, Bay-Baliq (БАЯР)
- Plate 12e** バイバリク遺蹟の石獅子 (БАЯР) Stone Statues of Lions, Bay-Baliq (БАЯР)

- Plate 13a** カラ=バルガス宮城遺蹟 Plan of the Palace of Qara-Balgasun  
**Plate 13b** カラ=バルガス宮城の平面図 (Atlas, pl. XXVII-2 に増補)  
 Plan of the Palace of Qara-Balgasun (Atlas, pl. XXVII-2, reproduced with additional information)
- Plate 14a** カラ=バルガス碑文計測値及び模式図 Measurements of the Qara-Balgasun Inscription as Reconstructed  
**Plate 14b** カラ=バルガス碑文断片残存状況, 漢文・ソグド面  
 Placement of the Survived Fragments of Sino-Sogdian Face, Qara-Balgasun Inscription
- Plate 14c** カラ=バルガス碑文断片残存状況, ルーン文字面  
 Placement of the Survived Fragments of Runic Face, Qara-Balgasun Inscription
- Plate 14d** カラ=バルガス碑文, Atlas 拓本 漢文・ソグド面  
 Placement of Rubbings of Chinese and Sogdian Face of Qara-Balgasun Inscription (Published in the *Atlas*)
- Plate 14e** カラ=バルガス碑文, Atlas 拓本 ルーン文字面  
 Placement of Rubbings of Runic Face of Qara-Balgasun Inscription (Published in the *Atlas*)
- Plate 14f** カラ=バルガス碑文, ピチエース拓本 漢文・ソグド面  
 Placement of Rubbings of Chinese and Sogdian Face of Qara-Balgasun Inscription (by Bichees-Expeditions)
- Plate 14g** カラ=バルガス碑文, ピチエース拓本 ルーン文字面  
 Placement of Rubbings of Runic Face of Qara-Balgasun Inscription (by Bichees-Expeditions)
- Plate 14h** カラ=バルガス碑文, 京大・立命拓本 漢文・ソグド面  
 Placement of Rubbings of Chinese and Sogdian Face of Qara-Balgasun Inscription (Housed at KYOTO UNIVERSITY and RITSUMEIKAN UNIVERSITY)
- Plate 14i** カラ=バルガス碑文, 京大・立命拓本 ルーン文字面  
 Placement of Rubbings of Runic Face of Qara-Balgasun Inscription (Housed at KYOTO UNIVERSITY and RITSUMEIKAN UNIVERSITY)
- Plate 14j** カラ=バルガス碑文, 北京図書館拓本 漢文・ソグド面  
 Placement of Rubbings of Chinese and Sogdian Face of Qara-Balgasun Inscription (Housed at BEIJING NATIONAL LIBRARY)
- Plate 14k** カラ=バルガス碑文, 北京図書館拓本 ルーン文字面  
 Placement of Rubbings of Runic Face of Qara-Balgasun Inscription (Housed at BEIJING NATIONAL LIBRARY)
- Plate 14l** カラ=バルガス碑文, 碑額 (片山・吉田) Frontispiece of Qara-Balgasun Inscription (KATAYAMA & YOSHIDA)
- Plate 14m** カラ=バルガス碑文, 碑頭計測値及び模式図 (片山・吉田)  
 Measurements of the Dragon-Shaped Head of Qara-Balgasun Inscription as Reconstructed (KATAYAMA & YOSHIDA)
- Plate 14n** カラ=バルガス碑文, 碑頭ソケット部 (片山・吉田)  
 Mortise from the Dragon-Shaped Head of Qara-Balgasun Inscription (KATAYAMA & YOSHIDA)
- Plate 14o** カラ=バルガス碑文, 断片復元図 (片山・吉田)  
 Joining Two Fragments of Qara-Balgasun Inscription (KATAYAMA & YOSHIDA)
- Plate 14p** カラ=バルガス碑文・碑頭 (БАЯР) Dragon-Shaped Head of Qara-Balgasun Inscription (БАЯР)
- Plate 14q** カラ=バルガス碑文礎石断片 (片山)  
 Fragments of the Tortoise-Shaped Socle of Qara-Balgasun Inscription (KATAYAMA)
- Plate 15a** セブレイ碑文 (吉田・片山) Sevrey Inscription (YOSHIDA & KATAYAMA)
- Plate 15b** セブレイ碑文の行の進み方 (吉田・片山) Line Arrangement of Sevrey Inscription (YOSHIDA & KATAYAMA)
- Plate 16** ホシヨー=ツァイダム 4 遺蹟のバルバル列 (森安・松川)  
 Queues of Balbals Belonging to the Four Sites of Khoshoo-Tsaidam (MORIYASU & MATSUKAWA)
- Plate 17** 釈迦院遺蹟・釈迦院碑記 Site of Sakya-Temple and the Inscription in Honor of Möngke Qayan
- Plate 18a** 宣威軍第 1 城址平面図 (松井) Plan of the Fortress No. 1 of Xuanwei Commandery (MATSUI)
- Plate 18b** 宣威軍第 2 城址平面図 (松井) Plan of the Fortress No. 2 of Xuanwei Commandery (MATSUI)
- Plate 18c** 宣威軍第 3 城址平面図 (松井) Plan of the Fortress No. 3 of Xuanwei Commandery (MATSUI)
- Plate 18d** 宣威軍第 3 城址平面図 (БАЯР) Plan of the Fortress No. 3 of Xuanwei Commandery (БАЯР)
- Plate 18e** 宣威軍碑 (村岡) Inscription on the Establishment of Xuanwei Commandery (MURAOKA)
- Plate 19a** ハルホル=ハン城址全体平面図 Map Showing Kharkhul-Khan Area
- Plate 19b** ハルホル=ハン城址, 第 1 ~ 第 9 遺蹟平面図 Plan of the Fortresses Nos. 1-9 of Kharkhul-Khan
- Plate 19c** ハルホル=ハン城址, 遺蹟 A ~ C 平面図 Plan of the Fortresses A-C of Kharkhul-Khan
- Plate 20a** シャーザン=ホト遺蹟全体平面図 (白石) Map Showing Shaazan-Khot Area (SHIRAIISHI)
- Plate 20b** シャーザン=ホト遺蹟平面図 Plan of the Site of Shaazan-Khot

Plate 1a ブグト碑文の計測図 (片山・吉田)

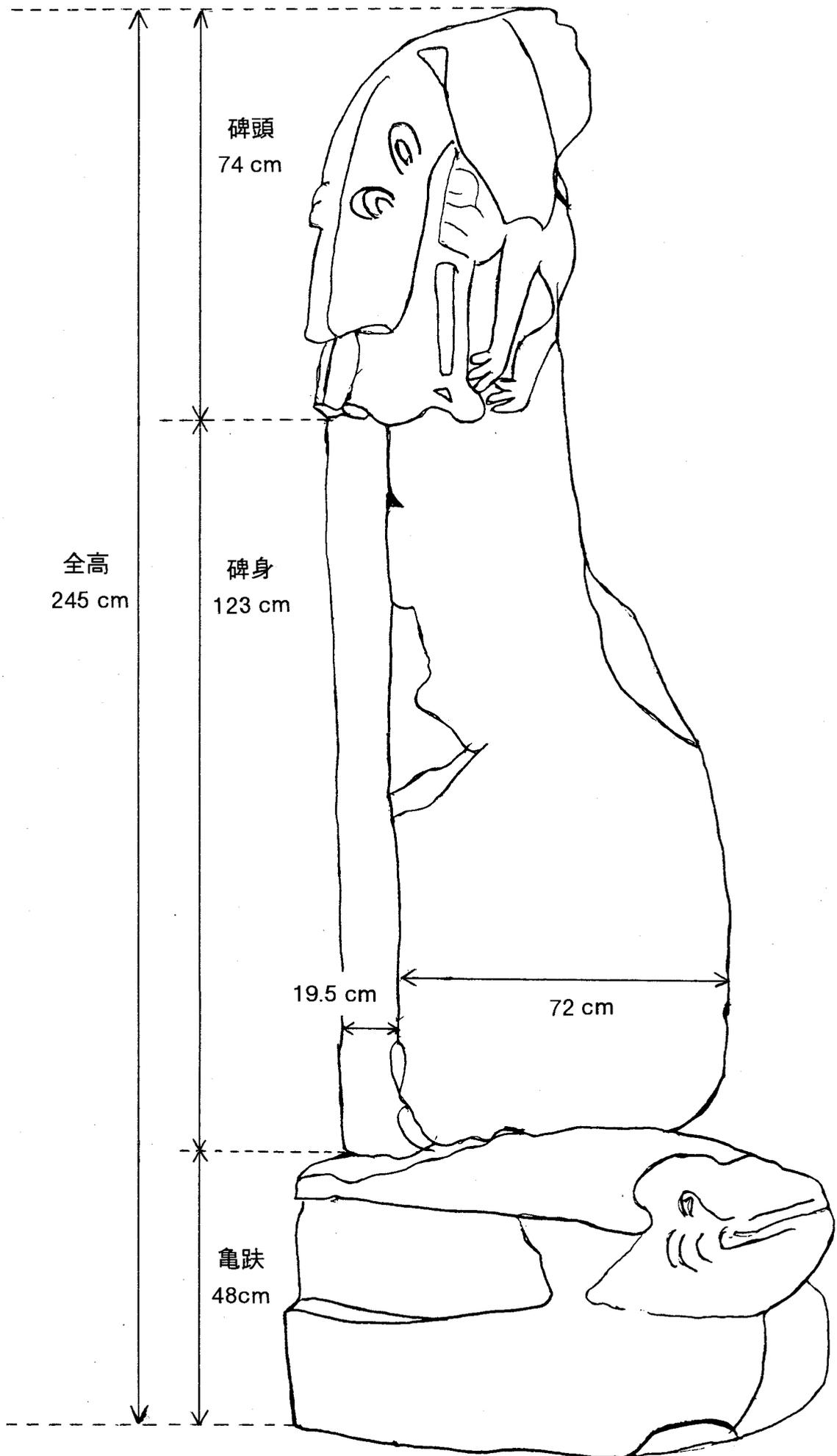


Plate 1b ブグト碑文の亀跌 (片山・吉田)

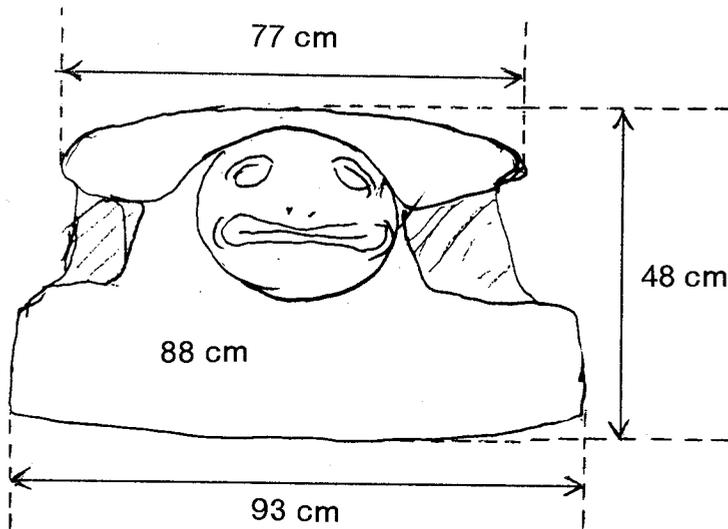
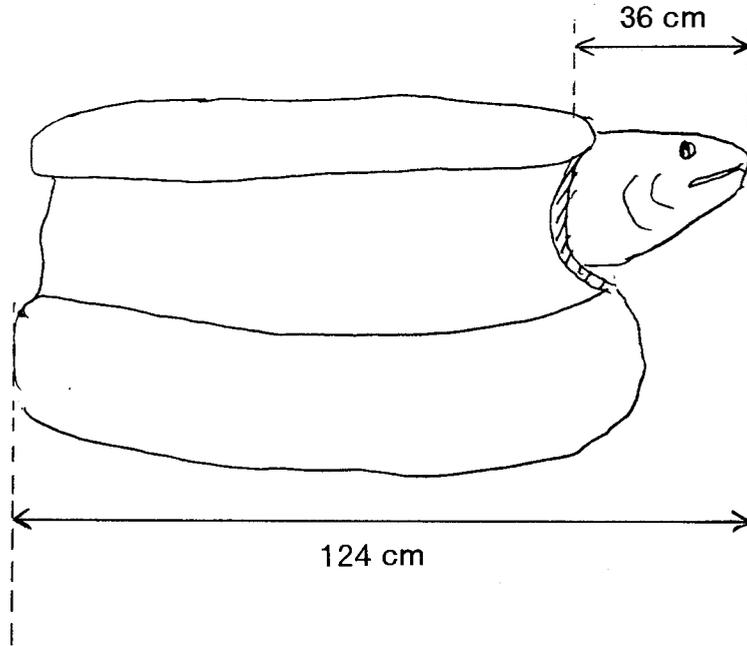


Plate 1c ブグト碑文側面図 (Баяр)

0 30 cm

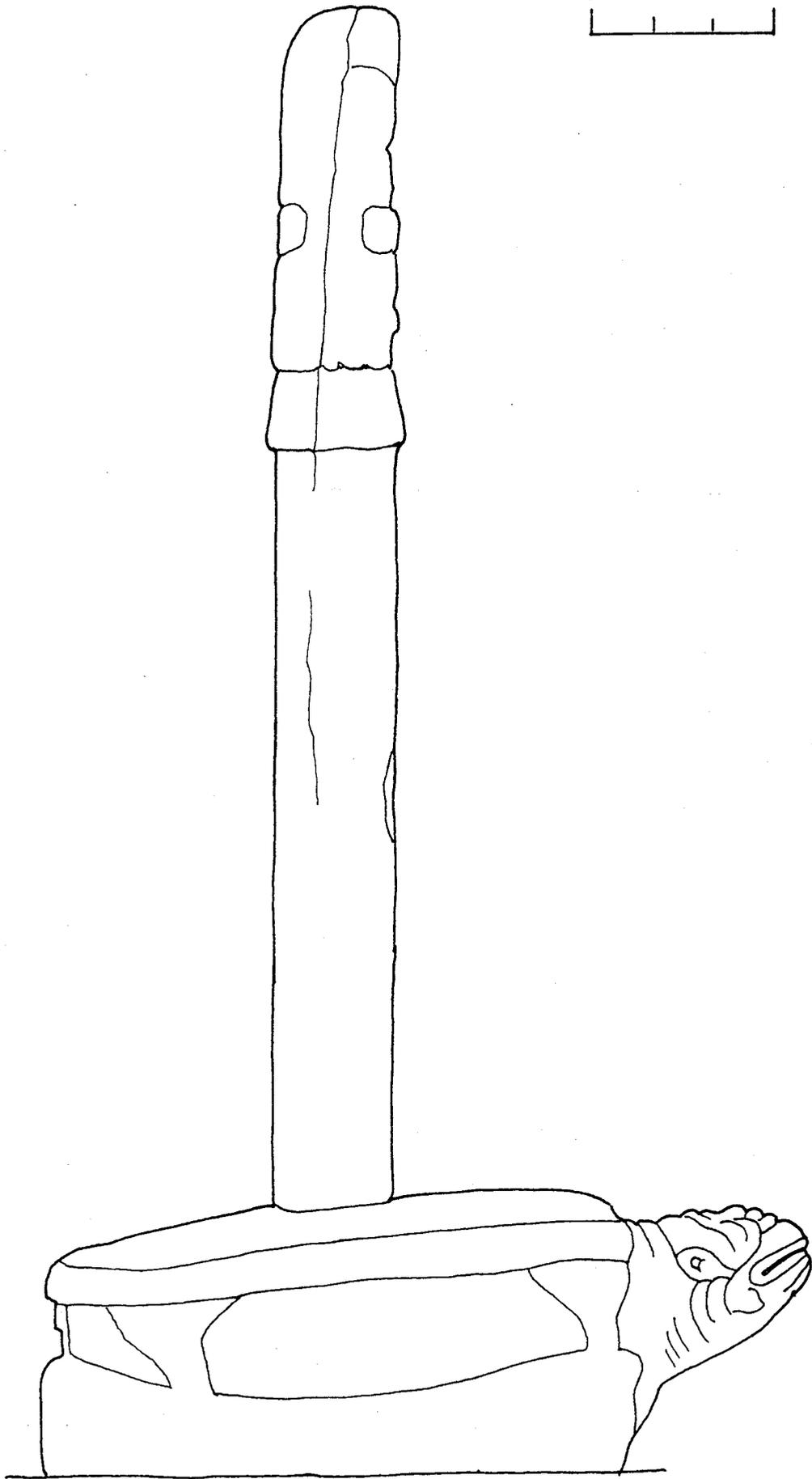


Plate 1d ブグト碑文側面図 (Баяр)

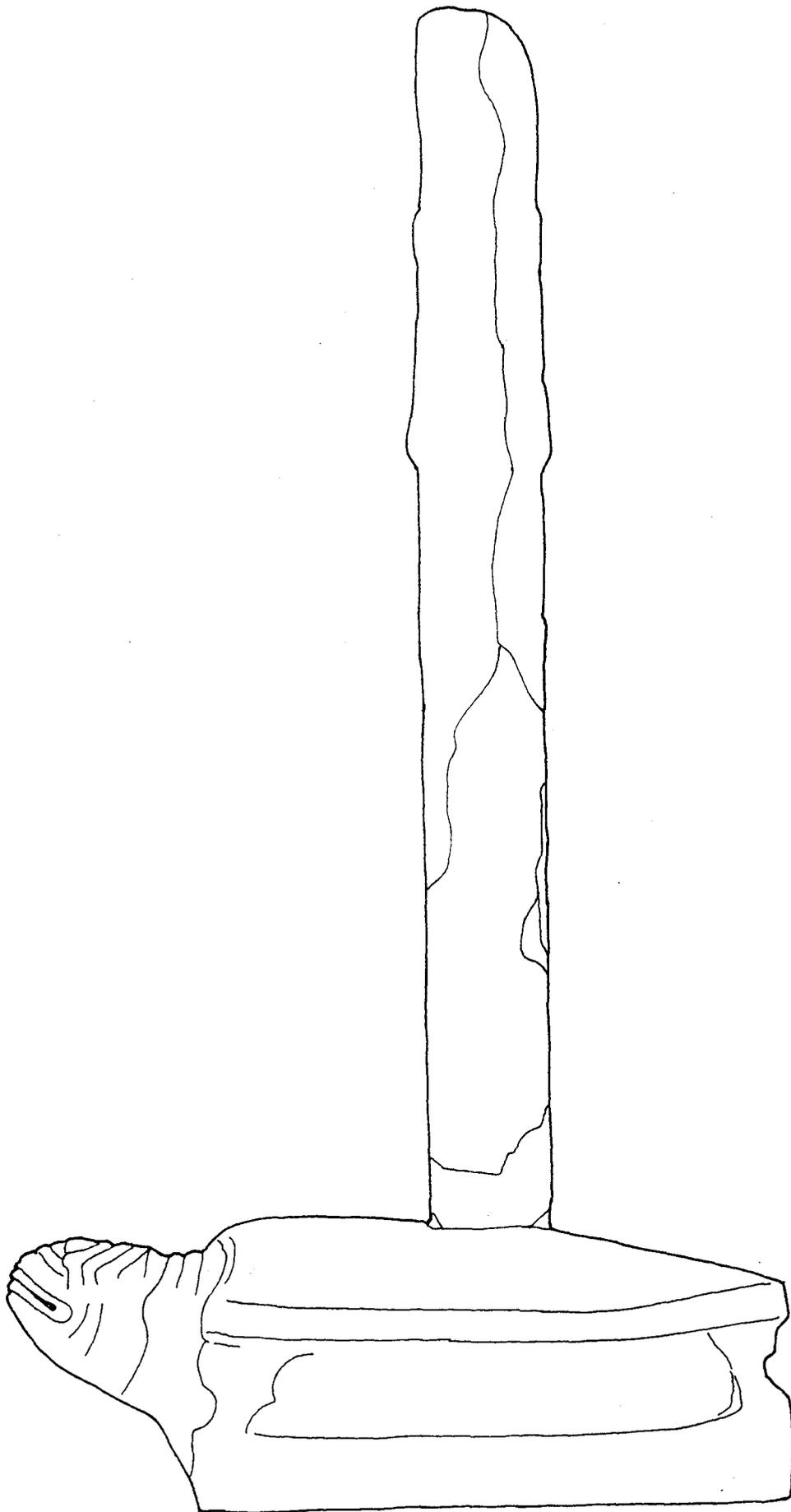


Plate 1e ブグト碑文正面図 (Баяр)

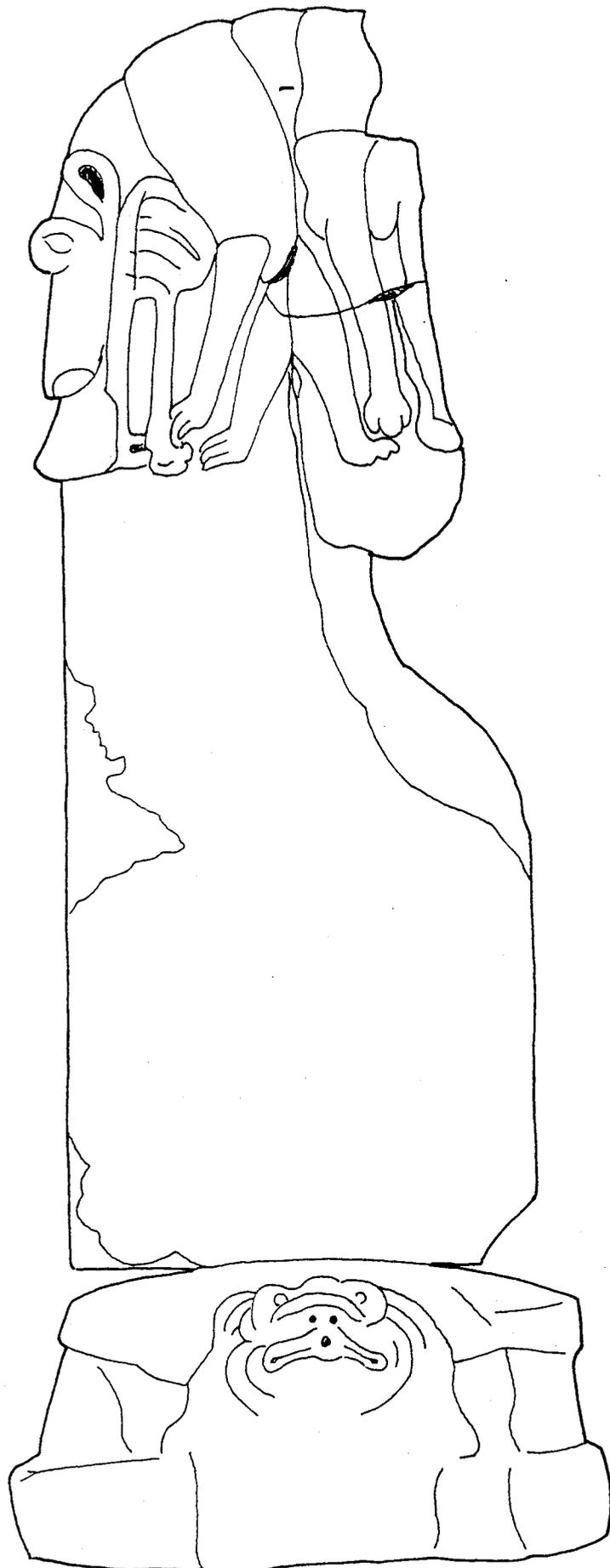


Plate 1f ブグト碑文背面図 (Баяр)

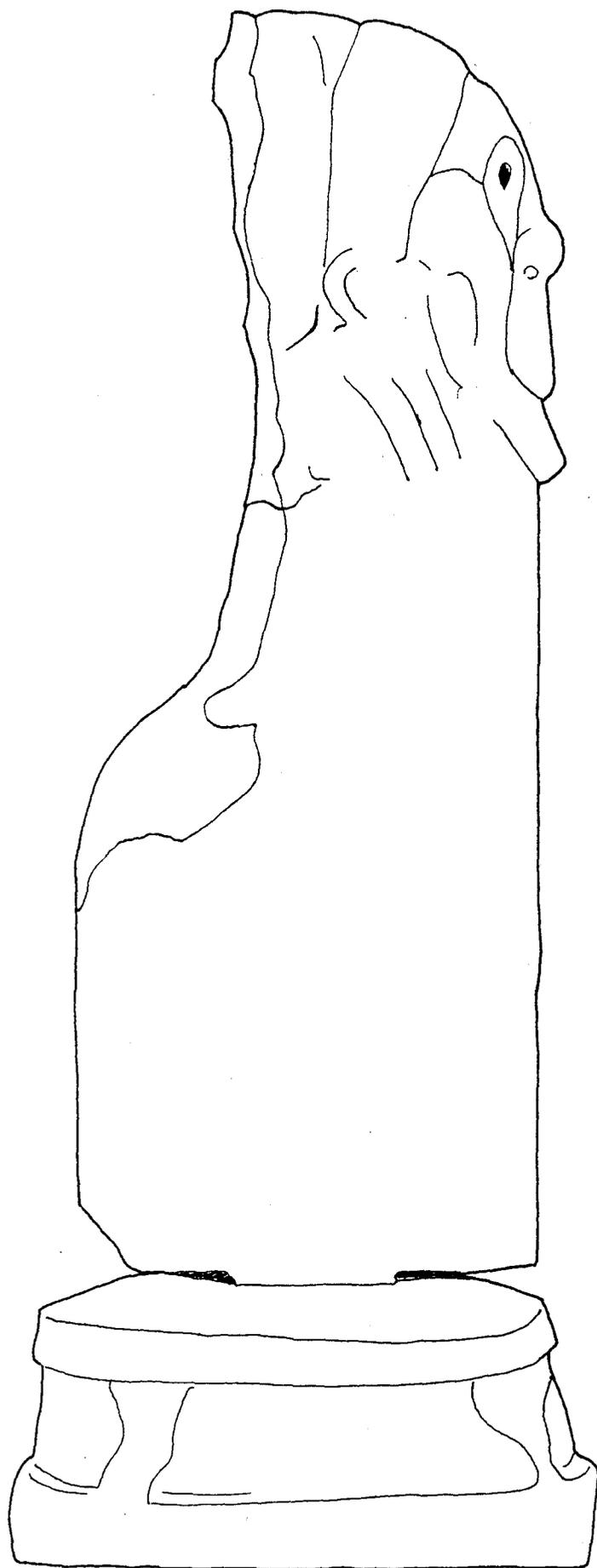


Plate 2a オング遺蹟平面図 (大澤)

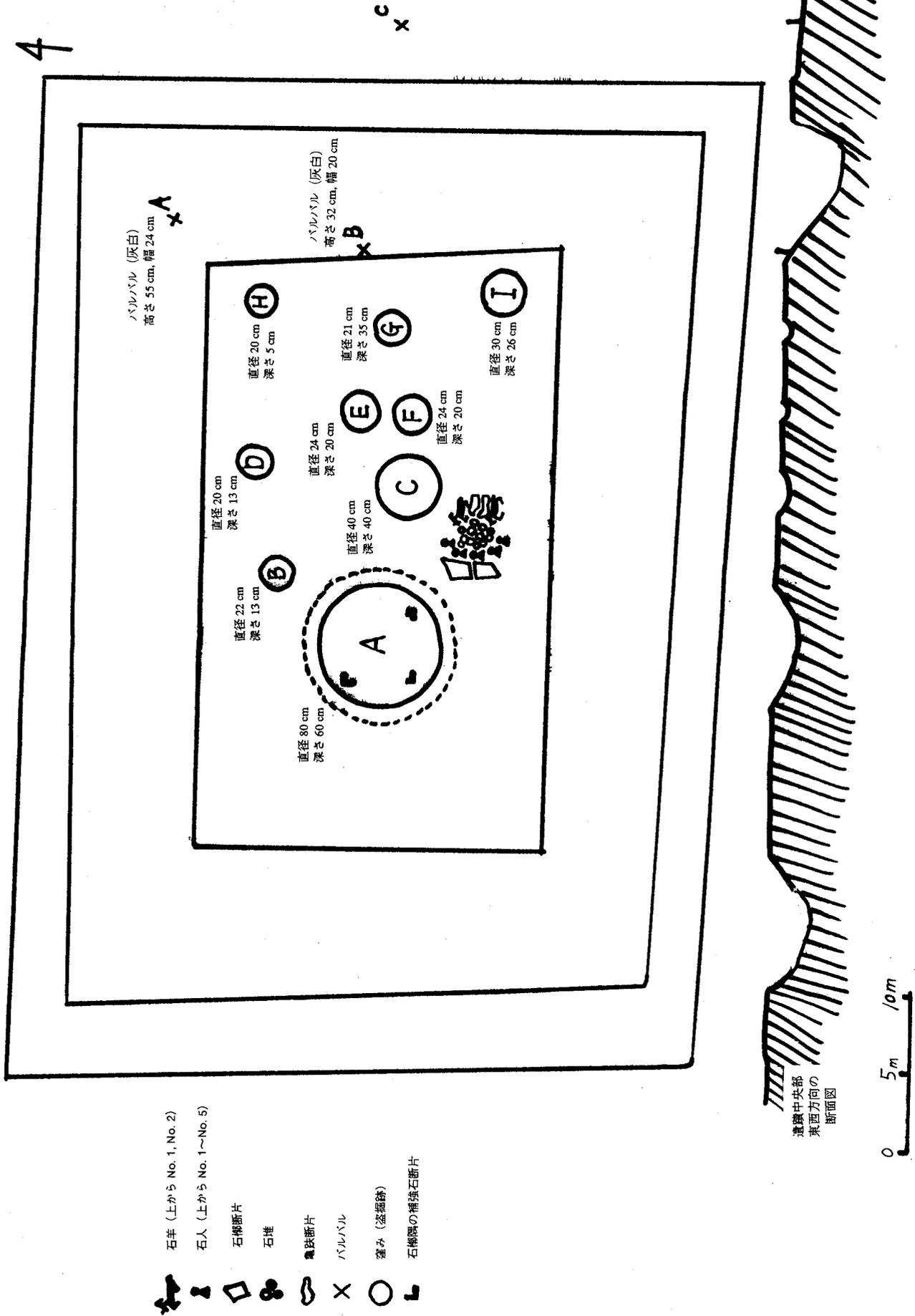
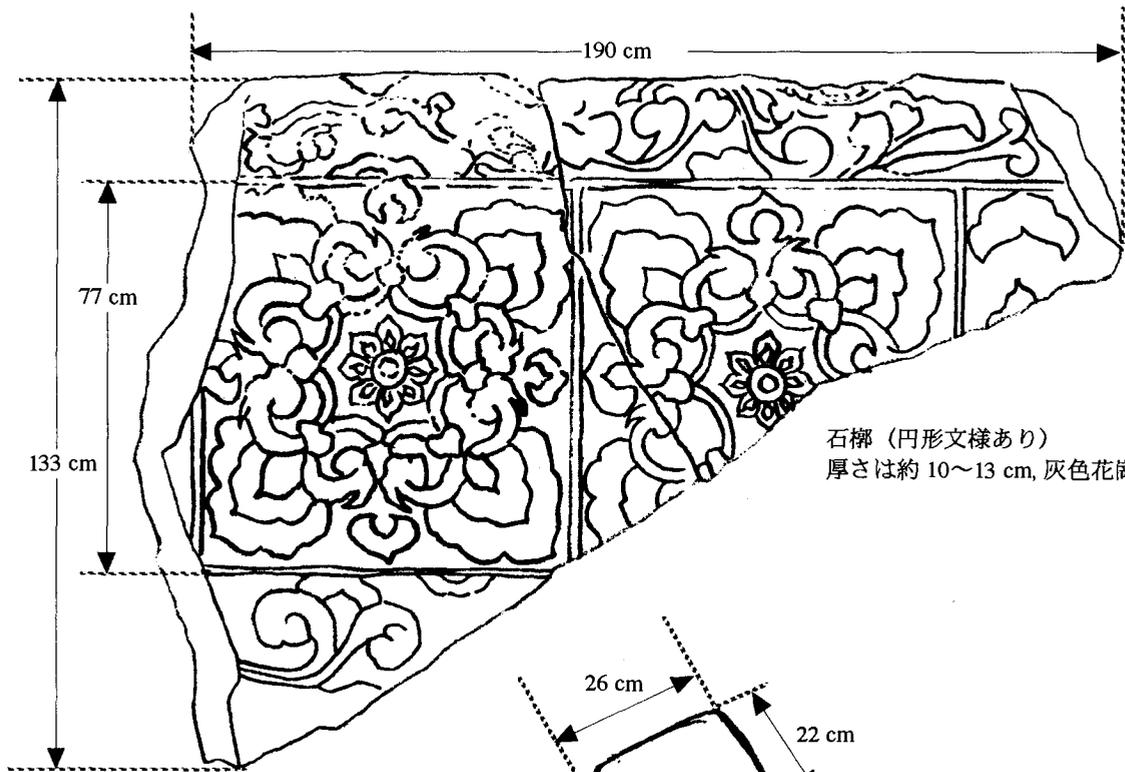
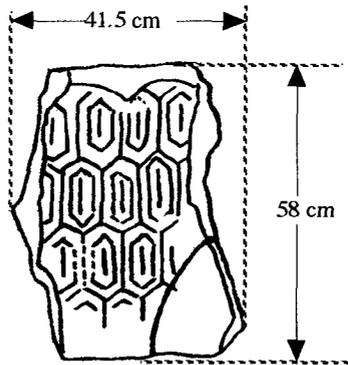


Plate 2b オンギ遺蹟の石槨・亀趺（大澤）

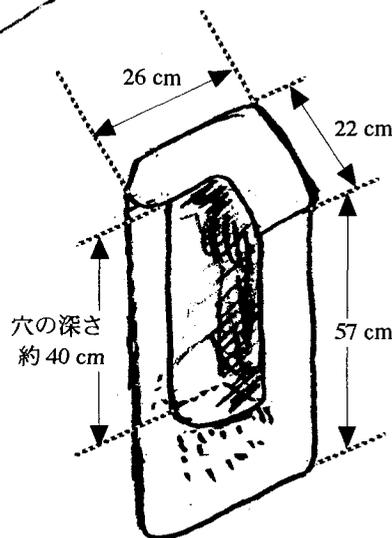
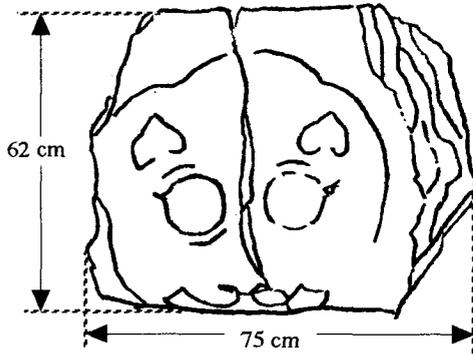


石槨（円形文様あり）  
厚さは約 10~13 cm, 灰色花崗岩製

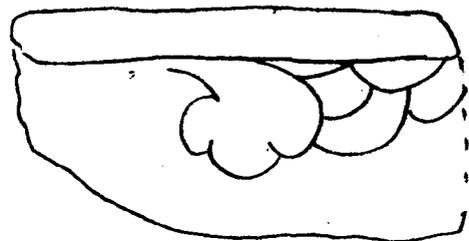


↑ 亀趺背面の断片亀甲文.  
厚さは 12~15 cm

↓ 亀趺頭部の断片  
厚さは 11~14 cm, 花崗岩製



← 穴 1 の北西隅よりオチルが発掘した石槨補強用の石柱. なおオチルは, これと同じと推測される補強用の 2 個が, いずれも不完全な断片として石人前の堆石より発見した.

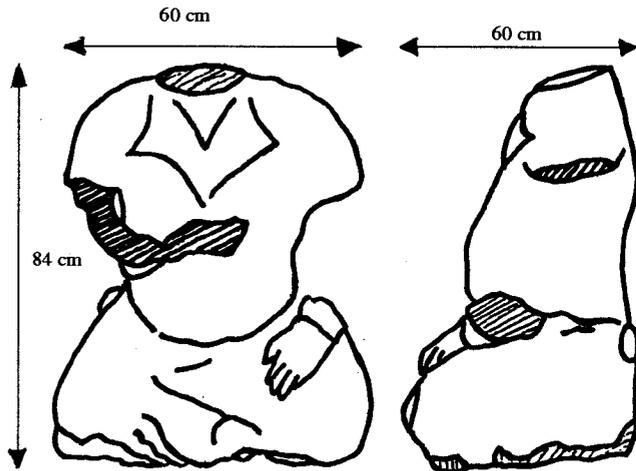


↑ 穴 1 の北西隅出土の石槨断片（文様あり）

Plate 2c オンギ遺蹟の石人・石羊（大澤）

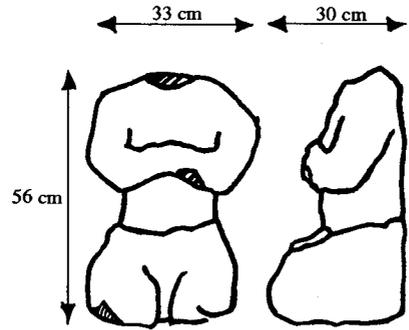
※全て花崗岩製；配置番号は遺蹟図を参照）

石人 No. 1



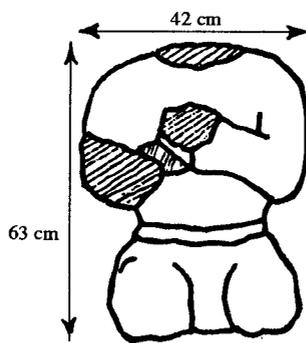
Войтов 1989 はこの幅を約 50 cm とする

石人 No. 2



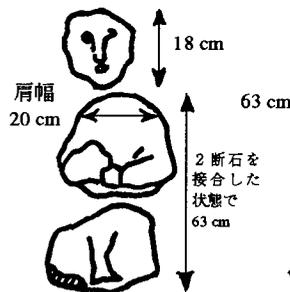
Войтов 1989 は高さを約 51 cm とする

石人 No. 3



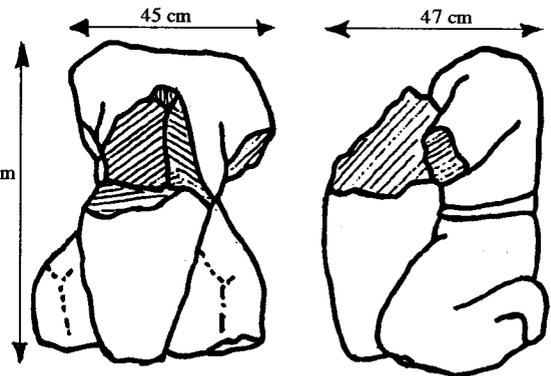
厚さ 47 cm  
Войтов 1989 は高さを約 70 cm とする

石人 No. 4



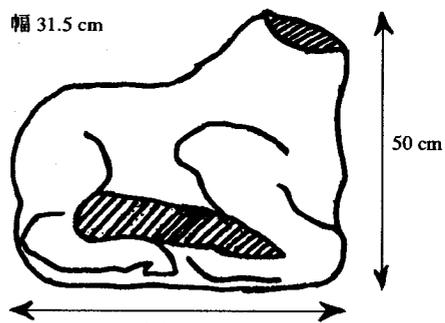
Войтов 1989 は高さを約 45 ~ 50 cm とする

石人 No. 5



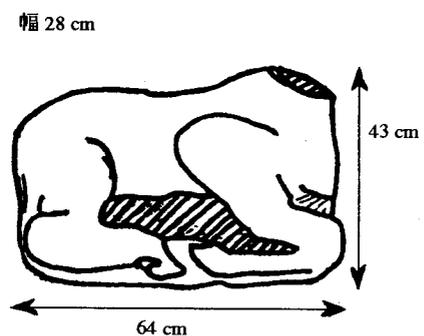
Войтов 1989 は幅を約 45 cm とする

石羊 No. 1 (大)



全長 66.5 cm  
Войтов 1989 はこれを約 71 cm とする

石羊 No. 2 (小)



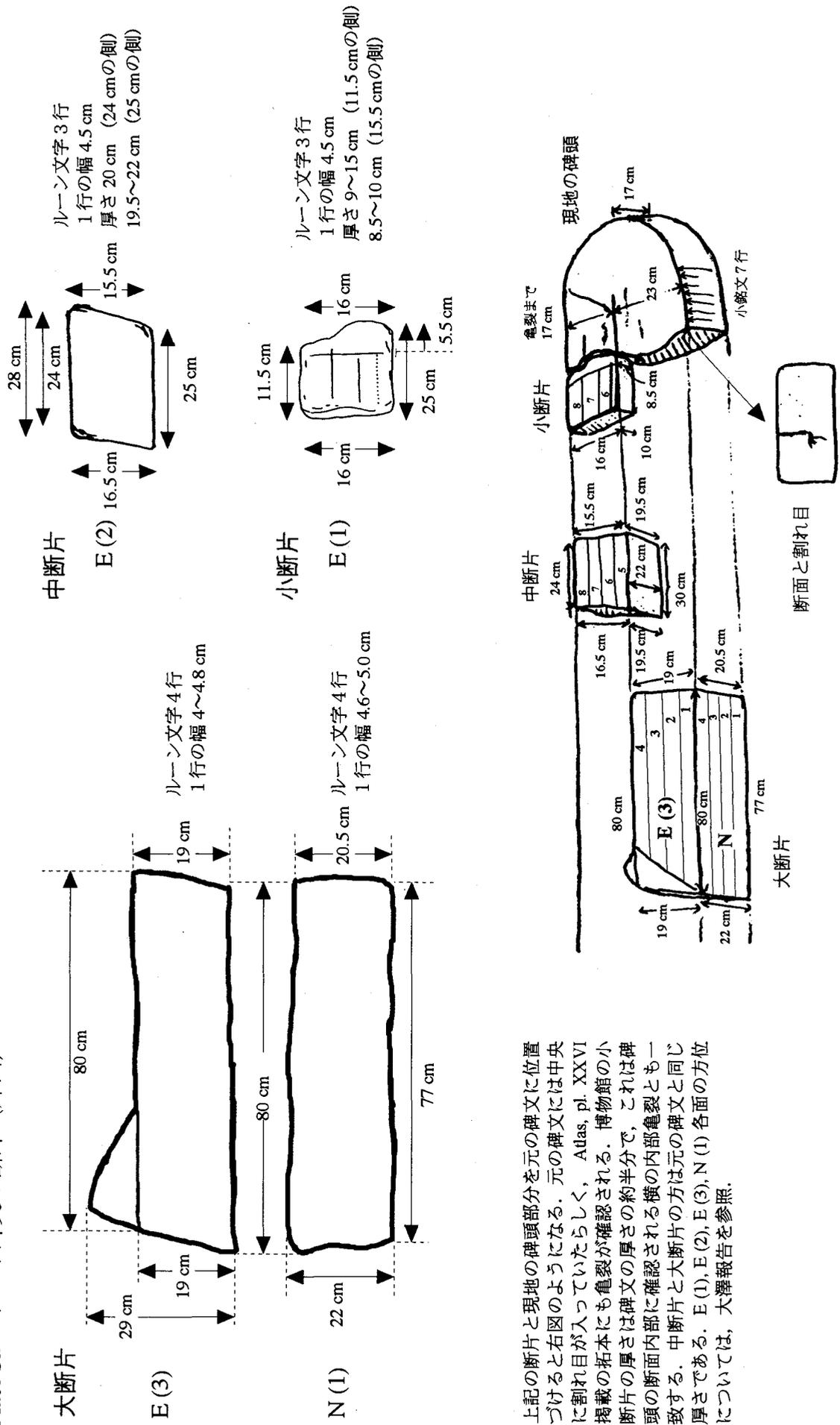
# Plate 2d オンギ遺蹟バルバル計測値表 (大澤)

A : No. B : 高さ (cm) C : 幅 (cm) D : 次のバルバルまでの距離 (cm) E : 色 F : タムガ G : 備考

| A  | B     | C  | D    | E       | F  | G   |
|----|-------|----|------|---------|----|---|
| *  | 32    | 20 | 1630 | 白       |    | *マウンド東面のふちの立石断片                                 |
| 1  | 104   | 28 | 336  | 白       |    | 西方に直径 240 cm の円形くぼみあり、深さ 22 cm                  |
| 2  | 54    | 22 |      | 白       |    | No. 4 までの距離は 360 cm                             |
| 3  | 112   |    |      | 白       |    | No. 2 の南から 190 cm; バルバルのところに直径 360 cm の穴あり      |
| 4  | 64    |    | 498  | 黒       |    | 破片  |
| 5  | 13.5  |    | 194  | 黒       |    | 破片  |
| 6  | 35    |    | 568  | 黒       |    | 破片  |
| 7  | 21    |    | 797  | 黒       |    | 破片  |
| 8  | 21    |    | 204  | 黒       |    |   |
| 9  | 21    |    | 250  | 黒       |    |   |
| 10 | 98    |    | 545  | 黒       | あり | 115 cm 南に倒れていた。釣り針型タムガと雄ヤギ型タムガあり (新発見)          |
| 11 | 91    |    | 540  | 黒       | あり | 釣り針型タムガと雄ヤギ型タムガあり、ただしルーン文字銘文は破損                 |
| 12 | 78    |    | 1108 | 白       |    |   |
| 13 | なし    |    | 1140 | 黒       |    | No. 14 の穴の東端まで 1358 cm                          |
| 14 | 115   |    | 1400 | 白       |    | 本バルバルを中心に直径 140 cm の円形窪みあり                      |
| 15 | 13    |    | 528  | 黒       |    | 裏面に山芋タムガあり                                      |
| 16 | 73    |    | 306  | 黒       |    |   |
| 17 | 41.5  |    | 560  | 黒       |    |   |
| 18 | 53    |    | 405  | 黒       |    |   |
| 19 | なし    |    | 150  | 黒       |    |   |
| 20 | なし    |    | 285  | 黒 (やや黄) |    |   |
| 21 | 35    |    | 264  | 黒 (やや白) |    |   |
| 22 | 32    |    | 266  | 黒       |    |   |
| 23 | 6     |    | 297  | 黒       |    | 折られた上部断片 (高さ 110 cm) が本来の位置から南に 8 m 離れた地点で見えられた |
| 24 | 80    |    | 193  | 黒       |    | 埋まっている。   |
| 25 | 73    |    | 385  | 黒       |    | 埋まっている。   |
| 26 | なし    |    | 944  | (黒)     |    | 折られた上部断片 (高さ約 90 cm) が本来の位置から南に 5 m 離れた地点で見えられた |
| 27 | なし    |    | 561  | (黒)     |    |   |
| 28 | 54    |    | 146  | 黒       | あり |   |
| 29 | 46    |    | 312  | 黒       |    | 北方 2~4 m の地点に 4 つの石片が埋まっている                     |
| 30 | 58    |    | 305  | 黒       |    |   |
| 31 | 38    |    | 255  | 黒       |    | 埋まっている  |
| 32 | 80    |    | 670  | 黒       |    |   |
| 33 | 63&97 |    | 315  | 黒       |    |   |
| 34 | 80    |    | 285  | 黒       |    |   |
| 35 | 43    |    | 323  | 黒       |    |   |
| 36 | 24    |    | 297  | 黒       |    |   |
| 37 | 52    |    | 320  | 黒       |    |   |
| 38 | 30    |    | 295  | 黒       |    |   |
| 39 | 5     |    | 305  | 黒       |    |   |
| 40 | 75    |    | 320  | 黒       |    |   |
| 41 | 62    |    | 280  | 黒 (やや黄) |    |   |
| 42 | 50    |    | 330  | 黒       |    |   |
| 43 | 63    |    | 296  | 黒 (やや黄) |    |   |
| 44 | 4     |    | 334  | 黒       |    |   |
| 45 | 25    |    | 300  | 黒 (やや黄) |    |   |

| A  | B     | C | D    | E       | F  | G                               |
|----|-------|---|------|---------|----|---------------------------------|
| 46 | 58    |   | 305  | 黒       |    |                                 |
| 47 | 8     |   | 175  | 黒       |    |                                 |
| 48 | 59    |   | 430  | 黒       |    |                                 |
| 49 | 36    |   | 320  | 黒       |    |                                 |
| 50 | 4     |   | 280  | 黒       |    |                                 |
| 51 | 32    |   | 625  | 黒       |    |                                 |
| 52 | 3     |   | 617  | 黒       |    |                                 |
| 53 | 18    |   | 288  | 黒       |    | 南 4 m のところに高さ 100 cm の断石が 1 つある |
| 54 | 103   |   | 280  | 黒 (やや黄) |    |                                 |
| 55 | 80&30 |   | 344  | 黒       |    |                                 |
| 56 | 28    |   | 1210 | 黒       |    |                                 |
| 57 | 20    |   | 602  | 黒       |    |                                 |
| 58 | 0     |   | 308  | 黒       |    |                                 |
| 59 | 15    |   | 300  | 黒       |    |                                 |
| 60 | 52    |   | 630  | 黒       |    |                                 |
| 61 | 5     |   | 920  | 黒       |    |                                 |
| 62 | 7     |   | 590  | 黒       |    |                                 |
| 63 | 17&54 |   | 340  | 黒       |    |                                 |
| 64 | 50    |   | 295  | 黒 (やや黄) |    |                                 |
| 65 | 38    |   | 315  | 黒 (やや黄) |    |                                 |
| 66 | 63    |   | 345  | 黒 (やや黄) |    |                                 |
| 67 | 73    |   | 365  | 黒       |    |                                 |
| 68 | 47    |   | 340  | 黒       |    |                                 |
| 69 | 0     |   | 330  | 黒       |    |                                 |
| 70 | 61    |   | 95   | 黒       |    |                                 |
| 71 | 44    |   | 975  | 黒       |    |                                 |
| 72 | 6     |   | 345  | 黒       |    | 北方に小さな石                         |
| 73 | 38    |   | 355  | 黒       |    |                                 |
| 74 | 26    |   | 340  | 黒       |    |                                 |
| 75 | 63    |   | 700  | 黒 (やや黄) |    |                                 |
| 76 | 40    |   | 350  | 黒 (やや黄) |    |                                 |
| 77 | 0     |   | 340  | 黒       |    |                                 |
| 78 | 5     |   | 1435 | 黒       |    |                                 |
| 79 | 0     |   | 1030 | 黒       |    |                                 |
| 80 | 23    |   | 350  | 黒       |    |                                 |
| 81 | 26&81 |   | 655  | 黒       |    |                                 |
| 82 | 0     |   | 746  | 黒       |    |                                 |
| 83 | 83    |   | 430  | 白っぽい    | あり |                                 |
| 84 | 103   |   | 655  | 黒 (やや白) |    | 表面を緑色のこけ状のものがおおっている             |
| 85 | 97    |   | 705  | 黒       |    |                                 |
| 86 | 52    |   | 380  | 黒       |    |                                 |
| 87 | 52    |   | 1040 | 黒       |    |                                 |
| 88 | 13    |   | 330  | 黒       |    |                                 |
| 89 | 40    |   | 390  | 黒       |    |                                 |
| 90 | 24    |   | 915  | 黒       |    |                                 |
| 91 | 0     |   | 0    | 黒       |    |                                 |

Plate 3a オング碑文の断片 (片山)



上記の断片と現地の碑頭部分を元の碑文に位置づけると右図のようになる。元の碑文には中央に割れ目が入っていたらしく、Atlas, pl. XXVI 掲載の拓本にも亀裂が確認される。博物館の小断片の厚さは碑文の厚さの約半分で、これは碑頭の断面内部に確認される横の内部亀裂とも一致する。中断片と大断片の方は元の碑文と同じ厚さである。E(1), E(2), E(3), N(1) 各面の方角については、大澤報告を参照。

Plate 3b オンギ碑文筆写コピー (大澤)

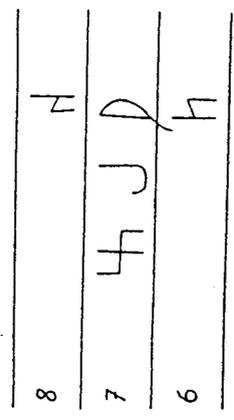
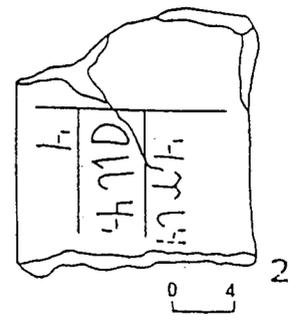


Fig. 20



Tryjarski による筆写コピー

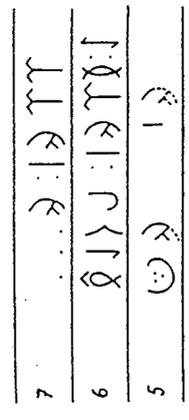
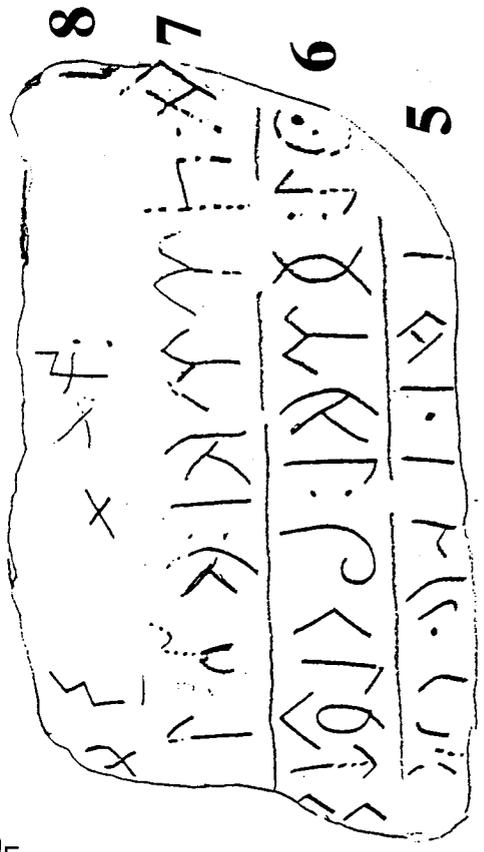
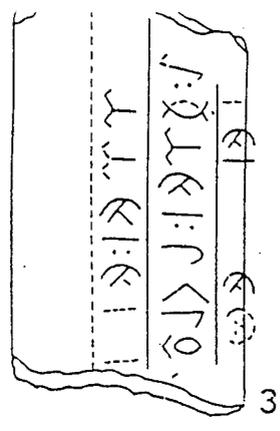


Fig. 27

中断片

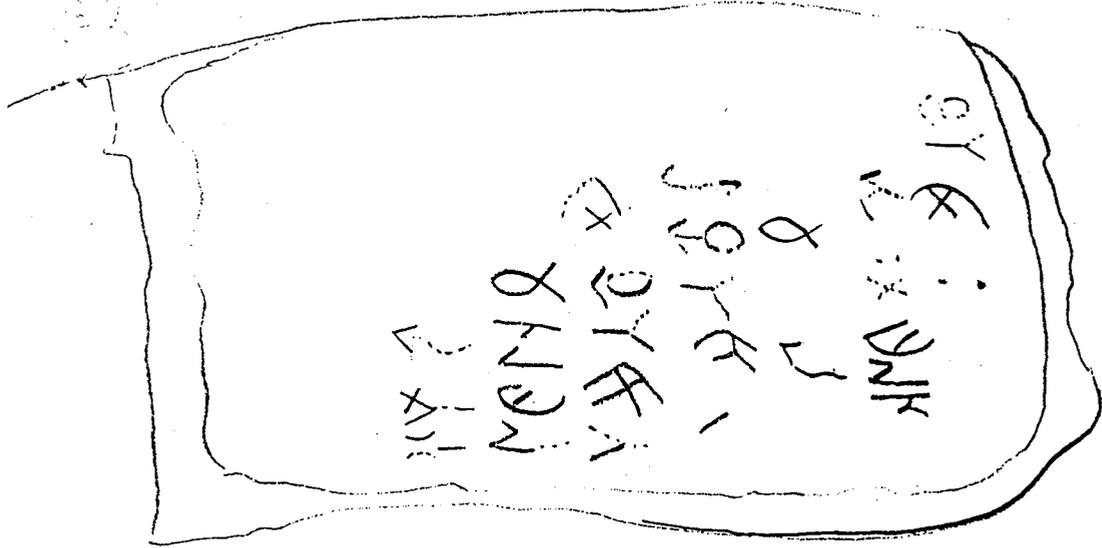


Бойтов による筆写コピー



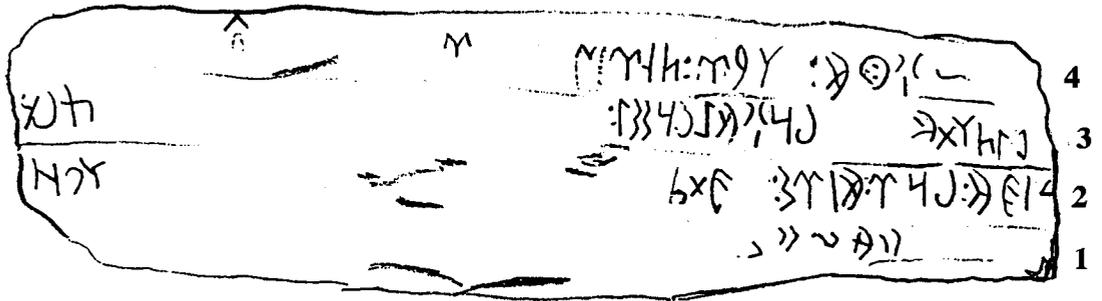
1 2 3 4 5 6 7

碑頭側面の小銘文



大断片

主碑の側面 4行銘文



主碑正面の全8行中の右側のみ

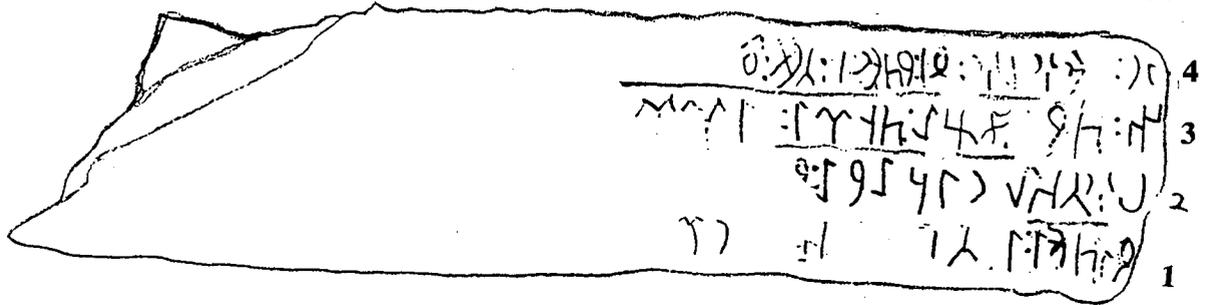
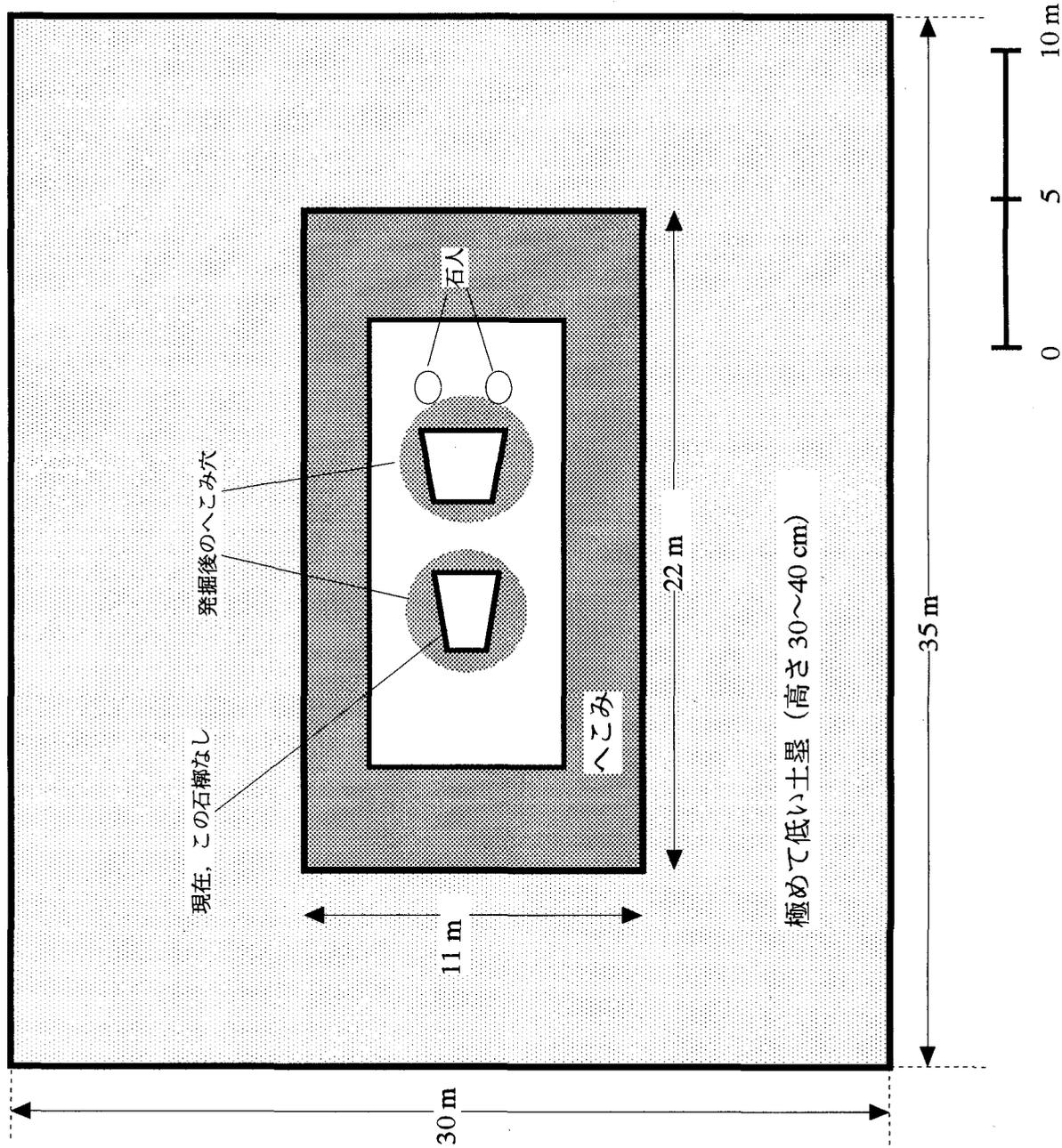


Plate 4a イフハヌイノール遺蹟平面図 (大澤)



バルバルは1つもなし

(農地にしたから?)

東方 2 km 余り先のところの  
高度は 1585 m

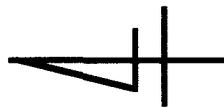
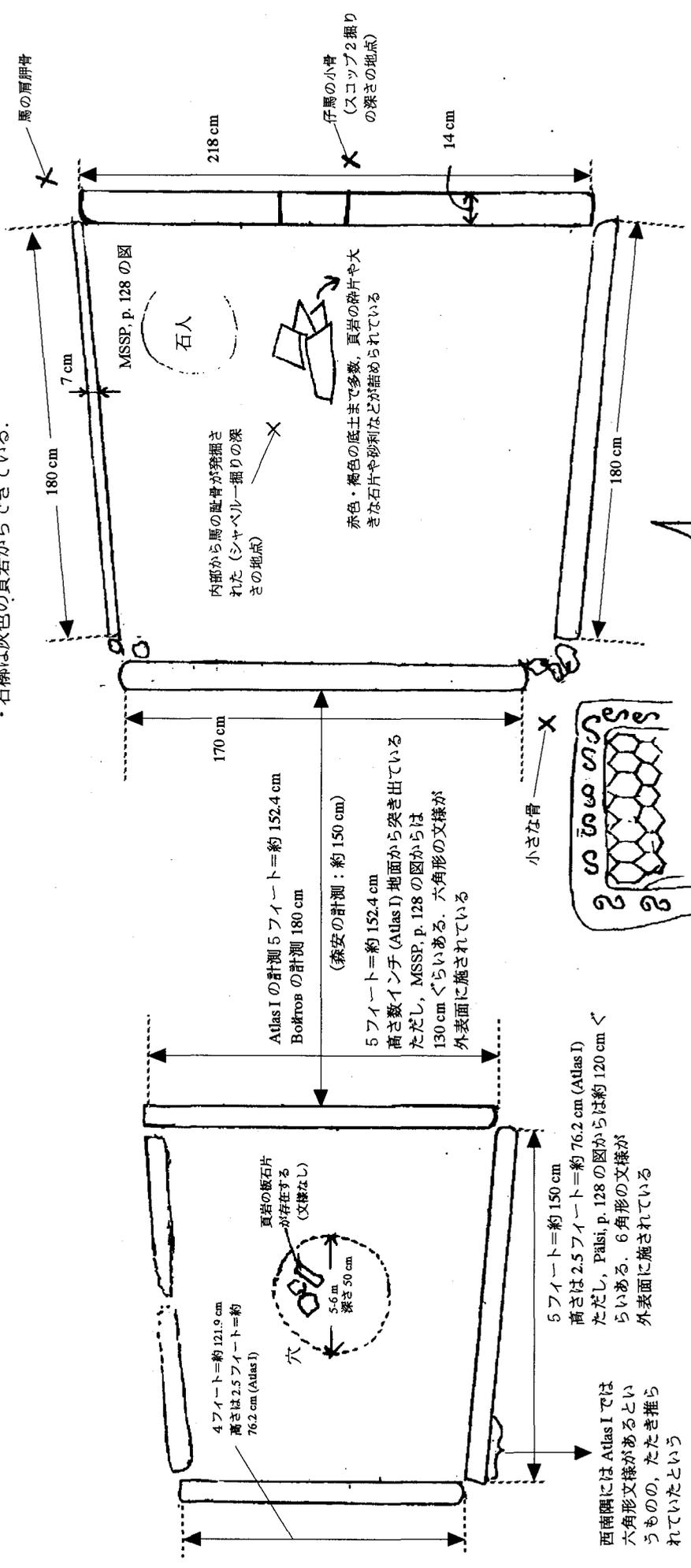


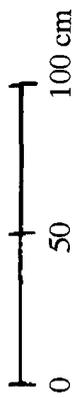
Plate 4b イフ=ハヌイ=ノール遺蹟推定復元図 (大澤)

後方の遺蹟は現在は失われて石槨なし！へこみ穴のみ。

※ Atlas I によれば後方の墓は東西8フィート南北5フィートとする。石槨北壁は地面から数インチのみ突き出ている (Atlas I)。ただし、長さや厚さは不明。



MSSP, p. 128 の図からは渦巻き文様の縁どりと六角形の文様が施されている



MSSP, p. 128 の図

クレメンツ発見時 (1891 年) には石人はともに石槨の内部にあった。

- ・石槨からなる内部はやや盛り上がりしている。
- ・方位はほぼ磁石の方位に一致する。
- ・石槨は灰色の頁岩からできている。

石人

Plate 4c イフ=ハヌイ=ノール遺蹟・遺物 (大澤)

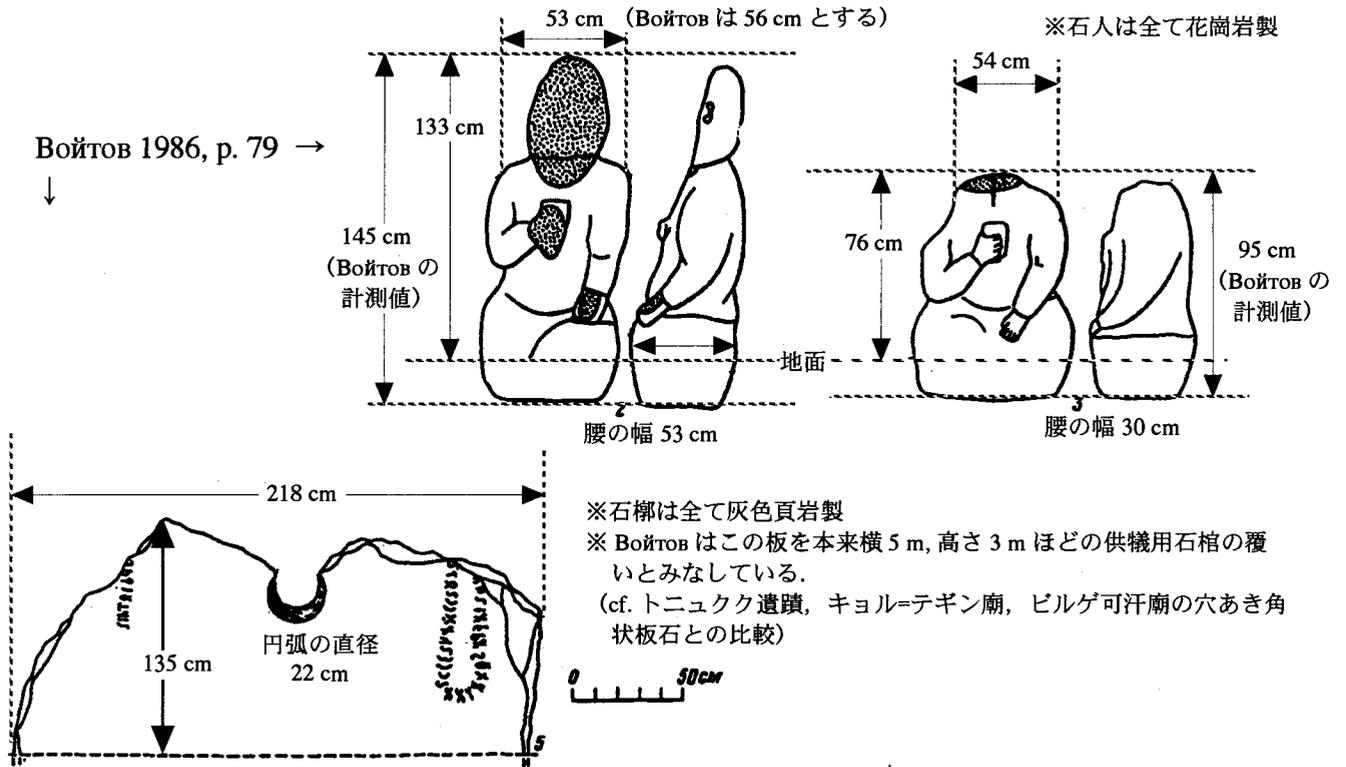


Рис. 8. 1 - изваяние 1; 2 - изваяние 3; 3 - изваяние 4; 4 - обломок восточной плиты памятника 2; 5 - восточная плита памятника 5

↓ Войтов 1986, p. 83

↓ Войтов 1986, p. 74

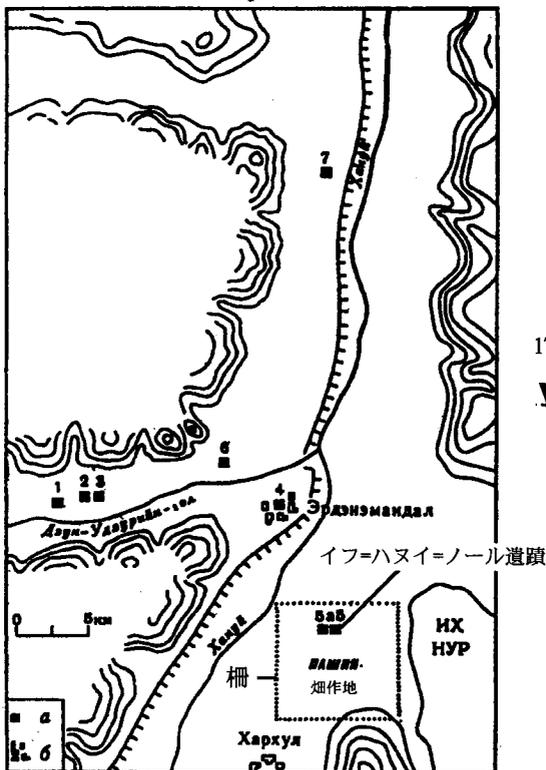


Рис. 1. Схематический план расположения памятников на р. Хануй. а - памятники; б - постройки сомона.

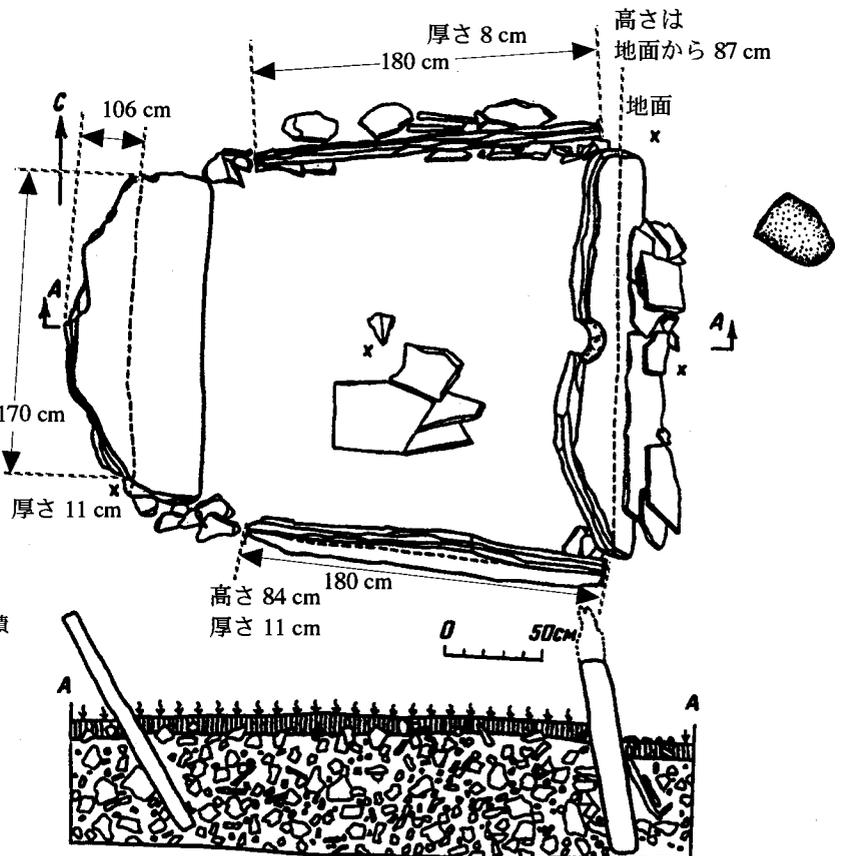


Рис. 9. План и разрез памятника 5. x - косточки

Plate 5a シヴェート=オラーン遺蹟平面図(Баяр)

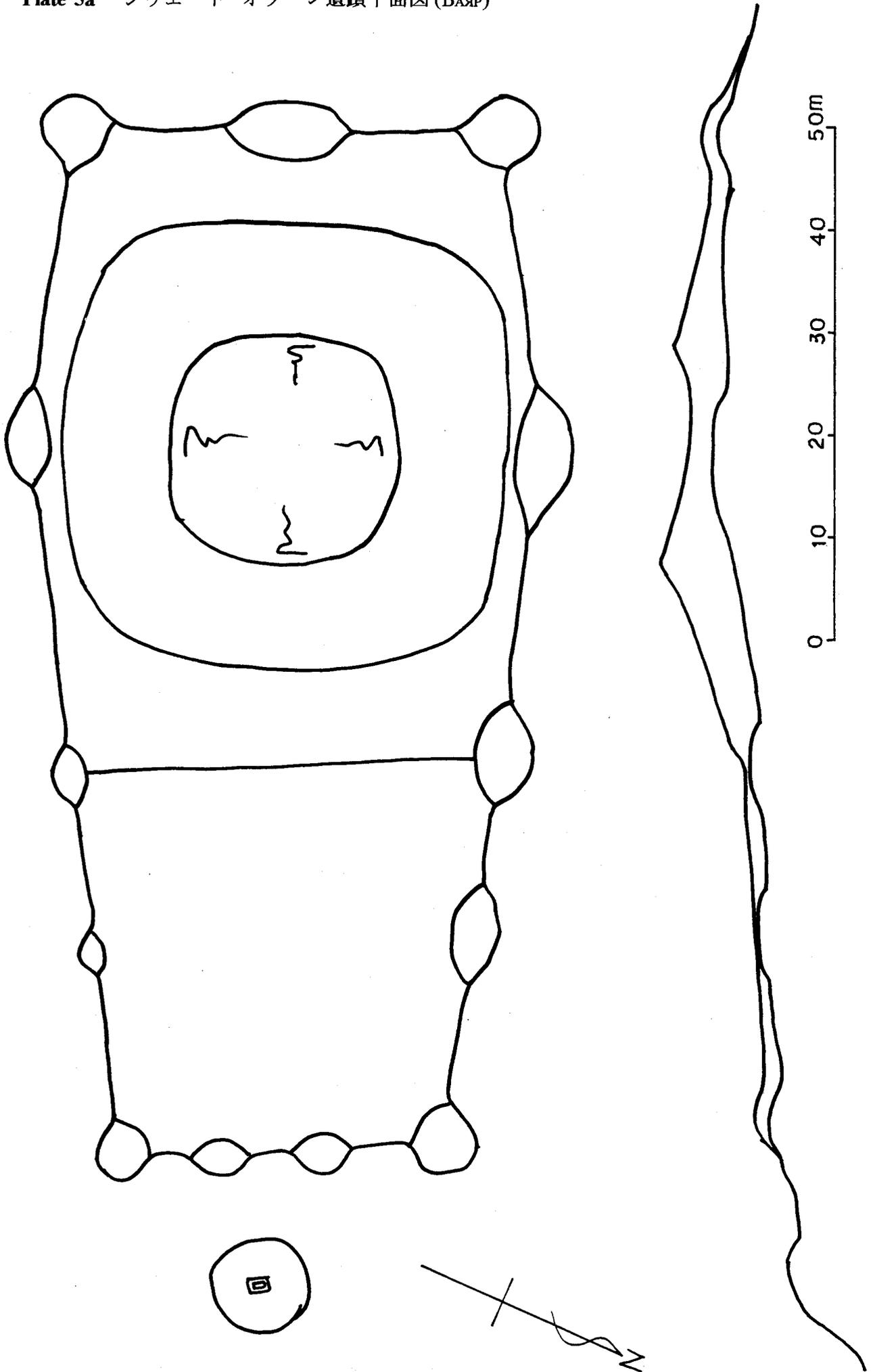


Plate 5b シヴェート=オラーン台石 (Баяр)

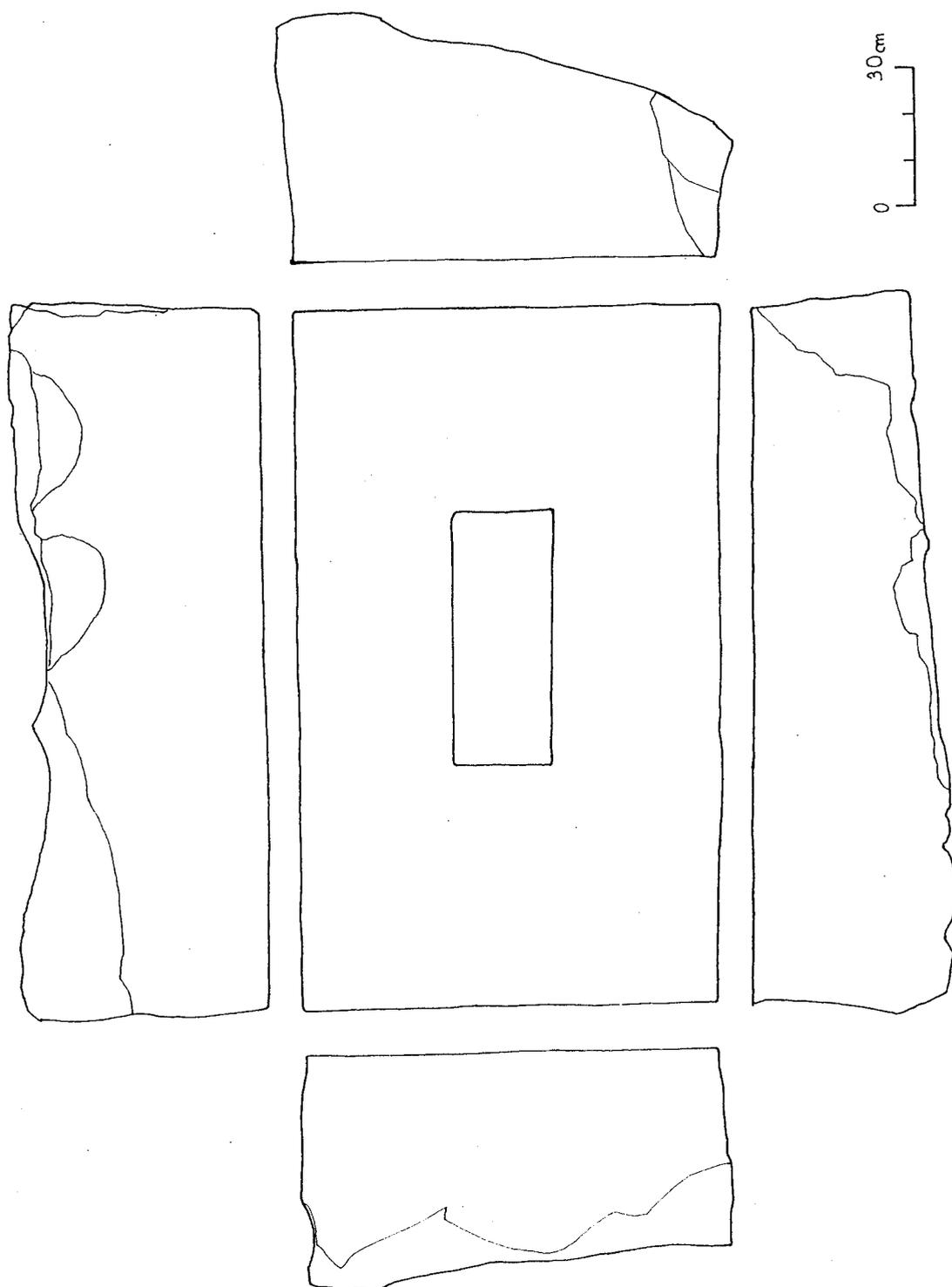
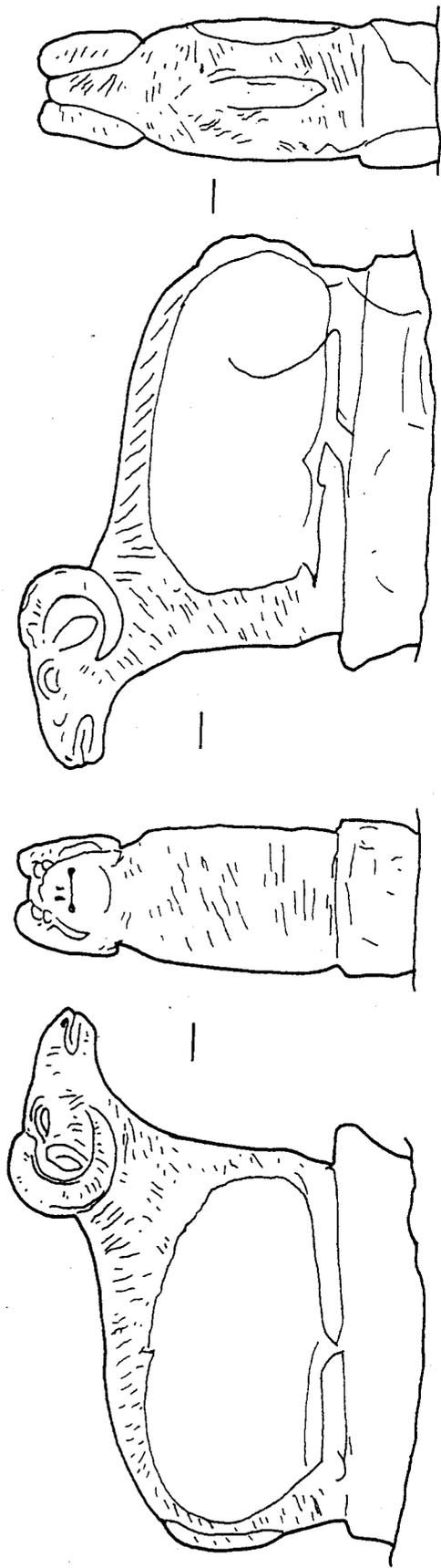
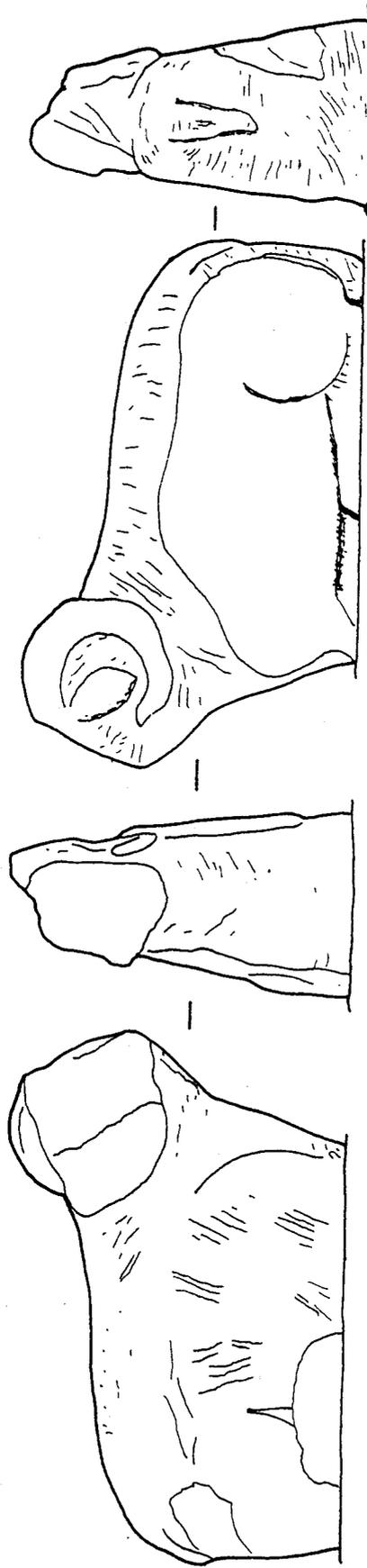


Plate 5c シヴェート=オラーン遺蹟石羊(БАР)

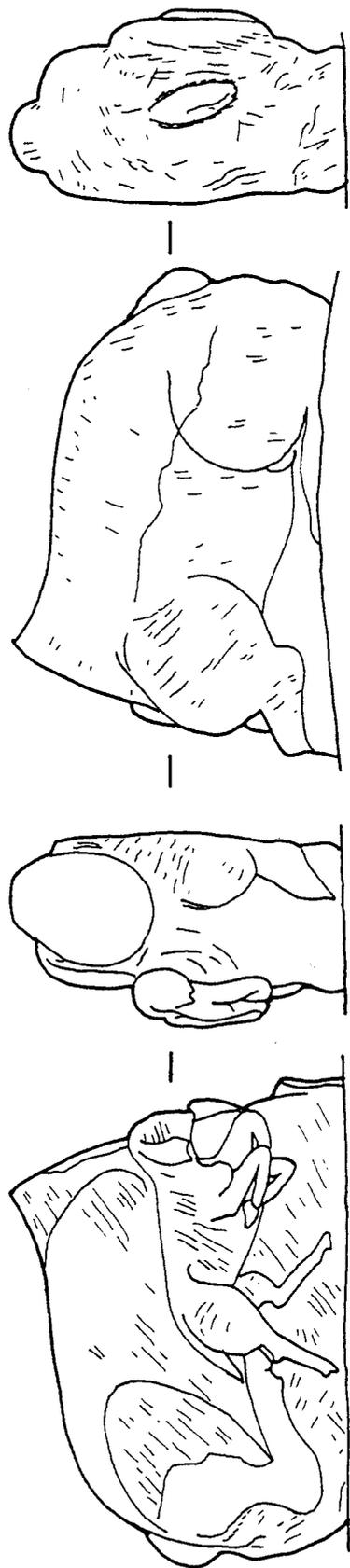
1



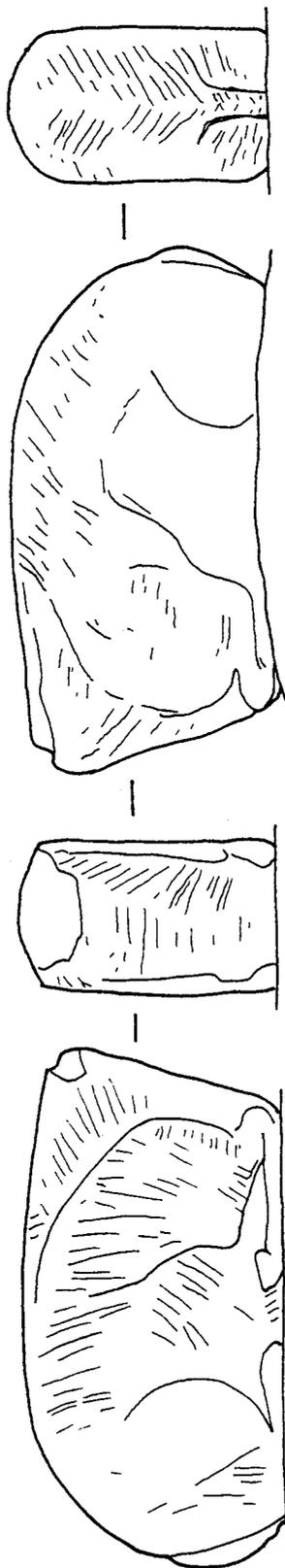
2

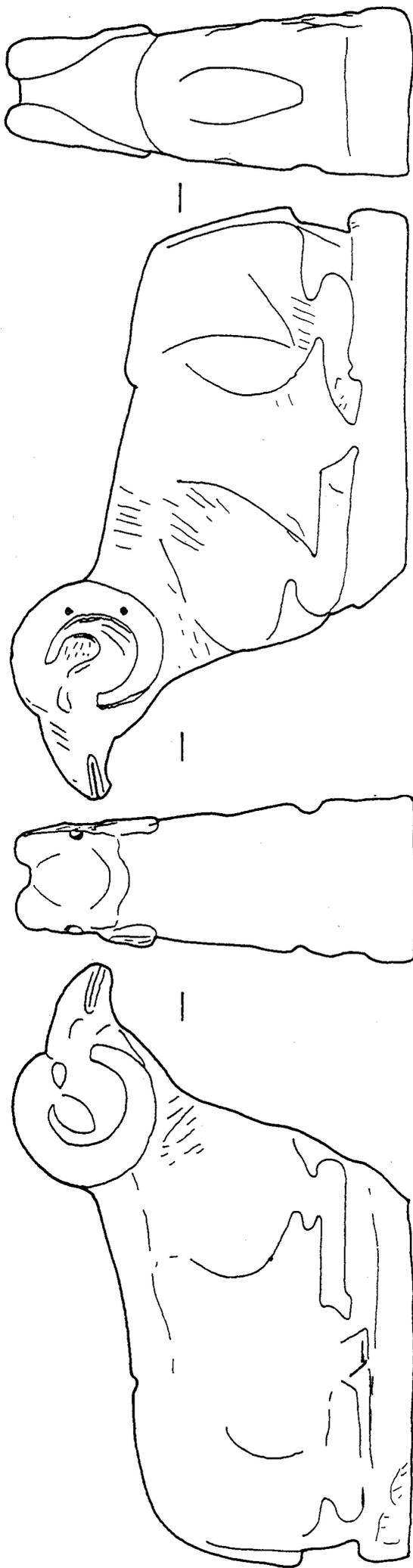
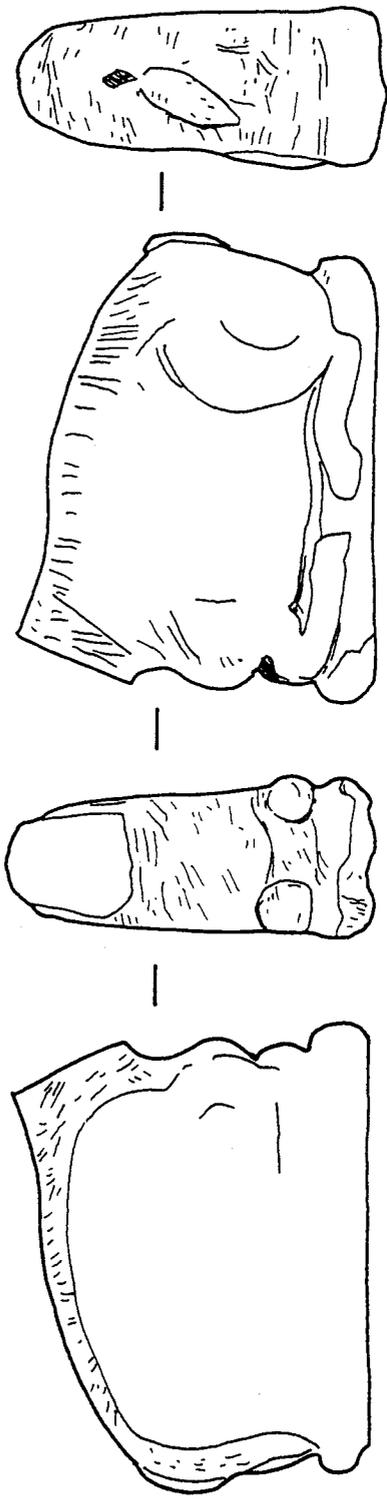


3

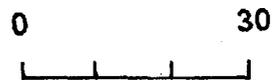
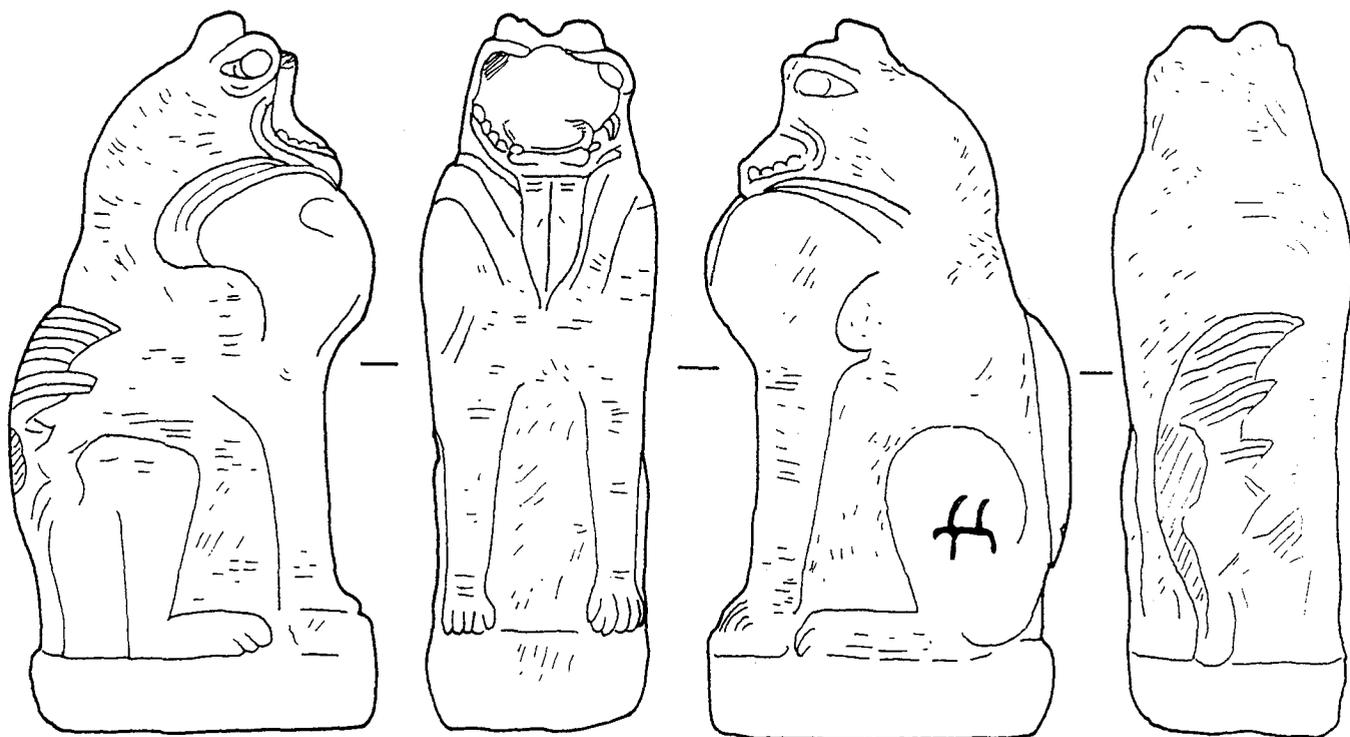


4





1



2

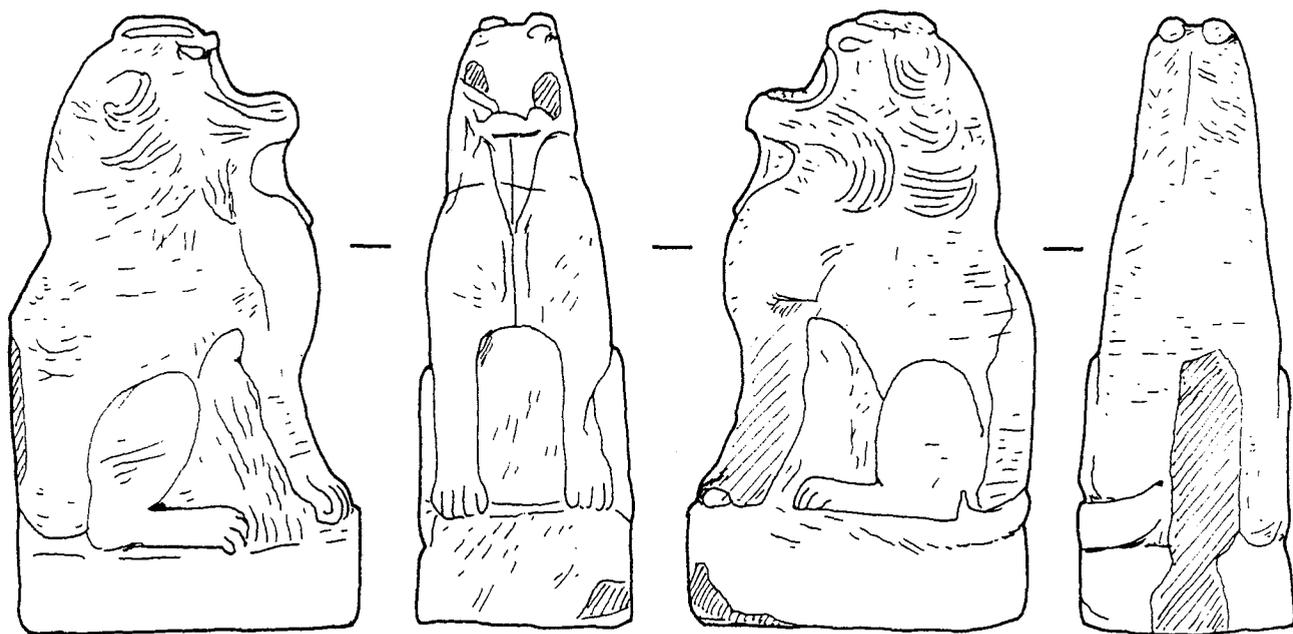


Plate 5g シヴェート=オラーン遺蹟石獅子(Баяр)

3

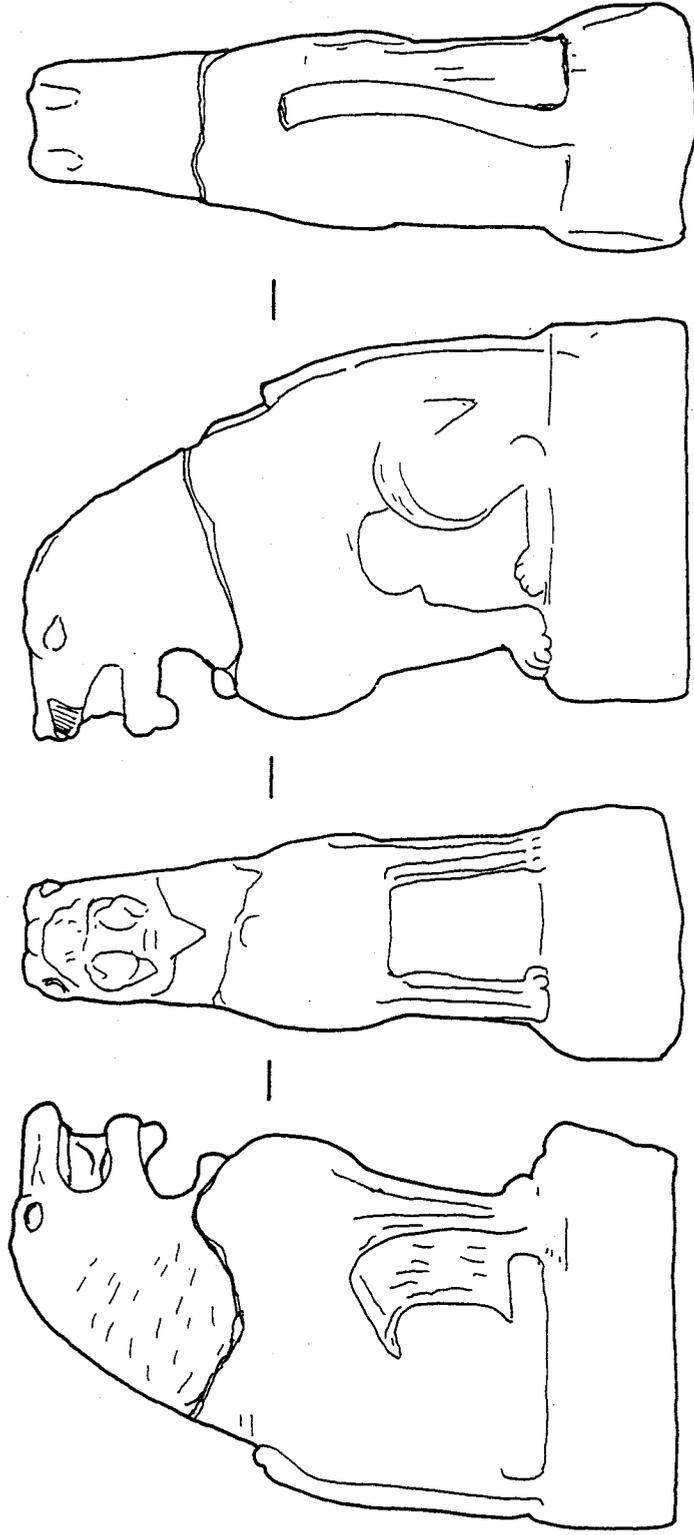
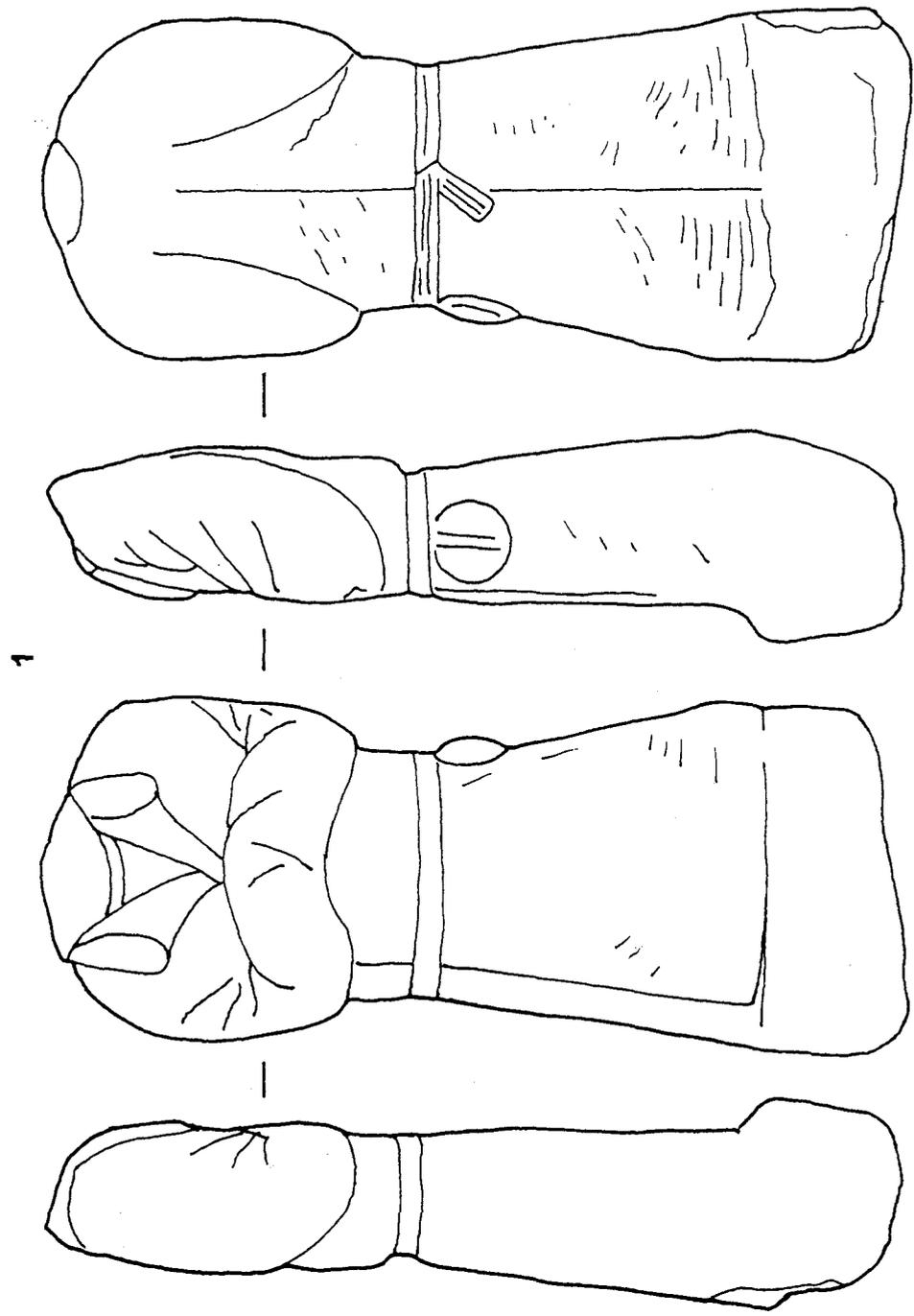


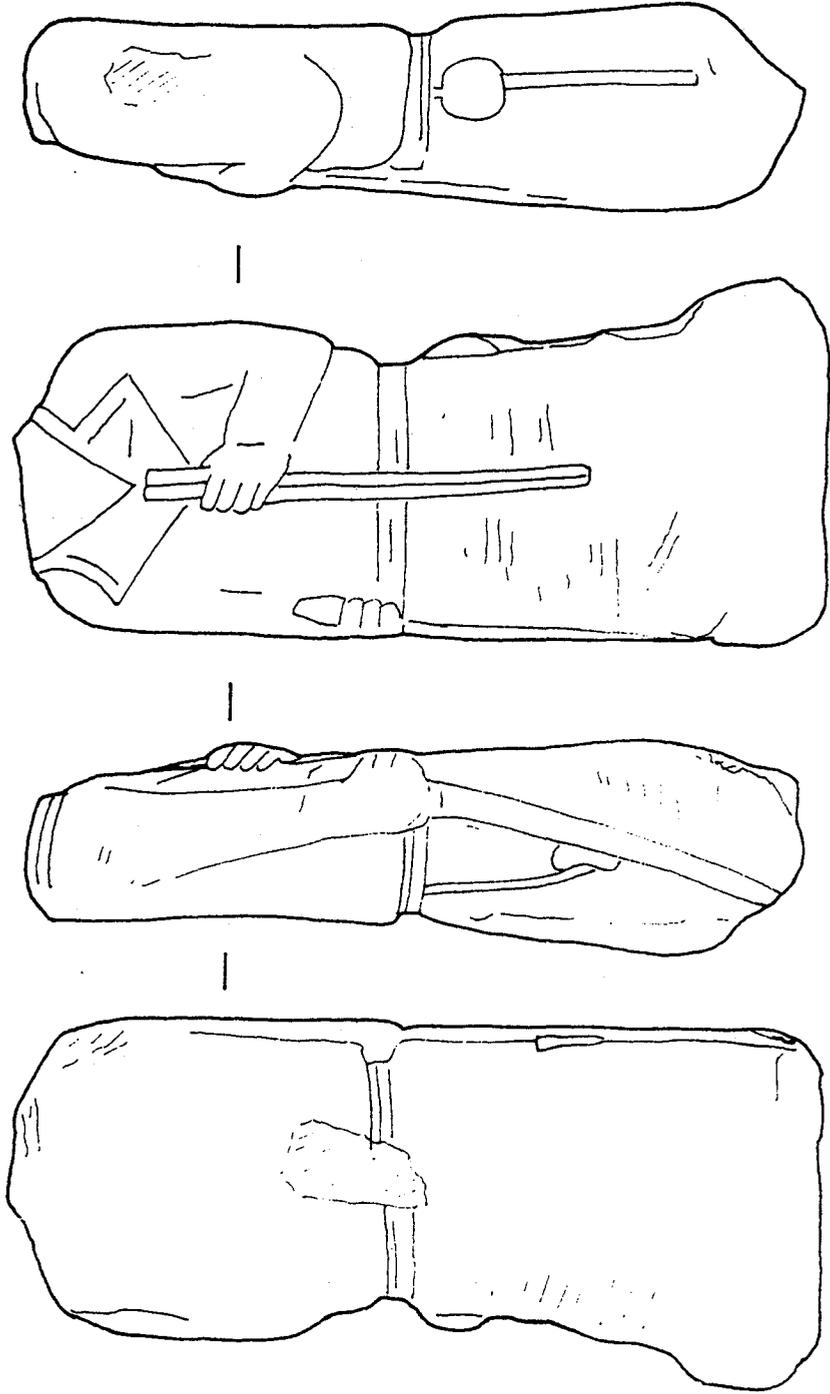
Plate 5h シヴェート=オラーン遺蹟石人(БАР)



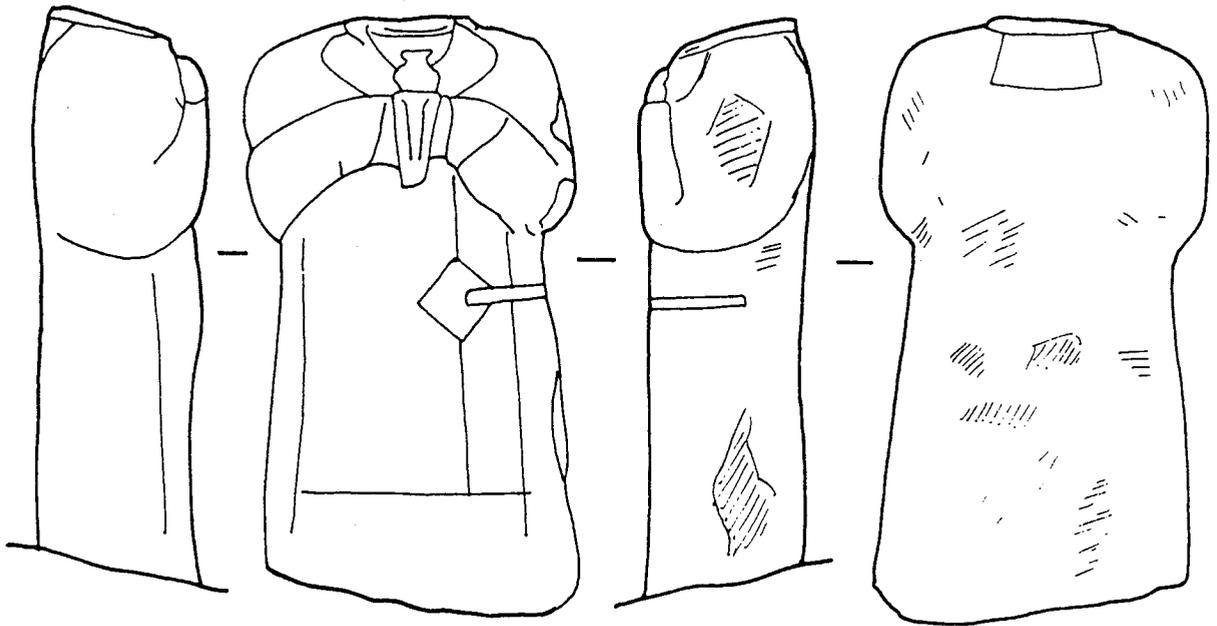
0 30

Plate 5i シヴェート=オラールン遺蹟石人(БАР)

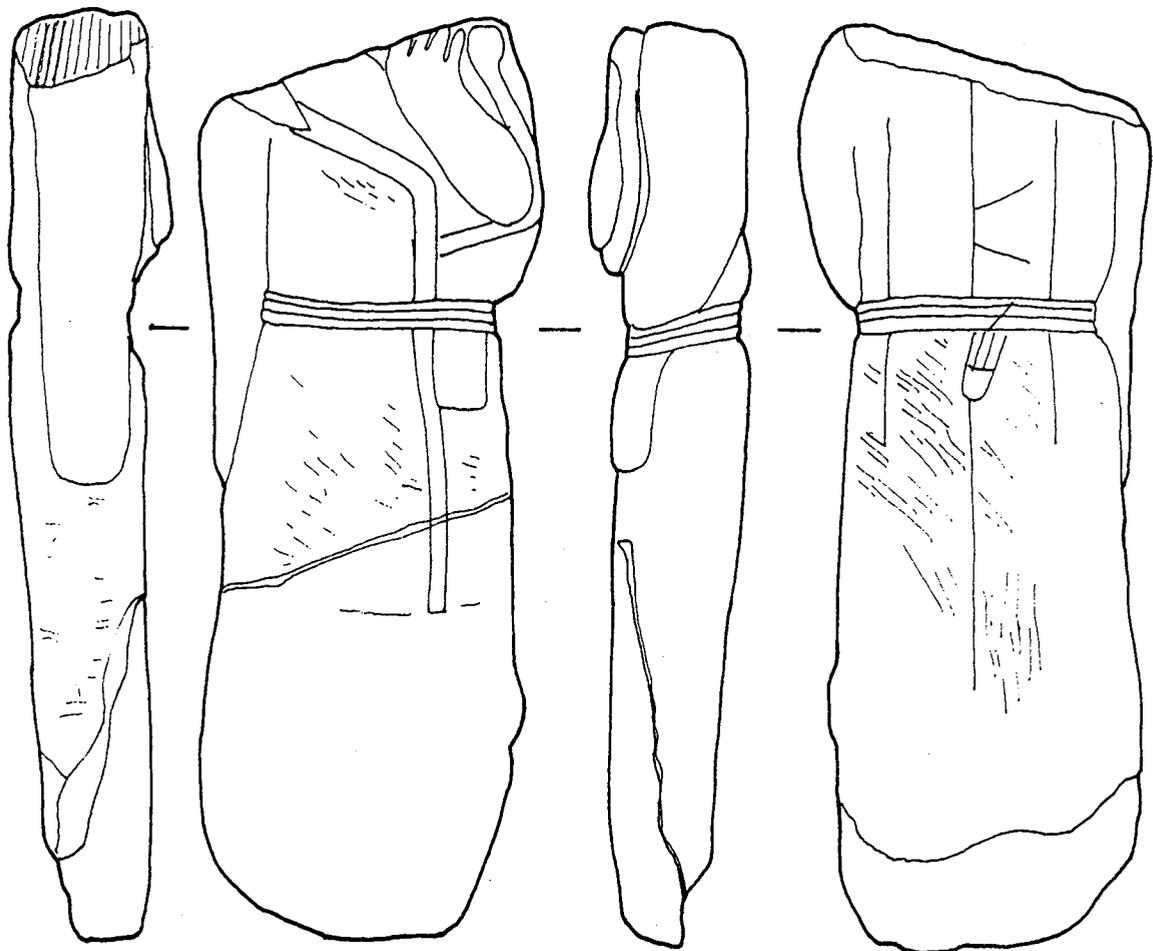
2



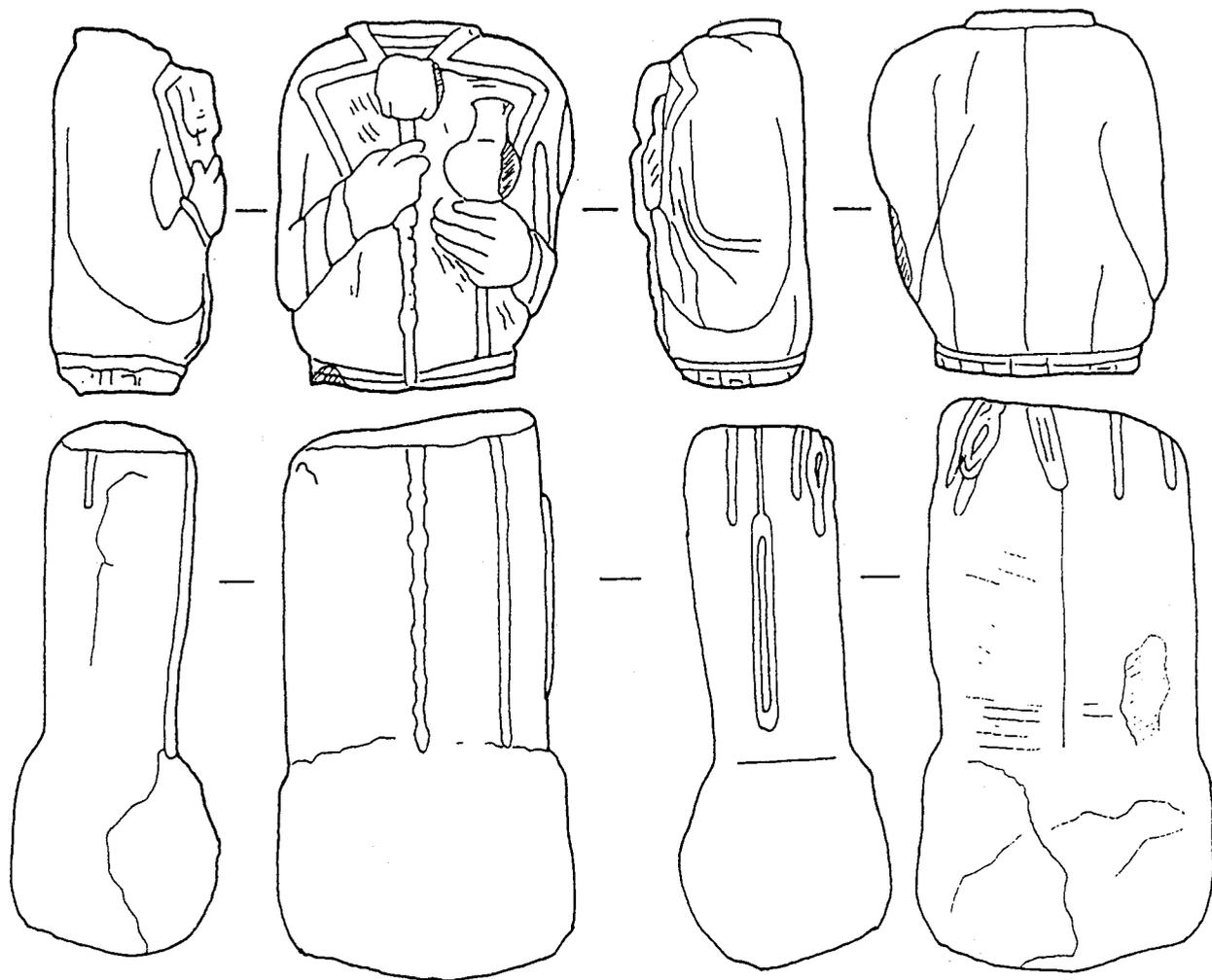
3



4

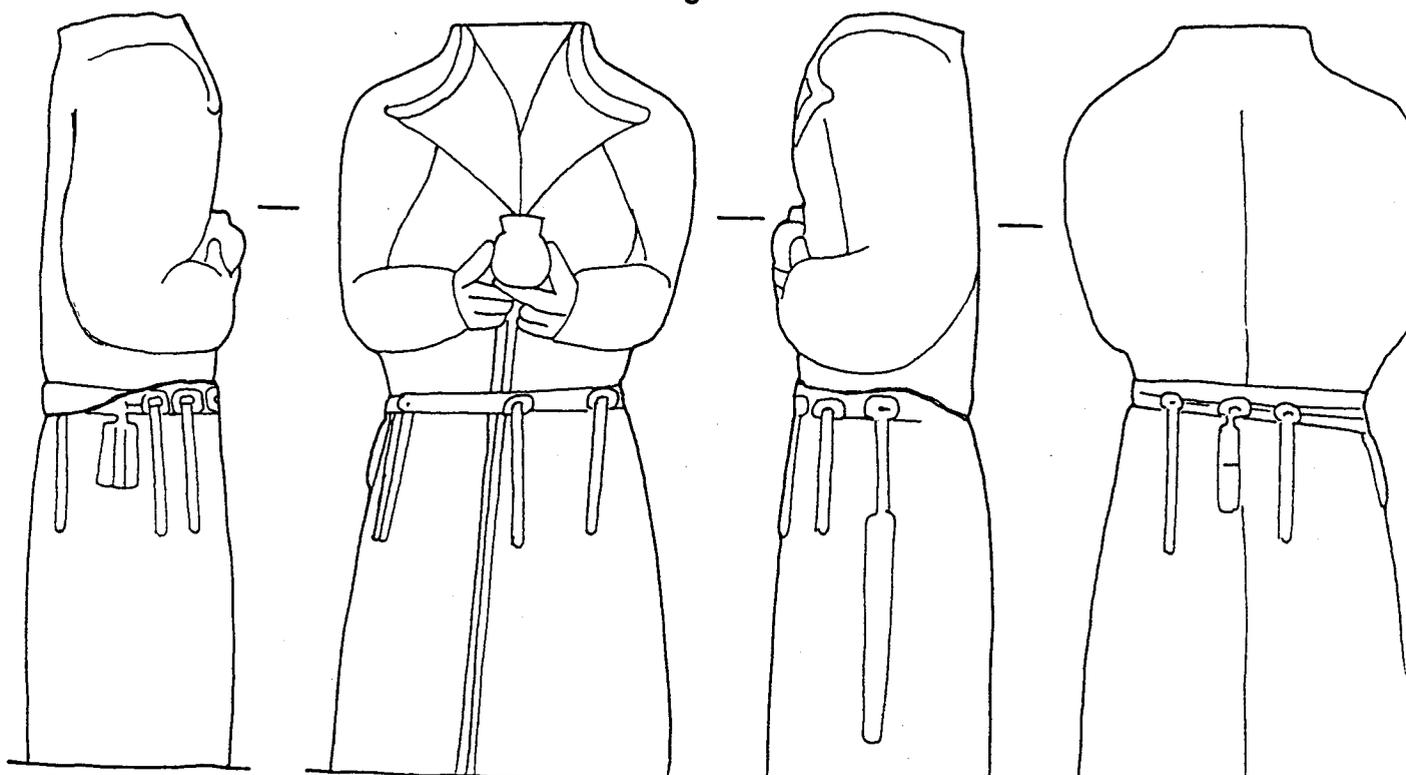


5

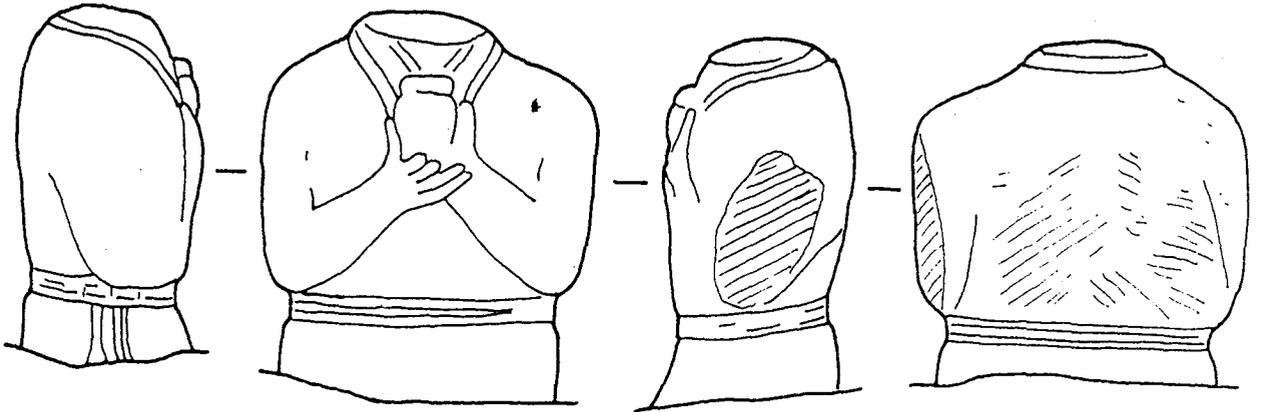


0 30

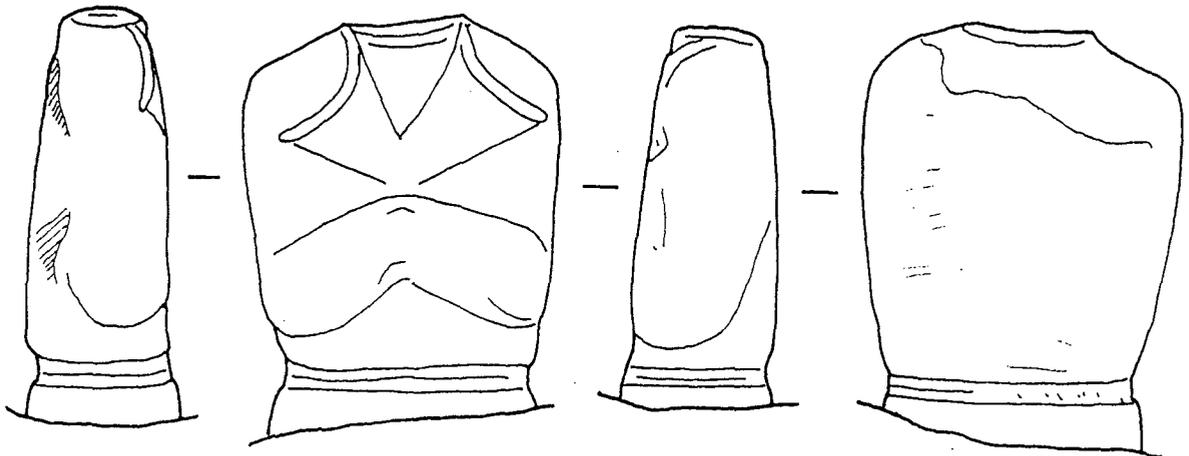
6



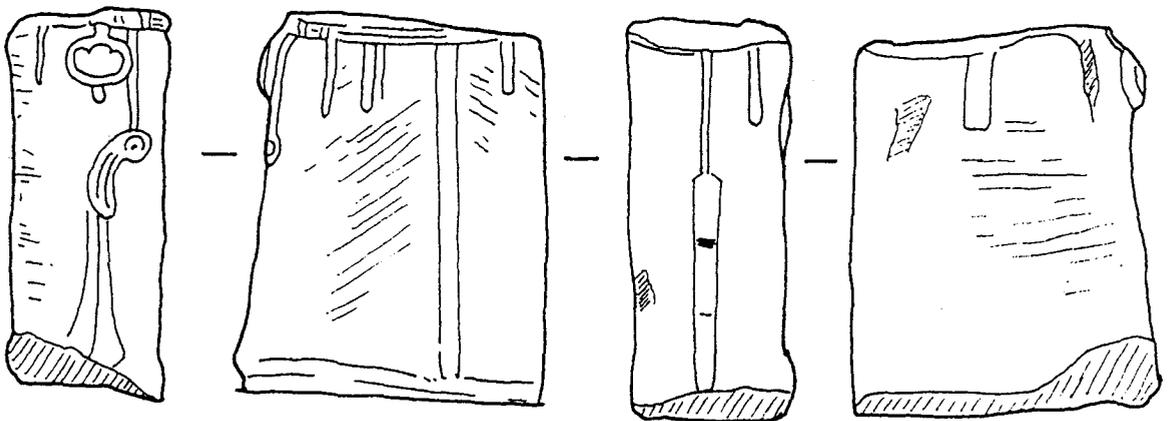
7



8

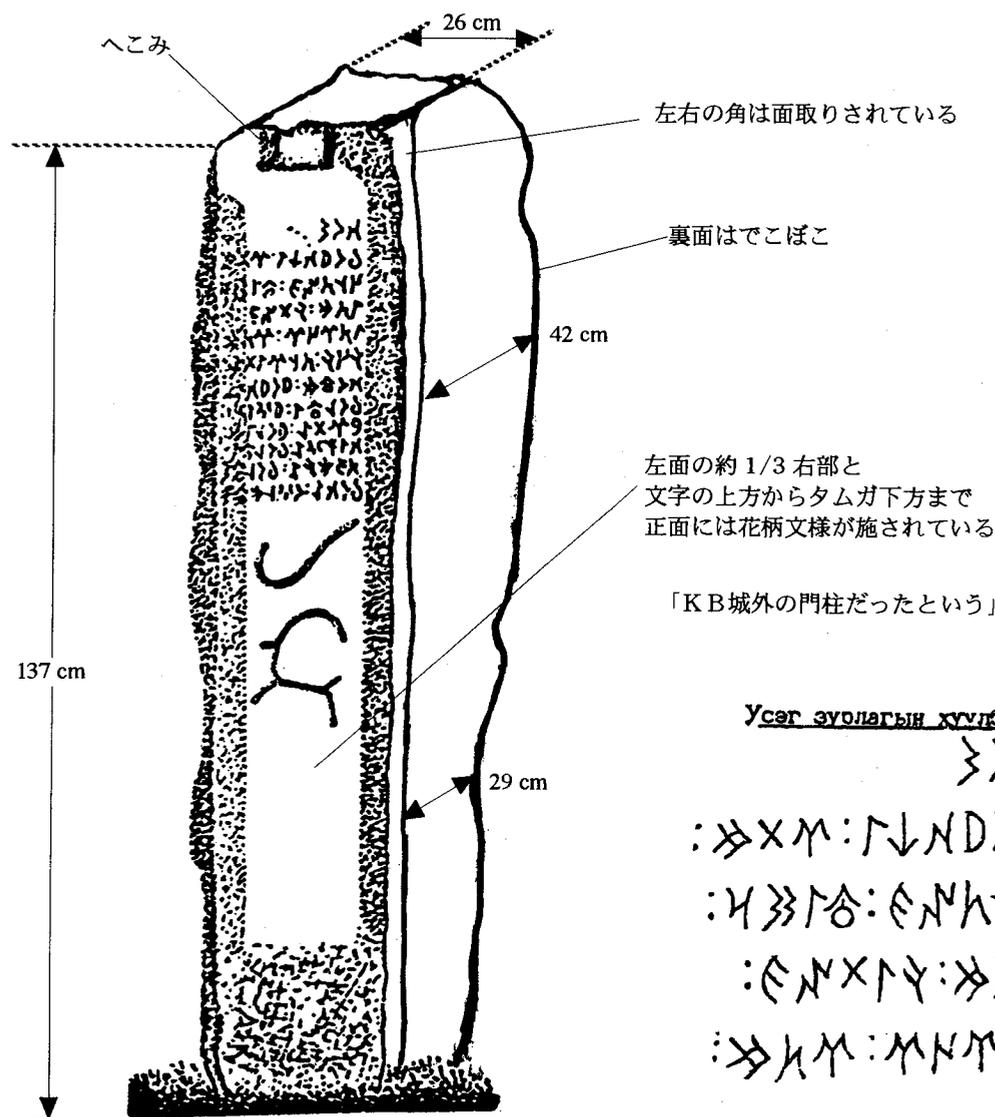


9



0 30

Plate 6 カラ=バルガスン第二碑文 (大澤)



左面の約1/3 右部と  
文字の上方からタムガ下方まで  
正面には花柄文様が施されている

「KB城外の門柱だったという」

Усєг зуулагын хувилбар нь

- 3>N I.  
 : \*X M : T ↓ N D > D 2.  
 : 4 3 T 6 : E N K Y N 3.  
 : E N X T Y : \* K T 4.  
 : \* K M : M N T K T 5.  
 : J X T M Y K : Y N Y 6.  
 : J N D > D : \* 6 > N 7.  
 : 4 T T D : T 6 J T D 8.  
 : \* T N > D : J X M 9.  
 : T 6 J T D : J T T Y T N 10.  
 : T 6 J T D : J Y \* E K 11.  
 : T 6 \* J T T > : J N T D 12.

Plate 7a ムハル遺蹟の亀趺 (大澤)

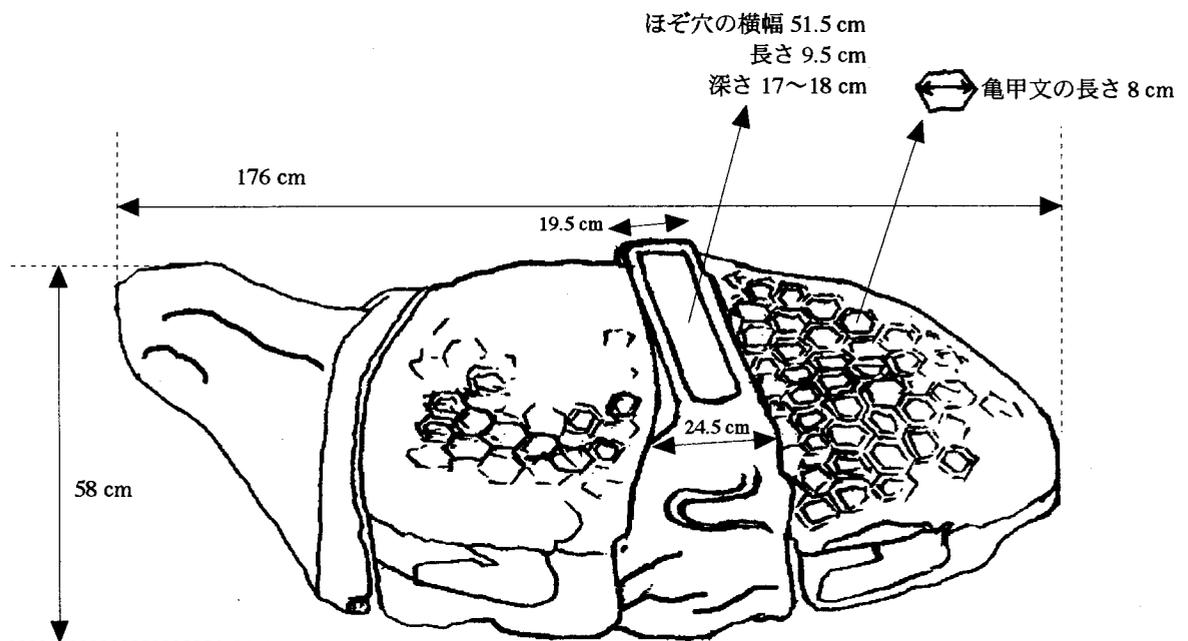
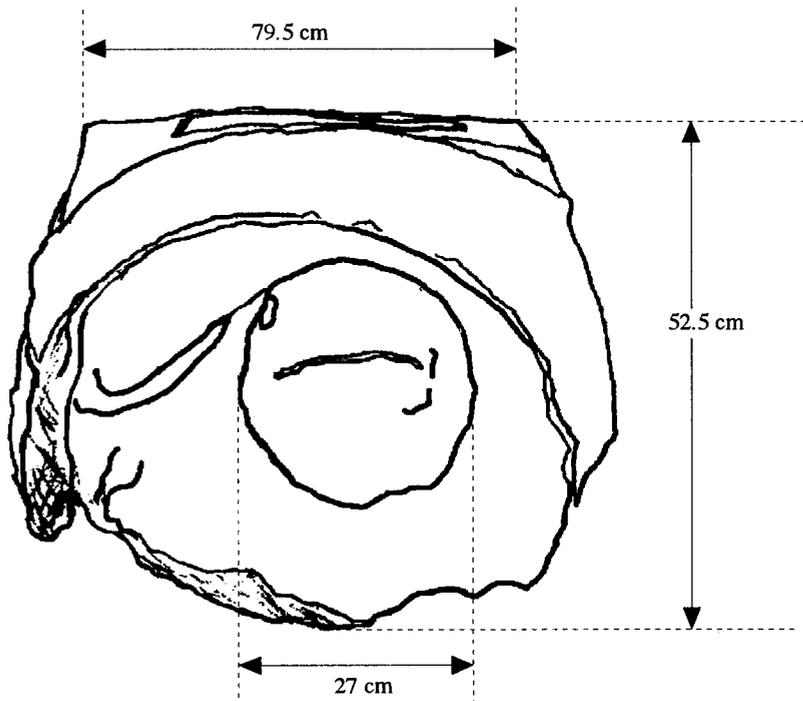
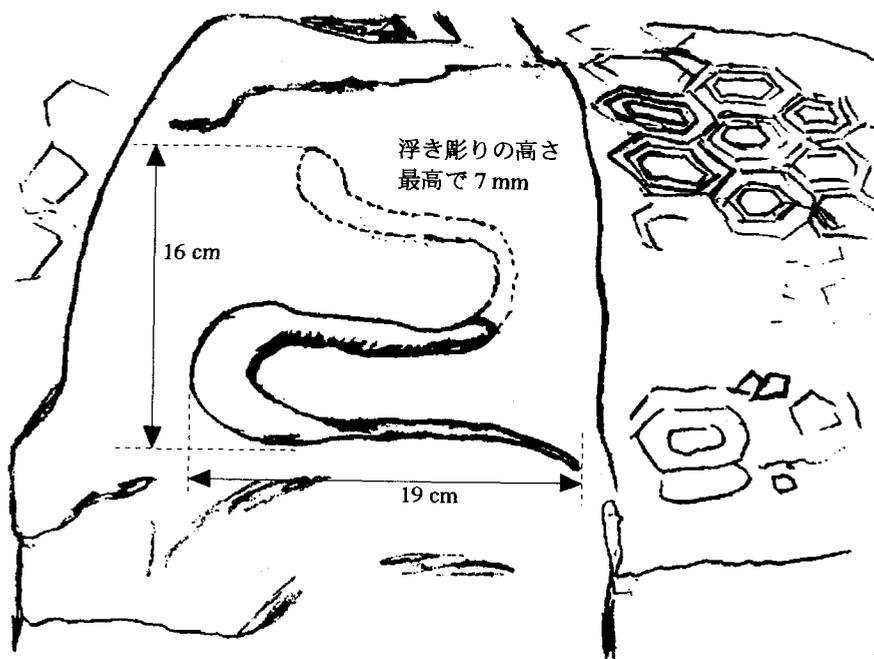
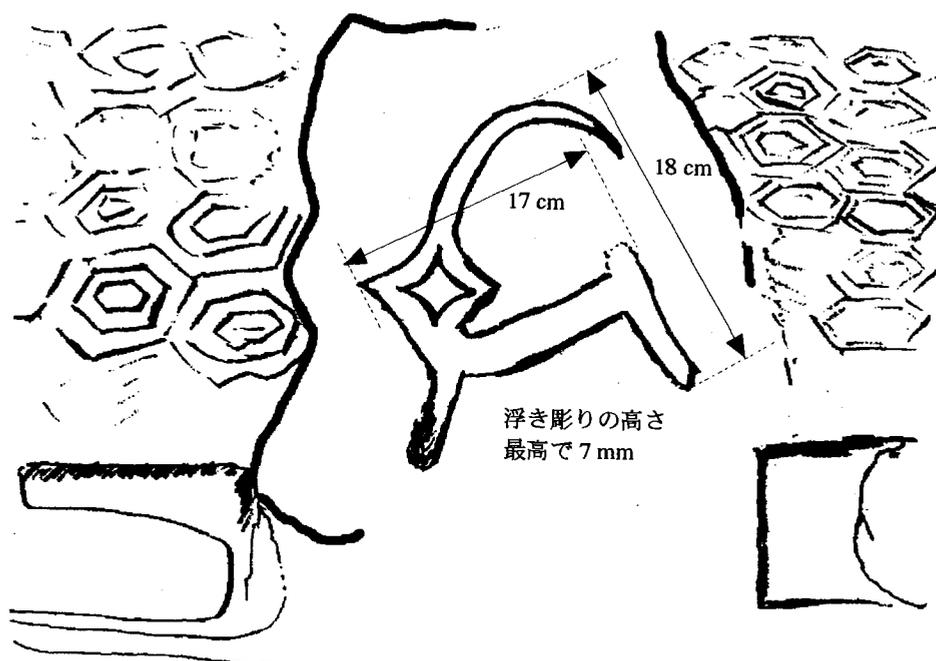


Plate 7b ムハル遺蹟の亀趺のタムガ (大澤)

左脇のへび型タムガ

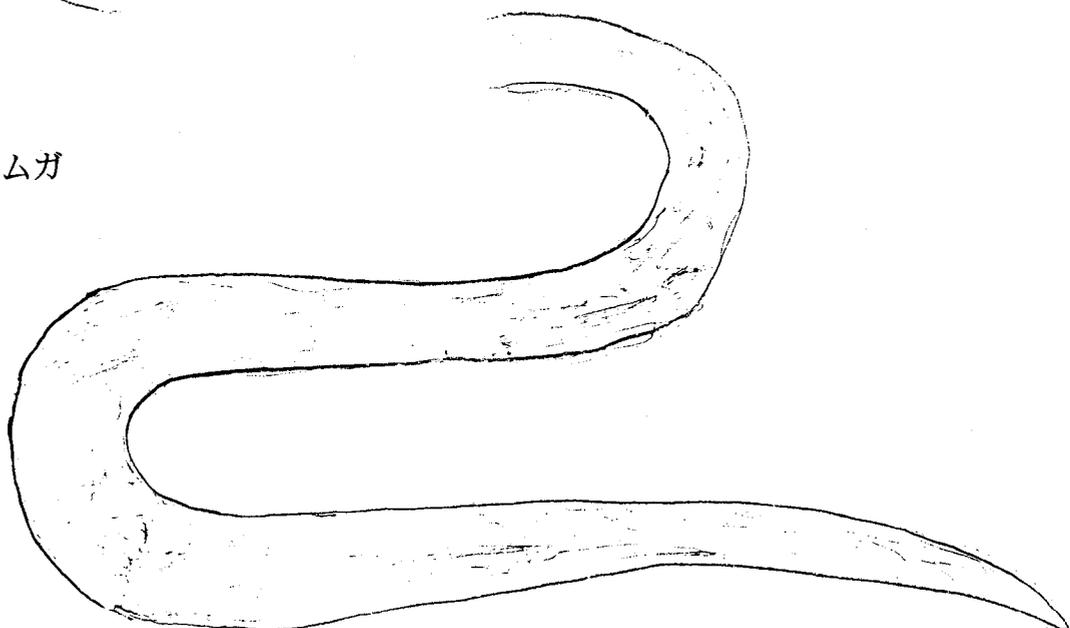


右脇の雄ヤギ型タムガ





左脇のへび型タムガ



右脇の雄ヤギ型タムガ

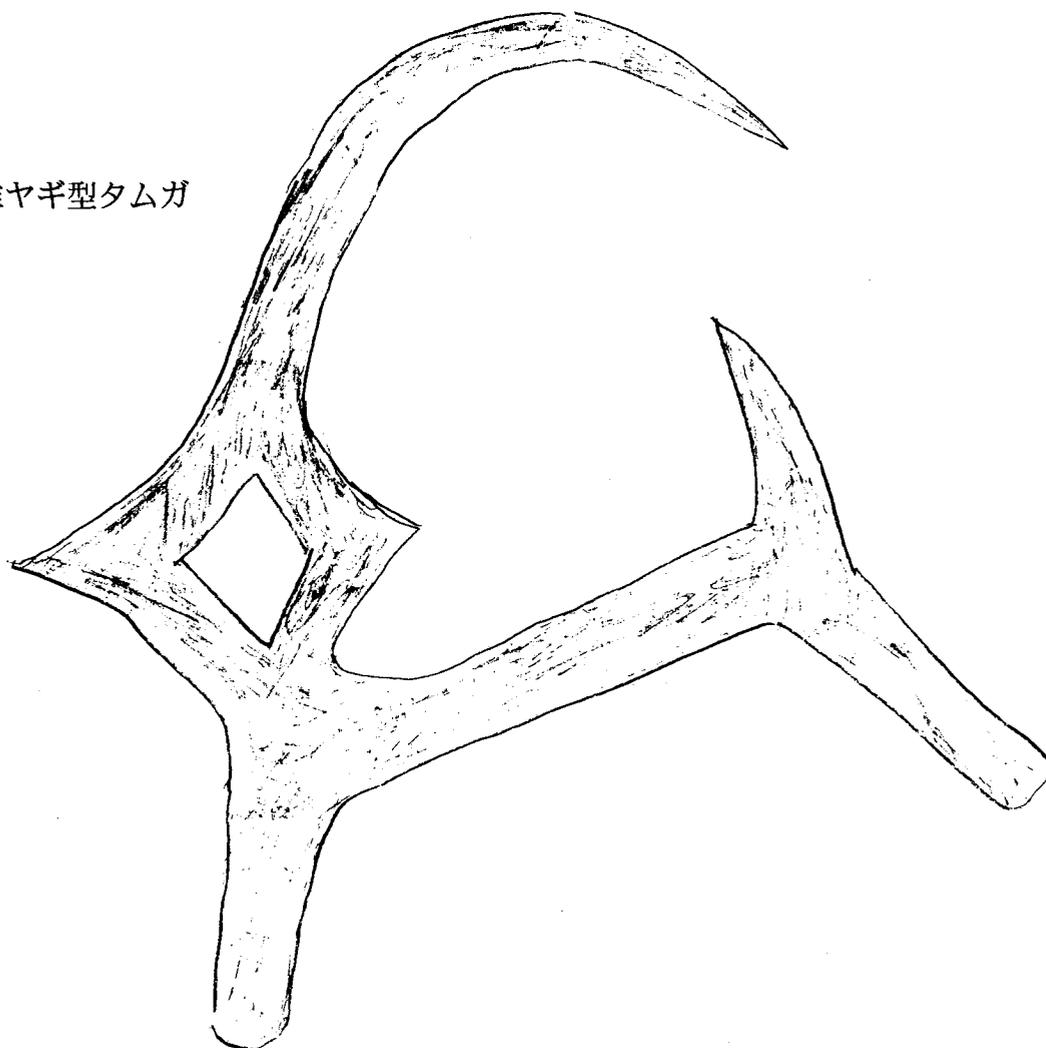


Plate 7d ムハル遺蹟平面図 (Войтов 1996 より引用)

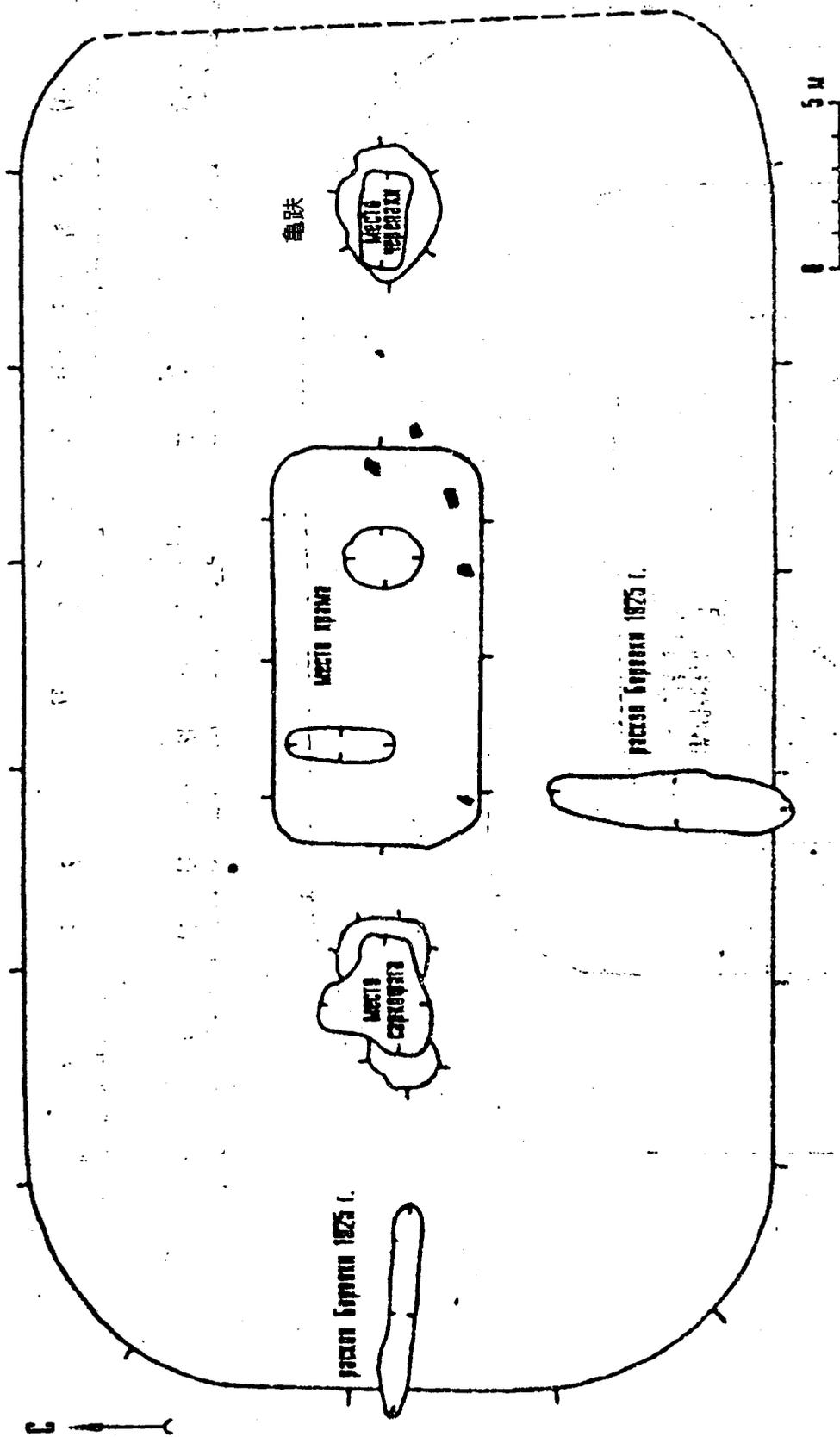
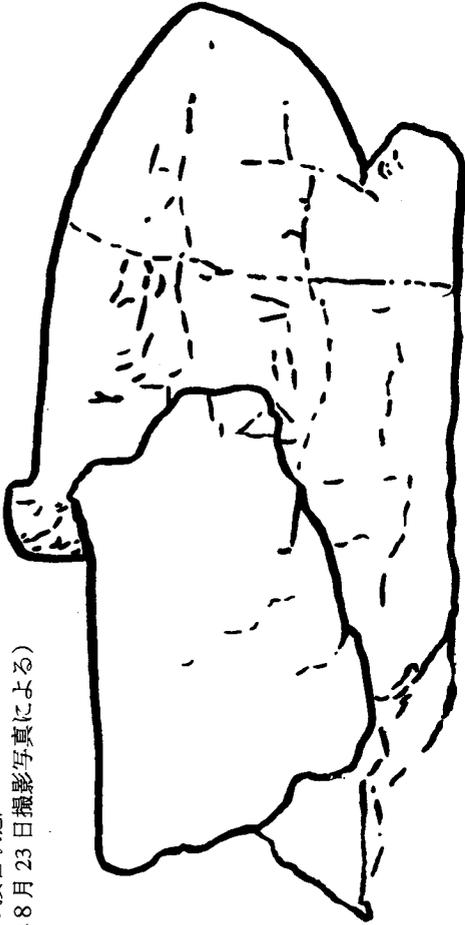


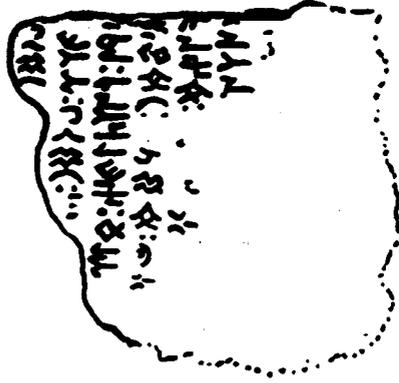
Рис. 15. План Мухарского памятника

Plate 8 キョルメテギン亀趺銘文 (片山)

亀趺断片の接合状態  
(1996年8月23日撮影写真による)



亀趺銘文の模写



亀趺断片の主要計測値

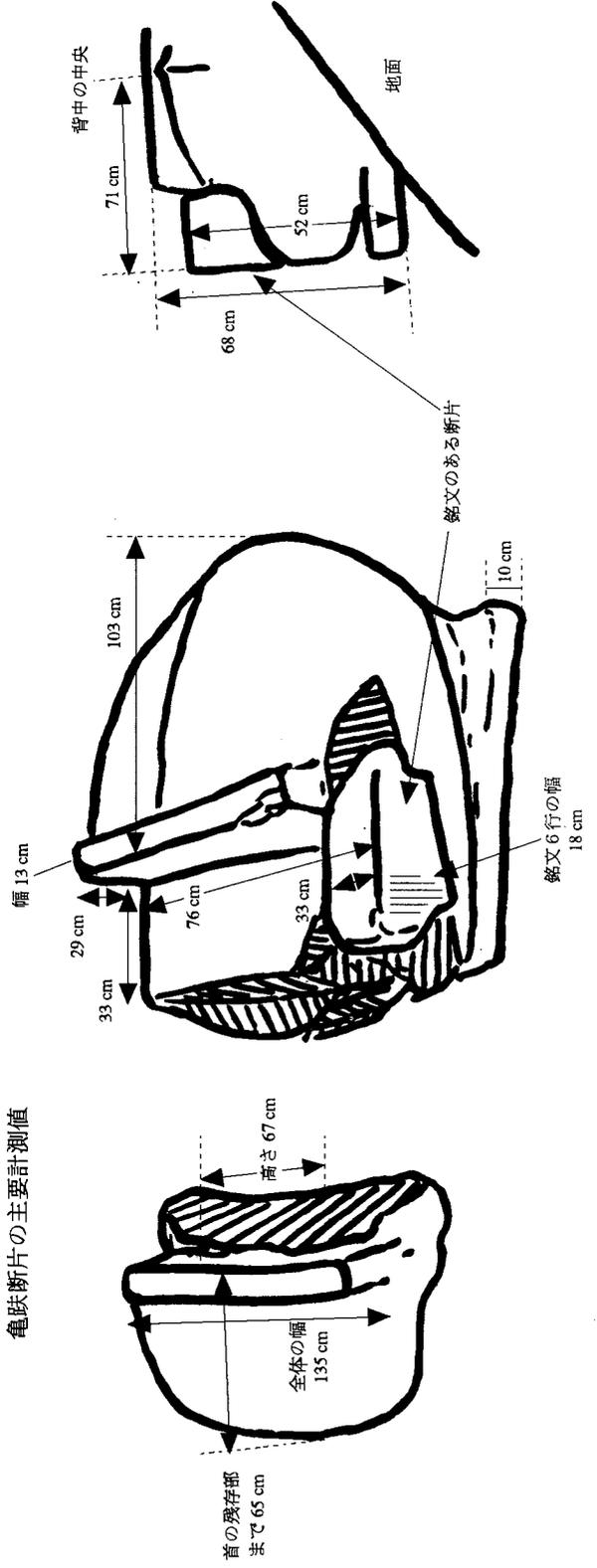
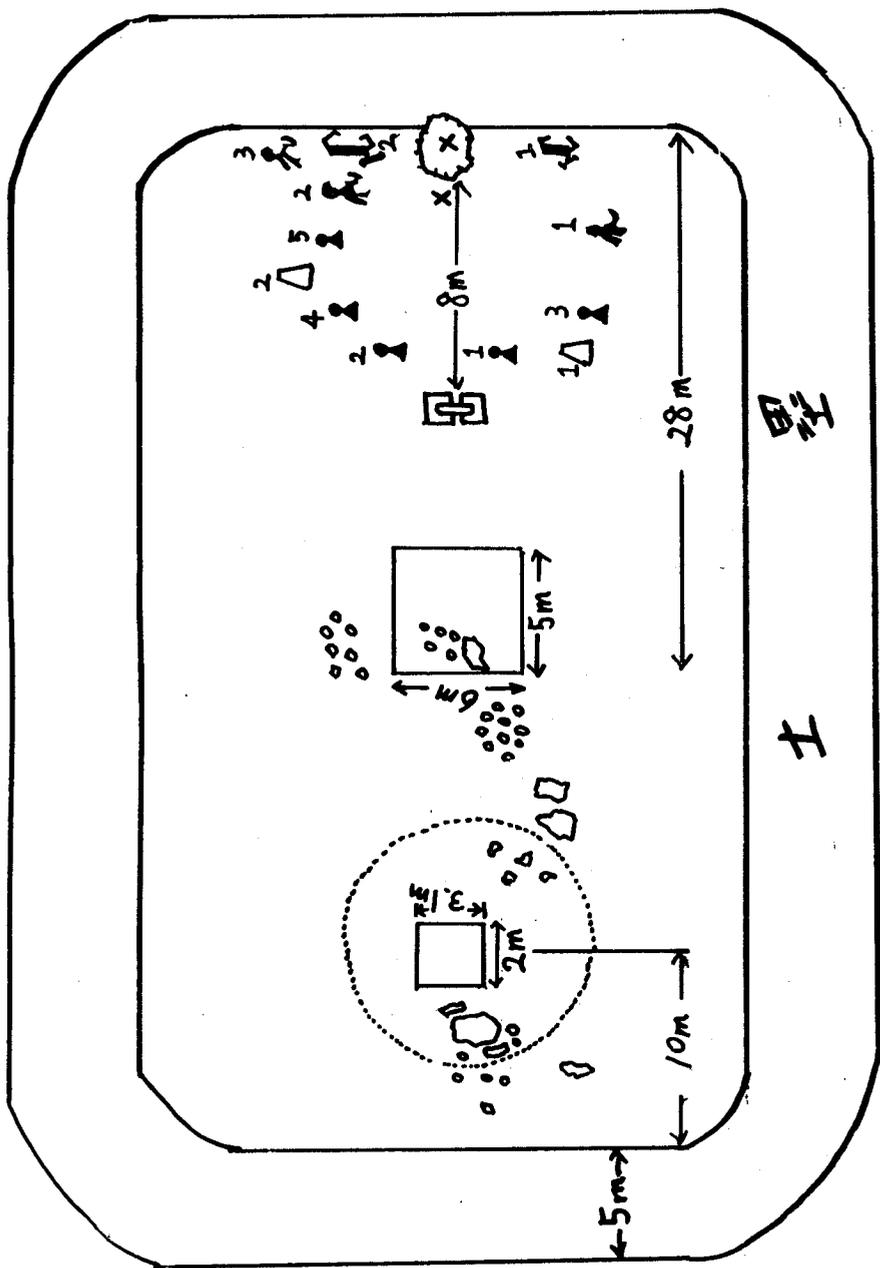


Plate 9a イフ=ホシヨートゥ遺蹟平面図 (大澤)

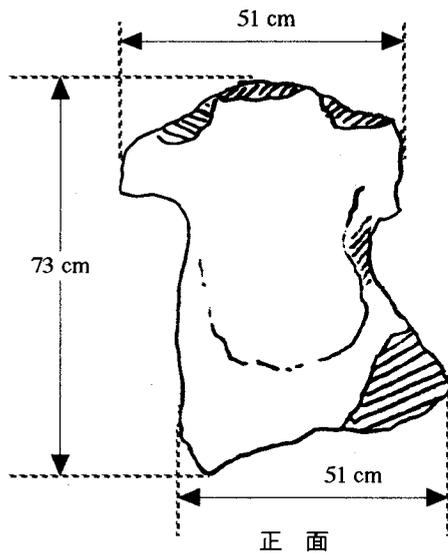


- 穴
- 板石断片
- 交互石断片
- × バルバ石
- △ 石人 (1~5)
- 石羊 (1,2)
- ▲ 石獅子 (1,2,3)
- ▽ 円鏡形断片 (1,2)



Plate 9b イフ=ホショートウ遺蹟の石人 (大澤)

石人 No. 1

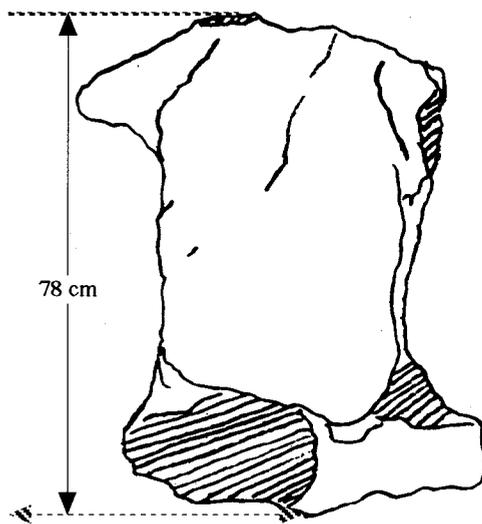


正面

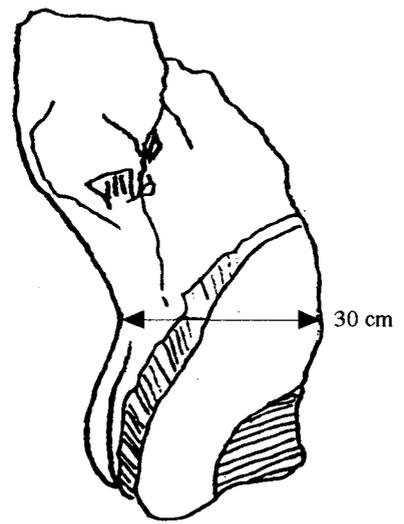


右側面

石人 No. 2

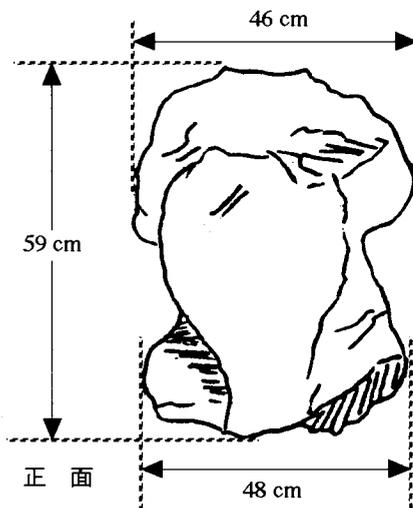


正面



右側面

石人 No. 3



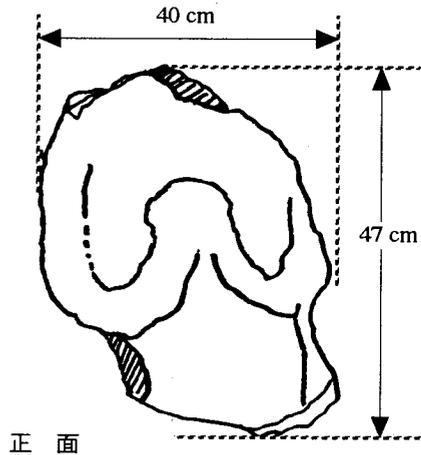
正面



右側面

Plate 9c イフ=ホショートウ遺蹟の石人 (大澤)

石人 No. 4

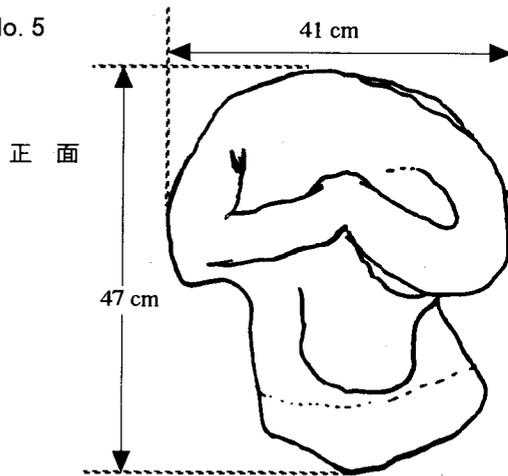


正面

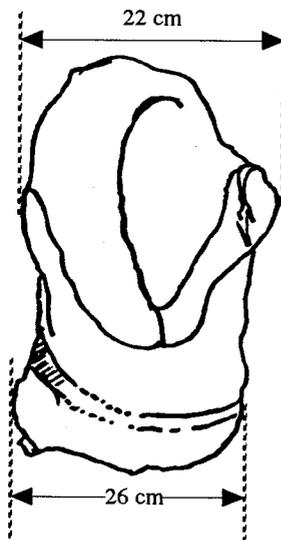


右側面

石人 No. 5

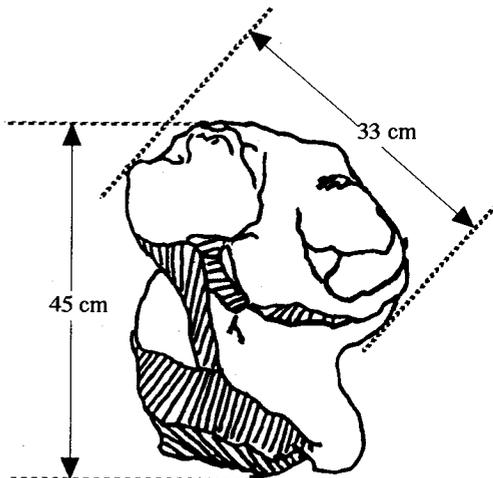


正面

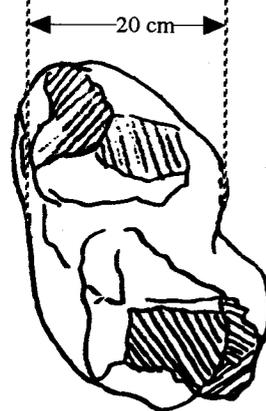


右側面

石人 No. 6



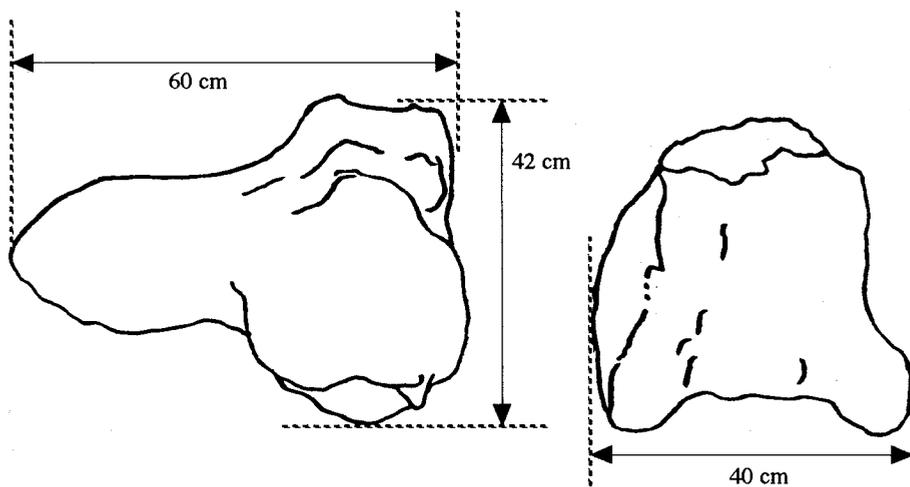
正面



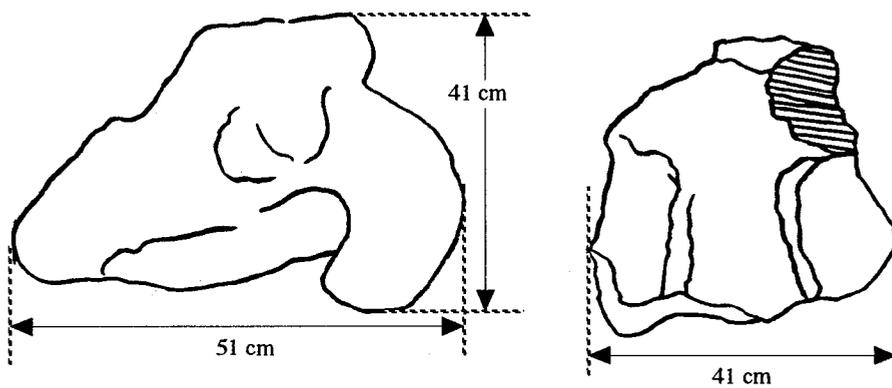
右側面

Plate 9d イフ=ホショートゥ遺蹟の石獅子断片 (大澤)

石獅子 No. 1



石獅子 No. 2



石獅子 No. 3

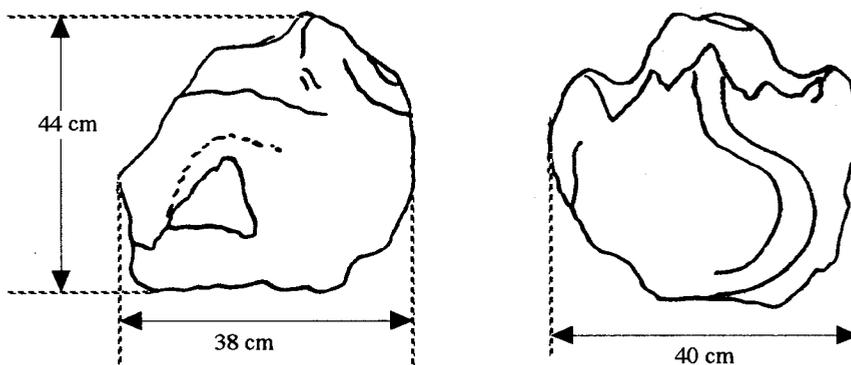


Plate 9e イフ=ホショートウ遺蹟の石羊・円錐形石片（大澤）

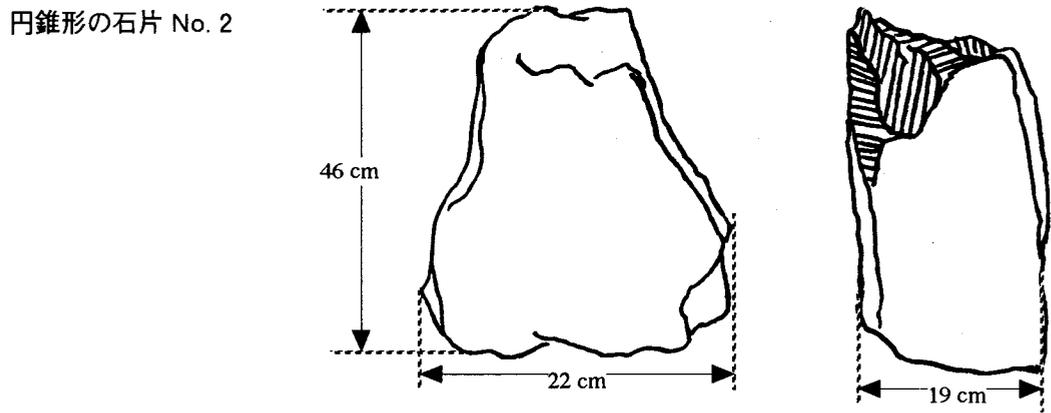
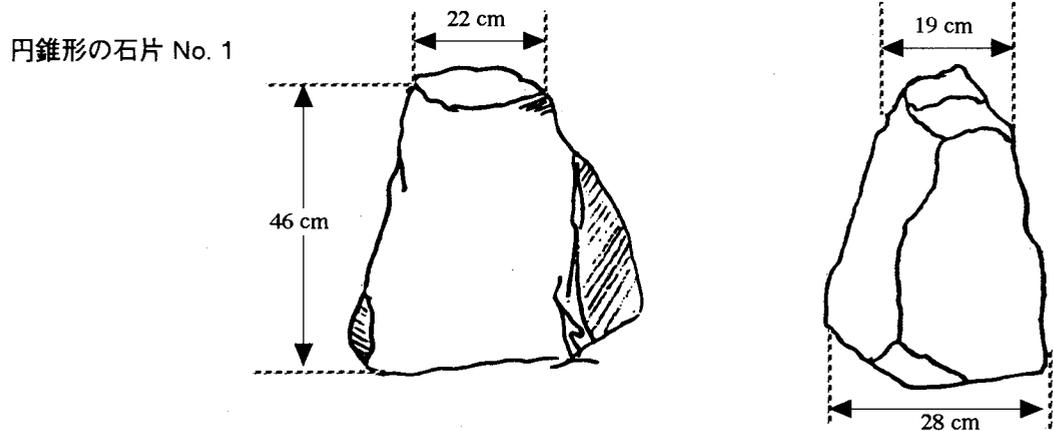
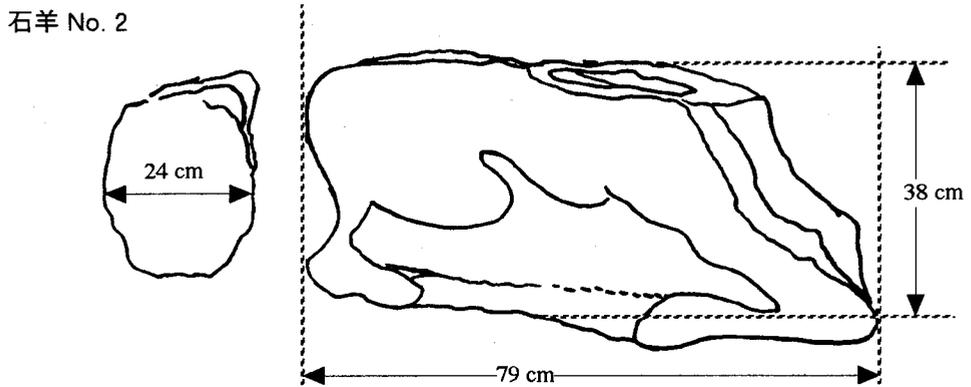
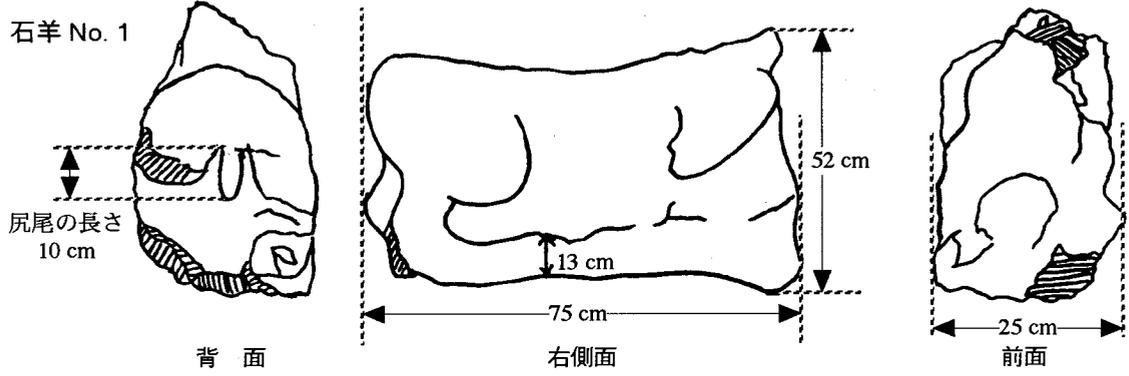
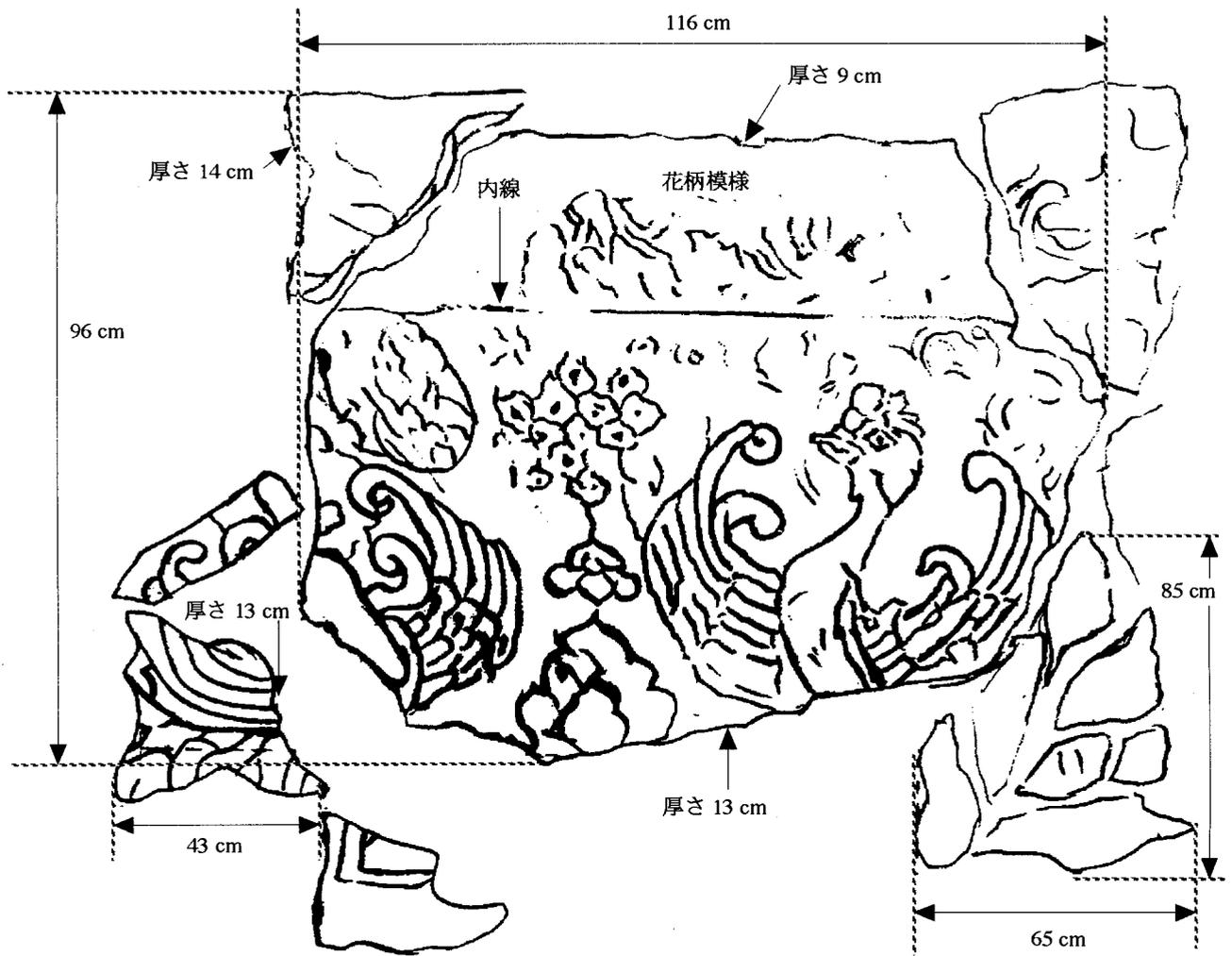


Plate 9f イフ=ホショートウ遺蹟の石槨断片 (大澤)



石槨穴南辺の板石断片

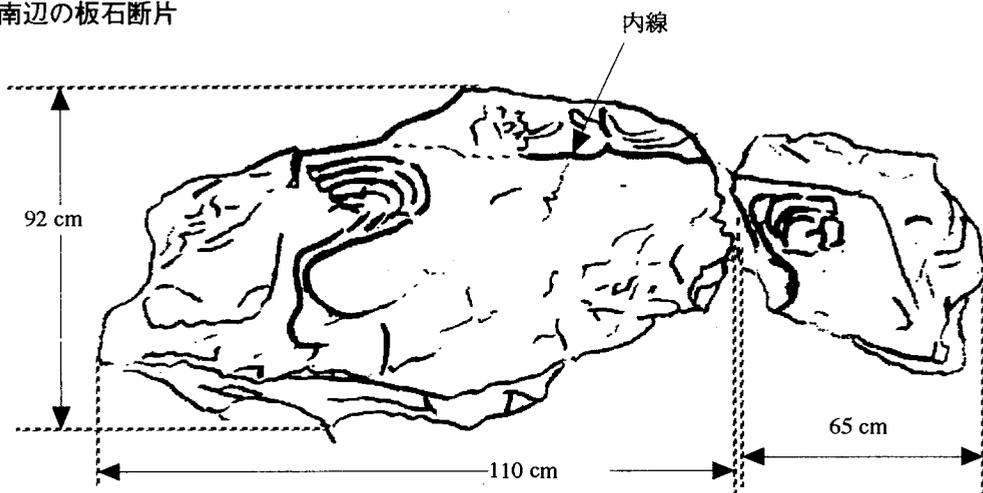
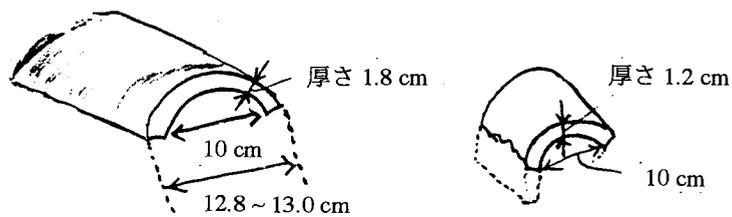
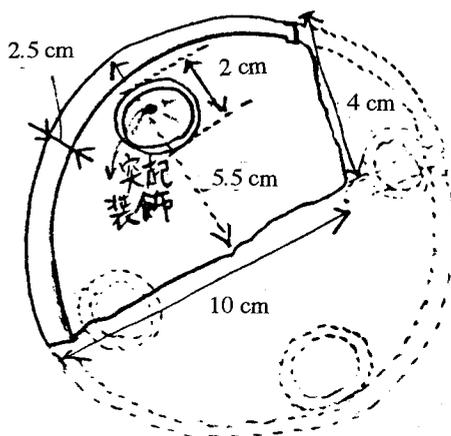


Plate 9g イフ=ホショートウ遺蹟のマウンド中央より採取した瓦・磚 (大澤)

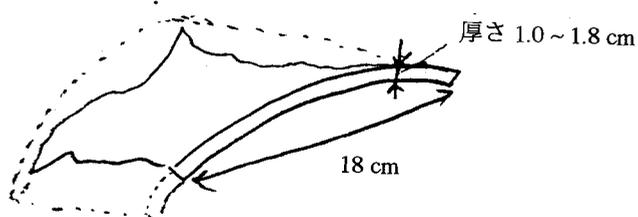
丸瓦



軒丸瓦 (バヤル採取)



平瓦



磚

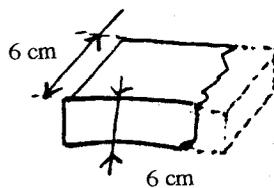
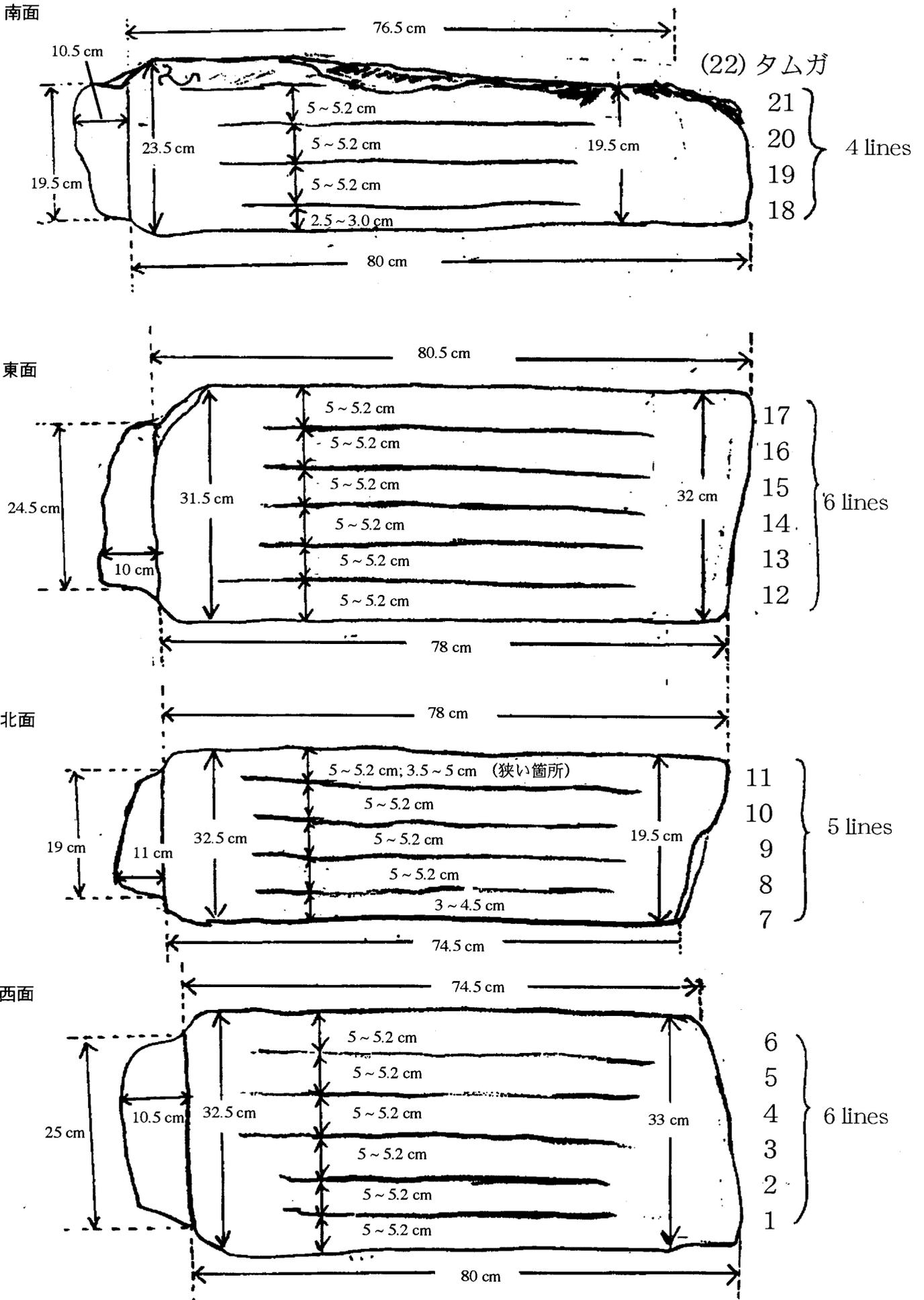


Plate 10a テス碑文計測図 (大澤)





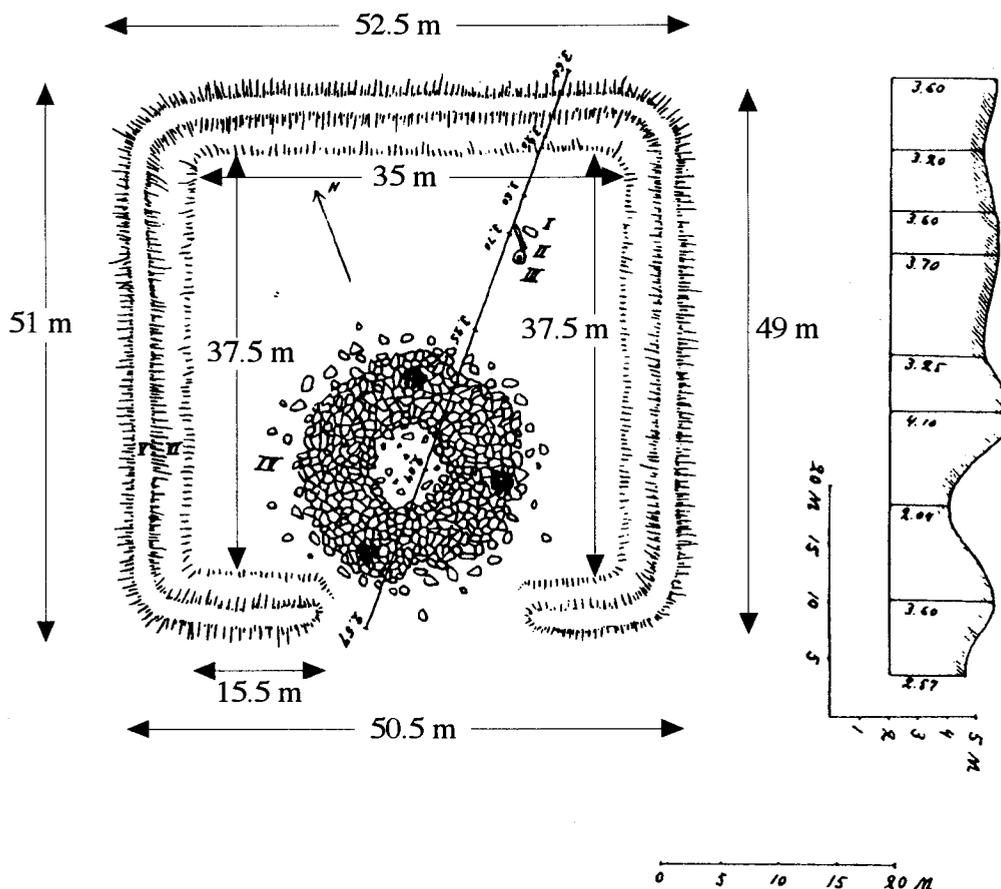


Fig. 3. Das Grab am See Šine-usu. (I) kürzeres Stück des Inschriftensteins, (II) längeres Stück des Inschriftensteins, (III) Sockelstein, (IV) geöffneter Grabhügel, (V) Erdwall, (VI) Wallgraben.

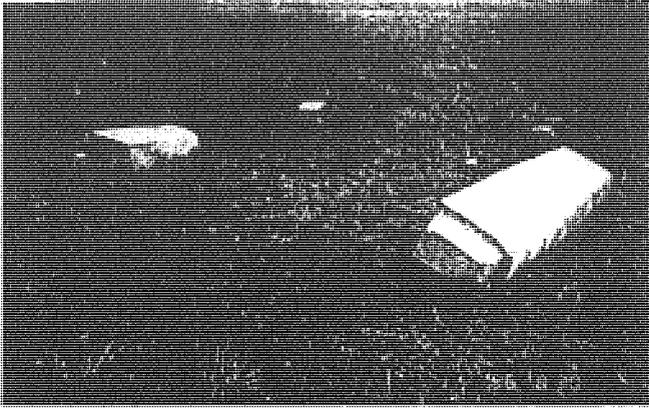
I, II, III の碑石と亀趺の現在地は少しずれている。

IV. 積石塚の盗掘跡の穴の深さ：1.9 m 前後

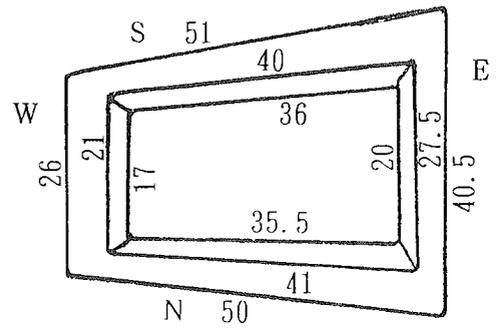
この穴の中央にて GPS 測定：48° 32" N, 102° 12" E, 海拔 1555 m

VI. Wallgraben (周溝) の幅：2~2.5m

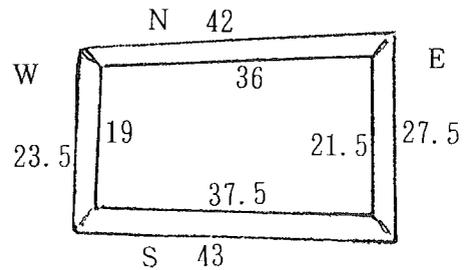
Plate 11b シネウス碑文と亀趺 (森安・片山)



碑文



亀趺



参考 MSSP, p. 60

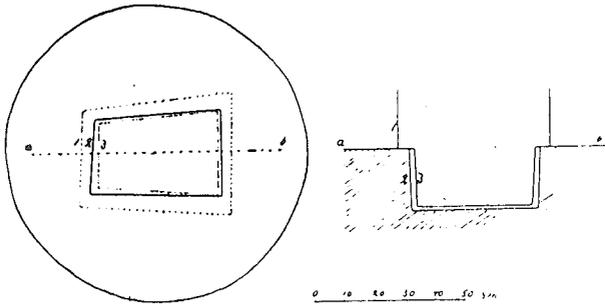
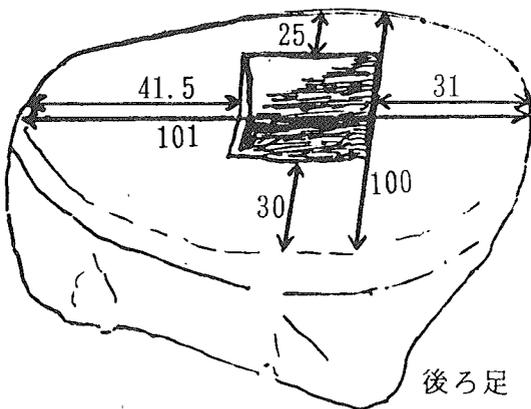
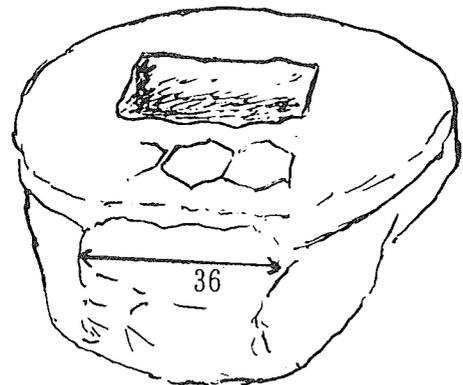


Fig. 4. Sockelkonstruktion des Sine-usu-Denkmal.

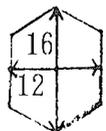
亀趺の計測 ポラロイド (森安) からトレース



後ろ足



甲羅下での周囲316 亀甲



首の部分の高さ41、甲羅の厚さ7~8、後部の高さ43

(計測：森安、作図：片山)

Plate 11c シネウス碑文の亀趺 (БАР)

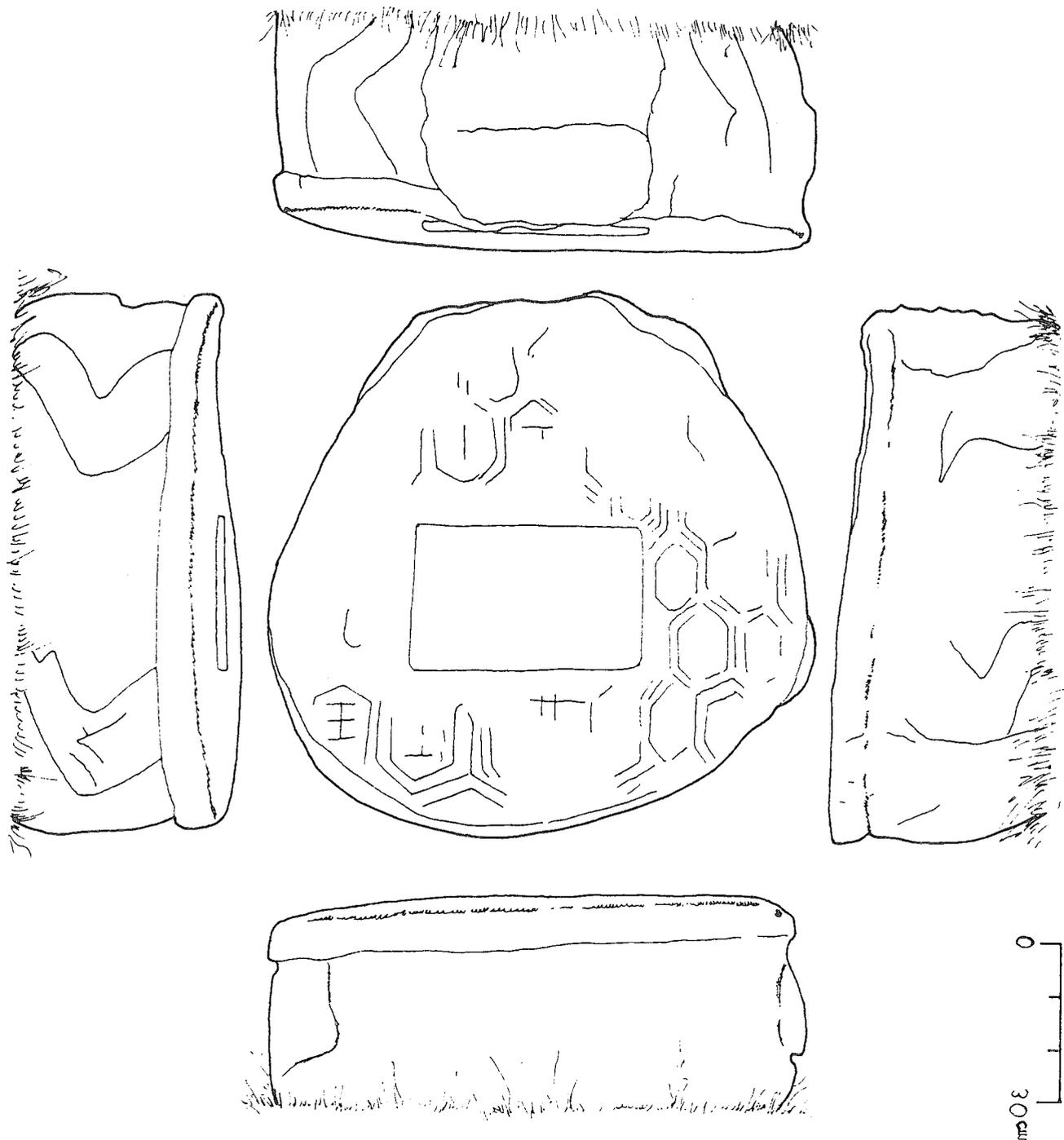
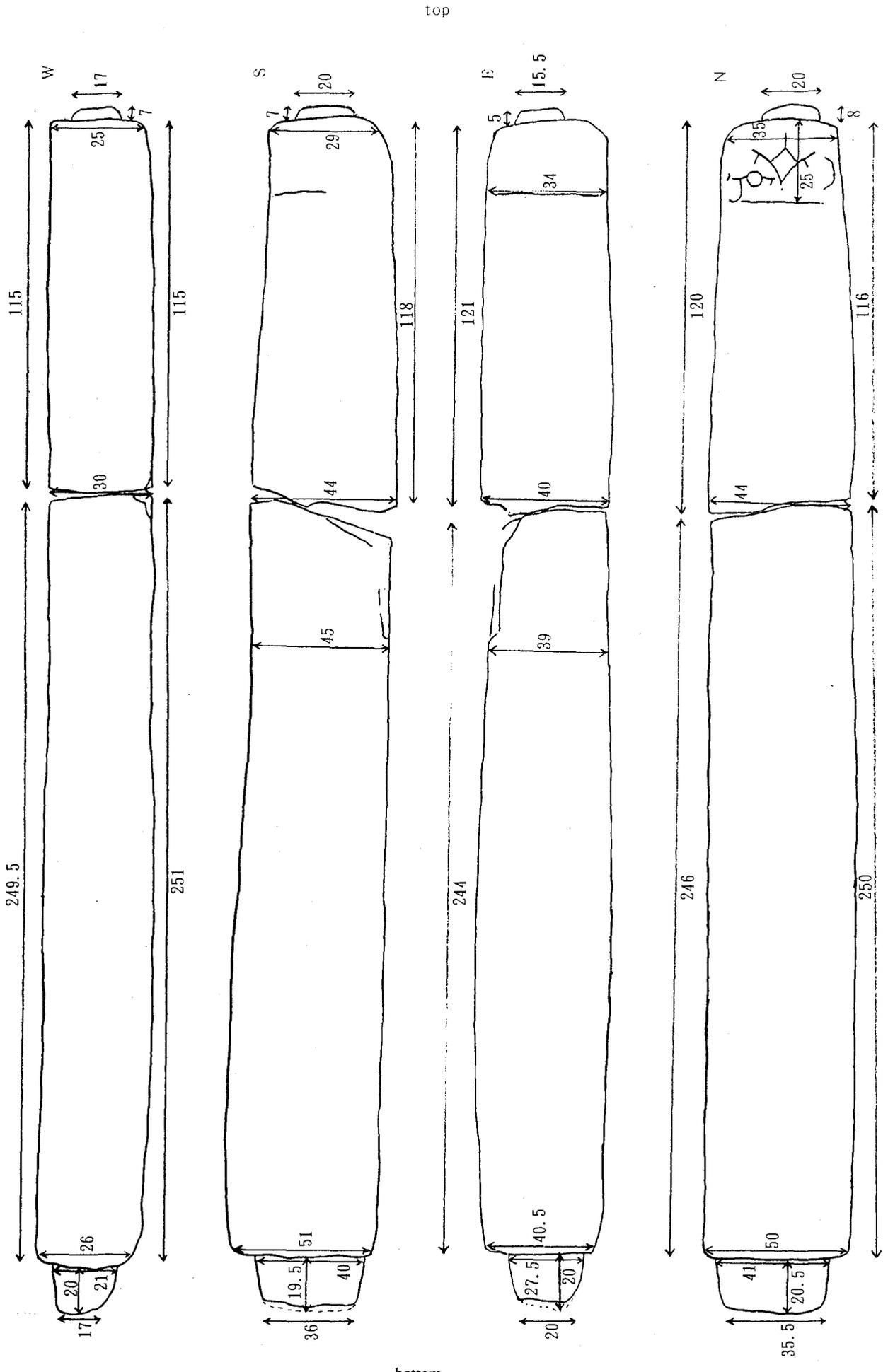


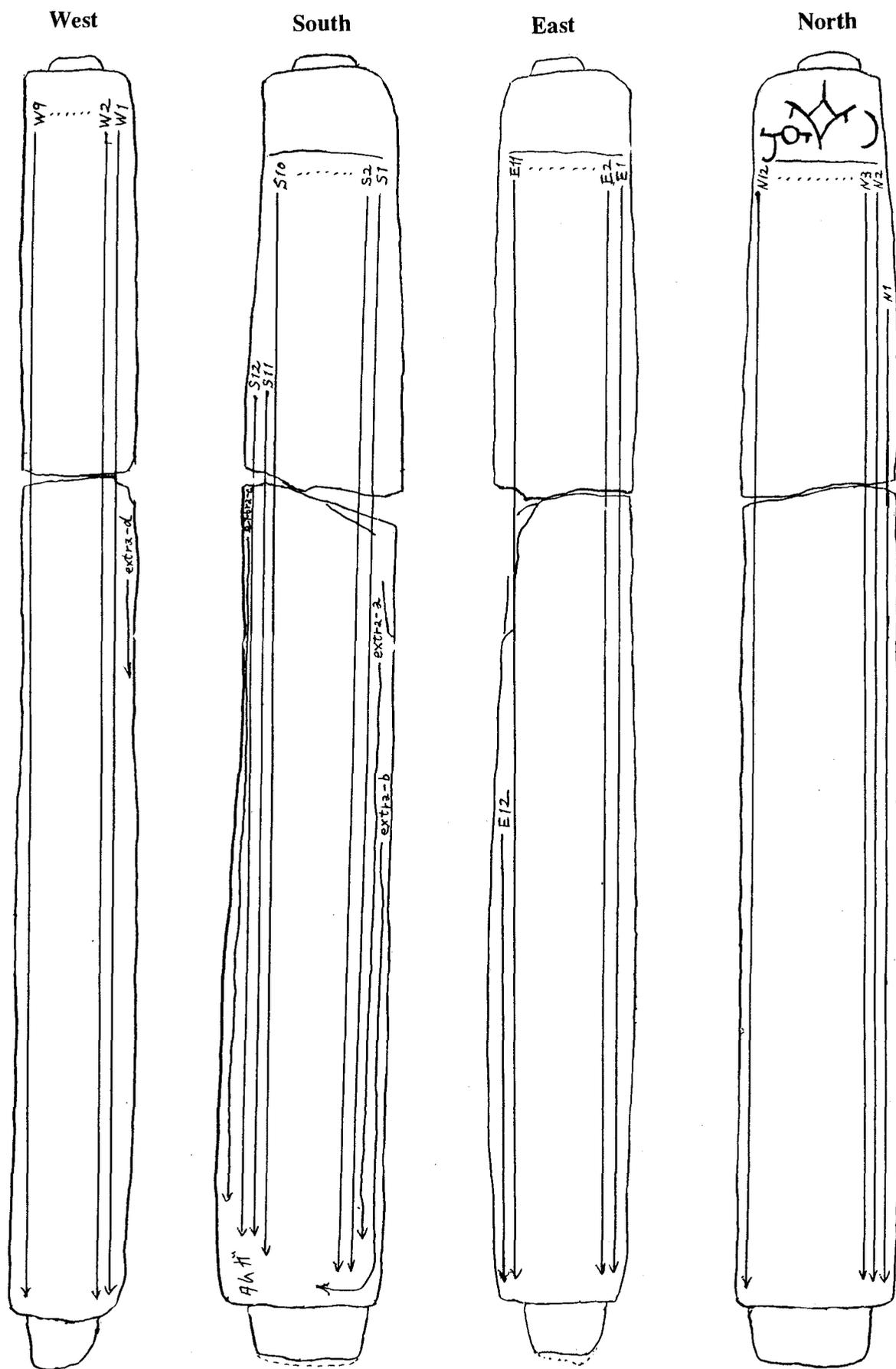
Plate 11d シネウス碑文の計測図 (森安・片山)



計測：森安，作図：片山

単位：cm (フィンランド隊の数値と一部異なる箇所があるがそのままとした。 Cf. MSSP, p. 60)

Plate 11e シネウス碑文の行の進み方 (森安)



N1 → N12 → E1 → E12 → S1 → S12 → W1 → W9; extra-a, extra-b; extra-c → extra-d

Plate 12a バイバリック遺蹟全体平面図 (白石)

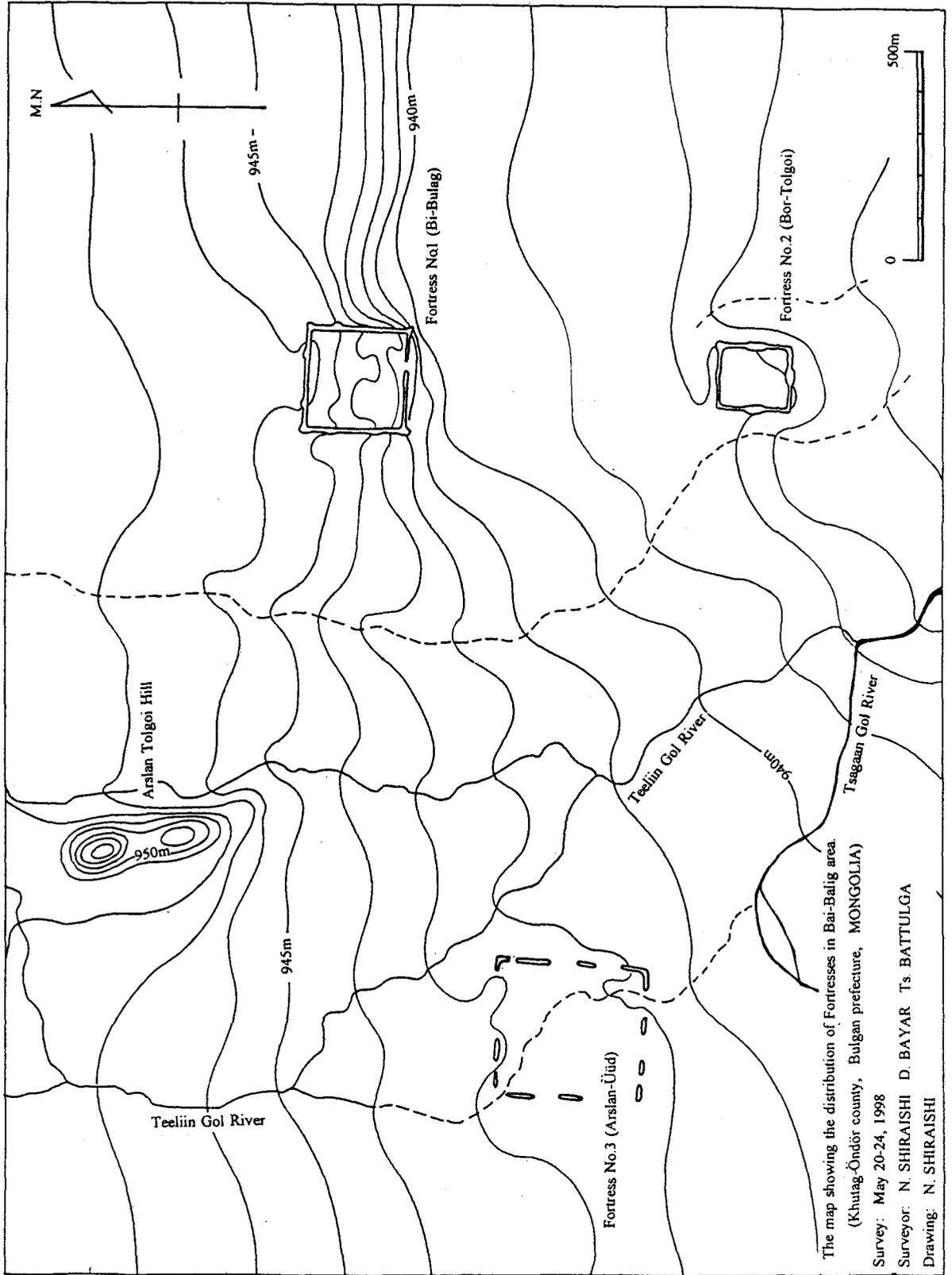
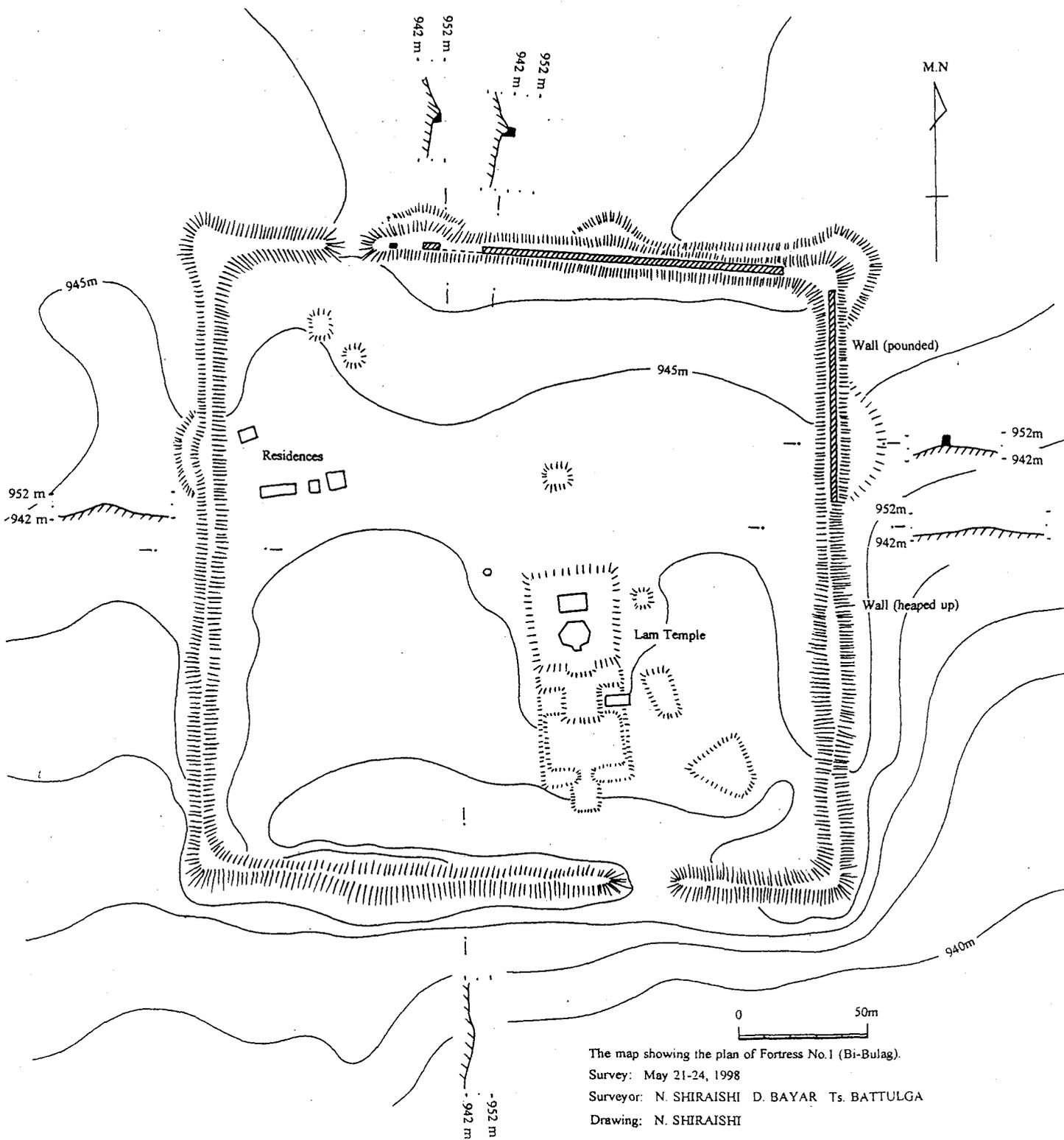
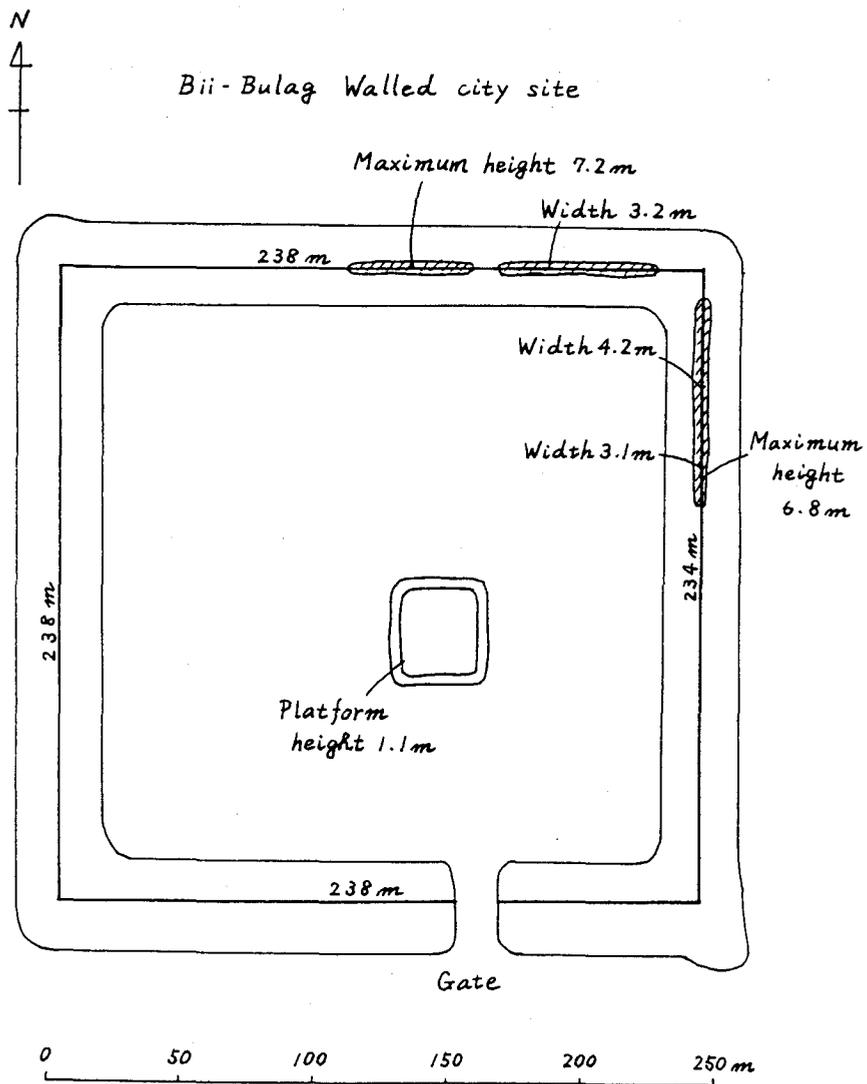


Plate 12b バイバリク遺蹟第一城址平面図 (白石)

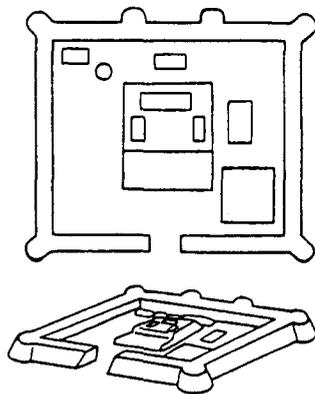


The map showing the plan of Fortress No.1 (Bi-Bulag).  
 Survey: May 21-24, 1998  
 Surveyor: N. SHIRAISHI D. BAYAR Ts. BATTULGA  
 Drawing: N. SHIRAISHI

Plate 12c バイバリク遺蹟第一城址平面図 (林)



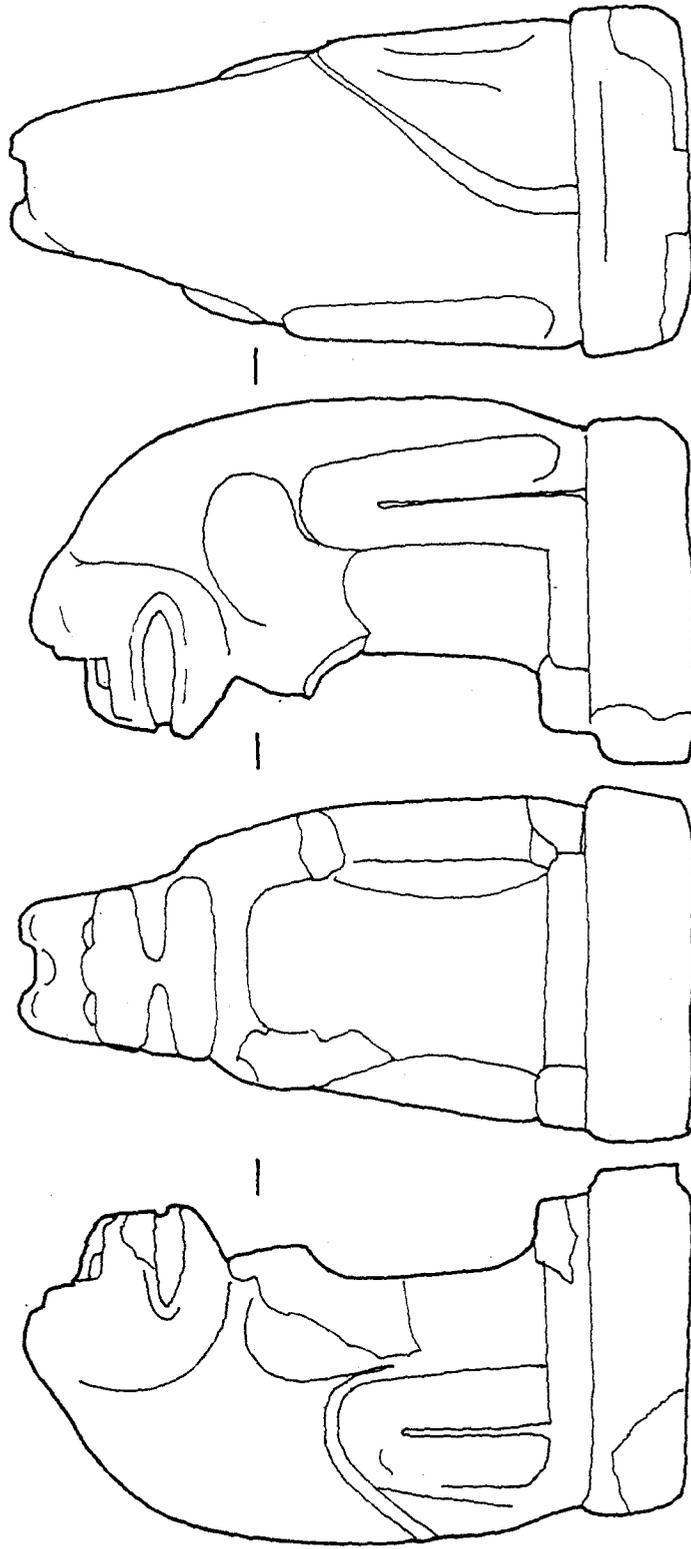
 well-preserved wall



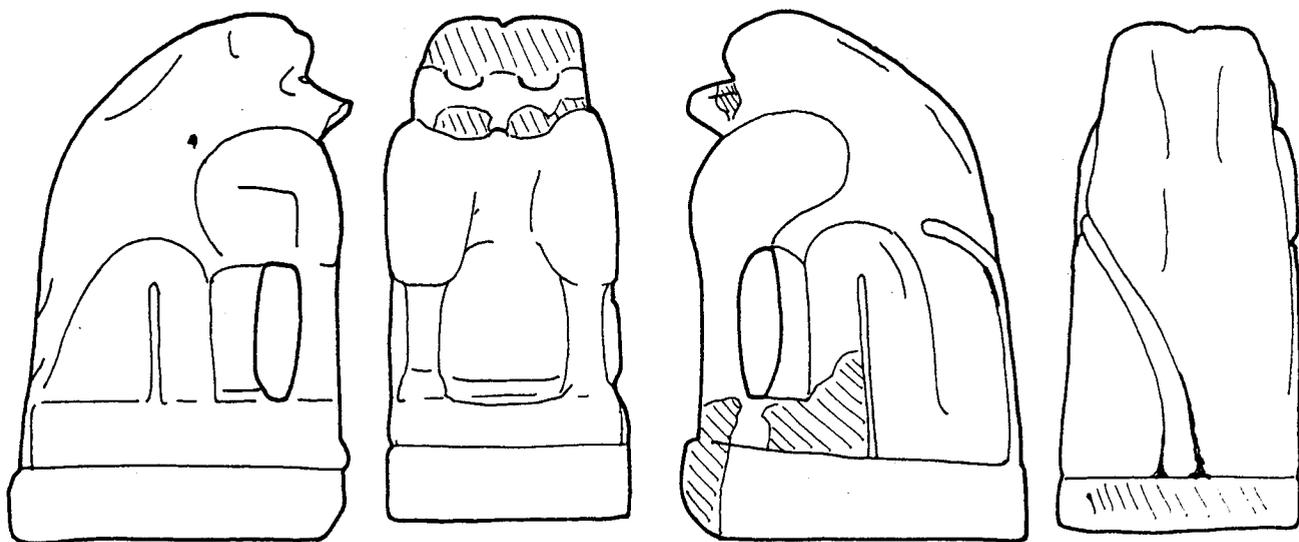
バイバリク平面図と推定俯瞰図  
(Худяков 1990, fig. 1)

Plate 12d バイバリク遺蹟の石獅子 (BARIK)

1



2



3

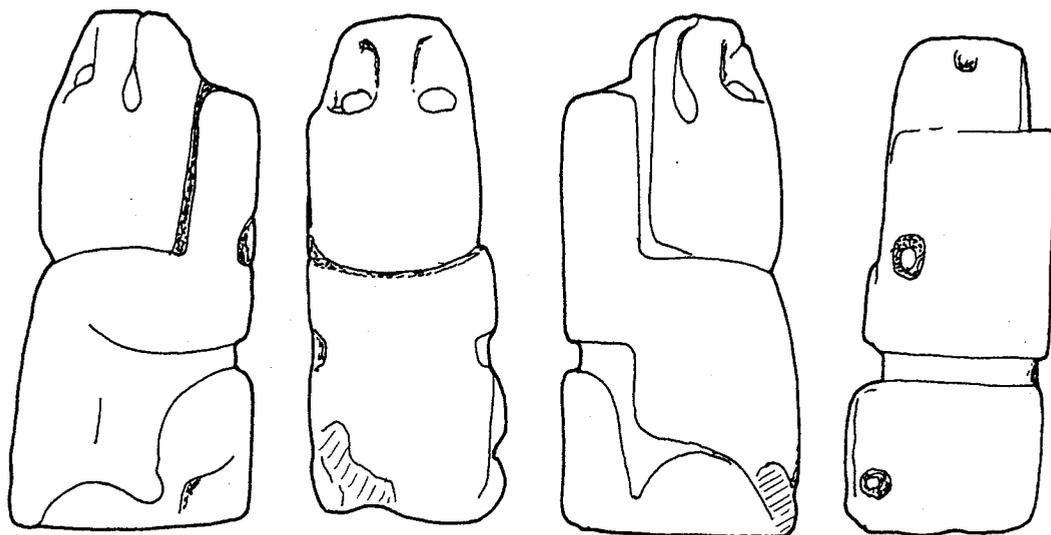
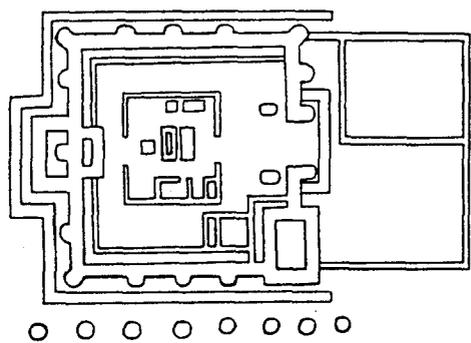
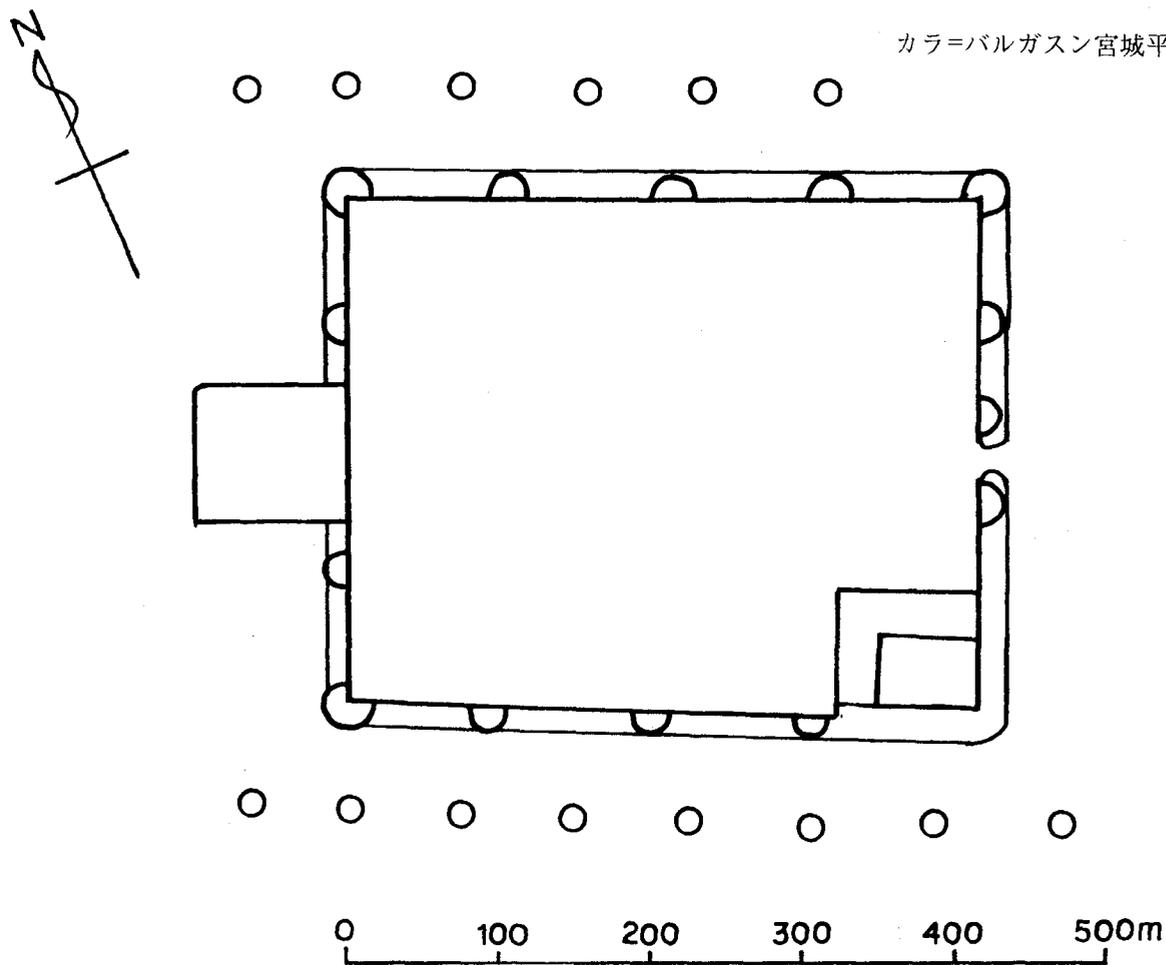
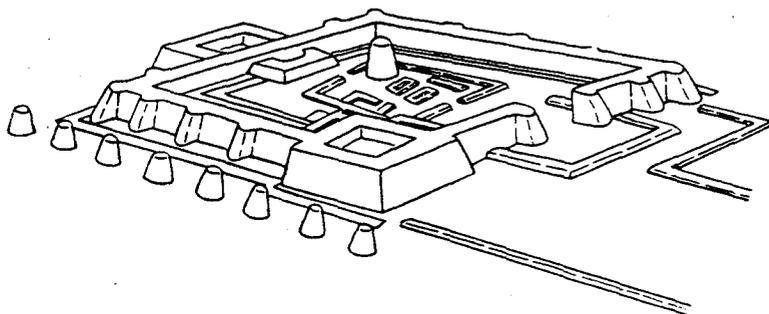


Plate 13a カラ=バルガスン宮城遺蹟

カラ=バルガスン宮城平面図 (林)



カラ=バルガスン城塞平面図  
(Худяков 1990, fig. 1)



カラ=バルガスン城塞 (南東からの推定俯瞰図)  
(Худяков 1982, fig. 1)

Atlas I, pl. XXVII-2 に数値を記入。  
ビチェース隊の数値が小さいのは、  
城塞の四隅の一番高い部分を基点と  
して計測したためと考えられる。

# ПЛАНЪ

развалини Дворца

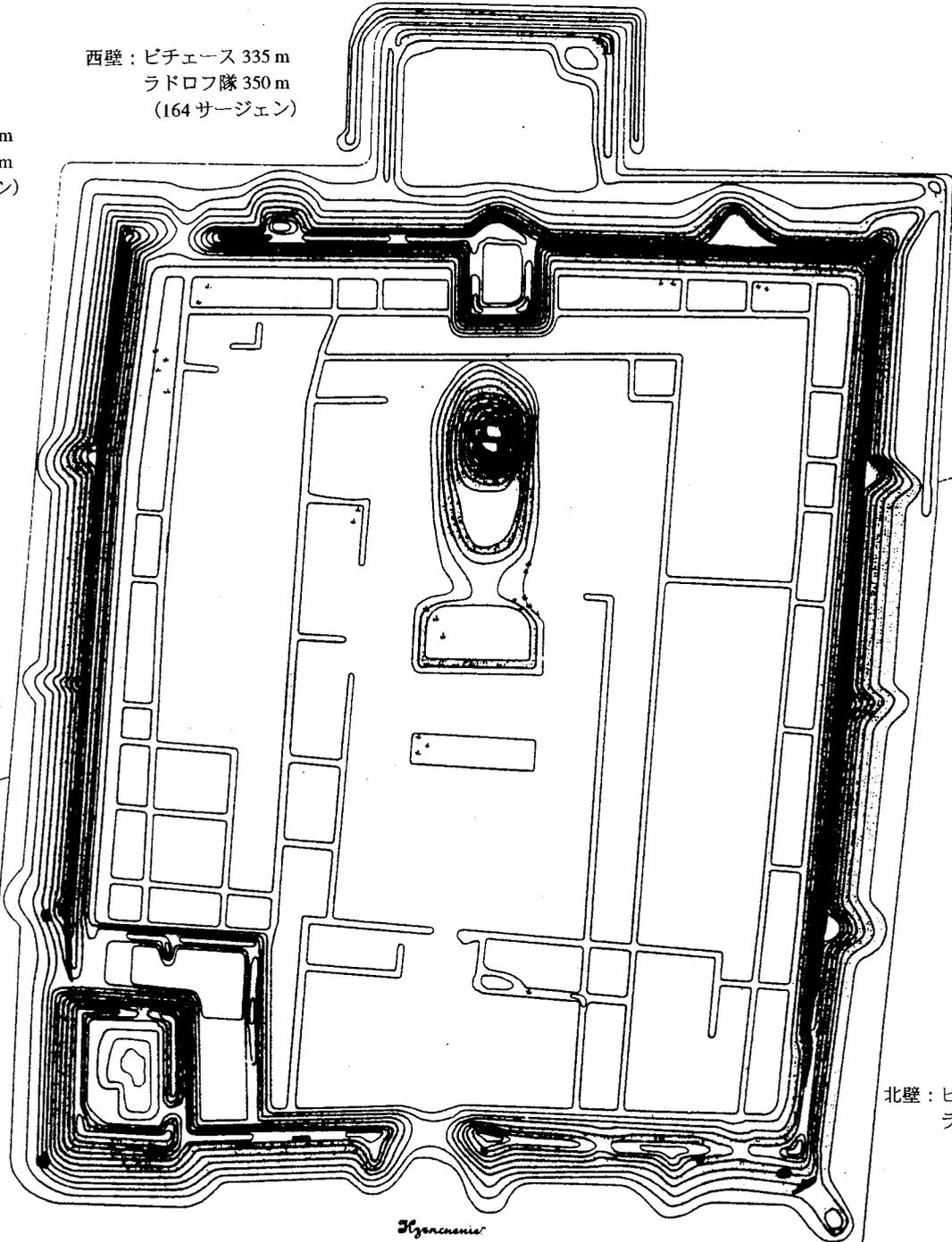
## ХАРА-БАЛГАСУНА

СНЯТЪ ВЪ 1891г

0 20 40 単位サーжен (1サーжен = 2.134 m)

西壁 : ビチェース 335 m  
ラドロフ隊 350 m  
(164 サーжен)

南壁 : ビチェース 413 m  
ラドロフ隊 478 m  
(224 サーжен)



北壁 : ビチェース 424 m  
ラドロフ隊 448 m  
(210 サーжен)

東壁 : ビチェース 337 m  
ラドロフ隊 341 m  
(160 サーжен)

- Знаменіе
- Дълъ и височина ориентации в 0.5 метри 城牆 (等高線は 0.5サーжен)
  - Силно видими валии около 0.5 метри височина かつての城牆の遺構 ( " )
  - Криволинейна стена или обломки на стени 粘土張りの壁と建物の、無事に残っていた部分
  - Стена с дупчурани стъпки
  - Пространство между реди かつての壕の徴候

Снимано Килиманджаро Музей

Plate 14a カラ=バルガスン碑文計測値及び模式図

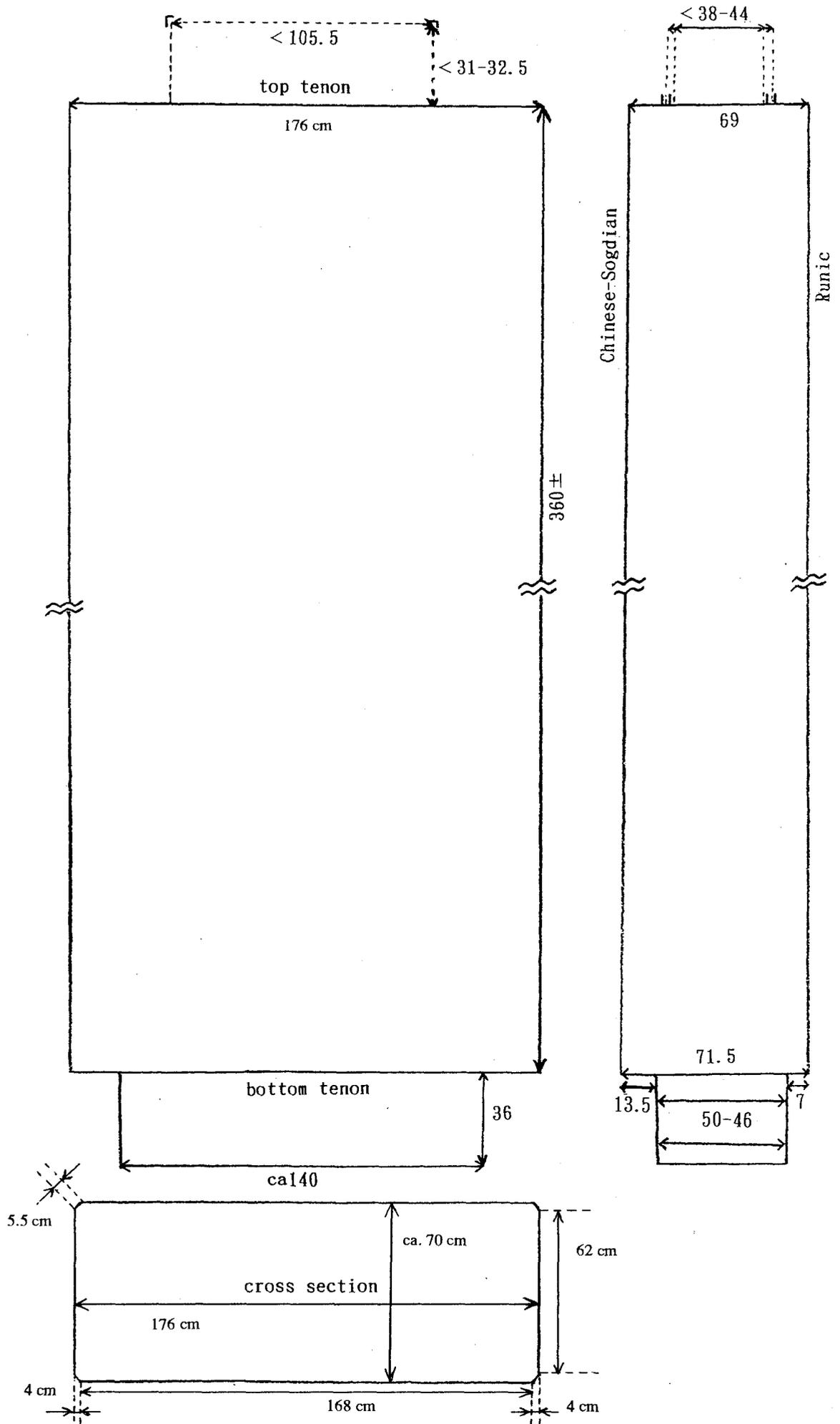
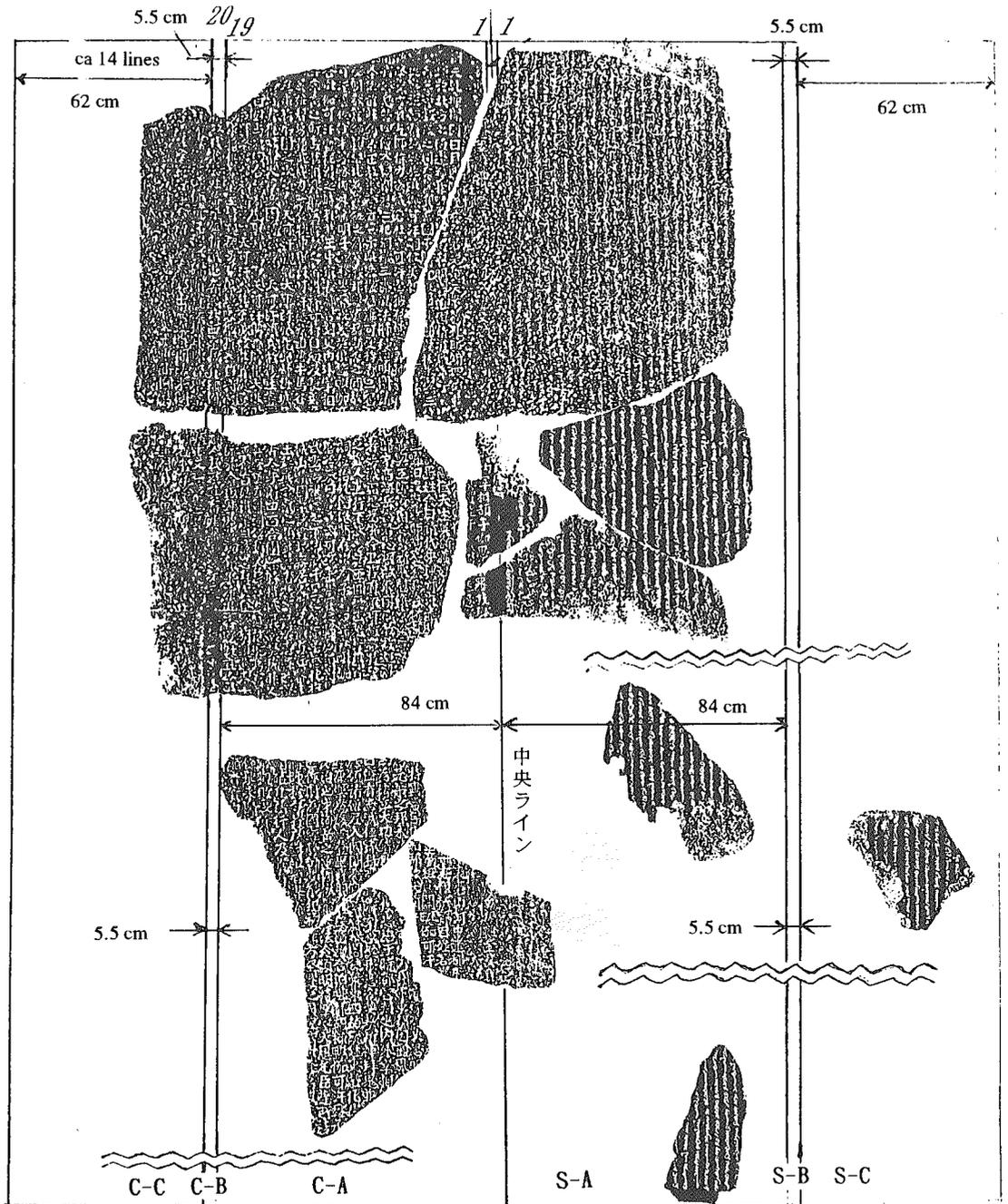
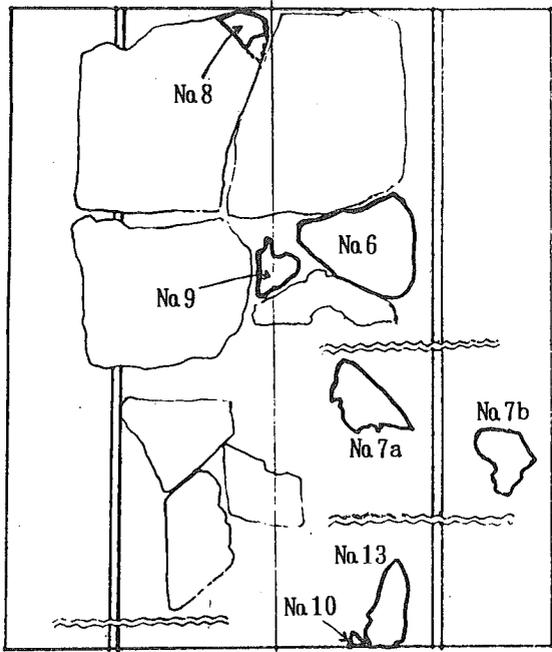


Plate 14b カラ=バルガスン碑文断片残存状況，漢文・ソグド面



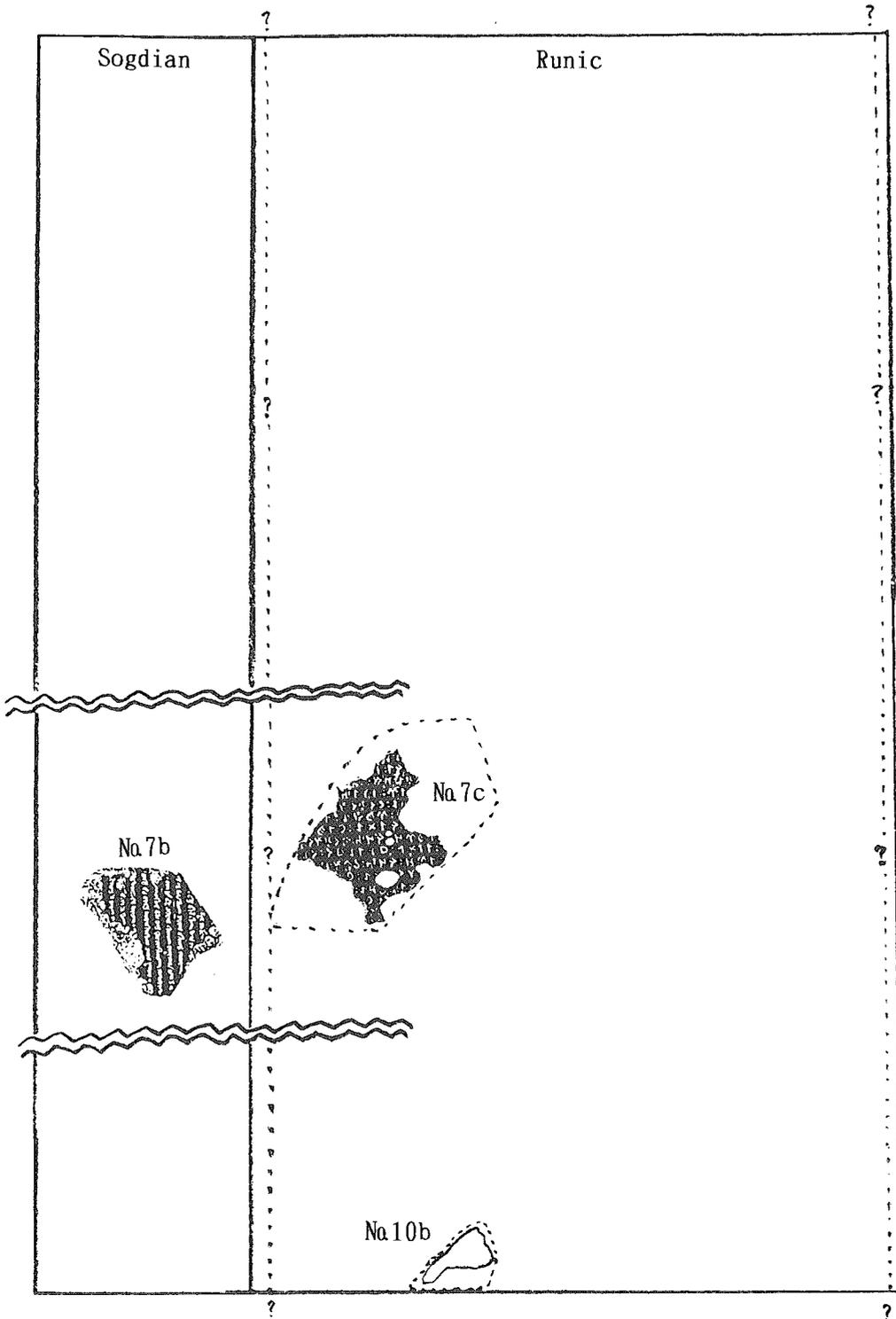
ラドロフの原拓・修正拓の位置関係



今回調査の断片

Chinese: front 19, edge 1, side ca. 14  
 total ca. 34 distance between lines 4.4 ~ 4.6 cm  
 Sogdian: front ca. 27, edge 1, side ca. 17  
 total ca. 45 distance between lines

Plate 14c カラ=バルガスン碑文断片残存状況, ルーン文字面



88-90 letters per line.  
cf. 10-9 letters per 20 cm.

Other unplaced stones

- Na 5 (Chinese): somewhere in C-A (bottom?)
- Na 12 (Runic)
- Na 14 (Runic)

\*Stone No. 5 is not to be from C-C side, because it is larger than 70 cm in width.

Plate 14d カラ=バルガスン碑文, Atlas 拓本 漢文・ソグド面

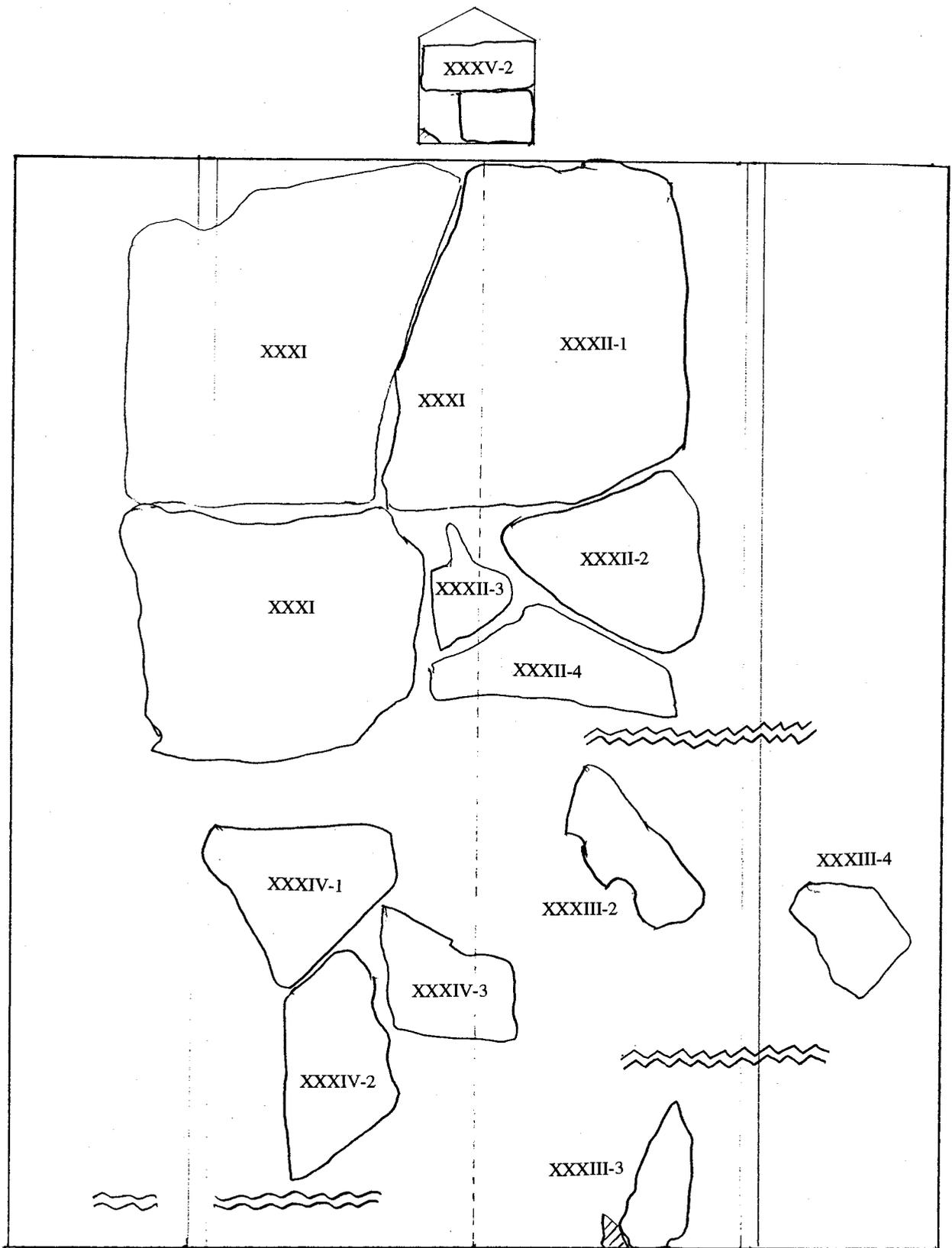
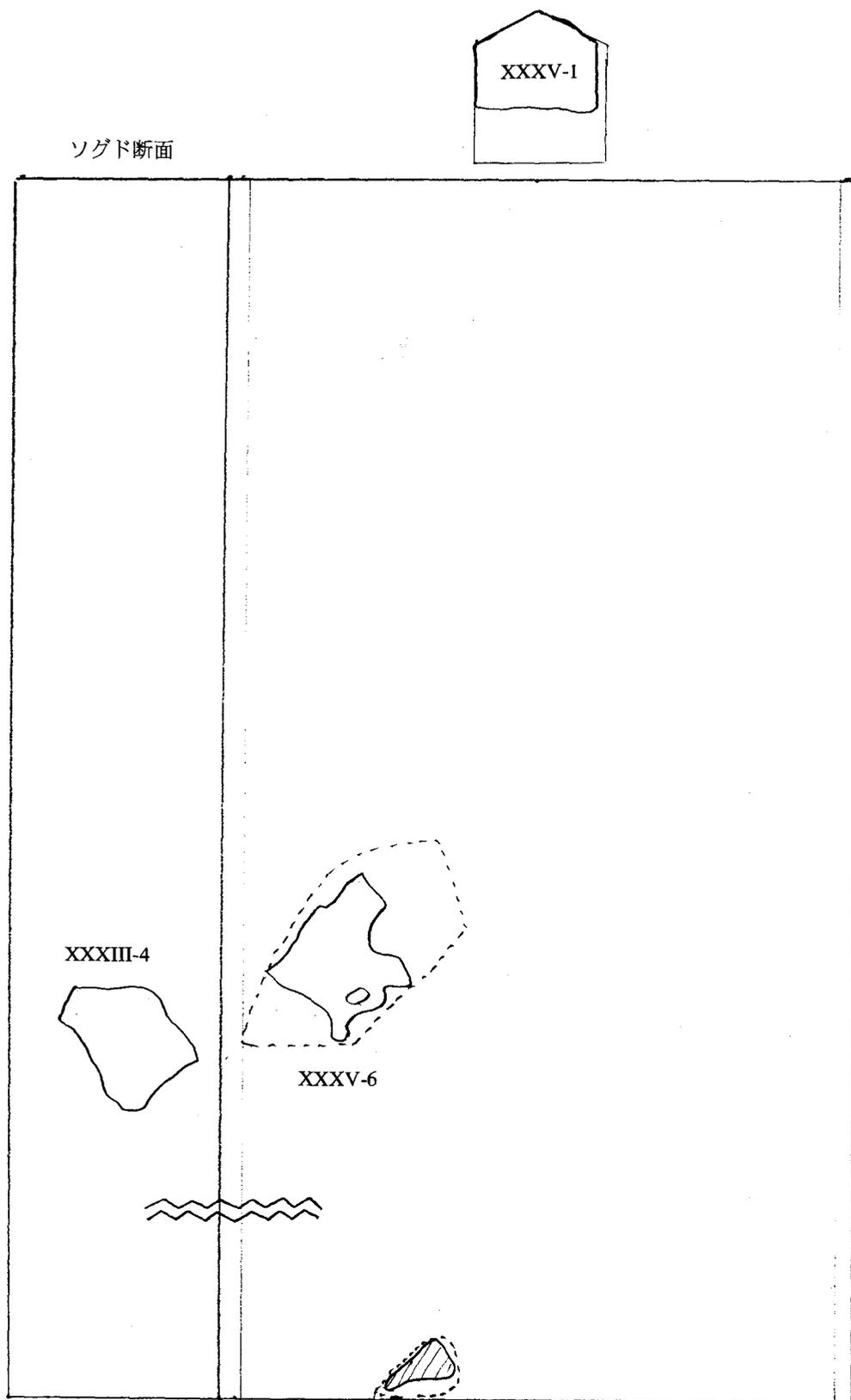
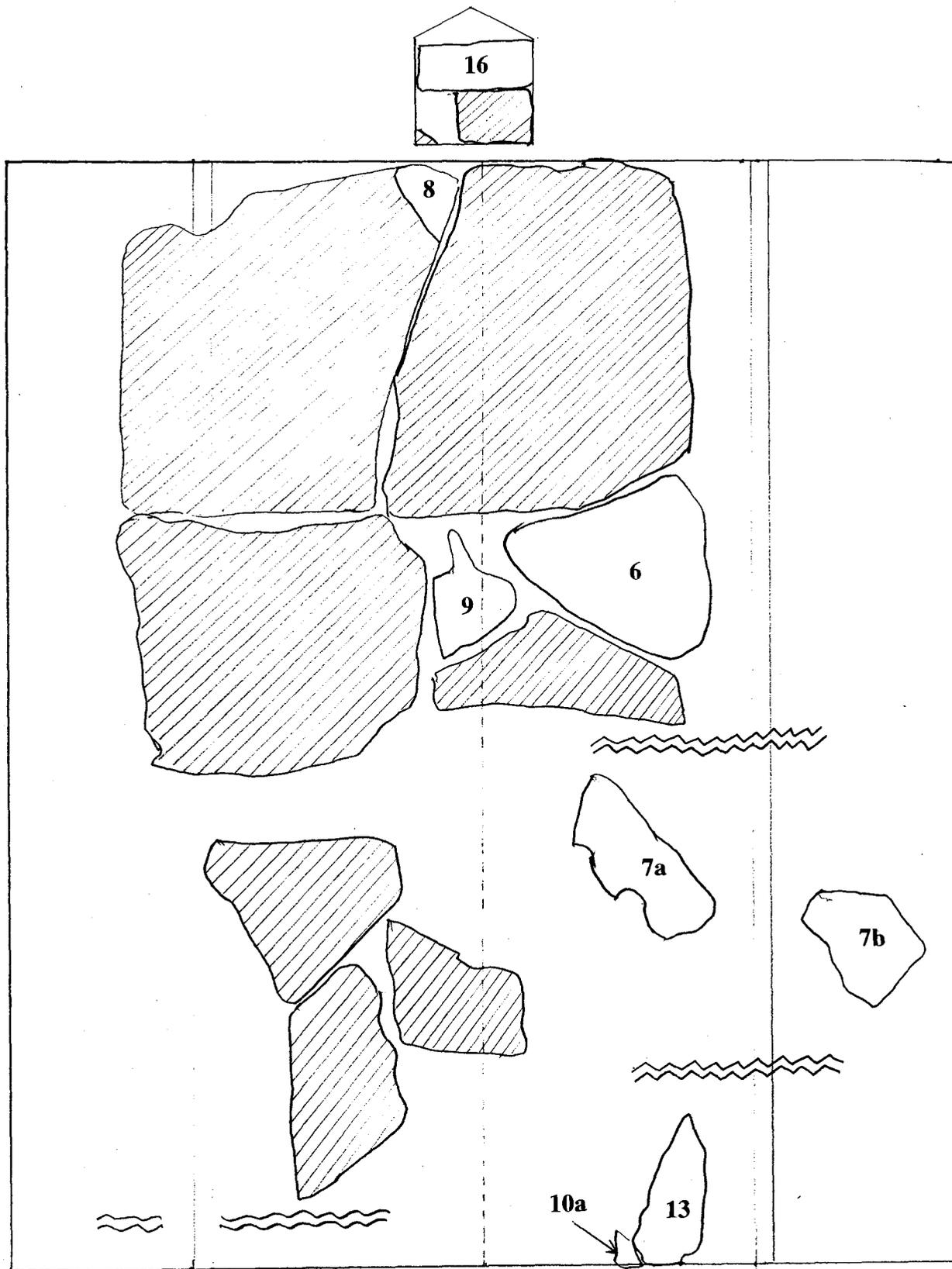


Plate 14e カラ=バルガスン碑文, Atlas 拓本 ルーン文字面



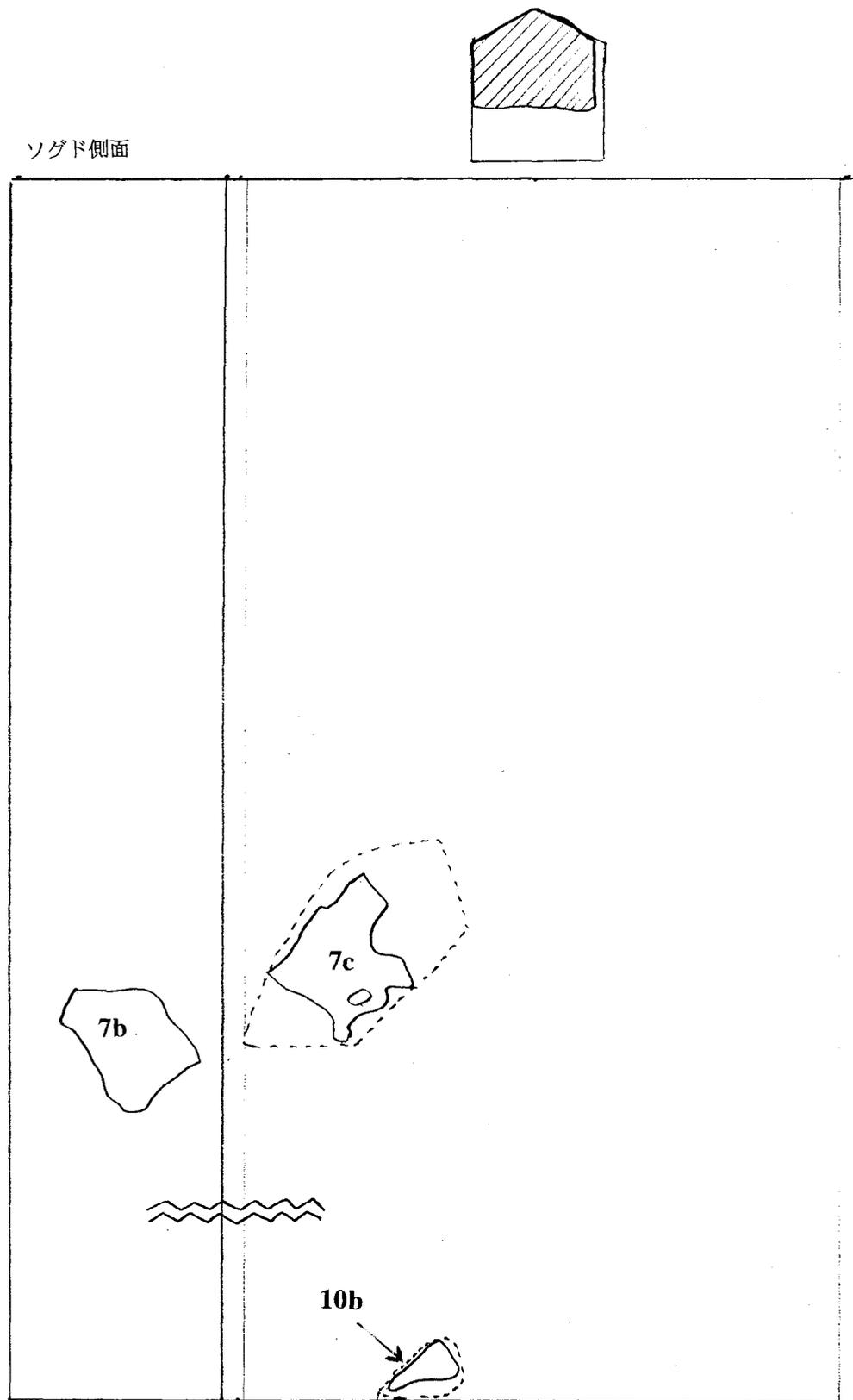
他に XXXV-5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, <13> があるが位置不明

Plate 14f カラ=バルガスン碑文, ビチェース拓本 漢文・ソグド面

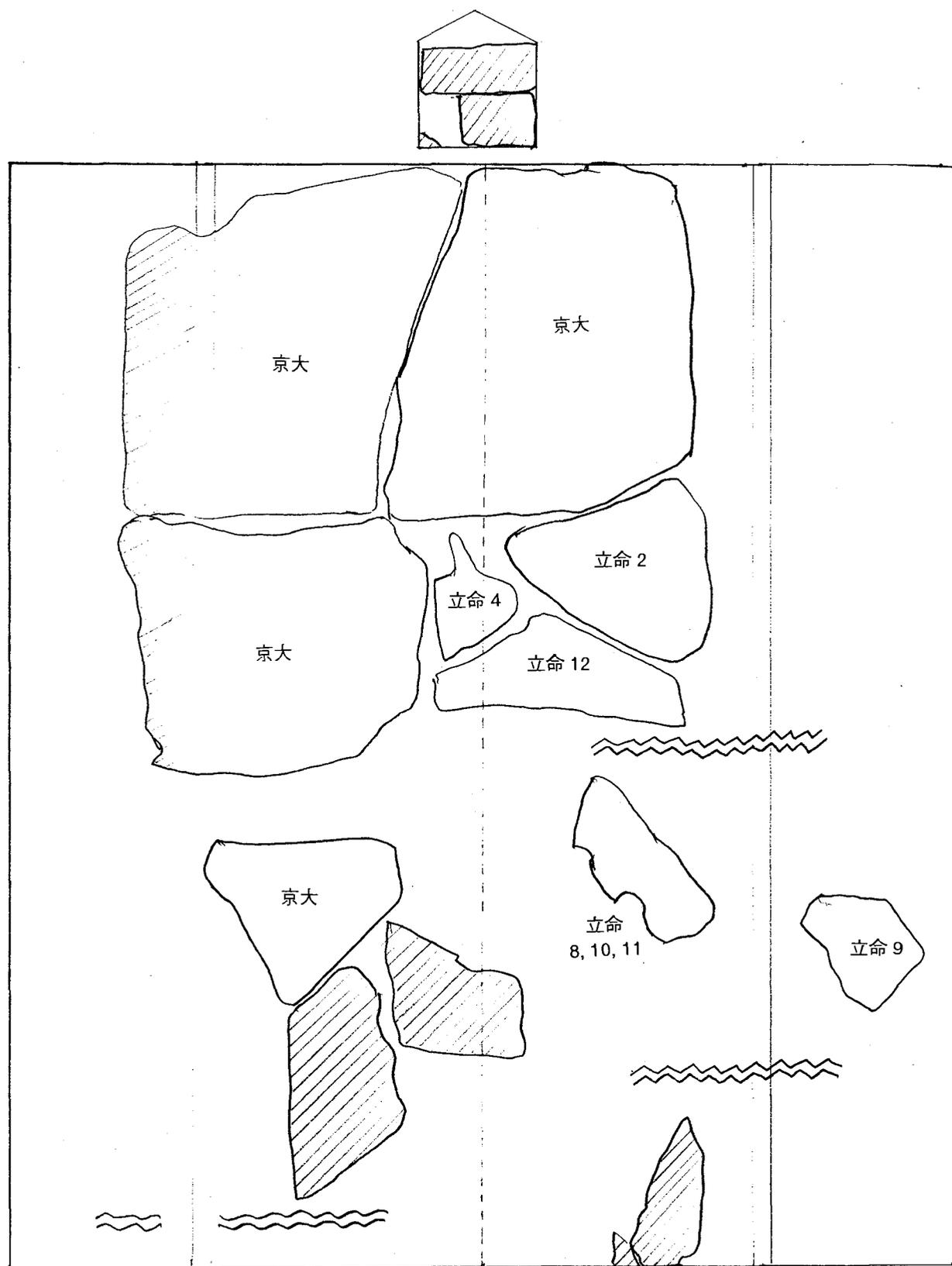


他に No. 5 (漢文) が位置不明

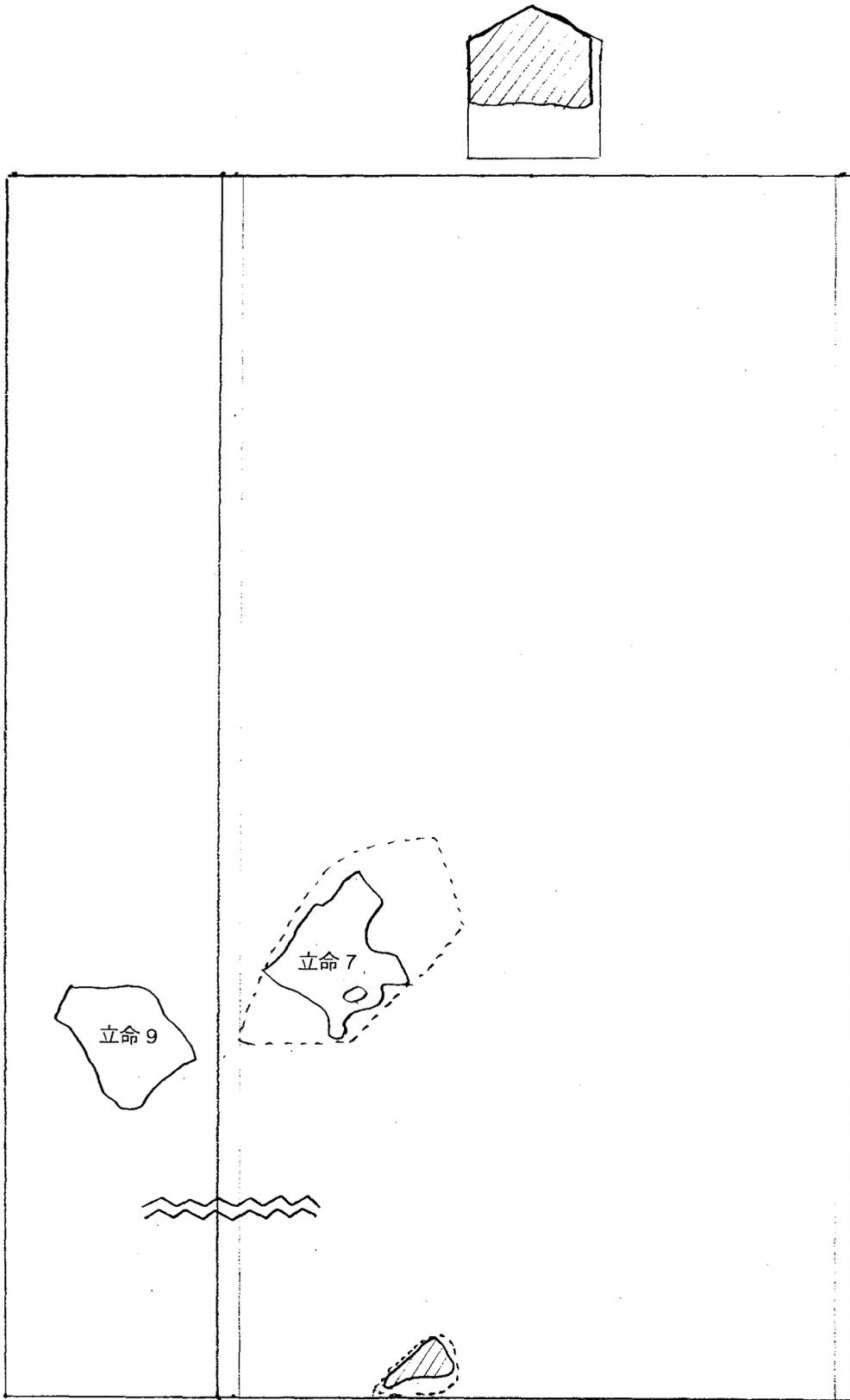
Plate 14g カラ=バルガスン碑文, ビチェース拓本 ルーン文字面



他に Nos. 12, 14 (漢文) が位置不明



立命 1 (= No. 5) の漢文が位置不明



立命 5 (= XXXV-9), 立命 6 (= XXXV-8) の漢文が位置不明

Plate 14j カラ=バルガスン碑文, 北京図書館拓本 漢文・ソグド面

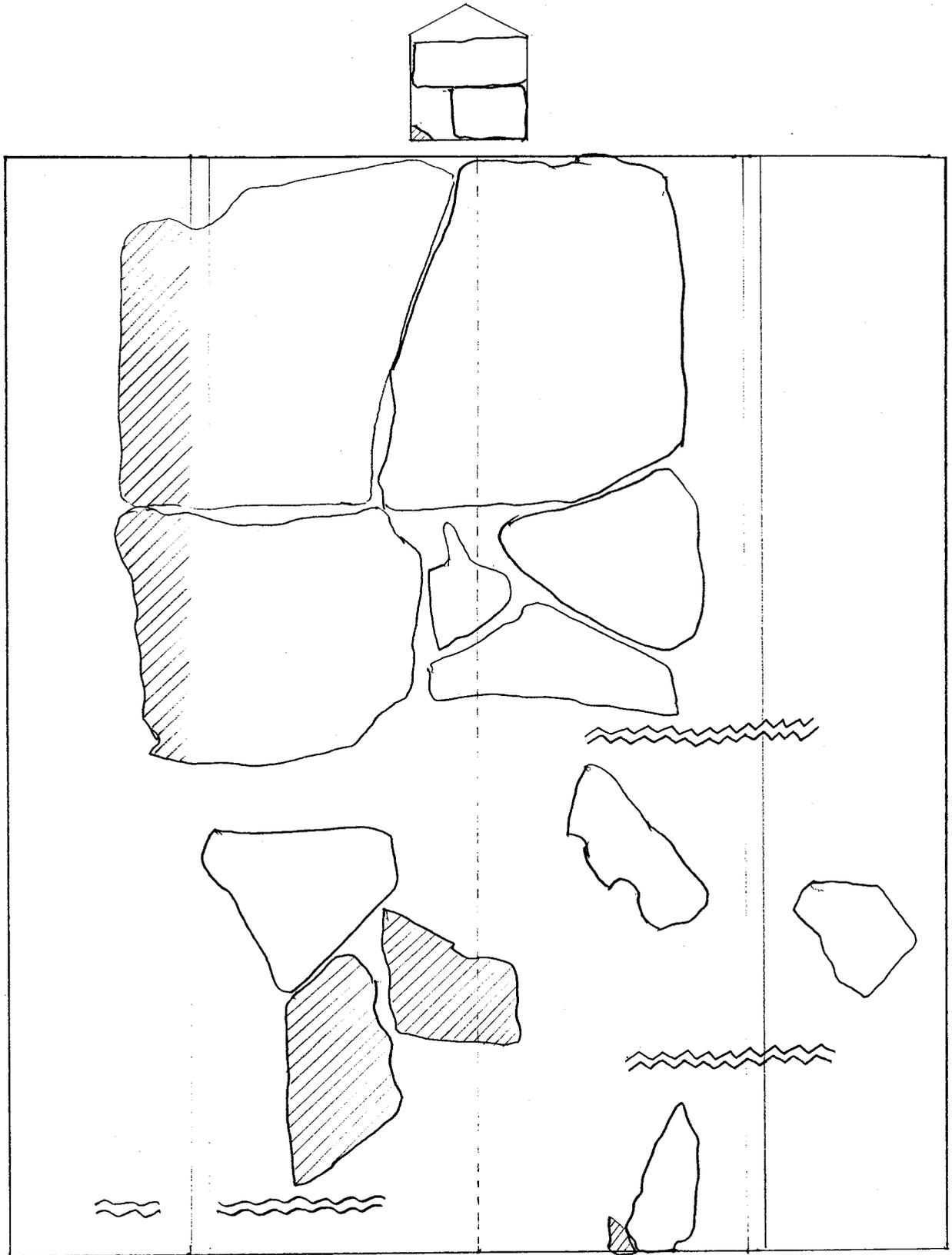


Plate 14k カラ=バルガスン碑文, 北京図書館拓本 ルーン文字面

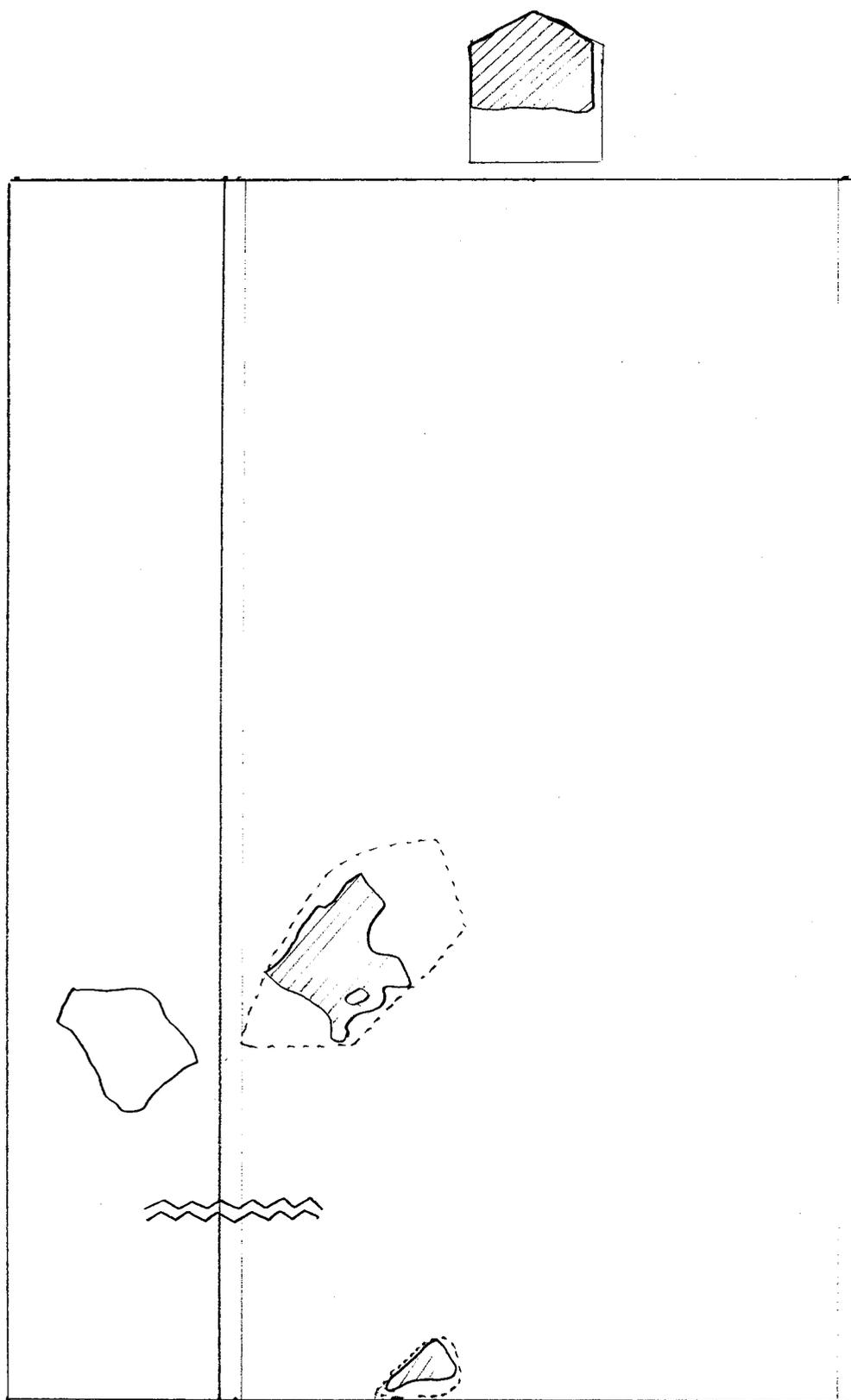
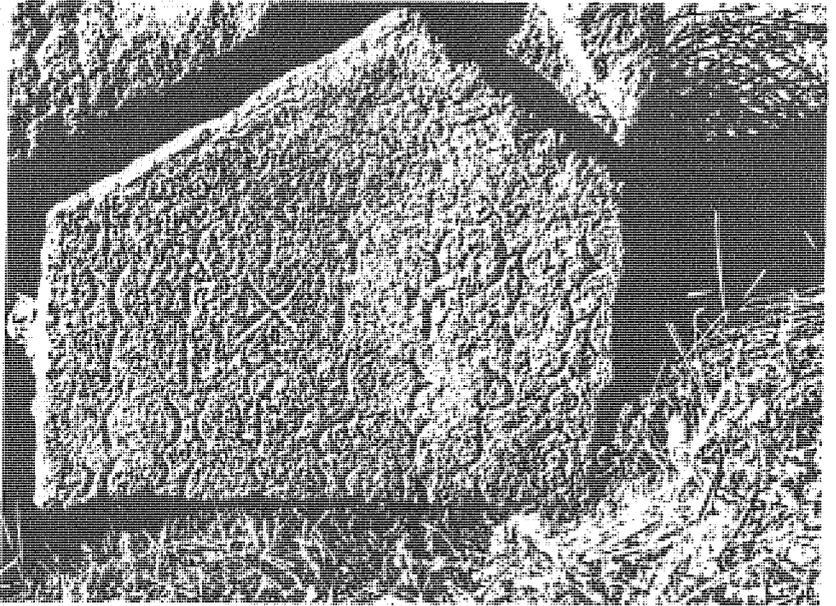
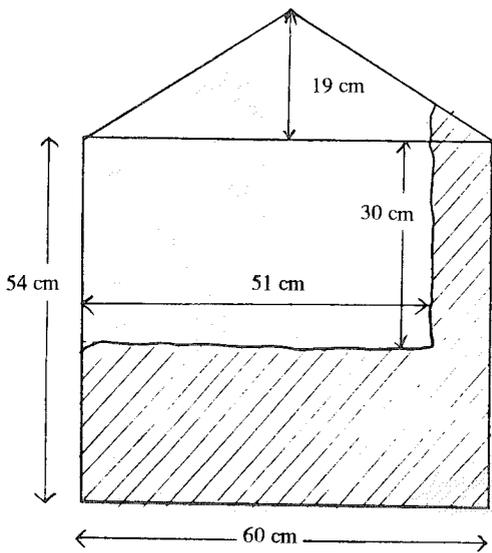
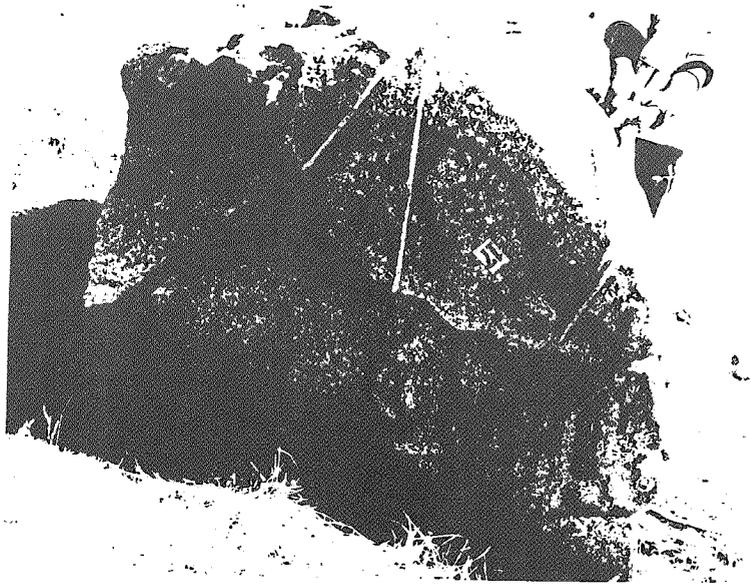
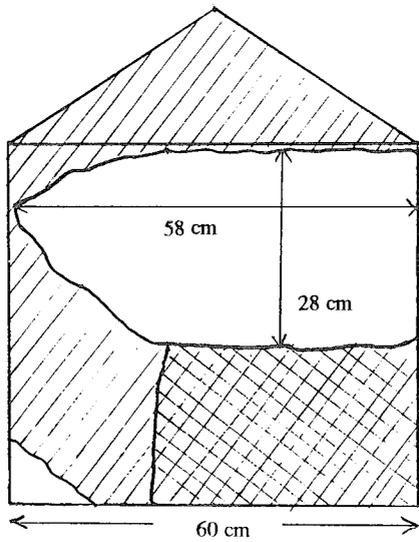


Plate 141 カラ=バルガスン碑文, 碑額 (片山・吉田)



5 lines remain. (9 lines could have existed.)  
7 letters per line. (8 letters should have existed.)

Chinese-Sogdian



Letters are almost illegible even on the rubbed copy.

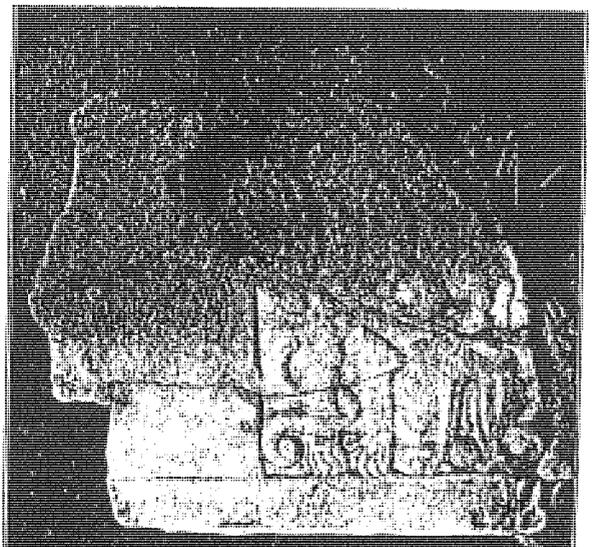
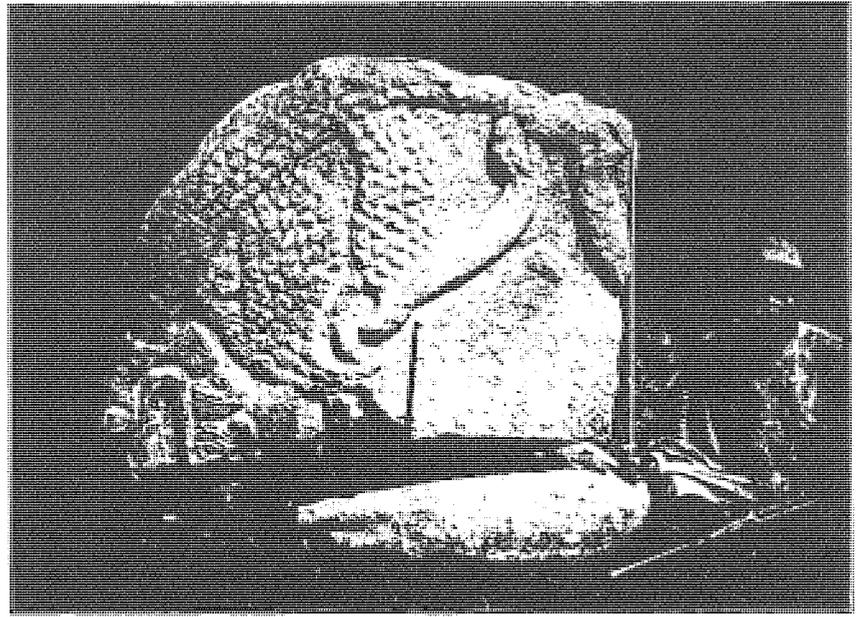


Plate 14m カラ=バルガスン碑文，碑頭計測値及び模式図（片山・吉田）



Heikel 1892, Tab. 46

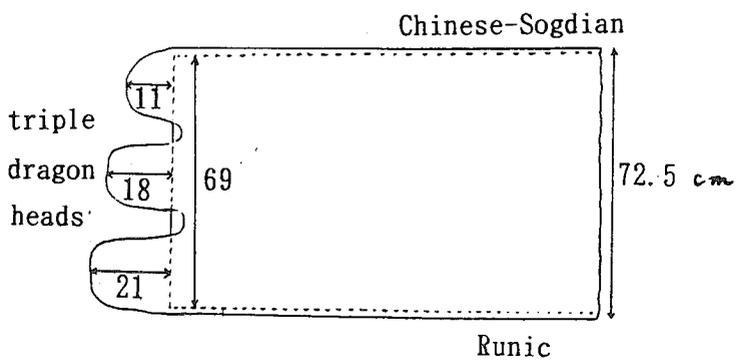
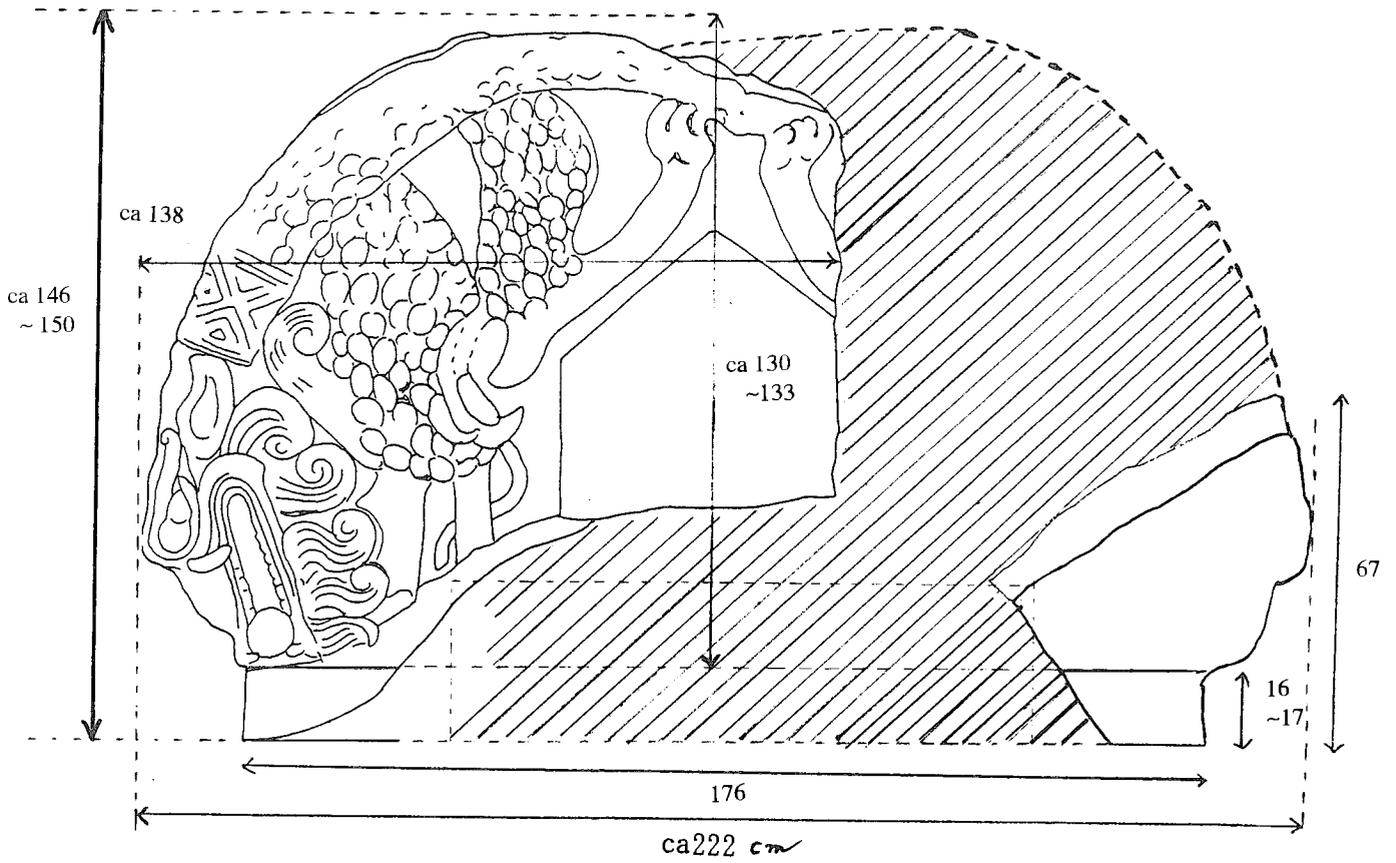


Plate 14n カラ=バルガスン碑文, 碑頭ソケット部 (片山・吉田)

Mortise of the dragon-head

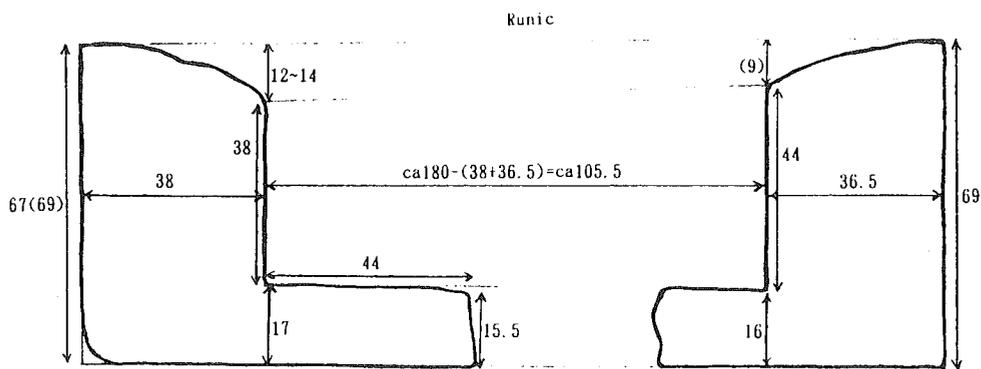
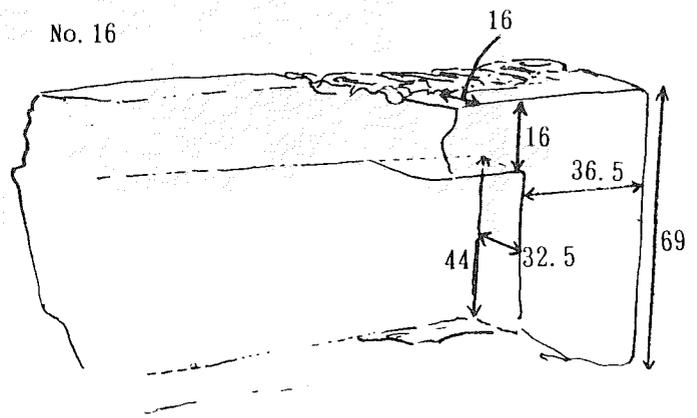
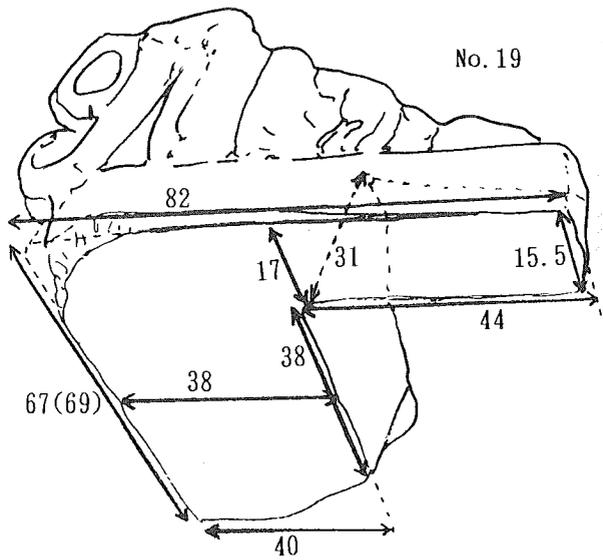
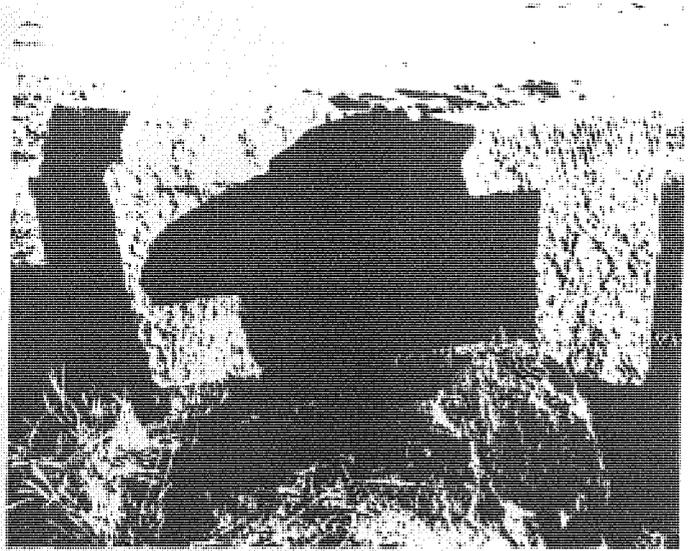


Plate 14o カラ=バルガスン碑文，断片復元図（片山・吉田）

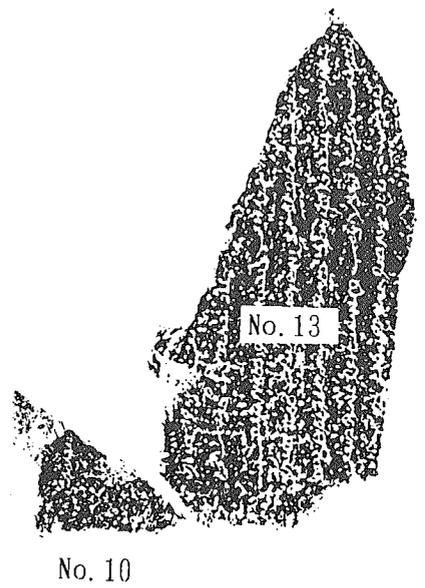
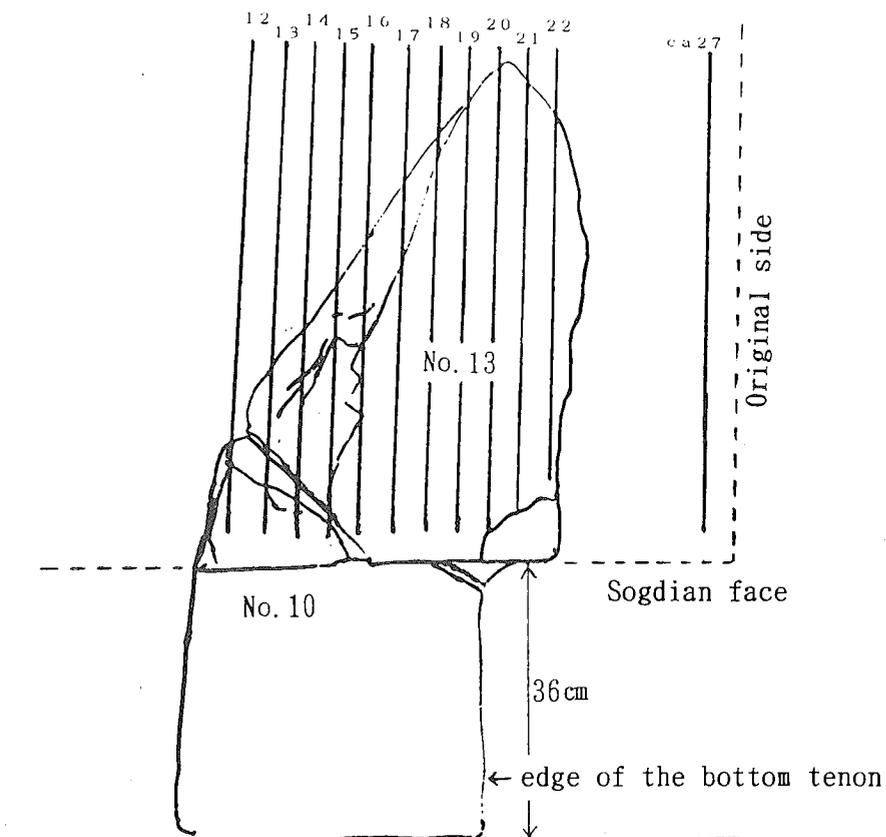


Plate 14p カラ=バルガスガン碑文・碑頭 (Баяр)

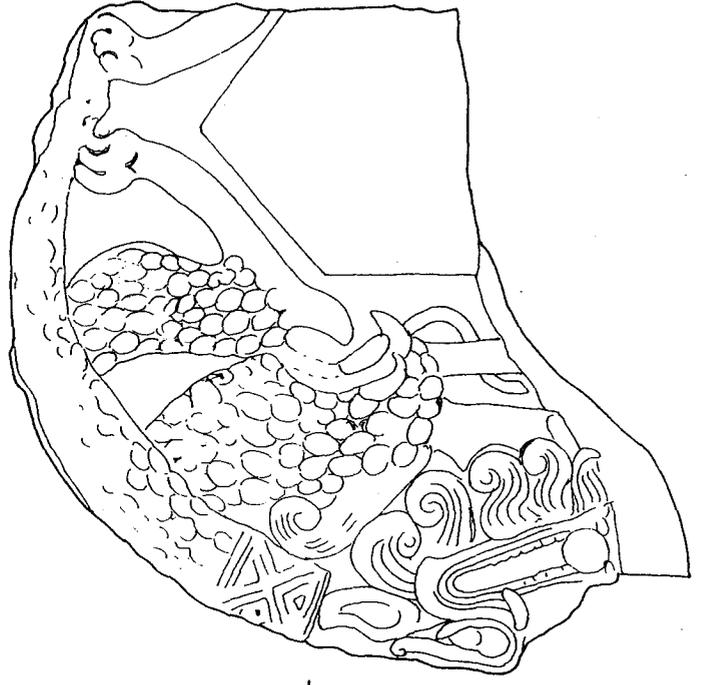
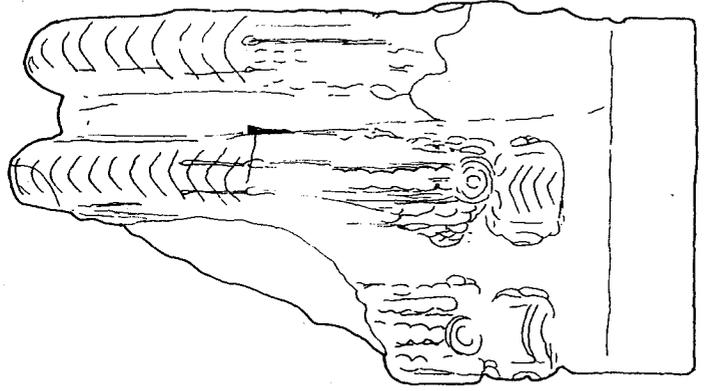
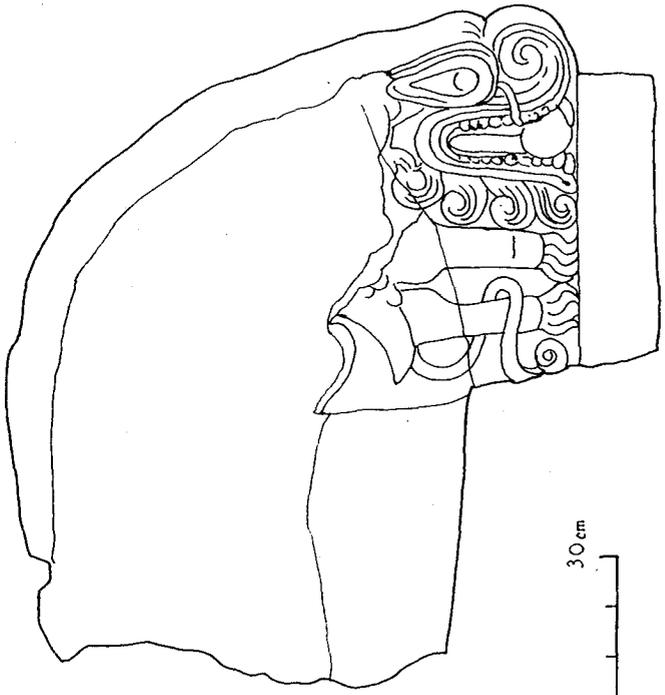
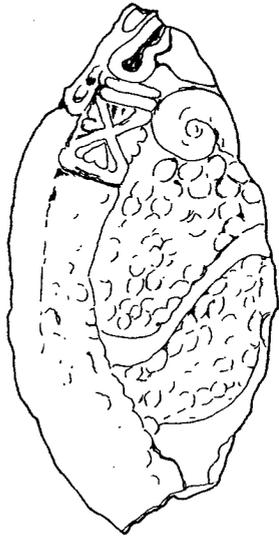
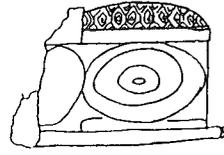


Plate 14q カラ=バルガスン碑文礎石断片 (片山)

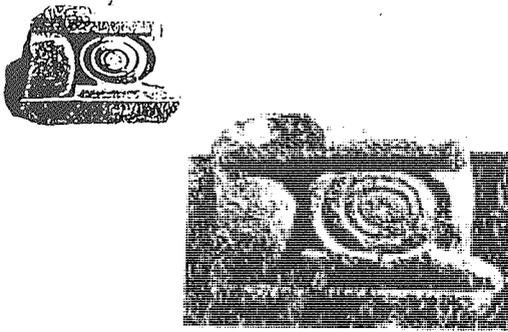
現在行方不明の断片  
Heikel 1892, pl.62



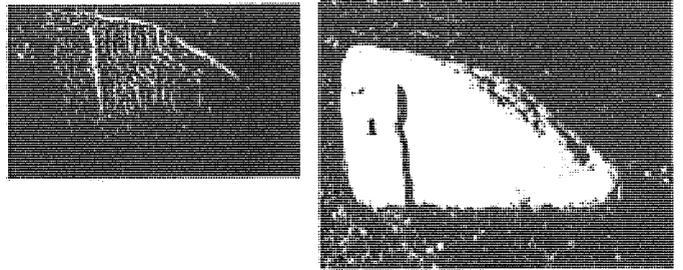
上原 1937, p.468



Radloff's Atlas, XXX-2, 7



断片 No.1  
Heikel 1892, pl.63 と今回の写真

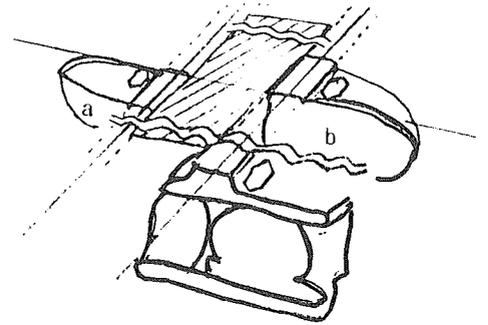


背筋のカーブ、ホゾ、亀甲紋

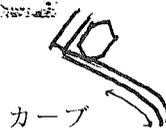


不明断片と断片 No.1 の関係  
No.1 は a か b の  
いずれかの位置  
ホゾの位置  
↓

背筋の中心線



行方不明の断片 ↑



カーブ

Plate 15a セブレイ碑文 (吉田・片山)

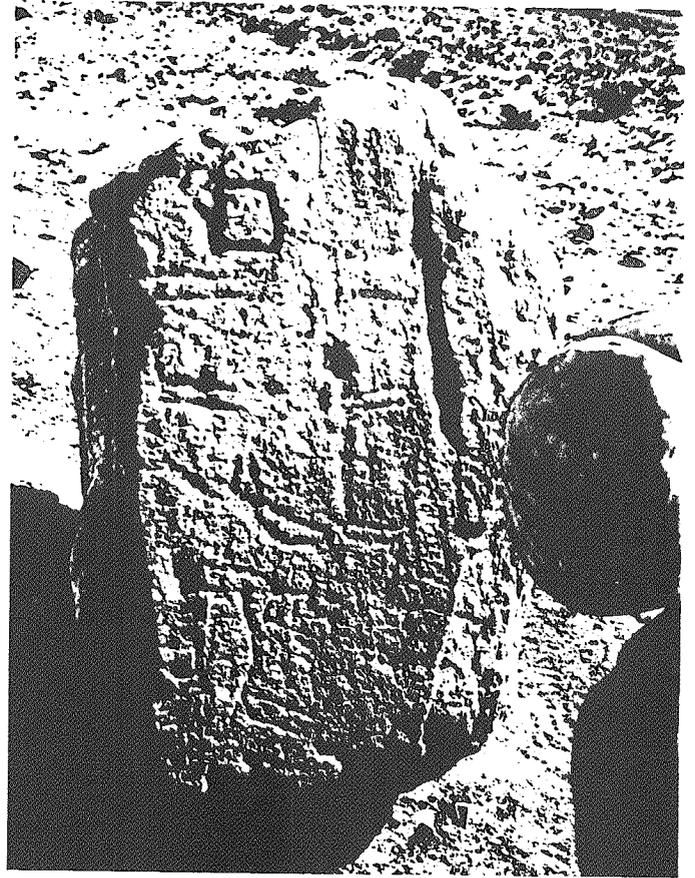
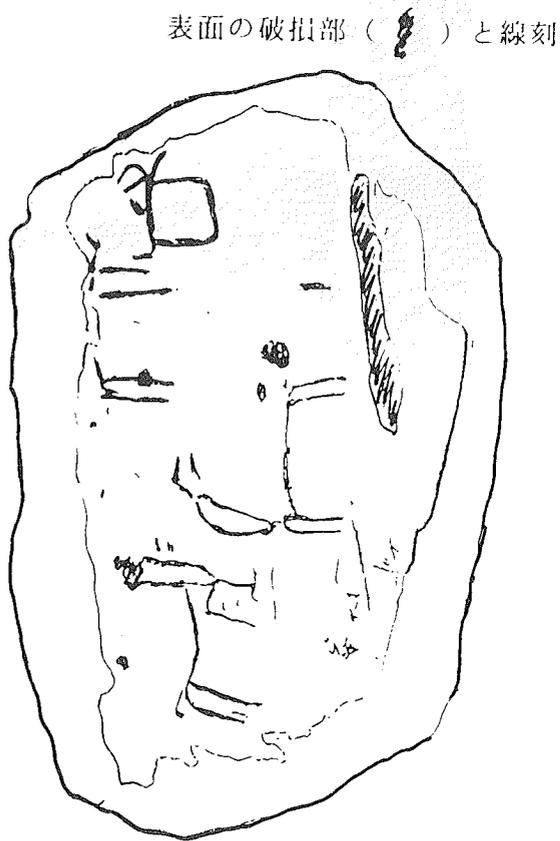
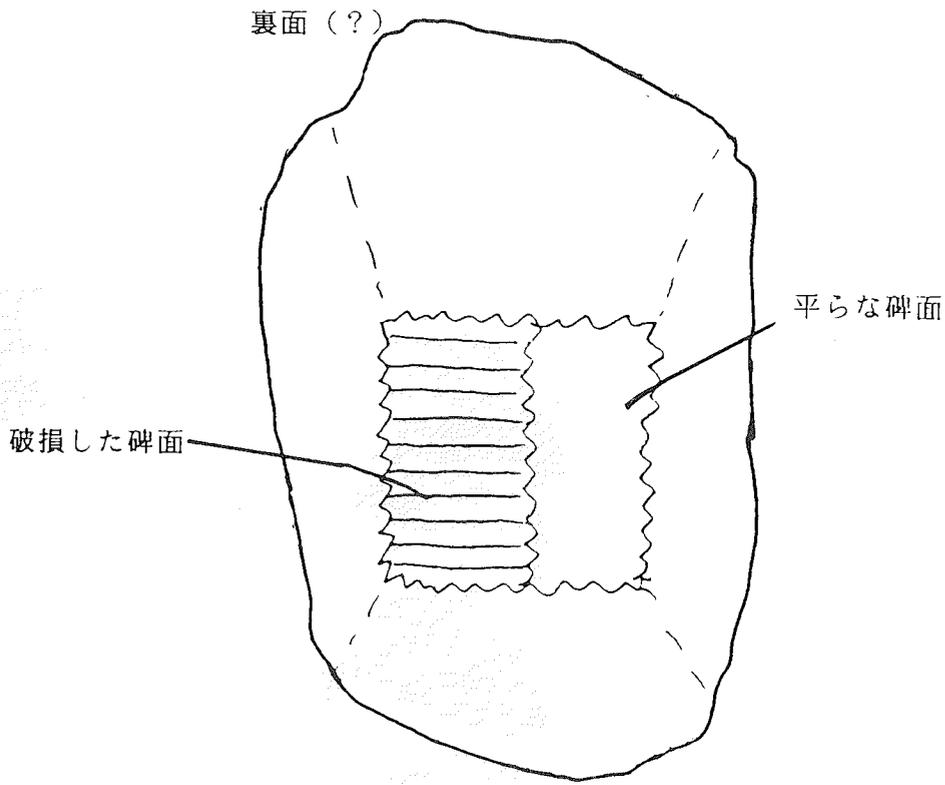
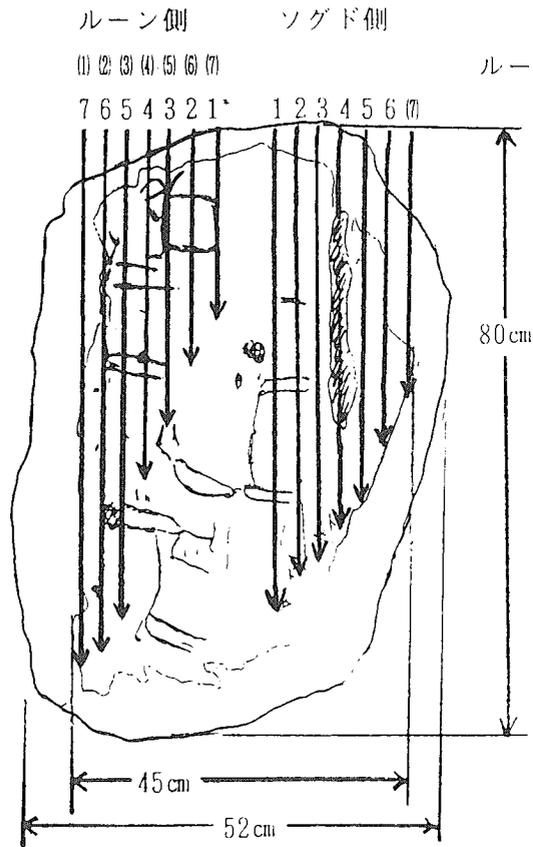
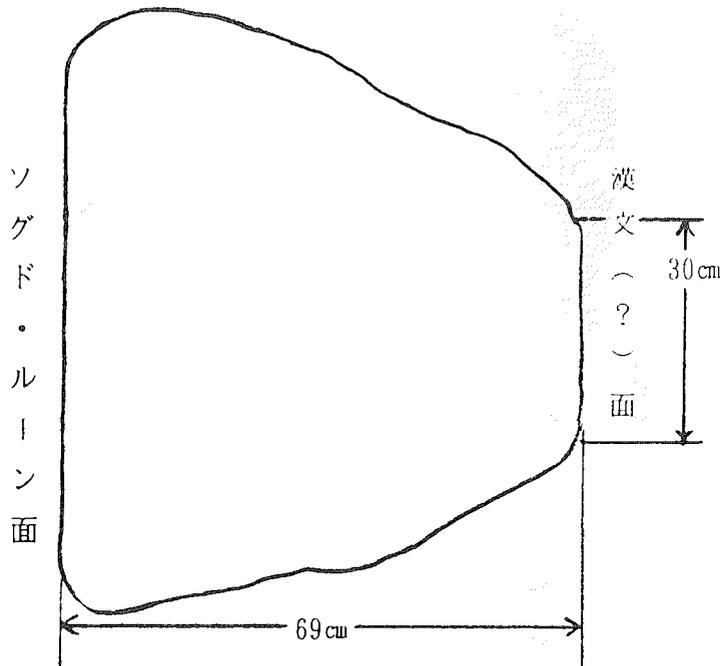
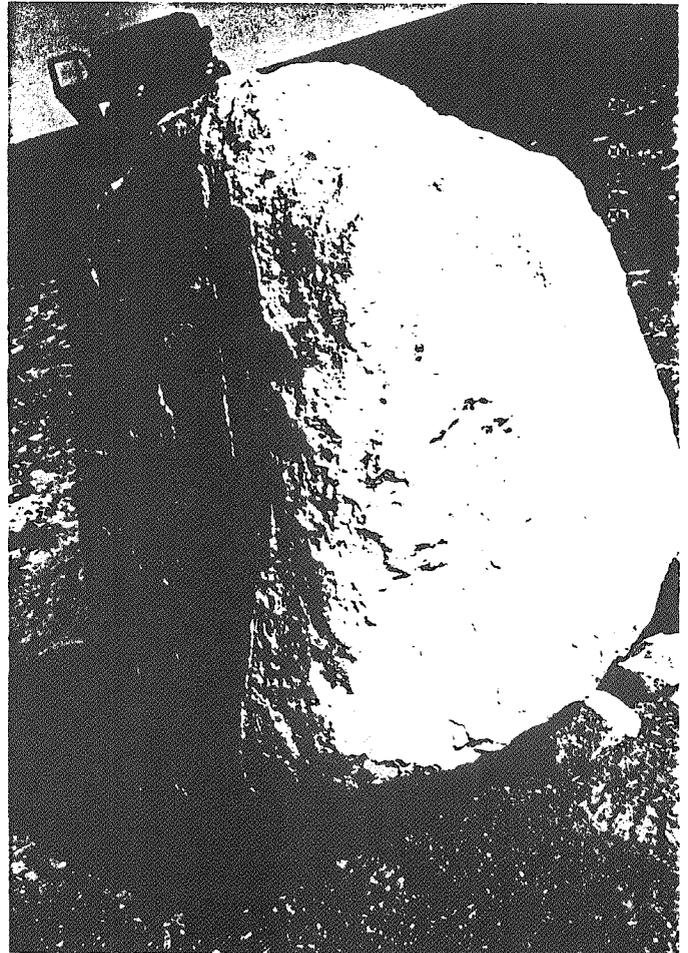


写真 (右) による模写 (左) : 吉田作成、片山整理

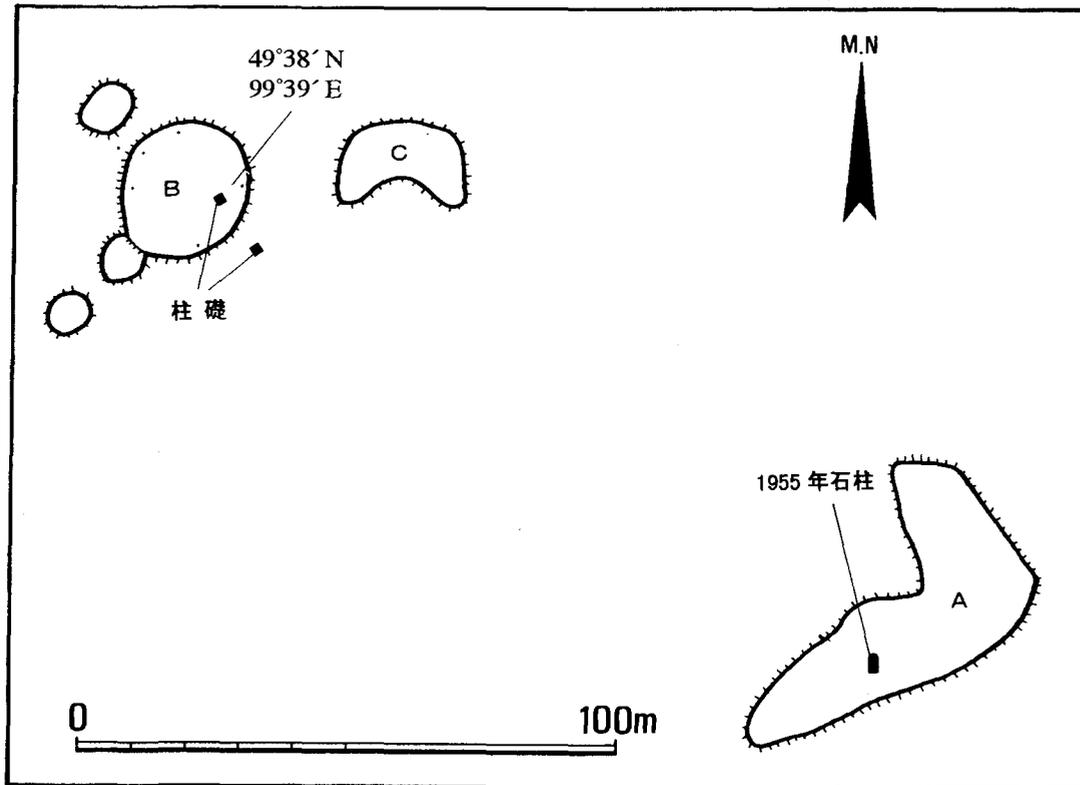
Plate 15b セブレイ碑文の行の進み方 (吉田・片山)



参考写真







↑ 釈迦院遺蹟

ピチェース隊計測データに依拠，一部マウンドのみの略測図（作図：武田和哉）

釈迦院碑記（宇野）

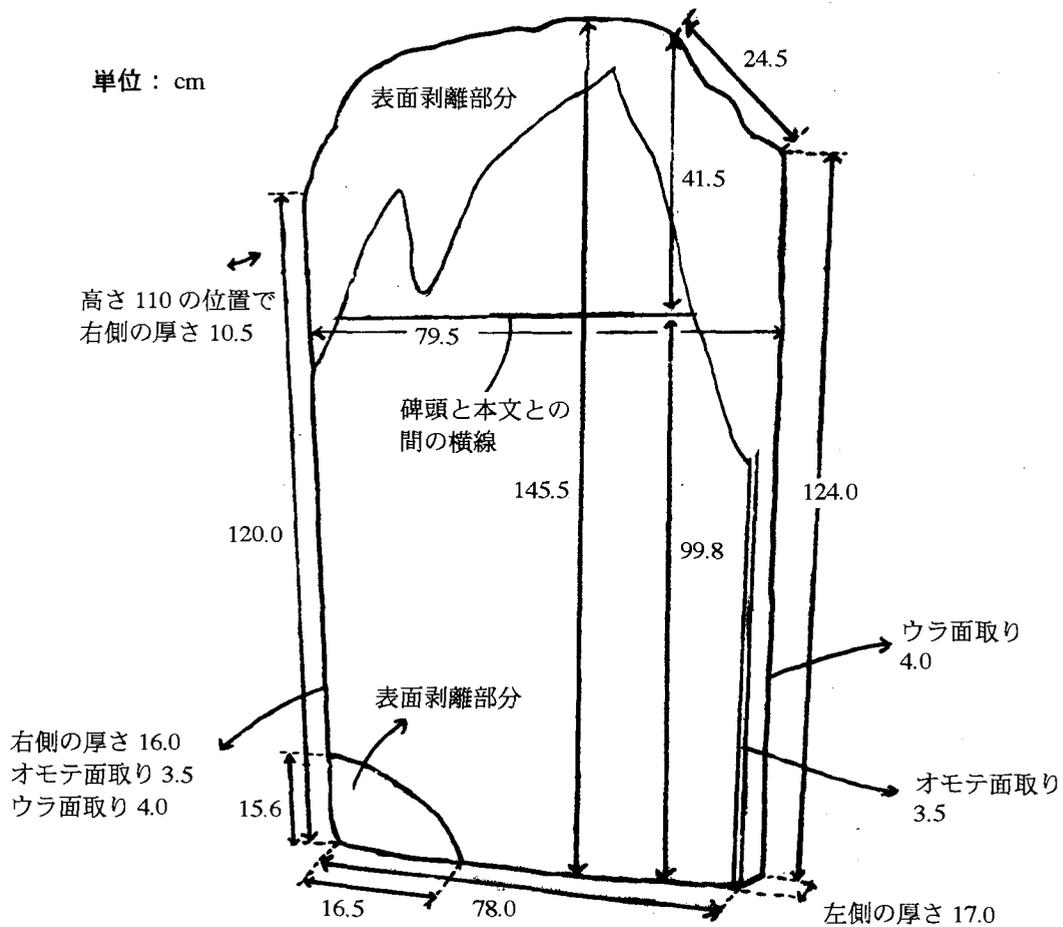


Plate 18a 宣威軍第1城址平面図（松井）

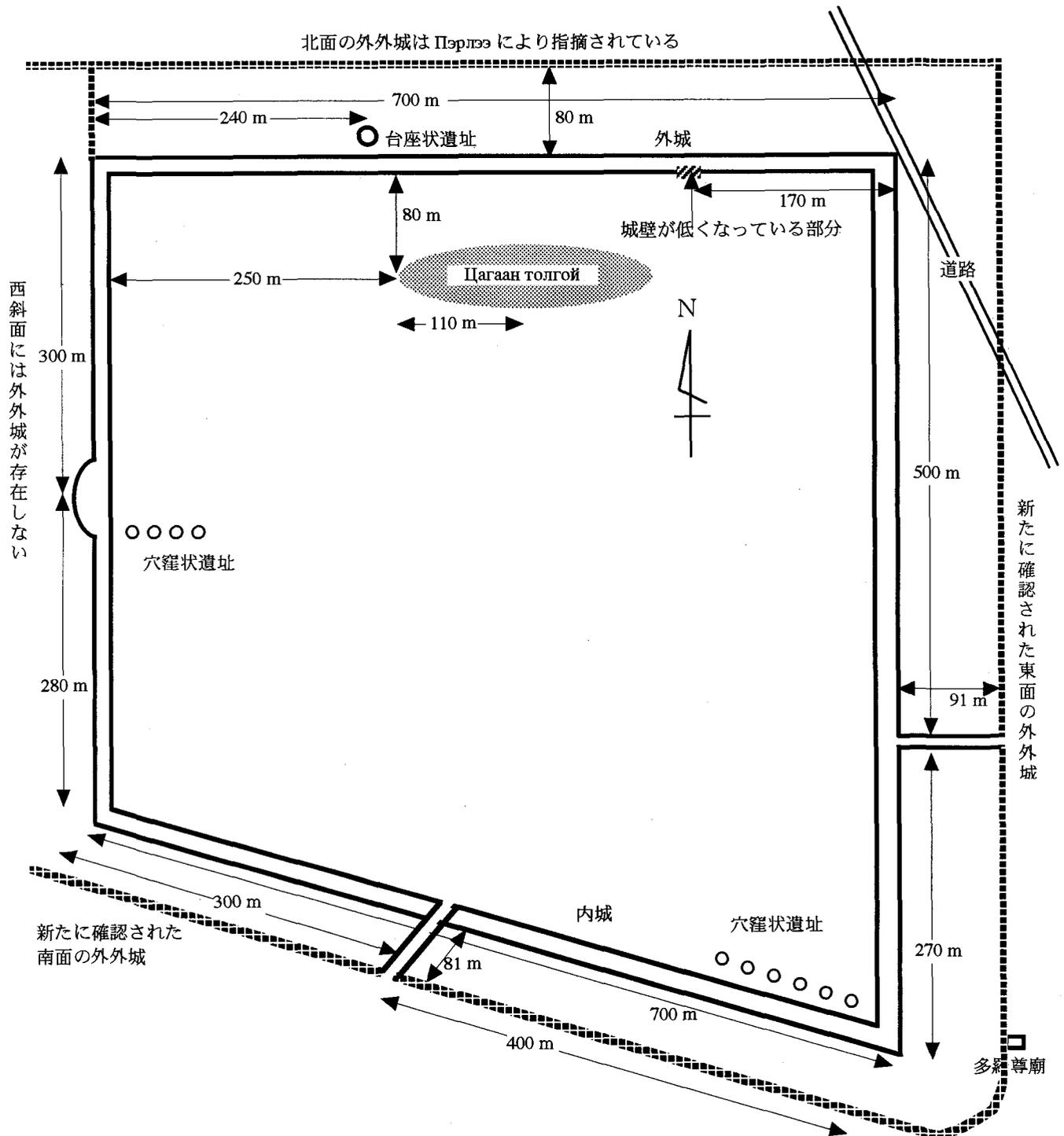
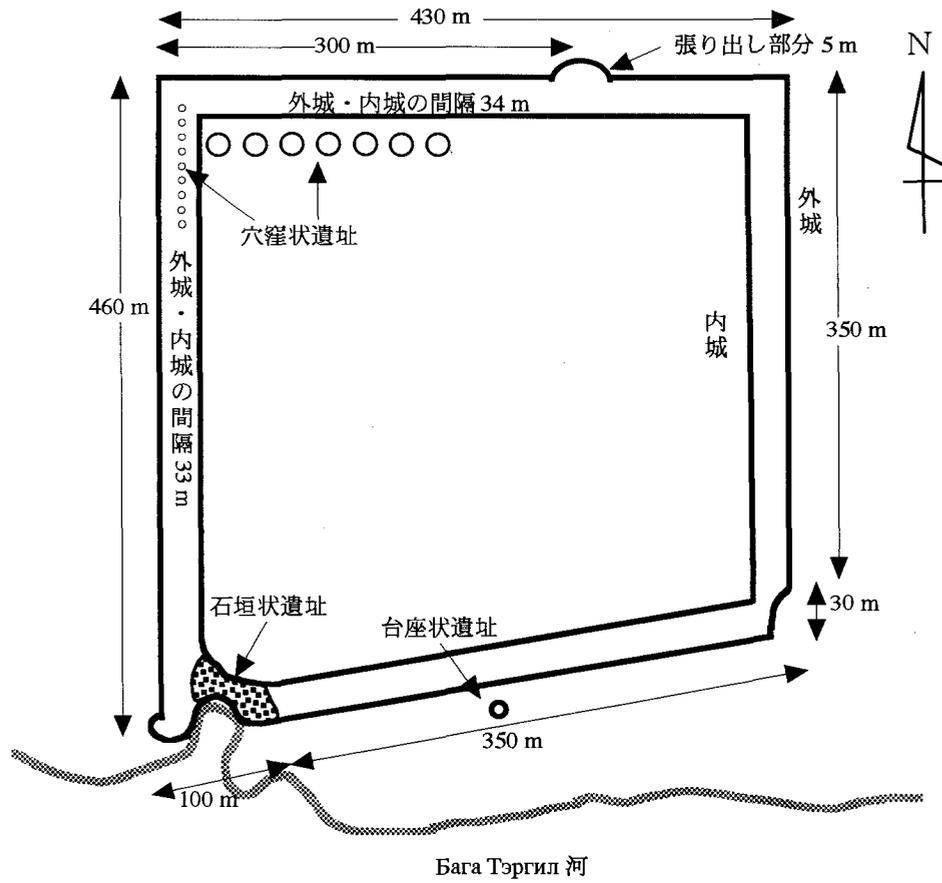


Plate 18b 宣威軍第2城址平面図（松井）



Пэрлээ・堀江雅明による宣威軍城址の見取図（堀江 1994, p. 18）

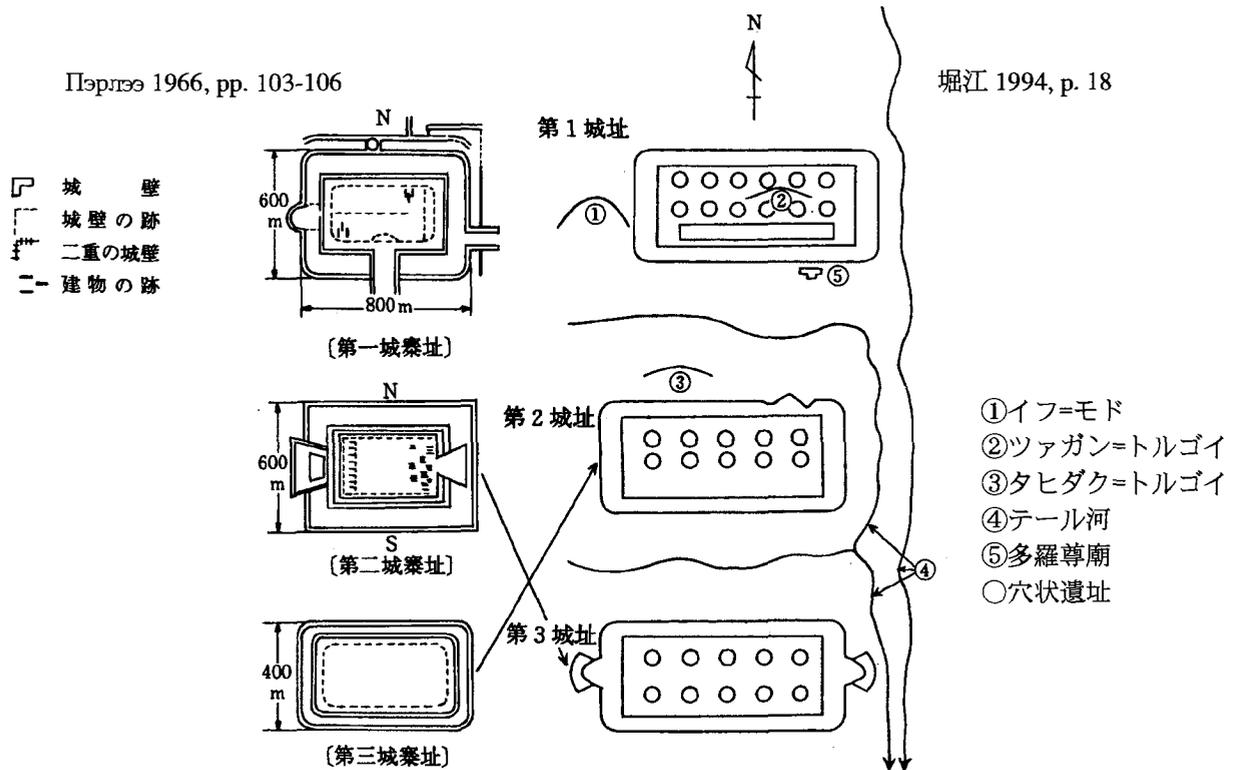


Plate 18c 宣威軍第3城址平面図 (松井)

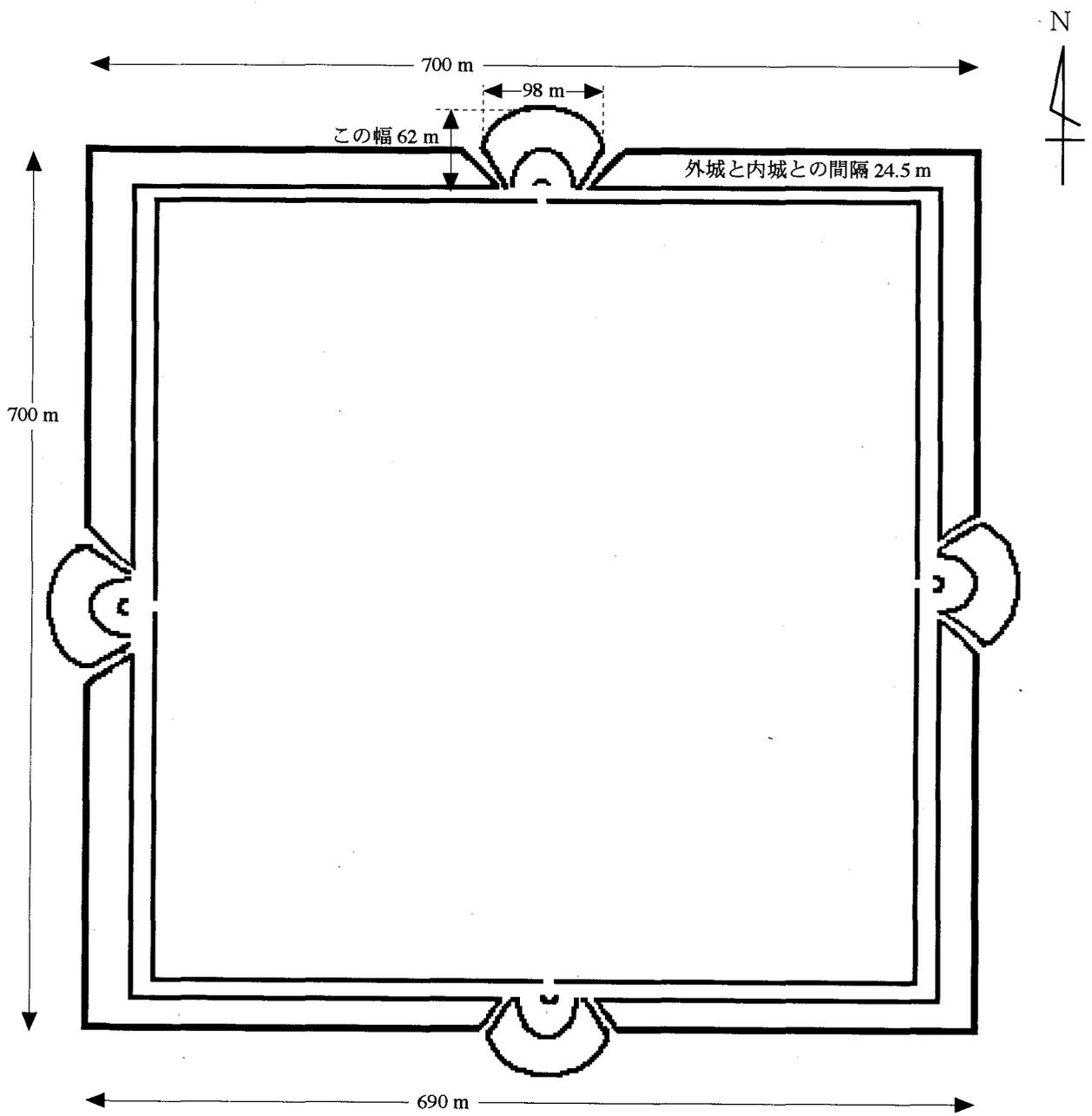
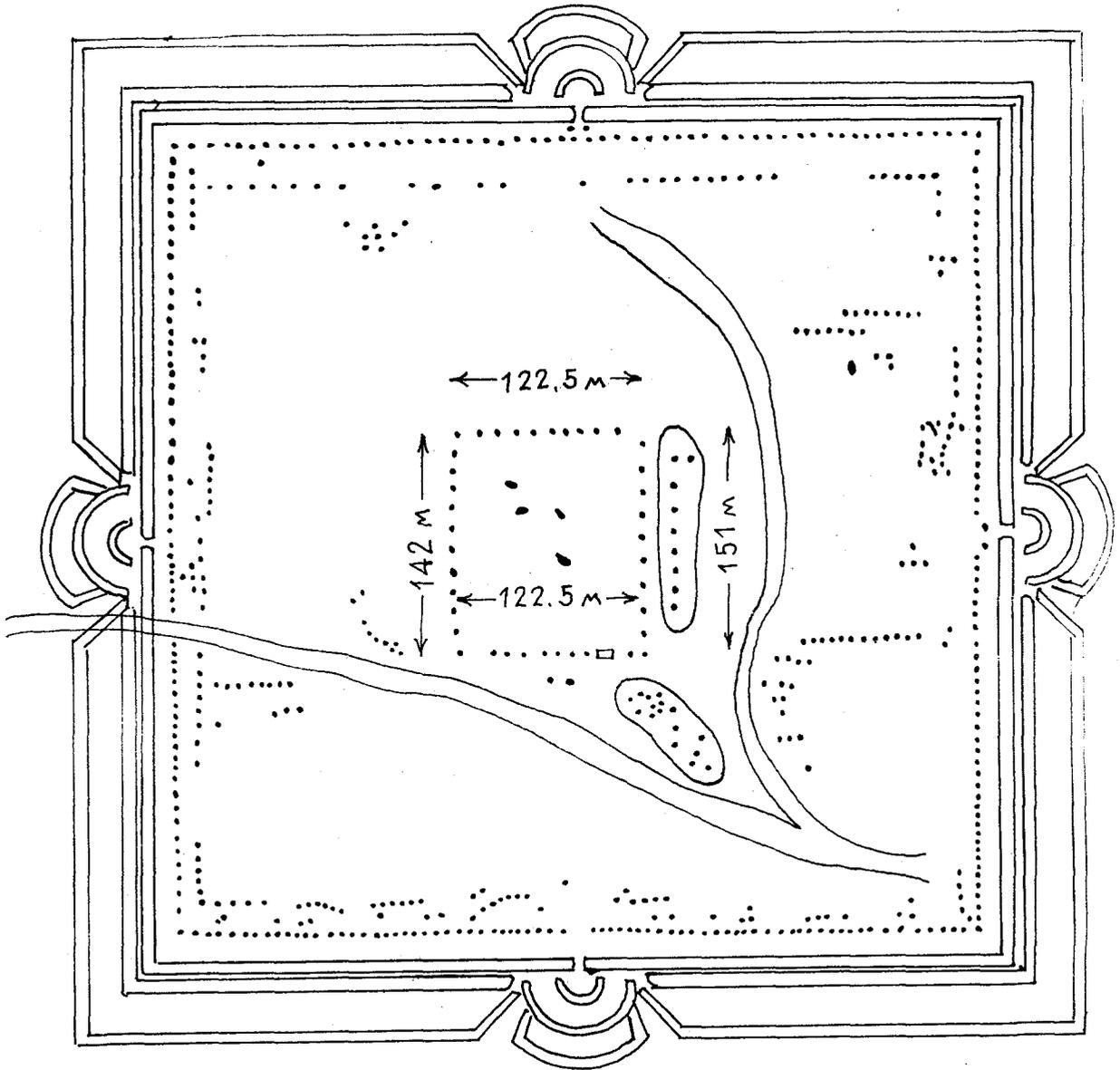


Plate 18d 宣威軍第3城址平面圖 (Баяр)



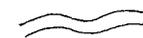
-  Хэрмийн далан
-  Хонхрууд
-  Жалга

Plate 18e 宣威軍碑 (村岡)

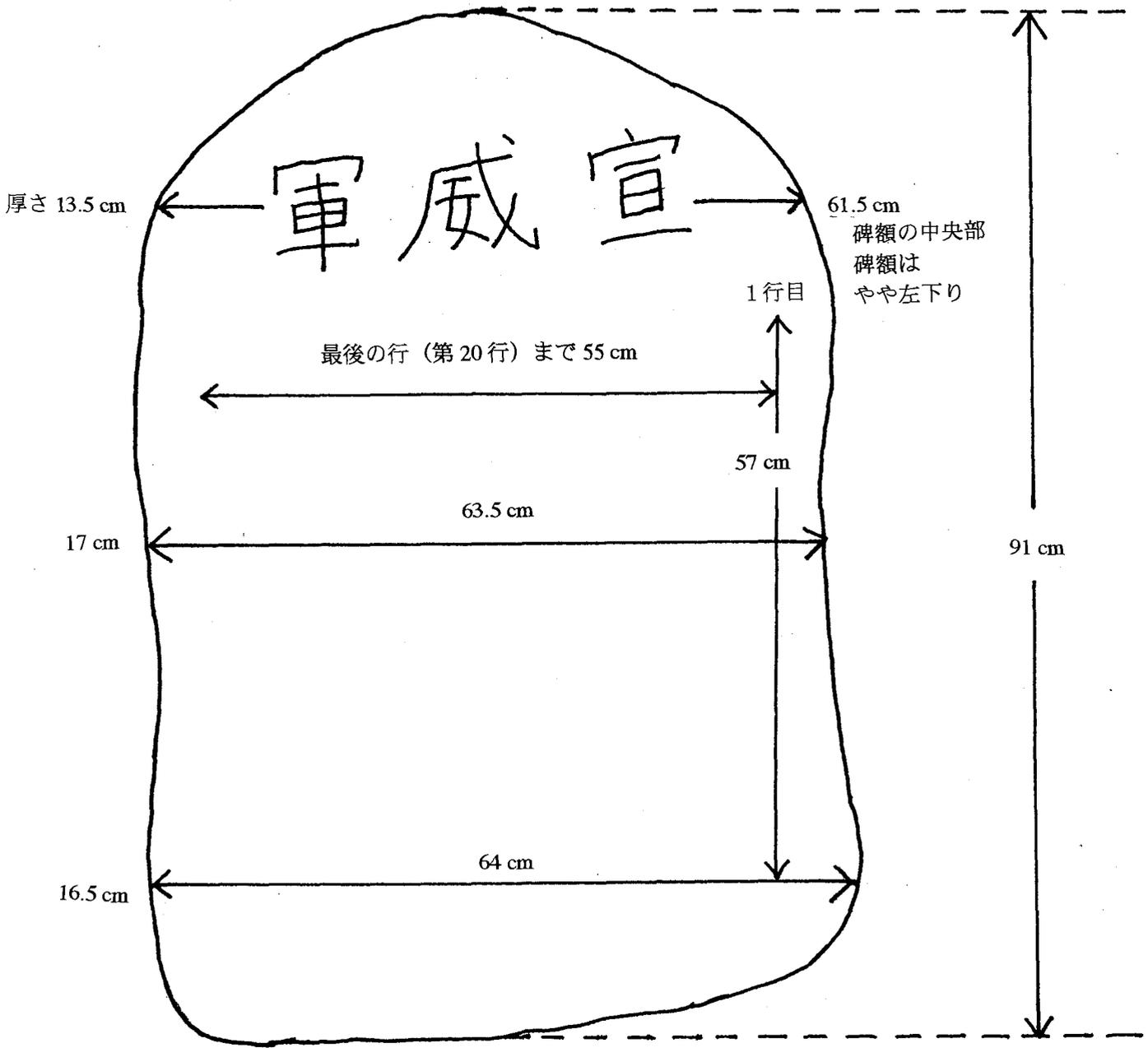


Plate 19a ハルホル=ハン城址全体平面図

モンゴル国国土地理院航空写真に依拠 (作図: オフィス=エムズ企画)

城址・遺蹟図はピチェース隊計測データに依拠 (作図: 武田和哉)

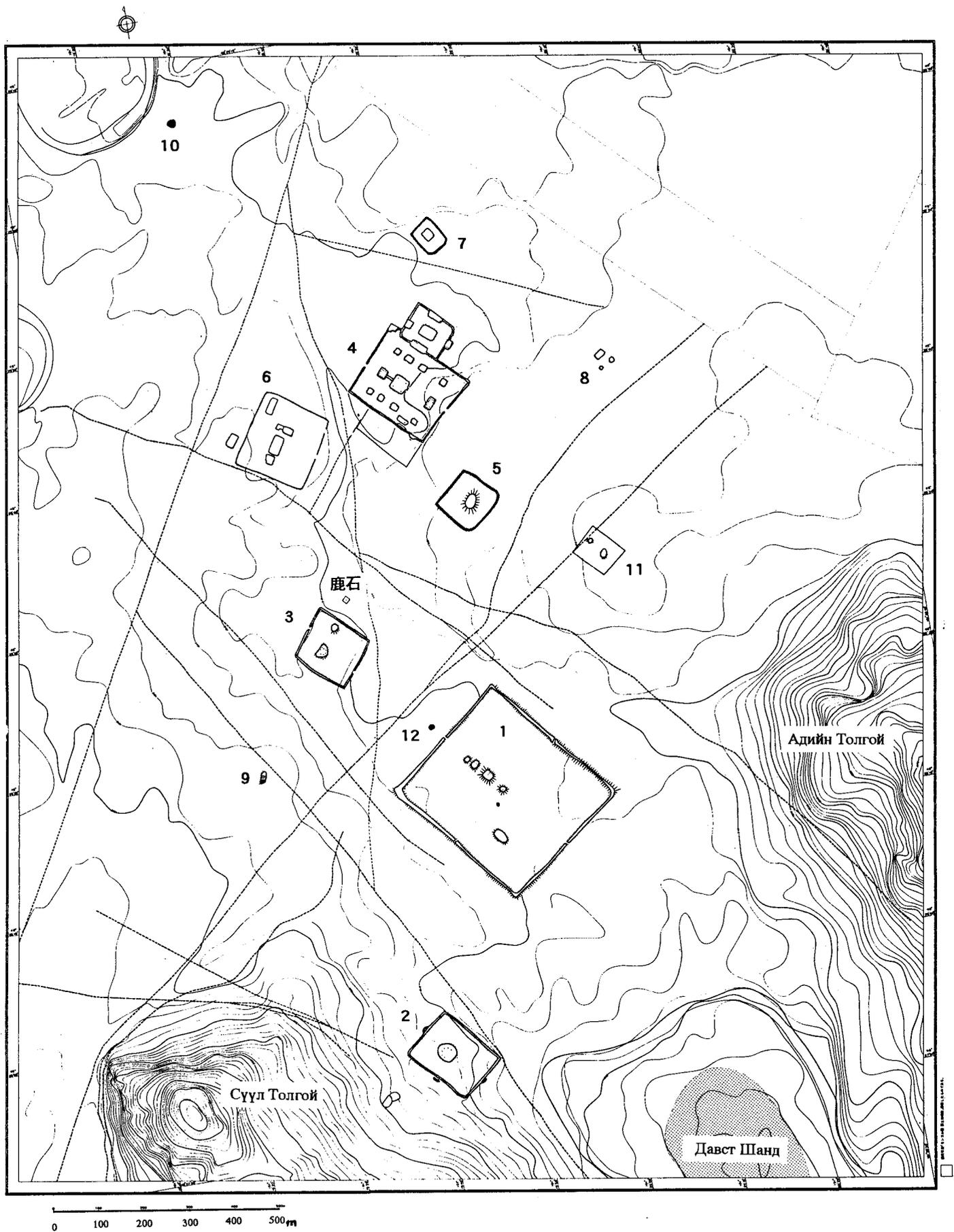
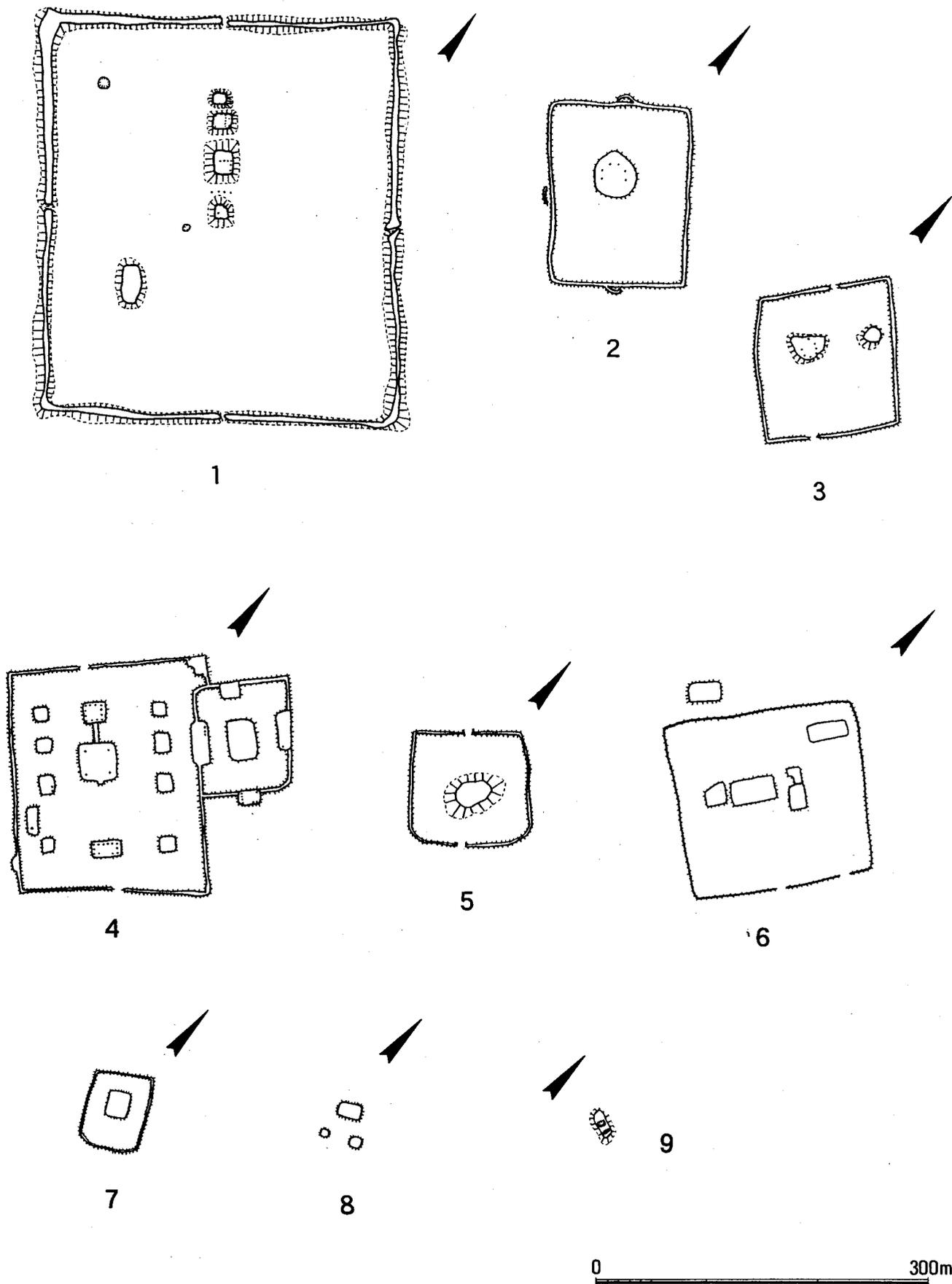


Plate 19b ハルホル=ハン城址, 第1~第9遺蹟平面図

ビチェース隊計測データに依拠 (作図: 武田和哉)



**Plate 19c** ハルホルル=ハン城址，遺蹟A～C平面図

ピチエース隊計測データに依拠（作図：武田和哉）

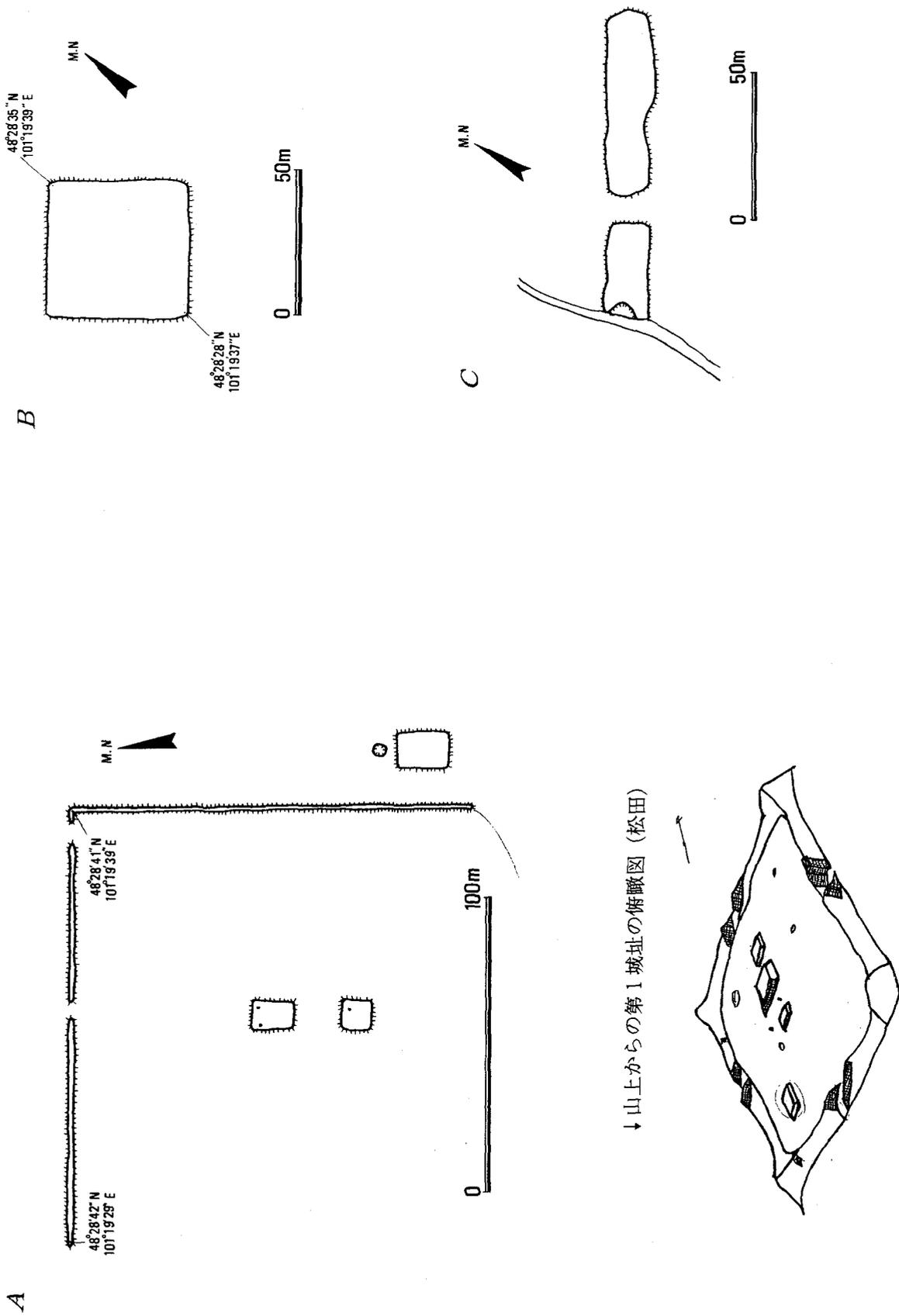
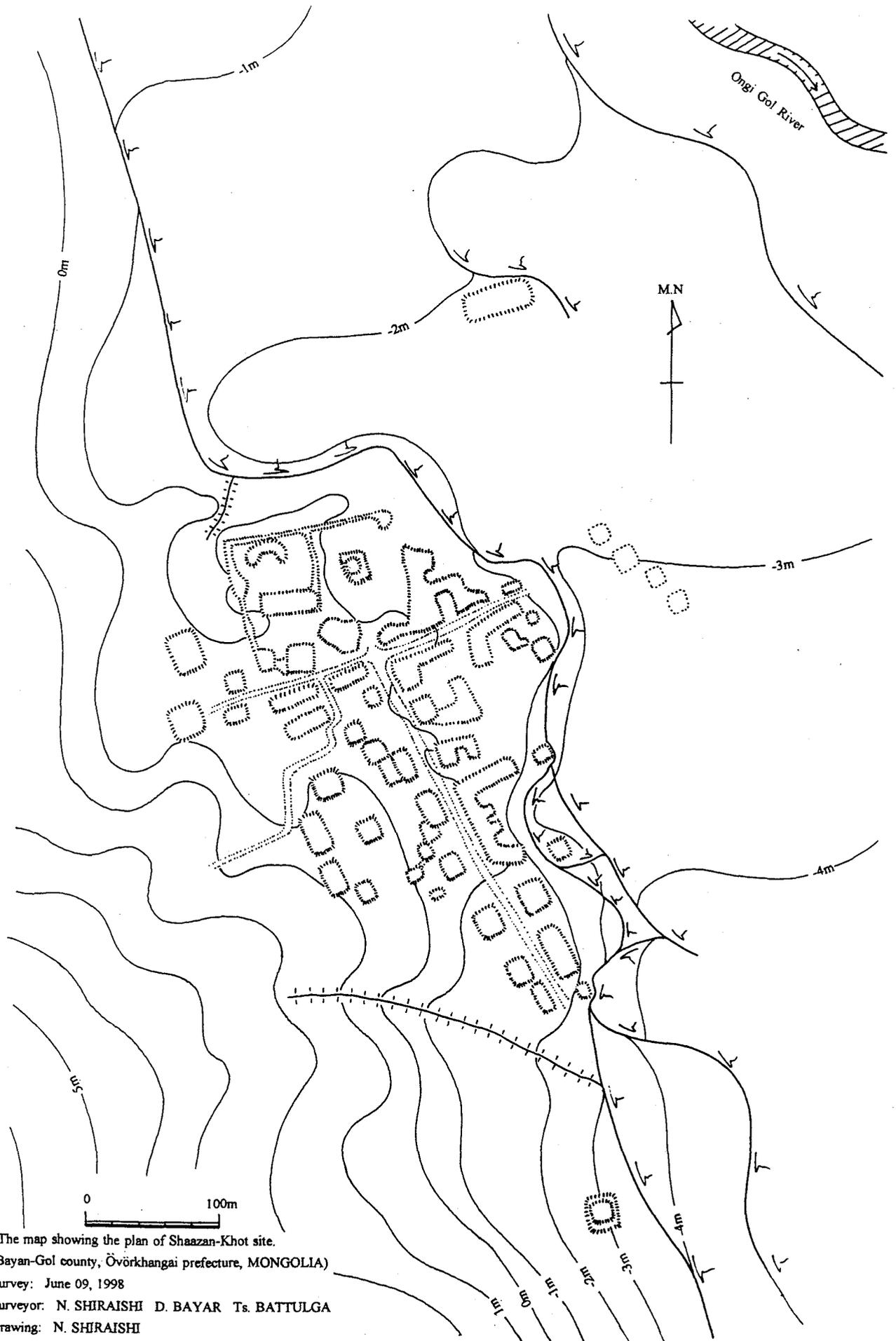
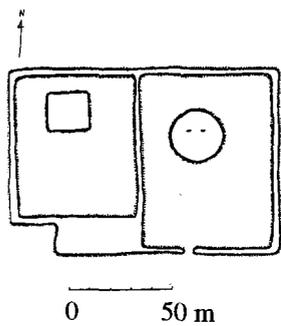


Plate 20a シャーザン=ホト遺蹟全体平面図（白石）



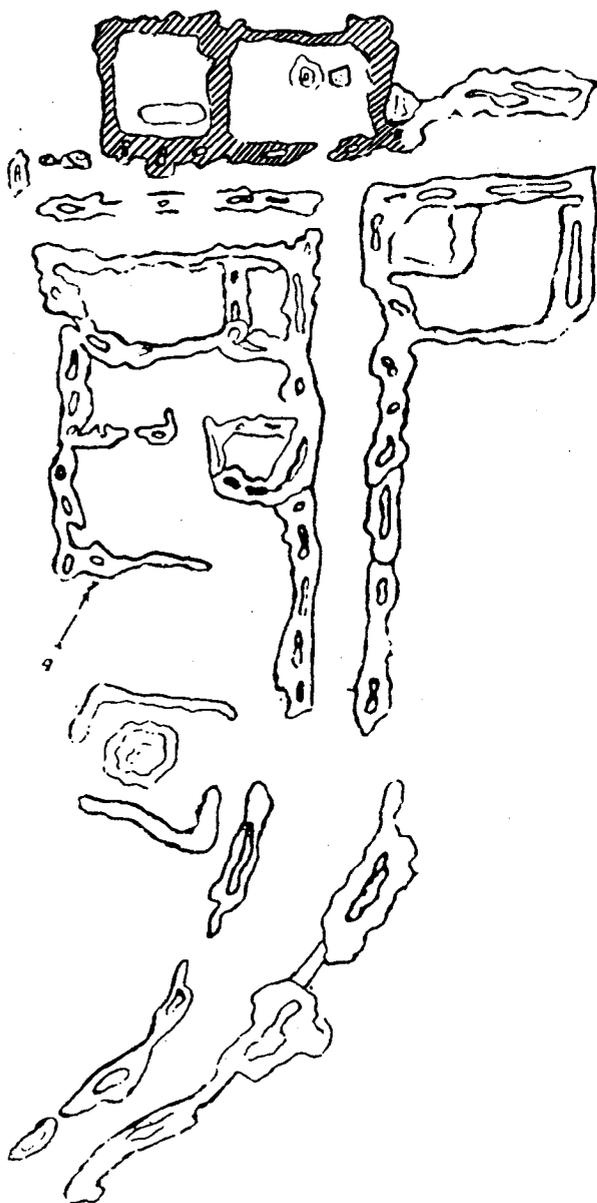
The map showing the plan of Shaazan-Khot site.  
 (Bayan-Gol county, Övörkhangai prefecture, MONGOLIA)  
 Survey: June 09, 1998  
 Surveyor: N. SHIRAISHI D. BAYAR Ts. BATTULGA  
 Drawing: N. SHIRAISHI

Plate 20b シャーザン=ホト遺蹟平面図



←中心遺蹟の概念図（松田）  
下の Пэрлээ 1961 の図面，最北の斜線部分に相当する

↓シャーザン=ホト遺蹟平面図（Пэрлээ 1961, p. 111 に補足）



26-р зураг. Онгийн харганын голын „Шазан хот“

**Provisional Report of Researches on  
Historical Sites and Inscriptions in Mongolia from 1996 to 1998**

Edited by Takao MORIYASU and Ayudai OCHIR

© The Society of Central Eurasian Studies  
c/o Faculty of Letters, Osaka University  
1 - 5 Machikaneyama, Toyonaka, 560 - 8532 JAPAN

Printed by Chūbu Word Service  
10 - 10, Mukaiyamada, Toyohashi, 440 - 0865 JAPAN

モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告

1999年3月発行

責任編集 森安孝夫・オチル

出版者 中央ユーラシア学研究会  
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5  
大阪大学文学部森安研究室内  
☎06-6850-5103

印刷所 有限会社 中部ワードサービス  
〒440-0865 豊橋市向山台町10-10  
☎0532-55-8503

ISBN4-89281-069-X C3022

**PROVISIONAL REPORT OF RESEARCHES ON  
HISTORICAL SITES AND INSCRIPTIONS  
IN MONGOLIA FROM 1996 TO 1998**

Edited by

Takao MORIYASU and Ayudai OCHIR

The Society of Central Eurasian Studies

1999

ISBN4-89281-069-X C3022